
(仮)

イオン水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

(仮)

【Nコード】

N8400W

【作者名】

イオン水

【あらすじ】

気が付いたら魔王になった。

みんなも良く分からないけど僕はもっと良く分からない。

初めから説明すると「ふと目を覚ましたら知らない部屋で寝ていて、傍らに美人の女性が居た」

あれ？余計に意味が分からない。誰か助けて。

タイトル？そんなの考える余裕もないよ！

とりあえず「(仮)」と言う事で！！

第1話 魔王（前書き）

このお話は一人の少年が異世界の魔王になってたと言う良くあるお話です。

内容自体もどこかで見たような話を面白く出来ない感じが滲み出ていると思います。

作者の限界です。勢いでやりました。ごめんなさい。

時間を無駄にしている方。駄作を読んでも怒らず生暖かい目で見れる方はどうぞお読みください。

第1話 魔王

気が付いたら魔王でした。

僕達の冒険はまだまだ続く!!

応援ありがとうございました。
先生の次回作にご期待ください。

：終われる訳無いよね。
そもそも始まってもないし。

目を覚ますと知らない部屋で寝ており、知らない女性が傍らに居た。
うん。これだけ話すと色々と誤解を受けそう。
でも実際の所は女性はベッドの傍らで看病してくれていたただけなん
だけど。

状況が分らず脳味噌がフリーズしている僕には今の状況を説明し
てくれる存在は有難かった。

どうやら僕は魔王の体に入ってしまったらしい。

―意味がわからないよ。

魔王といってもまだ正式な魔王ではなく、父である魔王の跡継ぎを
めぐって骨肉の争い勃発。
いざ魔王を名乗って活動をしようとした時に勇者にエンカウントを
してしまい、壮絶な戦いの末に辛くも勝利を治めはしたもののかな
りの深手を負ってしまったらしい。

―自称魔王（笑）

笑ったら長時間文句を言われた。うるさい。

僕が魔王の中に入ってしまった原因は勇者との戦いにある。

魔王と勇者の戦いは熾烈を極め衝突により生まれたエネルギーは大地の形を変えるほどだった。

そして戦いの果てに魔王と勇者それぞれが放った魔法の余波が異次元の世界へとつながるゲートを開くことになり、そこから精神体が飛び出して弱った魔王に入り込んだらしい。

本来なら惰弱な精神などは時間が経てば溶けて無くなるので問題は無いけど―（大アリだよ！）その後にはイレギュラーが起こり僕の精神が定着して体を乗っ取ってしまったらしい。

元に戻る方法は今のところわからない。

とりあえず元に戻る方法もわからないので当面は魔王として他の魔王候補をぶちのめしながら元に戻る方法を探そうという事になった。

うん…？

ぶちのめす？

無理無理無理無理！

僕は元の世界ではただの中学生だよ？

運動も得意じゃなく勉強も中の中と下を行ったり来たり、社交性も殆ど無く「クラスに一人いる目立たない奴その3」

頑張っても村人その2だよ！「今日はいい天気ですね！」しか台詞が無いモブだよ！

嫌がる僕への説得はただ一言「やらなきゃ死ぬぜ？」

勇者との戦いに負傷したために現在は隠れているけど何時までも隠

れていられる訳も無く、発見されたら刺客などがわんさか沸いてくることが予想される。

『だからやられる前に殺れ！』って事らしい。

―勘弁してください…

「一体どうやって戦えばいいんだ」と思ったら魔王の身体能力は他のものより優れているし魔力自体も失われてた訳ではないので、それで十分戦えると聞いて一安心。

よかったゝ

で？どうやって使うの？

そこからが大変だった。

魔力は膨大にあるので魔法の使い方さえ理解すれば使うのは簡単だ
と思ったのに、いくら教わっても一つも使えない。
難しい話は分からないけどどうやら魔法のバイパスが魔力に繋がっ
ていないらしく、何で繋がらないかは原因不明。

魔力は膨大に在るのに使えないとか。。。

ならば戦闘技術はどうかというと身体能力は魔王そのものだとして
も動かす僕はヘボ（悪かったね！）いので、そこら辺の魔物にも勝
てない状況。

さてどうしようと困った所へ美人さんが「人族の土地へ身分を身を
隠しながら力を蓄えるのはどうでしょう？」と提案した。

人族の土地は魔族の土地に比べて魔物が弱く魔王も手を出しにくい
場所なので都合がいいらしいので人族の土地に行く事になった。

人族の土地に来てから『お前、こんな事も出来ないのか?』と蔑まれ、「頑張ってください」と言いながらモンスターの巣に突き落とされる日々。

僕は身も心もぼろぼろになっていた。

実際は魔王の強靱の生命力を持っているので少々の傷なんかはすぐに回復するんだけど精神はズタボロだよ。

人族の町に來た晩に美人さんに「実は僕は魔王じゃ無いんです」と伝えたところ、『何で勝手にバラ漕んだ!』と文句を言われてうんざり。

「僕は魔王じゃないけど魔王の精神も残ってはいまずと言うと、美人さんは笑顔で首を傾げたが「魔王には変わりありませんから」と変わらぬ忠誠を誓ってくれた。

というか美人さんは魔王の従者だったの!?

美人さんの言葉を聞いて『今回は何とかなったが…』うんぬんかんぬん

『今後は他人に簡単に話すな！』と喚いてるのが魔王です。

魔王の声は僕にしか聞こえないらしい。

直接頭に響くので耳を塞いでも意味が無くうるさい。

美人さん「入れ替わりの事などは危険ですので他の者には話さないほうがよろしいでしょう。」

笑顔で言われたので今後は気をつけよう。

魔王『なんで我の話は聞かず、美人の話だけ聞くんだ！』

—うるさいなあ

そうして僕は剣術に関して超一流らしい美人さんに剣術を、魔王にこの世界や魔法について（無理やり）教わる事になった。

世界には2つの大きな大陸と小ささまざまな島がある。

一方の島で最大勢力を持つのが魔族
もう一方の島で最大勢力を持つのが人族

2つの島の間には激しい海流があるのでなかなかお互いの土地に軍隊を送るのは難しい。

だからと言って行き来が全く無いわけではなく、多きな戦争も数年、数十年い一回は起きることがある。

世界には他にも数多くの種族がおり魔族や人族はそれぞれの大陸に偏っているが、それ以外の種族は一部特殊な種族を除いてどちらの大陸にもいる。

見た目に関しては人族と魔族の殆ど違いは無いようだ。

元々は同じ種族だったけど思想や信仰するする神の違いにより対立。

信仰する神の力を受け進化して人族に勝る魔力を手に入れた種族が魔族。

なら魔族が優位かと思ったら魔族はそれほど協調性のある種族じゃない上に身体能力に関しては、殆どの魔族が人族とさほど変わらないかちよつと上くらいのものでしかないらしい。

魔族と聞いて想像する羽が生えてたり角があったりするのは魔族ではなく妖魔族といい、別種族らしけど思想が近いので魔族と共存関係にはある。

魔獣と言われるのは獣の類で殆どが知性は殆どないらしい。

種族は数が多いので全てを把握するのは難しいが大まかに分類すると「魔族側」と「人族側」の他にどちらにも所属しない「中立の種族」の3つに分かれるらしい。

—うん。これ以上何か言われてももう覚えれないから！

まあ人族の中に魔王の僕が居てもよっぽどのことが無い限り気づかれることは無い。

ただ一箇所にとどまるのは危険なので冒険をしながら戦い方などを勉強していくことになった。

人族の土地に来て早数ヶ月

美人さんは最初の数日こそ剣の持ち方や構え方を教えてくれたけど「実践は練習の数百倍の価値があります」と、笑顔でモンスター
の巣に落とされた時には本当に死ぬかと思った。
危ない時は助けてくれるけど少々の危ない状況なら笑顔で見ている
だけなので美人なだけにその笑顔が余計に怖い。

そんなこんなで毎日命を掛けた結果、魔法は全く使えないままだったけど剣に関しては一端の冒険者波には使えるようになっていた。

…多分。

――

人族の土地に来て半年。

冒険者として色々とモンスター退治などのクエストをこなして来た僕は、他の冒険者に一目を置かれる存在になっていた。

なんて事は無かった。

ただ「ものすごい美人を連れたガキが居る」という噂が聞こえてくるようになった。

美人さんはいつも通りの笑顔を浮かべているけど魔王が「そろそろここも潮時だな」と言ってるので別の町に移動する時期らしい。大体そういう噂が広がりだすとよからぬことを考える人間に町の外で襲撃されたり時には町の中でも絡まれる。美人さんが居れば対応は簡単だけど、そういう問題に巻き込まれると色々面倒で仕方ない。

今は町から約半日の街道から少し外れた森の中で野営をしていた。美人さんのスペックはとどまることを知らず、ナイフ一本で晩御飯を調達しておいしい料理を作る。

―美人さんって一体何者なんだろう？

聞いてみたけど「魔王様の従者です」と言われただけで、後は何を聞いても笑顔を返すだけなので聞くのをやめた。

――

2日目の晩

ぶつかり合う音と怒声に目を覚ます。

獣よけに絶やすことの無い火が消えた森の中は薄暗い。

ただ何も見えないわけではなく夜目が利くのは魔王の体質のおかげのようだ。

少し先に屈んで遠くを探る美人さんの背中が見えた。

僕「ど…」モゴ

近づいて美人さんに尋ねようとした僕の口を手でふさぎ、静かにするようにジェスチャーで伝えてくる

魔王『少し先で数人の戦闘があるな。剣がぶつかる音がするから旅人が野盗にでも襲われてるのだろう。』

そんな事まで分かるのか。

僕（どうしよう?）

美人さん（状況を見る限り野盗ですね）

美人さん（襲われているのは商隊のようで護衛が戦っているようです）

美人さん（ただ野盗の数は多く商隊の護衛は劣勢のようですね）

魔王『ここは捨て置こう。巻き込まれるのは得策じゃない』

僕（え?）

戸惑った僕に美人さんが目だけで「何か？」と問いかける。

魔王の言っていることを伝えた美人さんは少し考えてから判断は任せますと僕を見つめてくる。

魔王『今出たところで死体が一つ増えるだけだ』

僕のような弱い人間が出て行っても死ぬだけだと言うことか。

無力感に打ちひしがれる僕は美人さんが僕を見つめていることに気が付かなかった。

魔王『そうと決まればヤツラが気が付く前に移動しよう』

反応が出来ない。

魔王『早く移動しないとヤツラがこちらに気が付くかもしれん』

魔王の言葉を美人さんに伝えようと目を向けた時、いつも笑顔の美人さんが笑みを消しこちらを見つめていることに気が付き息を吞む。

「~~~~~っ!!」

女性の悲鳴が聞こえる。

馬車の中から女性が引きずりだされたのが暗闇に浮かぶ人影でなんとか分かった。

どうやら戦闘の音は止み野盗が勝利したようだ。
逃げようとする女性らしき人影を周りの人影が突き飛ばす。

子供の僕だってこんな状況に落ちいった女性が受ける仕打ちについては大体の予想は出来る。

下卑た笑いが聞こえてくる。

倒れた女性の髪をつかんで引きずり立たせる姿を見て僕は無意識のうちに飛び出していた。

隠れていた草陰を突っ切って行く事はしない。
居場所がばれていない状況で物音をするのは愚作。
木の葉を迂回し走り出す。

―姿勢を低く足を音を立てないように！

野盗に気付かれないよう馬車の陰に隠れて見られないように近づいていく。

敵の数は……8……9

馬車の横、女性の近くに4

少しはなれたところで死体を漁っているのが5人

魔王『馬車の中にもう一人気配がある』

10人

とりあえず女性の近くから行く

息を止め一気に馬車の陰から飛び出す

立ち居地は最後に見た位置とさほど変わっていない。

こちらを向いていた野盗が声を上げようとしたがそいつの喉に向かってナイフを投げる。

ナイフは狙った場所ではなかったが訓練の成果か右肩に刺さりAが倒れこむ。

他の3人がとっさの事に剣を構えようとする。

女性の髪を掴んでいた野盗Bは背を向けていたために反応が遅れていたので背中から切り付ける。

右手でナイフを素早く引き抜き右手に居る野盗Cに投げる。

当たらなくても牽制になれば十分。

Cが怯んでいる隙に左手に居る野盗Dにぶつかる様に突っ込んで剣を突き刺す。

魔王『飛べ！』

剣が引き抜けずに止まった僕に魔王の言葉が聞こえ無我夢中で剣を手放し左に転がるように飛ぶ。

急いで立ち上がって見るとCが背後から僕に切りかかろうとしていた様だ。

僕が急に避けた為にCの振りおろした剣は「僕という支えを無くして前のめりに倒れるD」を切り裂いていた。

ここに来て自分の手に残る人を殺した感触に血の気が引く思いをする。

―人を殺した。人を殺した。ひとをころした、ヒトヲコロシタ・・・

魔王『しっかりしろ！死にたいのか！！』

魔王の声にはっとする。

まだ目の前に1人、周りに5人以上居るのに剣が無い状況。
ここで呆けていたら殺されてしまう。

急いで腰のナイフを取り出す。

他の連中が来る前に目の前の敵を倒すか武器を奪わないとやばい。

魔王『あせるな』

魔王の一言に気持ちを無理やり落ち着かせる。

—そんなんで落ち着くわけ無いけど！

—そういう気持ちだけでも持ってみる。

大腿で突っ込んできた野盗Cが剣を振り下ろして来るのを体をずらして避ける。

ナイフを突き出したがCは後ろに引いて逃げながらなぎ払ってくる剣をどうにかナイフで受ける。

剣を押し戻しつつCに向かって踏み込む。

バランスを崩して倒れこむCに覆いかぶさるようにしてCの胸にナイフを突き立てる。

痙攣をして動かなくなったCを見て疲れと恐怖がどっと押し寄せる。

魔王『———！』

荒い呼吸と心臓の鼓動がうるさい。

魔王『おい、気を抜くな!』

魔王の声にまだ野盗が居ることを思い出し急いで野盗Cの剣を拾い周りに注意を向けたところで、馬車に寄りかかりこちらを見ている美人さんと目が合う。

どうやら残りの野盗は美人さんが倒したらしく、僕が野盗と戦っているのを見ていたようだ。

美人さん「相手が油断していたとはいえ敵に察知されずに近づいたのは中々良かったですね。」

魔王『一人で突っ込んだのは大間違いだな』

美人さんは僕より後に飛び出したはずなのに何時から見ていたんだろう？

美人さん「最初の投擲は命中精度が低いですね。減点1です。当たってよかったですね。」

―何その減点！

美人さん「2投目は牽制のつもりでしょうが、それでも急所に当てるつもりで投げないと駄目ですね。減点2」

―何点でどうなるの！？

魔王『魔法があれば牽制なんぞ考えずとも敵を葬れる』

美人さん「まだ敵が近くに居る状態で突きは判断としては良くないですね。減点3。現に抜けなくなりましたしね。」

僕が疑問を口にするより先に減点数が増えていく。

—もう止めて！僕の点数は0よ！！

美人さん「ただ背後からの攻撃を避けたのは中々の判断でした。振り返ったりしたら死んでました。」

魔王『避けれたのは我の忠告のお陰だがな』

—それはありがとう！魔王。

美人さん「その後に別の事に意識を取られたのは減点4。敵を目の前にして注意が散漫になるとやられますよ。」

魔王『全くだ。人を殺した程度で動揺なんぞして』

！！

—そうだ僕は…人を殺したんだ…

美人さん「ナイフを使った戦闘はバタバタしてよくないですね。減点5。相手がバランスをくずさなければ危ないところでした。」

魔王『本当に吊人形の劇を見ているような無様さだ』

美人さん「最後に敵がまだ残っている可能性があるのに気を抜いたのは致命的ですね。減点6…」

そこで顔を真っ青にした僕に気が付いたのか美人さんは僕を抱き寄せる。

美人さん「ただ初陣としては及第点を挙げてもいいかもしれません。」

と優しい声で囁いてくれる。

美人さん「貴方が野盗を倒したお陰で一つの命が助かりました。まづはその事を誇りに思ってください」

美人さんの体温と匂いに心が少し落ち着く。

美人さん「人に手を掛けた事に対して忘れろとも慣れろともいいません。人を殺す事に慣れるのは怖いことです。」

美人さんの鼓動が聞こえる。

美人さん「ただ相手は野盗です。罪を感じる必要は在りません。」

冷え切っていた指先に血が戻ってくるのが感じる。

美人さん「人を手に掛けた事に潰されること無く乗り越えてください。」

美人さんの優しさに心苦しさが溶けていくように感じた。

魔王『状況を利用して女に抱きつくとは…策士だな』

―そ、そんな事考えてないからね!!

―色々台無しだよ魔王。。。

第2話 首輪

小刻みに震える女性——小柄だし少女？を目の前に僕は途方にくれていた。

僕「怪我は無い？」

少女^{ビクッ}

どうやら急に話しかけられて驚いているようだ。

——困ったな。

こういう時に掛ける言葉なんかわからないよ。

魔王『女へ掛ける言葉一つ知らないのか？』

——うるさいな。

魔王『仕方ない。私の言うとおりに言うが良からう』

僕（魔王）「『賊は退治した。もう心配する事は無い』」

その言葉に少女が恐る恐ると言った感じでこちらを見る。

——いい感じだよ魔王！

僕（魔王） 「『さあ涙を拭くがよい。愛い奴よ。我が可愛がつてやろう。苦しゅうない、近k——』おかしいから！」

僕の（傍から見たら）一人ツツコミに少女がビクツと体を揺らす。また警戒心を抱かせてしまった。。。

まだ魔王は何か言ってるけど役に立たないのが分かったので放置。地味にうるさい。

どうしようか困っていたら野盗を縛り上げた美人さんが戻ってきたので少女の事は任せ、僕は賊の見張りに付くことに。

生き残りは僕が最初にナイフを指したAと美人さんが倒した5人の計6人か。

全員生捕りとかさすが美人さん。

賊は全員気絶させられて縛られてるので見張る必要が在るのかは疑問だけど何もしないよりはマシだね。

少しして美人さんに呼ばれる。

どうやら少女が落ち着いたらしい。

焚き火の光の中に美人さんと毛布にくるまれた少女が居る。
毛布なんてどこにあったんだろう？と思っただら、どうやら馬車の中にあつたのを拝借しているらしい。

僕「落ち着いた？」

少女
コクリ

一瞬、体を膠着させながらも小さくうなづく。
焚き火の明かりに照らされる少女の後ろにある羽を見て「あれ？」
と思う

魔王『ほう。妖精族の者か』

僕「妖精族…？」

妖精少女
ピクッ

魔王『妖精族というのは精霊の森に住む種族で滅多に外に出てくることは無い珍しい種族だ』

何でそんな種族がこんな所にいるんだ？

魔王『大方、人間にでも捕らえられたのであろう。』

よく見ると首に大きな首輪のようなものが付けられている。

魔王『封輪か。』

封輪？

魔王『あの首輪を付けられたものは魔力を封じられる。』

美人さん「どうやら彼女は住んでいた森の付近で囚われ無理やり連れてこられたそうです。」

どういふことなの？と美人さんに目を向けると、さっきの短い時間である程度美人さんが話を聞いていてくれたらしい。美人さん優秀すぎる！

―べ、別にその間の会話が面倒だったわけじゃ無いんだからね！

・名前は妖精少女

・妖精の森付近に居るところを人間に捕らえられてしまった。

・妖精の場所は良く分からない（外に出ることが無いので地理は理解してない）

・捕まって1ヶ月くらい（眠らされてたりしたので正確な日数は不明）

・どこに連れて行かれるかは不明。

・一緒に居た人たちは私を捉えた人たちの仲間（奴隷商人の一味らしい）

全部で7人（商人が1人、御者が1人、護衛が5人）

・皆の所に帰りたい

奴隷商人の一味は全滅していた。
少女に関してどうするかだけど：

魔王『ちょうどいい。珍しいから買おう』

ーうん。だまれ。

僕「この子を家まで送って上げようと思うんだけど」

美人さん「わかりました」笑顔で即答

妖精少女^{キョトン}

何を言われたのか分からなかった妖精少女は僕の言ってる意味を理解し驚きをあらわす。

僕「とりあえず封魔の首輪だけど。どうにかならないかな？」

美人さん「そうですね。本来なら鍵になるものがあるはずなんです
が奴隷商人はそれらしいものを持って内容なので、鍵自体は本来の
目的地にあるのかもしれませんが。」

鍵が見当たらないのは困ったな。

魔王『なんでわざわざ外すんだ。』

—うるさいよ、魔王。

美人さん「無理に外すのは危険ですね。」

首輪自体に魔力が込められており正規の鍵以外で外そうとするのは装着者の命に関わるらしい。

魔王『このまま飼えばいいではないか』

—だから少し黙ってね。

見ていて気持ちいいものじゃないので外してあげたいんだけどなあ。

魔王『別に鍵なんて無くても外すことは可能だ』

—もういいかげんに…え？何だって？？何て言ったの魔王！

魔王『我はうるさいのであろう。黙っておるから好きにするよい』

—ごめんなさい。もううるさいなんて（余り）言わないから機嫌を直して！

魔王『……』

―本当にごめんなさい。魔王様の力を見誤っておりました。

魔王『……』チラリ

―さすが魔王様、博識！僕らに出来ないことを平然としてしまう！！

魔王『……』ニヤリ

―そこにしびれる！あこがれる！！

魔王『……』テレ

―優しい魔王様。どうか無知な私めに魔王様のすばらしい英知をお与えくださいませ！！

魔王『…仕方がないな』ニヤニヤ

―この魔王ちよろすぎ！！！！

魔王『何かいったか？』ギロリ

―イエイエ。メッソウモアリマセン。

―で一体そうすればいいの？

魔王『簡単な事。私の魔力を持って首輪の魔力を相殺してしまえば
よからう』

―でも僕、魔法使えないよ？

魔王『魔法は関係ない。直接首輪に触れて魔力を注入するだけで無効化できる』

おお！

魔王『はずだ』

―確信じゃないのかよ！

魔王『お主がちゃんと魔力を出せるか分からぬからな。我がするなら確実なんだが。』

なるほどね。

美人さんと妖精少女に首輪は何とかなりそうだと伝えたと妖精少女が伏せていた目を僕に向ける。（可愛い！）

ただ僕自身もやったことが無いのでぶっつけ本番じゃなく少し練習する時間がほしいということも伝える。

そして妖精少女を元に居た場所に送っていく予定だと言うと妖精少女は「お願いします」と小さな声で言ってきた。（本当に可愛い！）

縛り上げていた野盗の一人を起こして尋問する。
妖精少女は馬車に居てもらっている。
尋問は美女さんがする事になった。

―僕は尋問なんて出来ないからね！

魔王『へたれめ』

―その通りだけど、うるさいよ！

野盗E「うう…」

美女さん「目が覚めましたか？」ニコニコ

野盗E「一体何が…はっ」

野盗Eは縛り上げられているのを理解し声を荒げる

野盗E「一体どういうつもりだ！」

美女さん「私の質問だけに答えてください」ニコニコ

野盗E「俺たちを誰だと思ってるんだ！こんなこととしてタダで済むと思うなよ！！」

美女さん「一体誰なんですかね？何が起るんでしょう？」ニコニコ

顎に手を当てちょこんと首を傾げる美女さん。

野盗Eは「どうだ！」とばかりに名前を言うが、そんな名前を僕たちが知るわけも無く美人さんは笑顔のまま。

美女さん「で、その由緒正しき野盗さんは全部で何人くらい居るんですか？」ニコニコ

野盗E「聞いて驚け。全部で100人を超す大盗賊団だ！」

美女さん「あらあら」ニコニコ

野盗E「さっさとこの縄を解かないと俺らの仲間が容赦しないぜ！」

美女さん「そうなんですか」ニコニコ

野盗E「へっ今更怖気付いても遅いからな」

美女さん「で、本当の所は何人なんですか？」ニコニコ

野盗E「だから100人を超す…」

美女さん「別に本当の事を言わなくてもいいですよ？いずれ自分から言いたくて仕方なくなると思いますし」ニコニコ

野盗E「へ？」

美女さん「別に貴方に聞かなくても他にも聞く相手はまだ居ますから」ニコニコ

その後の美女さんの拷問については多くは語るまい。

ただ野盗E・F・Gが精神的に少し陽気になったくらい。

――陽気ナナノハイイコオダヨネ。

魔王が『美女だけは怒らせないようにしよう』と呟いたのに僕も心の中で盛大に頷いた。

美女さんの誠意溢れる説得で聞き出した内容をまとめると

- ・ 本当の人数は19人（ここに居る人数を抜いたら残り9人）
- ・ 近くの山の中腹に拠点がある
- ・ 2ヶ月ほど前に別の土地からここに流れてきた
- ・ いつもはこの街道を通る商隊や付近の村を襲っている
- ・ 別働隊の9人は近くの村を襲っているはず
- ・ 親分は妖精少女の髪を掴んでいた男（最初に倒しちゃったよ）

それだけ聞くと美女さんは野盗に当身を入れて気絶させてしまう。

――笑顔がむっちゃくちゃ怖い。

奴隷商人の馬車は前が馬も無事で使えるようなので使う事にする。
人が乗る箱部分と後ろが奴隷を入れるだろう牢屋部分が連結してい

たので、生き残った野盗を縛ったまま後ろの牢屋部分に押し込む。
少し考えて一応、奴隷商人と護衛の死体も一緒に牢屋に突っ込んだ。

―もしかしたら商人の死体から何か分かって他の奴隷が助かったり
しないかな―

とか思って美女さんに聞いたら「大丈夫でしょうが私たちが商隊を
襲ったと勘違いされるのを防ぐためです」と言われた。

前の箱に僕と妖精少女が乗り込み美女さんが御者をする事になった。

夜が開け日が昇って少したってから騎乗した兵士10人に出会う。
騎士たちは野盗を討伐する為にきた領主の兵で馬車の後ろの牢屋の
話をする。死体と野盗は引き受けてくれる事に。

妖精少女については奴隷商人に連れられていた奴隷の少女で元の村

が僕たちの向かう方向と一緒になので送る旨を伝えると、当初は自分たちがと言っていた騎士も最終的には美女さんの笑顔に「お願いします」と言っていた。

美女さんの笑顔、最強ですね。

まあ妖精少女が僕たちに懐いていたのもあるかもね。（主に美女さんにだけど）

妖精少女の羽は毛布に包まって隠していたので大丈夫。恐怖に今だ怯えた少女を演出（殆どその通りだけど）

褒美も出るし出来ればこのまま館まで野盗と死体を運んで貰えないかと言われ美女さんが快く了承。

後で聞いたら「あそこで断ると不振に思われるから」と笑顔で言われた。納得

野盗と戦った場所、アジトの場所、残りの野党の人数、近隣の村に被害が出ている可能性を伝えたところ、討伐体の騎士たちは馬を駆ってあっという間に見えなくなった。

僕たちは後に残った一人の騎士と共に領主の館へ向かった。

――
昼前に領主の館に到着。
騎士に案内されて領主に面会する。

領主「野盗討伐に協力してくれたらしいな。感謝する」

――50代のダンディーなおじ様きたこれ！

領主「もっとぼってりと不健康に太っていて無駄に威張ってると
思ってた！」

魔王『まあそういう輩は腐るほど居るがな』

――やっぱりいるんだ！

領主には僕をとある地方貴族の三男で美女さんはその従者で、見聞
を広げるために冒険者をしながら旅をしていると伝えた。
領主の言葉に美女さんが如才がない対応をしている。

—いいのかな任せきりで。

魔王『人間界の事は美女に任せておけば間違いなからう』

—意外と信頼してるんだね。

魔王『……』

—あれ？照れちゃってるの？ニヤニヤ

魔王『うるさい』

領主「褒美は何がよい？」

美女さん「頂けるのでしたら奴隷商人の馬車を」

領主「あれでいいのか？」

美女さん「はい。旅に馬車があると便利ですので」

領主「ふむ」

美女さん「あと、出来ることならばもう一つお願いしたい事が」

領主「それは？」

美女さん「奴隷少女は私たちが村まで送らせて頂きたいです」

領主「私の方でも送り届けるつもりだったのだが？」

美女さん「奴隷少女も私に懷いておりますし、ちょうど彼女の村の方面に向かいますので」

妖精少女が美女さんを不安そうに見上げてギュッと服を掴む（可愛い！）

それを優しい微笑で見つめる美女さん。

魔王『綺麗だが薄ら寒いモノを感じるのは何故だろうか？』

そうだね、と心で頷いた瞬間に美女さんがチラッとこちらを見たのと目が合った

——全然何も思ってもませんよええとても素晴らしい笑顔に僕は神に祈りを捧げる勢いで——

と良く分からない言い訳を心の中で一心に唱え続ける。

―こ、心が読めるの？美女さん！

魔王『ナニモイッテマセンヨー』遠い目

魔王の声は聞こえない筈なのに同じく言い訳をする魔王。

その姿勢を弱いとは言えない。

領主「ふむ。確かに懐いているようだな。」

妖精少女と美女さんを見て呟く。

領主「よし分かった。その少女のことはそなたらに任せよう」

美女さん「ありがとうございます」

領主「他に何か望みはあるか？」

そういう領主に美女さんは僕を見つめる。ああそか。

僕「特にありません」

一応、僕が主人なのか。

魔王『一応じゃなく主人なんだがな』

全然そんな気にならないね。

その後、領主が今日は泊まっていって欲しいという申し出に「期日の迫った届け物があるので」と辞退。

では風呂は無理でもお湯を沸かすので身を清めてはというのには美女さんが笑顔で「ありがとうございます」と言う。

1刻後。

スッキリした僕が部屋で待っていると美女さんと妖精少女が戻ってきた。

妖精少女の衣服は領主さんが「子供用は無いが詰めて使ってくれ」と幾つかの服をくれたので、それを美女さんが簡易で詰めたのを来ている。

ゆったりとした服で羽が隠れるように出来ているようだ。

なんていうのかな。

身を清めて着替えた妖精少女は本当に要請のように可愛い！（妖精だけど！）

魔王『ホウ、これは将来有望な逸材だな』

―将来とかじゃなく今でも十分な逸材だからね！

その後、簡単な食事をご馳走になり領主に挨拶をし、館を後にした。

第2話 首輪（後書き）

1話で魔王で魔族の後継者争いがどうこう言う話が出ましたが当分は関わって来ません。そもそもそこまで話が続くかどうかとも分かりません。

とりあえず言えることは「可愛い！」

第3話 戦士

旅の一日は日が高いうちに移動し日が落ちる前に野営する。

朝は美女さんに馬車の扱いを教わるが簡単そうに見えて中々うまくいかない。

妖精少女は馬車の中から興味津々と言う感じで見ている。

「一緒にやる？」と聞いたら小さく首を横に振って僕がやっているのをじっと見ていた。

昼からは馬車の中で妖精少女の首輪を外す特訓。

といっても手のひらに魔力を通せるようになる訓練だけど魔王が『そんなことも出来ないのか』『子供でも出来るぞ』『恥ずかしい』と言うのが煩い。

夕方頃に野営準備をする。

野営地は街道にある程度あるので通常はそこを使用する。

先客が居たり後から人が来たりする場合は要注意。

妖精少女の正体が妖精族と悟られないようにも注意しなくてはいけないけど、大体は美女さんによからぬ事をしようとする輩が出てくることもある。

誠意を持って告白する相手には笑顔できっぱり拒絶するだけですむけど、腕力にモノを言わせようとする相手には笑顔でねじ伏せる美女さん。（コワイ！）

魔王『花が野花か食人花かも見分けれんと愚かな。あんなのに手を出そうとする気が奴の知れん』

貴方の従者ですよね？

食事の後は美女さんの剣術指南。これがハード。

美女さん曰く「疲れきったら夜中に何かあった時に対応できないので程ほどに」やってるらしいけど。

妖精少女はここでも興味深そうに見ている。

さすがに「一緒にやる？」とは聞かない。

その後は僕と美女さんが交代で見張りをし一日が終わる。

妖精少女も見張りをするつもりらしいけどすぐに船を漕いでしまう。

（可愛い！）

領主の館を出て数日。

その間のエンカウントはモンスターとの遭遇が2回。

毛皮と食用の肉が入った。肉はその夜に美女さんが燻製にした。

途中に寄った村で一部の毛皮と燻製肉を物品と交換する。
その中に子供服も何点かあった。さすが美女さん。
無地のワンピースだけどよく似合っていて可愛い！

そして5日程たったある日。

魔王『やっとか』

魔力を宿した手を見つめて呆然とする僕

魔王『結構な時間がかかったな』

僕「やった…」

この日、やっと手に魔力が通せるようになったのだ。

魔王『まずは第一段階クリアだな』

やっと、これでやっと妖精少女の…第一段階？

魔王『うむ。これからその魔力をコントロールできるようにしないとな。』

—まじですか！

魔王『次の段階は魔力を手のひらに集めるようにする。』

ふむふむ

魔王『その後は魔力の強度を調節できるようにして何とか首輪を無効化できる』

—なるほど

魔王『武器などに魔力を通せるようになったら完璧だな』

—武器に魔力！魔法戦士ですね！

魔王『まあそこらの武器なんぞは魔力を通した瞬間に碎けるがな。』

—意味無いじゃん！

魔王『うまく魔力を通せばなまくらでも少しくらいの切れ味や強度は上がるだろう』

—おお！

魔王『その脆弱な武器を壊さないように魔力が通せるようになれば首輪も外せるだろう』

―砕けるならそれで外しちゃえばいいのに

魔王『首輪に限定できない破壊は装着者も傷つけて場合によっては死ぬが?』

―練習大事だよね!

魔王『手のひらに集めることが出来たら後は微妙な調整をするだけなのであつという間だ』

―よし、がんばろう!

魔王『(多分な)』

―ん?何か言った?

魔王『何も言っておらん。さあ始めるぞ』

もうすぐで妖精少女の首輪が外せると思うと修行にも力が入る。

魔王『力みすぎだ、もっと力を抜け！馬鹿者！！』

空回りでした。

数日後

空回りは続く。

魔力を手のひらに集めることが出来ない。

魔王は『魔力をボワっじゃなくホっつという感じにすれば出来る』
と言う。

—意味がわかんないよ。

知識についてはちゃんと教えることが出来る癖に（口は悪く偉そうだけど）

感覚の話になるとなまじ苦勞してない分、説明が出来ないらしい。

美女さんに愚痴をこぼしたら少し首をかしげ

美女さん「魔力は出せるのですからその魔力を手のひら全体ではなく手のひらの中心に意識をし、丸い石のようなものを掴む感じをイメージしてみてもどうでしょう？」

とアドバイスをしてくれた。

—その説明は分かりやすいけどそんな事でいいのかな？

とか思いながらやってみたら出来た。

掌に魔力が集まっている。

妖精少女はそれを珍しそうに見た後に自分の掌を眺めてた（可愛い！）

魔王『ほれみろ。言ったとりでできたではないか』得意げ

魔王の説明で出来たんじゃなく美女さんのおかげだからね!!

そこからは物に魔力を通す特訓が始まった。

さすがに剣を駄目にするわけには行かないので石や木の枝などに魔力を通す。

最初はどれくらいの量なのか分からずにとりあえずちょっと力を入れたら

手のひらサイズの石が一瞬で割れたのにはビックリした。

数日が立つ頃には物の多きが魔力の容量では無いことが分かった。

同じ場所の石でも物によって容量が違うのは不思議だ。

分かったからと言って壊さずに通せるわけではないけど。

魔王の説明は相変わらず良く分からない。

本当に感覚の説明は壊滅的に駄目だな。

駄目元で美女さんに聞いてみた。

美女さん「私は魔力自体はさほどありませんので良く分かりませんが」

僕「美女さん魔力はそれほどないんだ。」

美女「ええ。ドラゴンを丸焼きにする程度にしかありません」

僕「そうか、ドラゴンええええええ？」

美女さん「冗談です」ニコニコ

—美女さん…冗談に聞こえないから。

美女さん「魔法に関しては嗜む程度なので詳しくはわかりません。」

美女さん、この前「剣術以外は嗜む程度」って言ってたのに無理やり手籠めにしようとしたゴツイ男を3人素手で倒してたよね…？

美女さん「魔力を通すという感覚ではなく入れるという感覚なのでしょうか？」

僕「何が違うの？」

美女さん「そうですね。通すとなると流し込む感じをイメージするのですが、入れると言うのは」

とそこで目の前にある器を手に取り

美女さん「このように器に水を貯める感じなのではないでしょうか？」

器に水を注ぐ美女さん。

美女さん「一気に入れると水はこぼれてしまいます。最初は緩やかに次第に勢いをつけて入れます。そうしていっぱいになる前に止めるんですね。」

水をぎりぎりまで入れる。

美女さん「ただ水をいっぱいまで入れてしまうと少し揺れただけでこぼれてしまいます。ですのでMAXまで入れるのではなくすこし余裕を持たせる感じで魔力を通せば壊れてしまう事も無くなるという事ではないのでしょうか？」

なるほど

試しに横に転がる石を手に取り試してみる。

最初は少なめで徐々に満たしていく

石に魔力が通るのが感覚で分かる。

とすぐに石は割れてしまった。

妖精少女が割れた石を見て「おお」と手をたたいていた（可愛い！）

美女さん「あら？だめでしたか？」

全然そんな事ありません。

いつもは一瞬で壊れていたものが少しでも魔力を通すことが出来たので

何となく感覚はつかめました。

魔王『だから何度もそういつてたのに。これだから理解力の無い奴は』ブツブツ

—もうつつこまないよ？

さらに数日。

途中、立ち寄った村が野獣による作物の被害で困っていたので退治の依頼を受ける。

妖精少女は危ないので村に居たらどうか？という村長の申し出は妖精族だとバレと困るので連れて行くことに。

美女さんがいたらある程度の脅威なんか目じゃないだろうしね。

野獣は村の東の森から来るらしい。

数名の村人と日中に東の森を探してみたがそれらしいのは見つからなかった。

夜は村長の家を間借りする事に。

野獣は深夜に現れるらしいので村人と協力して見張りに立つものの何事も無く朝を迎える。

翌日は東の森から少し南のエリアを探すもののやはり野獣は発見できず。

途中でゴブリンを発見したので倒す。

村人曰く今までこの森でゴブリンを見たことは無いらしい。

ゴブリンは群れで行動する。必ず近くに巣があるはずだ。

今まで見たことが無いということはまだ巣が出来たばかりだと思われるが、放置をすると数を増やし必ず村に被害が出るので早めに潰しておくことに。

足跡を辿っていくと崖に穴を掘った巣らしきものを発見。

森からこっそり伺うと巢の前で5匹のゴブリンと2匹の狼が争っていた。

村人に物音を立てないようにじっとしている様に指示を出す美女さん。

狼はゴブリンに傷を負わせているようだが劣勢のようだ。

それでも引かずにゴブリンに向かっていく。

一匹の狼がゴブリンの喉に噛み付く。

その狼に別のゴブリンが手にした木の棒をたたきつける。

その後も両者の戦闘は続いたが数の勝るゴブリンが勝利を収めた。しかし2匹の狼もただやられた訳ではなく、2匹のゴブリンを倒して生き残った3匹も満身創意の状態だった。

そこまで見て僕と美女さんが飛び出す。

驚いたゴブリンはこちらに向かおうとするものが2匹、残り一匹は逃げようとしていた。

正面にいるゴブリンが一匹向かってくるのが見える。

僕はのっそりとした動きに注意をしながら接近。

振りかぶった木の棒を持つ腕を切りつけた後ながら空きの体をな切り裂く。

美女さんを見るとあっという間に1匹のゴブリンを倒したいつもの笑顔で逃げるゴブリンを見ていた。

―あれ？何で逃がしたんだろう？

そう思っていると美女さんが村人を呼び寄せて指示を出す。

美女さん「数名私とついてきてください。ゴブリンの巣を潰します。」

美女さんはここがゴブリンの巣じゃないと判断したようだ。

美女さん「残りはここで他に居ないか確認作業をしてください」

僕は居残り組みだった。

まあもし他にゴブリンが残っていた場合に村人だけだと厳しい、信頼されてると思っておこう。

美女さん「妖精少女をお願いします」ニコニコ

そういうと数人の村人を引き連れてゴブリンの後を追った。

ゴブリンと野獣が本当に死んでいるのか確認をすると狼にやられたゴブリンは2匹とも喉を食い破られて死んでいた。僕と美女さんが倒した2匹も即死のようだ。

2匹の狼のうち1匹はすでに死んでいたが、もう一匹は辛うじて息

はしていた。

光を失いつつある目がそれでも僕を必死でにらんでいる。

魔王『ほう』

村人の話ではこの2匹が村を襲っていた野獣らしい。
村人は止めを刺して毛皮を剥ごうと話をしている。

魔王『トメロ』

—え？

魔王『あやつらを止めろ』

—毛皮を剥ぐことを？

とりあえず村人に止めを刺すことと毛皮を剥ぐことをやめるように伝える。

不満の声を上げるがどうにか納得をしてもらうことが出来た。

いつの間にか妖精少女が狼のそばに座って毛並みをなでていた。

血で自分の服が汚れる事は気にならないようだ。

そんな妖精少女を見ていた狼の目の光は弱っていき小さく鳴くと動かなくなった。

魔王『こやつらは戦士だ。戦士の身を汚すような事はするべきでは

ない』

—そういうもののなの…かな。

狼の死体を埋める穴を掘らないと思ったところで洞窟の中から小さな声が聞こえた。

見ると狼の子供が2匹、洞窟の入り口から飛び出した。

どうやらここは狼の巣でゴブリンから子供を守っていたらしい。

村人達が「狼だ」「子供だ」「まだ残っていた」と騒ぎ出す。

小さいうちに殺してしまおうという村人達に声がかかる。

妖精少女「この子たち殺しちゃうの？」

全員の目が妖精少女を見る。

妖精少女「殺しちゃうの？」

不安げに見上げてくる。

村人が「仕方ないんだよ」という風なことを説明するが納得されるわけもなく

妖精少女は2匹の子狼を抱き上げる。

妖精少女「かわいいそう」

どうしたものかと思つてるところに美女さんたちが戻ってくる。

どうやらゴブリンの巣があったようで、5匹ほどいたけど全部倒し巣を潰してきたらしい。

さすが美女さん。

子狼に関しては話を聞いた美女さんは少し首を傾げたが、妖精少女に「ちゃんと責任を持てますか？」と聞く。

頷く妖精少女を見て「私達が責任を持って連れて行くので任せて欲しい」と笑顔で村人に伝えた。

「村長に相談しないと」としどろもどろになる村人。

美人さんの笑顔つよ！

2匹の親狼を丁重に埋葬したいという魔王の意見を聞いた美女さんは狼の巣に2匹の遺体を入れて崩すのはどうかと提案してきた。狼の巣が別の野獣の巣になる事もないし埋葬も出来るというのだ。

―力技だなあ

魔王『戦士の身が汚されることの無いようになるなら問題は無い』

―いいんだ。

狼の巣に他に何もいない事を確認。巣はそれほど大きくも深くもな

かった。

親狼2匹の遺体を巣の奥に横たえた後、美女さんが洞窟の入り口上方に剣を走らせる。

それだけで入り口が崩れ埋まる。

魔王は小さな声で何かを呟いていた。

魔族に伝わる戦士を送る言葉らしい。

入り口は完全に埋まった。

洞窟全体を考えると中は空洞があるかも知れないが、無理に掘り起こそうとしたら崩れて危険なのでもう使用されることは無いだろう。子狼は妖精少女の腕の中で大人しくしている。

どうやら親狼の血の匂いが子狼を安心させているようだった。

村に戻って村長に狼の脅威がなくなった事とゴブリン退治を説明。驚きの後に村長はゴブリン退治の謝礼が出せるほど蓄えが無いと申し訳なさそうに切り出した。

通常、ゴブリンの巣を潰す依頼となると規模にもよるが野獣退治の報酬の数倍もする。

僕「いえいえ。かまいません。我々は皆様が安心して暮らしていただける事が最大の喜びです」キリッ

なんて事を僕が言えるわけも無く

美女さん「いえ。狼はゴブリンとの戦闘で果てました。我々はその後にゴブリンを倒しただけ過ぎませんので先のお約束の報酬でかまいません。ただその代わりと言ってはなんですが2匹の子狼は私どもにお任せください」

それでよろしいですね？と僕をみる美女さんに頷く。

――全く問題ないです。

村長も村人も僕達にすごい感謝をしていたけど、それよりも2匹の子狼について妖精少女が喜んでいたのがよかった。（可愛い！）

魔王『私の眷属として立派に教育してやろう』

得意げに2匹の子狼を見て言ってるけど、懐いてるのは妖精少女にだからね？

第4話 出会い

子狼が来て数日がたった。

順調に妖精少女に懐いているようで周りでじゃれあってる。

食事も妖精少女の手からなら食べるようだ。

最近の妖精少女はよく笑うようになったと思う。（可愛い！）

元々は良く笑う子だったのだろうけど怖い目にあって心を閉ざしてしまっていた。

子狼を助けて本当によかった。

ただその笑顔をまだ僕には向けてもらえてないけどね。

ーさ、寂しくなんかないんだからね！

魔力の訓練はある程度の成果を見せつつある。

手当たり次第にそこらにある石や木の枝に魔力を通してているが、勝率は7割と言うところまで来た。

魔王『石程度で100%じゃないというのはマダマダだな』

厳しいなあとも思わないでもないけど妖精少女を危険な目に合わせる訳には行かない。

僕達は国境を越え新しい国に入った。

国境は兵士が多く物々しい感じだったが、特に何も言われなかった。

僕達の旅は特に問題は無く進んでいる。

たまにある野獣とのエンカウントは問題に含まれない。食糧補給になるしね。

2日目の晩に美女さんが「他の旅人などと会わなくなりました」と呟いていたのが印象に残った。

確かにここ数日、旅人も商人ともすれ違っていない。

ただそういう事もあるかな、という程度のものだった。

3日目の昼前に村を発見したので寄る。

近づくに至るところが壊れており廃村だとわかった。

村に入ると黒焦げた家などが見受けられる。

炭になった部分を見る限り燃えてある程度の日にちがたっているようだ。

壊されたり焼けたりしている家を見る限り野盗の仕業かもしれない。野盗の5人や10人程度なら美女さん一人で大丈夫だと思うけど村が一つ潰れるような状況というのを鑑み、この場を離れたほうがいいという事になり廃村を後にする。

5日目の夕刻

争う声が聞こえて馬車を止める。

街道脇の森のほうから複数の人間が飛び出してきた。

どうやら大柄な人物に手を引かれた小柄な人物が複数人の人間に追

われているようだ。

追われているほうはどちらもフードを被っている為にどういう人物かは分からない。

相手はこちらに気がついたようで僕らと違うほうへ行こうとして小柄な人物が躓き転んでしまった為に後から追ってきた集団に追いつかれる。

「逃がすな!」「取り囲め!!」

大柄な人物は小柄な人物を庇う様に敵に剣を向ける。

—なんなんだ？

状況が良く分からない僕。

美女さん「いつでもいける準備をしてください。妖精少女は馬車に隠れていてくださいね。」

美女さんが小声で言うてくる。

追いかけて来たのは同じデザインの鎧をきた男が9人。

そのうちの一人が顎で合図を送ると2人が馬車に向けて走ってきた。その様子を見た大柄な男がこちらへ「逃げろ!」と声を張り上げる

美女さん「2人こちらに来るようです。どうやら私達を害するつもりようです。状況はわかりませんが仕方ありません。あの2人を助けます。タイミングを見計らって馬車から出て注意をひきつけてください。」

馬車に近づいた男に美女さんが「い、一体なんでしょう？」と怯えたような声を出す。

魔王『いつも笑顔の美女の怯えた声の顔ってどんなんだ？』

馬車で息を殺して隠れている僕に魔王の呟きが聞こえる。

—うわゝ、どんな顔だろう？

緊張感溢れるシーンなのにもう僕は好奇心が一杯で仕方ない。もう敵に発見されてもいいから見に行っちゃおうかな。というものすごい誘惑に駆られながら我慢する。

鎧男「旅人か？」

美女さん「は、はい」

鎧男「女か・・・悪く思うな」

その声を聴いた瞬間に僕は馬車から飛び出す。

鎧2人はこちらを振り返り警戒をしようとしたがその隙に美女さんが2人を切り伏せていた。

—くそ！

魔王『残念ながら美女の顔は見えなかったな』

—本当に！じゃなくて！！

美女さん「行きます」

笑顔で僕に告げて走り出す美女さんに僕も続く。

囲まれていた人物は7人のうち1人を切り伏せていたが人を一人を庇って戦って居るために至る所から流血していた。

だがいまだ倒れることは無く6人を威嚇しながら隙をうかがっているようだ。

小柄な人物も剣を構えてはいるがあまり使えそうな感じではない。

周りを囲んでいる鎧のうち何人かがこちらに気がつき仲間に警告の

声を発する。

美女さん「助太刀します」

短く発した美女さんと僕は近くの鎧男にそれぞれ切りかかる。

大柄な男「・・・感謝する」

そういうと僕と剣を合わせている鎧男を後ろから切り伏せ小柄な人物の手を無理やり引き、僕と美女さんの間を抜けると小柄な人物を隠すように反転して鎧男に退治した。

先ほど大柄な男が切った1人と、一瞬で美女さんが1人を切り伏せていたので残りは4人。

4対3では劣勢と見たより男達のリーダーらしき人物が「引くぞ」というと全員背を向けて走り出した。

背を向ける一瞬の隙に美女さんが距離を詰めリーダーらしき鎧男の背中をばっさり。

その行動にぎょっとして1人の動きが止まった瞬間を見逃すことなくあっさりと切り伏せる美女さん。

―容赦ない。

残り2人は気がつかなかったのかどうか分からないがそのまま走っ

て逃げていった。

「ふう」と一息ついて剣の血のりを払う美女さん。
ただ鞘に収めることは無く剣を半身で隠すように立つ。

美女さん「状況が良く分からないのですが説明いただけますか？」
ニコニコ

大柄な男「あ、ああ・・・」

美女さんの笑顔に若干押され気味の大柄な男。
僕と美女さんがまだ抜き身なのを確認し自分の剣を収める。
それを見た美女さんが剣を収めるのを横目で見ながら僕も剣を収めた。

大柄な男はフードから顔を出すと若くきこえる声よりナイスなミドルだった。

大柄な男「まずは助け立ちして頂き感謝の念に耐えない」

美女さん「いえ、成り行きですから」

大柄な男「詳しい説明をしたいが時間が惜しい」

美女さん「戻ってきます?」

大柄な男「来る」

「ふむ」と笑顔で首を傾げる美女さん

美女さん「野盗じゃないですね。」死体をチラリ

大柄な男「うむ。この国の騎士だ」

美女さん「巻き込まれました?」

大柄な男「すまない」

美女さん「ではまずはここを離れましょう。充てはありますか?」

大柄な男「距離はあるが・・・」

美女さん「説明してくださいね?」

あれ?

僕の良く分からないうちに話が進んでる。

魔王『脇役だから仕方あるまい』

何！その衝撃の事実！？

馬車に戻って妖精少女に大丈夫という事を伝える。

妖精少女を見た大柄な男は「こんな幼子が大事無くてよかった・・・」と呟いていたので案外いい人なのかも知れない。

自己紹介での僕達の関係は僕は貴族の3男で見聞を広げる旅をしている。

美女さんはその従者で妖精少女は旅の途中で出会った孤児で分け合って一緒に旅をしているという説明をした。

どちらかと言えば美女さんの従者が僕という感じだけど黙っておいた。

相手は大柄な男と子供と名乗る。

御者は僕と大柄な男が勤め馬車の中に美女さんと妖精少女と子供が乗り込み大柄な男の指示により移動した。

馬車の中と外だが布一枚なので話す分にはあまり問題は無い。

妖精少女は少し子供のことに興味を引きながらも美女さんに引っ付いており子狼をひざの上に乗せている。

子供はフードを目深く被りひざを抱えているが妖精少女の手元の子狼を見ているようだ。

大柄な男「この国の現状はどこまでご存知で？」

美女さん「殆ど知りませんね。」

どうやらこの国は前王が崩御して第一王子が後を継ぐ予定だったが体感直前に暗殺されてしまったそうだ。

その後、病弱な第2王子と第3王子のどちらが王になるかで取り巻きに寄る争いが起こったが第2王子が病死（というが本当は不明）の為に第3王子が帝位についた。

しかし政は自分を支持した貴族に任せ贅の限りを尽くし、貴族も自分達の富と権力の為だけに政を行うようになり国が荒れていった。

第3王子即位1年後、今から約4ヶ月ほど前に密かに準備を進めていた第4王子と第2王女は、共に民衆の為に立ち上がるべくクーデターを起こすも裏切りに合い負けてしまう。

第4王子も第2王女も何とか逃げ出す事が出来たようが今は行方が知れず大柄な男と小柄な人物はクーデター加担者として追われている状況らしい。

大柄な男「我々は各地に隠れ力を貯めながら時期を待っている状況です。」

なるほどね。物語によくあるパターンだ。

僕「じゃあもしかしてそっちの小柄な人物が第2王女だったり」

まあ子供と名乗ってたので明らかに違うけど。

何気ない気持ちで言った僕の冗談に大柄な男と子供がピクリと動く。

魔王『ほう』

美女さん「そうだと面白いですね。なんでそう思うんです？」

んー僕の昔読んだ本ではどうだったかな？

僕「だってたった二人に正規の国の騎士が追っかけて来るんだよ。大げさな」

美女さん「でもクーデターの主要メンバーならありえるのでは？」

僕「うん。でも捕まえろ殺そうとしたり目撃者を消そうとしたりするのは生きていて欲しくないけど騎士が殺害した事が噂になるのはまずい人物という事になる。」

美女さん「なるほど」

僕「大柄な男さんも自分の身を盾にしても子供を守っていた。屈強の戦士である大柄な男さんが明らかに弱いであろう子供をそこまでして守るとしたら、よほどの重要人物なんだろうしね」

美女さん「もしかしたら自分が巻き込んだ相手をたえそれが誰であつても見殺しに出来ない性格なだけなのかもしれません？」

僕「そうなんだけどね。でももし途中で出会った見知らぬ子供だとしたら騎士がそこまで執拗に狙うかな？」

大柄な男「というところ？」

馬車の空気が少し変わったことに気がつかずに僕は自分が読んだ物語の内容を話していた。

僕「だってもしただの子供なら大柄な男さんを殺した後には口封じでも何でもすればいいのに、騎士達は大柄な男さんではなく子供を優先的に執拗に狙っていたように見えたよ。」

大柄な男「もし仮にこの子供が重要人物だとして、何故王子ではなく王女なの？その理由は？」

僕「んゝあるにはあるけど・・・」

大柄な男「ぜひ聞いてみたいな」

僕「国の王子ともなると少しは剣術位は習っているはず。それにも関わらず剣を扱うのが不慣れな感じがした」

大柄な男「ふむ」

僕「それと手を引かれていて自分の走りが出来ないとはいえ走りなれていない感じがもう一つ」

大柄な男「・・・」

僕「でも一番の理由は・・・」

そこまで言ってちょっと馬鹿らしい理由過ぎるかな？と思いい口を濁す

大柄な男「理由は？」

僕「えゝつと・・・」

今まで自分が読んでた物語と照らし合わせてしたり顔で話していたことが急に恥ずかしくなる。

振り返って馬車のほうを見ると全員が僕を見つめていた。

子供ですらフードの奥から鋭い目を向けている。

ううう・・・女の子呼ばわりした事に怒っているのかな。

子供の目を見つめ「冗談だよ」という感じで笑いながら

僕「だって王子様もいいけど、どうせ助けるなら可憐な王女様のほうがうれしいから」

場の空気が死んだ。

見つめていた子供の目が大きく見開かれる。

―ああ、呆れられた・・・

馬車のガラガラという音だけが大きく聞こえる。

大柄な男 「つぶわっ ははははははははははは」

大柄な男が大笑いをしてくれる。

止まっていた空気が動き出す。

笑っていてくれてありがとうございます。助かりました。

魔王『鈍いのかそうでないのか・・・』

いつもは「うるさい」で片付けるけど空気を読めずしたり顔で読んだ物語と照らし合わせて妄想をしゃべってたのは自分なので今日は甘んじで受け取る。

魔王「やはり鈍いだけか」

—やっぱりうるさいよ。

何回も言わなくてもいいじゃないか。

魔王
『やれやれ』

大柄な男「素晴らしい推理でした」

それだけ大笑いしていただければ幸いです。

大柄な男「どうでしょう？彼らなら信用できると私は思いますが」

と大柄な男が馬車の中の子供に話しかける。

子供「爺に任せる」

子供は僕を見つめた後に大柄な子供に向かって囁いた。

大柄な男 改め 爺「真にすばらしい推理でした。」

クエスチョンマークで一杯の僕に爺が言う。

大柄な男「私はこの国で騎士団団長を勤め上げた後に第2王女付きの近衛騎士隊長をしております。そしてあちらにいらっしゃる方が・・・」

子供「自分で自己紹介をします」

そういいながら取り払ったフードの中から10代の綺麗な少女が出ていた。

僕より少し上かな？

子供「あなたの仰るとおり、私はこの国の第2王女です。」

あまりの超展開に思考が尽いていけずにただ第4王女の目を見つめてしまう。

魔王『お前が予想した通りじゃないか』

—そうだけど！

美女さん「あらら。あまりの美しさに目を奪われているんですか？」

ただ見つめ続ける僕に美女さんの楽しそうな声やし第4王女が恥ずかしそうにつつと視線をそらす。

—違いますから！あまりの展開にフリーズしただけですから！！

無駄にあわあわする僕。

美女さんはもっと早くに気がついていたのかな？

もしかしたら最初からかも知れないと思ってしまう所が謎だね。

魔王『最初からだろうな』

妖精少女は「当たった〜すごい」と目を丸くして手をたたき僕を賞賛していた（可愛い！）
ちよっとほっこりした。

魔王『そればかりだな』

―妖精少女故、致し方なし！

第4王女と爺は別の拠点にいる所を襲撃され逃げてきたて隠れながら落ち延びているところ発見されてしまい、これまでかと思った時に僕たちに出会った。
これからの方針を聞くと

爺「出来れば姫にはこのまま一度国外に出たほうが安全なのだが・
・」

子供 改め 姫「民を見捨てることは出来ません！」

という姫の強い希望によりとりあえず信頼できる者の所へ向かう予定らしい。

爺「勝手に申し訳ありませんがその者の場所まで行って頂けないでしょうか？」

爺曰く、このまま国境へ向かって先ほど逃げていった者たちが戻ってきて捕まるかもしれない。

もし関所に着いたとしても馬車の形などの手配書が回っている可能性が高いので信頼の置ける者の所まで行って頂いたら新たな馬車を用意させる。

悪くない申し出だけど問題はその人が本当に信頼できるのか？という問題。

行ってみたものの敵が待ち伏せしていて捕まるというのは勘弁してほしい。

爺「それは大丈夫です。奴は昔に私と一緒に騎士団にいた者ですが領地に戻った後も登城の度に姫に会いに来られてました。間違いない姫の味方をしてくれる男です。」

姫「幼い頃は会うたびにお願いをして騎士の話をしてもらいました。」

懐かしそうに目を細める姫。

爺「あやつは頑固者です。上が変わった程度で姫への忠誠は変わらない男です。」

爺にも翁にも姫は孫のような存在なのかな？

チラリと見ると美人さんがいつも通り微笑んでいた。

僕「分かりました。その方の領地へ向かいましょう」

頷く僕に爺は腕を掴んで振り回しながら「ありがとう」と何度も言った。

美人さんは相変わらぬ笑顔で、妖精少女はいつの間にか美人さんの膝枕で寝ている（可愛い！）

姫を見るとつとすぐに視線をそらされてしまう。

―嫌われてしまったかな・・・

—そう言えば魔王自身も自分の国では王位を争っているのにはずなのに他の国の内乱に巻き込まれるなんてちよつと笑えるね。

魔王『そうだな・・・』遠い目

—なんか色々ごめん！

第5話 お兄ちゃん

街道を外れ森の中を移動していたが日が暮れ視界も悪くなったので野営をする。

追われている為に火をおこす様な事は出来ない為に干し肉でおなかを満たした。

夜の見張りは僕と美女さんと爺で2人交代で行う事に。

姫は丸一日走り回ったらしくすぐに疲れて寝てしまった。

妖精少女は子狼と一緒に寝ている。

一人で寝るときは毛布に丸まって団子のように寝るのは種族的な寝方なのか個人的な寝方なのか興味は付き無い。

美女さんとの見張りのときは「ついでに夜間戦闘の訓練しましょう」と言われ軽い気持ちで同意したら「じゃあたまに投げるので避けてくださいね」と頭に小石を一杯ぶつけられた。

魔王の『鈍すぎだな』という声がうるさい。

爺と2人の時はたまに会話をする程度で特に何をするというわけでも無かったので魔力特訓をした。

早く魔力制御が出来るようになって妖精少女の首輪を外してあげたい。

翌朝、日が出る前には出発。

姫は自分一人寝入ってしまった事を恥じ入っていたが「疲れを癒し万全の体制を整えるのも旅では大事な事です」と笑顔で諭されていた。

御者は美女さんと爺が交代で行う。まだ僕はうまく出来ないので役に立てない。

昼前に一度馬を休ませたが日が沈むまで移動をし2日目の野営を行った。

見張りを行うと言う姫と休んでくださいという爺とで言い合いになった（と言っても爺は及び腰だった）けど姫の意思は変わらず今日は試しに行くことになってしまった。

さすがに姫を1人にカウントできるわけも無いので美女さんと同じ時間を担当する事になった。

その話を聞いていた妖精少女が「じゃあ私も」と言っていたが1刻もしないうちに寝てしまっていた。（可愛い！）

昨晚と同じように美女さんと一緒のときは小石を頭にぶつけられた。姫は当初は少しの物音でも反応をしていたけどすぐに落ち着いた。途中からは僕と美女さんを眺めていたが「投げてみますか？」という美女さんの申し出には「え、いえ、いいです」と少し慌てていた。爺との時も昨日と同じように魔力制御をした。

3日目の朝も同じく日が昇る前に出発する。

出発して数刻、森が開け小さな泉があったのでそこで早めの休憩を取る。

そこで今後の方針を話し合う事になった。

ここまで来ると馬車で移動すれば昼前には森を抜ける。

その後は草原を数刻走れば目的の館は見えてくるらしい。

ただ敵も翁を頼ることは予想しているはずで必ず兵を配備していると予想され、さすがに領地内にあからさまな兵を配置出来ないとは思いますが馬車で突破するのはかなり難しいと思われる。

爺「姫たちにはこの場で待機してもらってこの先は私一人で向かうと思います。」

その言葉に姫が声を荒げようとするのを爺が手で制す

爺「お聞きください。森を抜けた所の兵士もそうですが、もし館にたどり着いても一安心と言うわけではありません。」

翁は捕まり館に敵がいる可能性は0ではない。

なので爺が一人で館に向かい確かめた方がいい。

森を抜けてからでも爺の足で半日ちょっとあれば館に付く。

すぐに戻ってくれば1日ちょっとで戻ってくれるはず。

爺「ですのでもし1日半たって戻ってこない場合はすぐにこの場を放棄し逃げてください」

姫「!」

美女さん「もし逃げるとして、当ては?」

爺「・・・近くにはありません。もし逃げる場合は国境を越えて隣の国へ亡命してください。」

美女さん「隣国へ亡命して姫の身は安全なのですか?」

姫「隣国には第一王女のお姉さまが嫁いでおります。」

爺「あの方なら姫を悪くはしないでしょ」

方針は大体決まった。

魔王『またお主は何も言っていないな』

―悪かったね！

美女さん「話は分かりました。ただ幾つか提案があります」

爺「こういった内容でしょう」

美女さん「私も同行しましょう」

爺「いや、しかし」

美女さん「敵は姫様と爺の2人組みを探しています。もし発見された場合に爺のみだと姫様を探して森を搜索される危険性があります。」

僕「なるほど。そこで美女さんが同行して目くらましにするんだね。」

魔王『うまく話しに割り込んだな』ニヤリ

—うるさいよ！

美女さん「マントを被れば少々の身長差は誤魔化せるでしょう」

爺「しかしこの先は危険だ」

美女さん「私はこう見えても結構強いですよ？」

爺「いえ、それは最初に助太刀頂いた際に理解してますが」

姫を守って欲しいと爺の意見に美人さん「2人の方が生存率が上がります」と笑顔で押し切った。

出発は森を抜けるときに暗いほうが言いと言うことで日が落ちてからになった。

人は滅多に来ない場所らしいけど念のために泉から少し離れてぱっと見ても分からないように馬車に偽装を施す。

昼間での間に近くに危険な生き物が居ないかを探したが居ないようだった。

僕「美人さん」

美人さん「どうしました」

僕「1日ちよっととはいえ僕と妖精少女と姫だけになる状況を考えたら妖精少女の事は伝えた方がいいと思うんだけど」

少しはなれた所で姫と一緒にじゃれ合ってる子狼と一緒に見ている妖精少女を見る。

数日だけ妖精少女も姫に対してはあまり警戒心を抱いていないようだ。

魔王『お主よりは懐いているな』

—そんな気はしてたけど煩いよ！

美女さん「そうですね。お二人なら信頼できると思いますし、当分一緒に行動する事になりますので話して起きましようか。爺はうすうす感じていたようですが」

—さすが年の功というやつなのかな。

美女さん「だからと言って魔王様の話はしませんでしたので注意してくださいね」

—キヲツケマス

姫と爺に妖精少女の事を伝えると爺は納得がいった感じで頷いた。姫は妖精少女が奴隷商人に捕まっていた話を聞いたときは少し悲しい顔をしていたが、話を聞き終わると笑顔になり美女さんの後ろに隠れていた妖精少女の頭を優しくなでてあげてた。

昼からは馬車の周りに簡単なトラップを仕掛ける。

とはいえ何か近づいたら音が鳴るようなものと、足を取る程度のトラップではあったが何も無いよりはマシだった。
その後は日が暮れるまで順番で仮眠を取る事になった。

夕方に簡単な食事を取り一緒に取り、日が陰りだす頃に美女さんと爺が出発した。

爺は僕の手を取り「姫を頼みます」と頭を下げた。

魔王『そろそろ良いかもしれないな』

掌の石を眺めて魔王が言う。

やっと魔力の制御が出来るようになった。

魔王『だからと言ってまだまだだからな。これから精進を怠るな』

—うん。うん！

妖精少女は昼寝をしたためいつもより遅くまで起きてるので僕は妖精少女を呼んだ。
姫と連れ立ってくる妖精少女。

僕は警戒されています？

僕「魔力の制御がうまく出来るようになったので首輪が外せるよ」

妖精少女「ほんと？」

僕「うん。ただ僕が触るけど少しの間じっとしててもらえるかな」

妖精^{こくん}少女

僕「じゃあこっちに来てもらえるかな」

音を立てずに近づいてくる妖精少女。

僕「顎を上に向けて」

僕の言われたとおり僕の前まで来て一生懸命顎を上げる。（可愛い！）

魔王『今なら何でも命令できるな』

—そうだな、しないからね！何を言うんだ！

魔王『緊張を紛らわそうと思ったただけなのだが・・・』ドン引き

僕「じゃあ少し我慢してね」

僕は妖精少女の首輪を両手で包む。傍から見たら少女の首を絞めて
るという少し危ない図である。

包んだ掌から指輪に向かって魔力をゆっくり注ぐ。

薄く青く光る首輪に姫が息を呑む。

魔力の量を調節しながら魔力を注いでいると「パキッ」という音が
聴覚でなく感覚で聞こえて首輪の明かりが消えた。

魔王『上出来だ。』

首輪の魔力を相殺することが出来た。

魔王『後は首輪を石のように砕いてしまえ』

—よし

再度少し魔力を込めると「ピシ」という音を立てて首輪にヒビが入
った。

後は腕の力を使うまでも無く妖精少女の首から首輪が外れた。

僕「もう大丈夫だよ」

僕がそういうと一生懸命目を瞑って我慢していた妖精少女は目を開け自分の首に首輪が無いのを確認する。

そして首から首輪が無いのを確認すると目から涙が溢れ出した。姫が後ろからそっと抱き寄せると姫にしがみついて声を出さずに無く。

―良かった。

少したって落ち着いた妖精少女は僕のほうに走ってきた。

僕「どうしたの？」

妖精少女「えっとね。ありがとう」

その一言で今までの苦労が全て吹っ飛ぶを感じた。妖精少女はまだ僕の前で何か言いたそうにしている。

妖精少女「ありがとう、お兄ちゃん」

—ぐは！ナニナニナニナニ！何なのこの可愛い生き物は！#○\$%
□&

魔王『何語を話しているかわからん。落ち着け』

あまりの衝撃に新しい信仰に目覚めそうになる僕に魔王のツツコミが入るが、もちろん僕には届いてない。

「ふおおおおおおお」と叫びそうになるのを我慢してたらこちらを見ている姫の存在を思い出す。

暗いから表情まで見えないけど微動だにしない。

—ちょっとドン引きしてる？

魔王『してるかもな』

一気に現実に戻ってきました。

妖精少女の頭をなでながら「どういたしまして」というと妖精少女はうれしそうに笑った。（可愛い！）

その後、妖精少女に魔法が使えるようになったけど実際に何を使えるのか聞いてみた。

妖精少女「隠れるのと風と水とお話できる」

魔王『ほう。精霊と話せるのか』

姫「精霊とお話が出来るなんて素敵ですね」

僕「今できる？」

そう聞くと「うん」と頷いた妖精少女は指を立ててくるくる回して僕に指を向ける。
なんだ？とその様子を見ていた僕の首筋に風が流れる。

僕「びっくりした」

魔王『それほど強い精霊を呼べるわけでは無い様だな』

姫「風を起こせるのですか。水の妖精はどんなことが出来ますか？」

妖精少女「んゝ水をゆらゆら揺らせる」

僕「風で何かを切り裂いたり水で攻撃したりは？」

妖精少女「出来ない」

姫「妖精族は争いを嫌うと聞きます。精霊をそのように使おうとは思わないのでしょうか」

魔王『そういうのはちゃんと契約を結ばないと無理だしな』

僕「それでもすごいなあ」

誉められた妖精少女は「えへへ」と笑みを浮かべる（可愛い！）
姿消しも試してもらったが良く見たら全く消えるわけではなく薄っすらとは見えるようだ。

魔王『力が上がればもう少しすっかり消えるし、周りのものも姿を隠せるようになるう』

—すごいなあ

その後も首輪が外れたうれしさでテンションの高い妖精少女は子狼と風の妖精で遊んでいたが急に眠ってしまった。

姫「疲れて眠ったようです」

僕「久々に魔力を使ったし仕方ないね」

・・・

やばい！姫と2人きりって初めてだけど何を話していいかわからない！

沈黙が痛い。

魔王『適当に話せばよいではないか』

—そんな事言われても、元の世界ですら女の子なんて殆ど話さなかったから良く分からないよ！

魔王『情けない。仕方ないな、我が話すきっかけを作ってやろう。私の言うように話してみるが良い』

僕（魔王）「『寒くないか？』」

姫「え、はい」

僕（魔王）「『そうか。まだ夜は肌寒いから無理はするな』」

姫「そうですね」

僕（魔王）「『よければ我が暖めてやろう。苦しゅうない、ちk』このネタ前もやったからね！」

きよとんとする姫。

僕「あ、あははは、なんてね」

—魔王のばかり

姫「ふふ・・・」

―笑ってくれたああああ。

魔王『ほれみろ。うまくいった』

―もう魔王の手は借りないからね！

その後は途切れ途切れだけど会話は出来た。

姫と言うことで緊張したけど話してみたら普通の女の子で安心した。

魔王『普通の女の子とやらとも殆ど話をした事無いのであらうに』

―そうだけどさ！

話の内容は「王宮はどんな所」とか「いつもは何してるの」とか。姫も「どんな所を旅してきたのか」や「どういう冒険してきたのか」を聞いてきた。

どんな所というのはそれほど記憶に無いので冒険についてはゴブリン退治の話をした。

こういう話は姫は向かないかなと思ったけど、ゴブリンとの対決の時には真剣な表情で食い入るように話を聞いてくれていた。

―ゴブリン退治の話で僕の活躍を5割り増しで語ったくらい大目に見てもらえるよね？

魔王『10割は増していたらうに』

—うるさいよ。

夜の見張りにいるのは美女さんが事前に「夜は若（僕の事）に任せて、翌朝に若が仮眠取る時にお願いしますね」と笑顔で言い含めていたので問題は無かった。

姫が眠って数刻、僕はいつもの日課の魔力制御の特訓をしていた。

—やっぱり一人で起きてるのはやっぱり寂しいなあ

魔王『我が付き合っているではないか』

—そうだけちょっと違うんだよね。

魔王『仕方あるまい・・・む？』

身を寄せて眠る姫と妖精少女を見る。

と、その傍らで寝ていた子狼が2匹とも急に身を起こし遠くを見る

―どうしたんだろう

魔王『何かくるぞ！』

―え？

魔王『かなりの数だ。戦闘の準備をしろ！』

僕は物音をさせないように急いで寝ている2人のところに行くとき寝ている姫を揺すり起こす。

僕（姫、起きてください）

姫「え・・・」

僕（し！静かに。何者かが集団で近づいてきているようです）

はっと起きる姫。

僕（馬車の中に隠れていてください）

姫（私も戦います）

僕（いえ、妖精少女をお願いします）

カラン。音系トラップが静かな夜の森に響く。
僕は剣を抜き馬車を静かに下りる。

魔王『結構な数があるな』

―追手かな

魔王『わからん』

相手は音系トラップの存在を知ると気配を消そうともせず近づいてきた。
カラカラカラ。幾人かは音系トラップを踏んで音を鳴らしてしまう
が気にしない。

―多い！

少なくとも面前に10人以上いる。
全員が抜き身で警戒しながら近づいてくる。

謎の男「何者だ」

僕「そちらこそ何者だ」

震えそうな声を虚勢で何とか押しとどめる。

謎の男「何者だ」

僕「旅のものだ。そっちは野盗なのか？」

謎の男「嘘だな。旅人なら何故野獣避けの火を焚かない」

僕「寝ている間に消えてしまっ」

魔王『囲まれたな』

謎の男「それも嘘だな。火を焚いた後はどこにも見当たらない」

―っ！

謎の男「本当の事を話さないようなら仕方ない」

周りの男が殺気立つ。

魔王『くるぞ！』

馬車を背に回りこまれないように気をつけながら対峙する。

謎の男の指示で1人の男が向かってくる。

振りかぶった剣を受け止める。

剣を絡め取られそうになるのを透かして流す。

体が泳いだ男の胴を切りつけようとした所、横から別の男に攻撃されそうになり断念して剣で受ける。

目の前の男を剣で押し返しすぐにもう一人の剣を受ける。

「ほう」と謎の男が一言呟く。

魔王『来るぞ！避けろ！！』

剣を受けて止まったままの視界の隅にもう一人が剣を振りかぶるのが見える。

―避けられない！

自分の体に迫り来る剣を睨み付ける事しか出来なかった。

第5話 お兄ちゃん（後書き）

9／21 「爺さん」↓「爺」に修正。

第6話 美女

森から街道を伺うと歩哨がいた。

やはりここら一帯は警戒されているらしい。

数はそれほど多くは無いが月明かりの為に遠くまで見渡せる。

誰かが街道を横切るとしてもすぐに見られてしまうだろう。

横を見ると同行者が上を指した後に小さく「雲」と言った。

どうやら月に小さな雲がかろうとしているらしく、少しでも暗くなった時に行こうというのだ。

ゆっくり流れる雲が月にかかるうとする直前に兵士が立ち止まってしまう。

目配せをすると相手は頷いて「兵が動いたら行って下さい」と森を引き返していった。

雲のお陰で辺りが暗くなった事により街道を抜けるのに好都合な状況にもかかわらず動けないことに焦燥感が募る自分の心を叱咤する。屈みながら兵士を見ていると離れた場所で草が擦れる大きな音が聞こえた。

兵士がそちらに向かう。

全員の注意がそちらに向いて歩いていくのを確認すると音がならない様に飛び出し街道に向かって走り出した。

一心不乱に街道を横切るとそのまま背を低くし走り抜ける。

街道から少し離れた場所に背の高い草むらを発見しそこに隠れるように回り込みながら地面に伏せた。

弾む呼吸を押し殺すようにしながら街道を伺うと一人の兵士がこちらに明かりを向けていた。

明かりといっても紙などで作った丸い筒を倒したものに蠟燭を立てて居るだけのものなので、それほど遠くは照らせる訳ではない。だが隠れている立場からすると「もしかしたら衣服の一部が見える位置にあるかもしれない。何か光に反射するかもしれない」という恐怖と、身じろぎするのは自殺行為だという理性に挟まれて時間の流れがいつもより遅く感じる。

少しの間あちこちを照らしていたが何も見つける事が出来ずに仲間の元に戻っていく。

小さく息を吐いた後に同行者はどうしたのか心配になった。

あの音はその同行者が起こした音である事は間違いない。

もしかしたらあの音のせいで見つかってしまうかもしれない。

身を伏せたまま兵士の声に必死に耳を傾ける。

何を言っているのか分からないが警戒しながら音が鳴った辺りに近づいているようだ。

見つからないでくれという思いに兵の声が微かに聞こえる。

必死で声を拾うと「ウサギ」「驚かせて」等の単語が聞こえてきて見つからないだろう事にほっとする。

月が出てきて少し明るくなる。

兵は移動を開始したがこれではまた街道が渡りにくくなってしまう。同行者が街道を渡るのをどう手助けしようか考えていると近づいてくる影が見えた。

ぎよっとして見ると「お静かに」という風に指を口に立てた同行者がいつもの笑顔で近づいてきた。

爺（いつのまに？）

ニコニコ笑う美女殿に疑問をぶつきたいがここで声を上げるわけにも行かず指で街道から離れる方向を指す。

ニコリと笑った美女さんは街道のほうを向いて屈んだままソロソロと後ろに向かって進みだした。

街道に立つ人物が認識できない距離まで来ると「行きましようか。方向は？」と笑顔で告げてきた。

指を刺すと「日が昇るまでにある程度進んでしましましょう」と背を低くして走り出したので慌てて追いかけた。

街道から一切見えない場所に来るまで屈んで走っていたが、その後は普通に走り出した、

街道を渡ってからずっと走り続けている。

もともと急がないとは考えていたので不眠不休で向かうつもりだった。

ただ美女殿は女性なので体力なども考えて最終的には背負って進むつもりで出発した。

しかし実際はどうだろう。

先ほどからすでに3刻ほど走り続けている。

しかもペースが速い。

年老いたとはいえ体力ではそこの若者に負けないと思っていたが、その自分が息を乱しているというのに、笑顔を絶やさず息もさほど上がっているようには見えない。

目の前に森に覆われた丘が見えてきた。

それを見た美女殿は「あそこで一旦休みましょう」と笑顔で告げて丘に向かって速度を落とさずに走っていった。

荒い息を抑えながら水を口に含む。

美女殿は「ふう」と汗を拭ってはいるが息を乱しているようには見えない。

空を見ると月が上に見えるので夜明けまでまだまだ時間はある。

美女殿「館まで後どれくらいありますか？」

爺「ここで3、4割というくらいでしょうか」

美女殿「このまま行けば今日中につけそうですね。」

爺「そうですね」

美女殿「まだ行けますか？」

美女殿が笑顔で聴いてくる。

今は刹那の時も惜しいのは確かである。

一度小さく深呼吸をした後に頷く。

それを見た美女殿は笑顔で「参りましょう」と言う走り出した。

まだ日も変わっていないうちに館の前に立つ。

出来るだけ早くとは考えていたが翌朝までにはと思った距離を今日中に付くとは思わなかった。

途中、短い休憩や歩いたりしたものの予定の時間の半分以下くらいでついた。

息を整え館に近づく。

まだ敵か味方が分からない状態なので美女殿には隠れておいてもらう。

領地の門の前に来ると門の中に立っていた若い兵士が「用が無いなら立ち去れ」と言ってきた。

2人いるが残念ながら見知った顔ではない。

前に訪れたときには門番など居なかった。

時期が時期なので念のために警戒しているのか、敵の手に落ちて居るのかはわからない。

「領主の翁に面会したい」と伝えると「こんな時間に？」と不振がられてしまった。

用があるなら明日、日が昇ってから出直せと言ってくる。

—どうやら翁はまだ健在で敵の手は回っていないようだな。よかった。

知り合いだからこんな時間でも問題なく合ってくれと伝えても素気無く返される。

仕方ないので伝言だけでもお願いできないかと伝えても同じ返答だ。せめて伝言さへ伝えてもらえれば何とか鳴るのに困ったなと思っていれば、館のほうからもう一人の兵士が歩いてきた。

兵士「どうした」

若い兵士「この老人が翁に合わせろとしつこくて」

兵士「こんな夜更けにか？」

近づいてくる兵士の顔をみて笑いがこみ上げるのが自分でもわかる。彼は翁に付いて私に何度か合ったことがある。兵士隊長をしている男だ。

彼も私の顔に気が付いたようで若い兵士の一人に翁へ伝える用に指示を出すと「姫はご無事で？」と聴いてくる。

手短に状況ともう一人同行者が居る事を伝えると兵士隊長は「信頼が置ける者ですか？」と聴いてきた。

私が頷くと兵士隊長は門を一人分だけ開けるようにいう。

門が開いている間に美女殿を呼んだらいつの間にか門の影に隠れていたように笑顔で出てきた。

兵士隊長はいきなり現れた気配に驚いているようだ。

顔には出さないが私もかなり驚いた。

美女殿は本当に得体の知れない人物である。

館に入ると翁が寝間着姿で剣だけもって現れた。

翁「姫は！」

爺「領地の境に見張りの兵が多かった為に領地には入らずに隠れて頂いておる」

翁「そうか！ではすぐに少数精鋭を送り姫の無事を確保しよう」

さすがと言いかんというか、全て説明しなくても話が通じる。

急いで兵士達に集まるように指示を出し始めたがすぐに翁の息子の現領主が姿を現すのを見て兵への指示を引き継がせた。

姫の迎えをする兵士達の選抜や姫を乗せる為の馬車の用意を始める。

「それで姫と別れてからどれくらいの時間が―」と翁が言った所で10代後半の若い男が現れる。

若い男「爺殿が来られたと聴いたが」

翁「来るのが遅い！もしこれが敵襲だったらどうする！！」

現れた若い男は現領主の長男で翁の孫になる。

立派な体格で武芸においては同年代では敵うものはそうそう居ないぐらいに秀でているとは翁に聴いていたが、さすが全身から自信が満ち溢れていい男である。

ただ近年はその事で慢心をして思慮に欠けると嘆いてはいたが。

領主長男「戦ならすぐに来ますよ」

翁「気構えがたらんと言ってるんだ！」

煩い爺だとばかりに肩をすくめる領主長男

領主長男「姫を迎えに行くのでしょうか？」

翁「今、行くものを選んで準備させている」

領主長男「俺も行きますよ」

翁「お前はいかんでいい」

自分以外に適任が居るのか？と自信満々に言う領主長男
行く、行かなくていいのやり取りを見ていた美女殿が発言する。

美女殿「私も参りますので私の馬もご用意頂けますでしょうか？」

領主長男「なんだこの女は」

美女殿「若の従者の美女と申します。姫様と爺様には途中で出会い
共に行動をしておりました。」

美女さんが礼節を持って自己紹介をするも領主長男は鼻で笑う。

領主長男「ふん、女子供は黙っている」

爺「美女殿になんて事を！」

領主長男「足手まといにしかならん」

客人に対する長男領主の無礼な物言いに翁が顔を真っ赤に怒鳴りつけようとした時

美女殿「翁様」

翁「孫の無礼、許してくれ」

美女殿「気にしてませんので。馬はご用意頂けますか？」ニコリ

翁「お主もいくのか？危険だぞ」

爺「美女殿は中々の手馴」

翁「ほう」

領主息子「ふざけるな！姫の救出を遠乗りか何かと勘違いしているのではないのか！？」

美女殿「領主息子様こそお城へのパレードと勘違いされておられますか？」

領主息子「なんだと！」

笑顔の美女殿の台詞に領主息子が憤怒に染まる。

美女殿「姫様の救出が危険なことを貴方は理解していない」

領主息子「なんだと！」

美女殿「では貴方の考える救出方法を述べてください」

領主息子「何で貴様なんかに」

翁「面白い、言ってみろ。よければお前に指揮を取らす」

領主息子は「救出の指揮」という言葉を聴いて自身と期待を満ち溢れさせて言葉をつむぐ。

領主息子「兵を率いて姫の下へと駆けつけここまでご案内するだけだろう。途中、国王軍との戦闘も予想されるが街道に居る数はたかが知れている。向かってくれば蹴散らせばいい」

美女殿「貴方はその程度の理解で救出に出向くという」

笑顔の美女殿を中心に温度が若干変わった。
気配を察した兵士隊長がとっさに剣を抜こうとするのを翁が止める。

美女殿「貴方の蛮勇は周りを巻き込む」

領主長男「なんだと！」

美女殿「言い直しましょう。貴方の無知蒙昧が姫を殺す」

領主長男「知った風な口を！」

美女殿「正直にいますと、この国の人間でも無い私は姫様がどうなろうが知ったことではありません。ただ若を危険にさらす状況となると見過ごせません」

笑顔の美女殿から発せられる凄みが少し増す。

真横にいる私は美女殿の気迫に一歩後退し柄に手をやるのを堪えるが、ここ数日の美女殿を見て感じた人柄からはかけ離れた物言いに繭を寄せる。

翁は「ほう」と再度声をもらし兵士隊長は驚きの顔を隠せない。少し離れた場所で兵士の指揮を取っていた現領主と一部の兵がこちらを向く。

常人には気がつけずともひとかどの者なら気がつく程度の殺気。それに気がつく者が何人か居ることに頼もしさを覚る。

―それを真正面に受けて動じない領主息子はよほどの大物か、それとも―

前者であれば良かったのだが様子を見る限りでは、何かを気がついてはいるが怒りが大きくて見逃してしまっているらしい。
翁もまだまだだという感じで肩を少し落とした。

領主息子「女と思って甘く見ておれば！国の大事を何と心得る！！」

美女殿「私の国ではありませんので巻き込まれてなければ知った事ではありません。」

領主息子「これが翁の客ではなく男なら決闘を申し込んだ上で切り伏せているところだ！」

無礼な態度は取っても客人に手を上げるのは不味いという理性は残っていたようだ。

だが沸騰寸前の所に美女殿は笑顔で火に油を注ぐ。

美女殿「あら？女に負けるのが怖くなりましたか？」

領主息子「なんだと！」

美女殿「井の蛙かわずに大海を教えてあげましようと言っているんです」

領主息子「爺殿、貴方の連れですが教育がなっていない様なので指導を付けたいのですが、よろしいですか？」

怒りを殺しきれない様子で私に告げる領主息子。

チラリと見た美女殿はいつもの笑顔を浮かべていた。

剣を抜こうとする領主息子を止めようとする兵士隊長に「やらせておけ」と翁が含み笑いで言う。

どうやら領主息子程度では相手にならない事を読んでいるようだ。

爺「どうやらこの娘はお転婆で仕方が無い。よろしく頼みます」

領主息子「許しが出た。女だからと言って容赦はせん！腕の一本くらい覚悟しろよ！」

美女殿「殺すくらいがいいですよ？後で『女だから手を抜いた』とか言われても面倒ですし。時間もさほど掛けられませんので、さっさとお越しください。」

憤怒に染まった領主息子が振り下ろした剣を受け止める。

―片手で！

あの細腕にどれだけの力があるのか分からないが笑顔で片手で受け止めたのだ。

美女殿「あら？本気で来られるのではなかったのですか？」

決して今の一撃は気を抜いたものではなかった。

その台詞に腹を立てた領主息子は剣を両手で掴むと力任せに振り下ろした。

今度はそれを受け流す。

やはり片手で。

状態が流れてたたら蹈鞴を踏むがすぐに美女殿に向き直り両手で剣を振り下ろす。

それをまた片手で受け流し、蹈鞴を踏んでまた振り下ろす。

今度は流されても体が泳ぐ事無く何度も剣を打ち付け始める。

それを片手で左右に流していた美女殿は領主息子が打ち疲れた所を狙って剣を絡め取った。

剣が床に落ちる音がある。

館における人間は全て、今起こった事に息を呑んでいた。

領主息子は決して油断しても女の細腕にいなされて剣を奪われるような腕ではない。

美女殿「もうお終いですか？」

領主息子自分の手から剣が無くなった事に呆然としていたが美女殿の言葉を聴いて「手が滑っただけだ！」と言い剣を拾いなおす。

美女殿「では今度は私から向かってもいいですか？」

領主息子「おう！女などには後れを取らん！」

それを聴いた美女さんは無造作に距離を詰める。

そして片手で無造作に鞭でも振るうように左右に剣を振るいだした。その全てを領主息子は受け流しながら笑みを浮かべる。

今度は美女殿が疲れたところを剣を絡め取り、雪辱を晴らそうとも思ったのだろうか。

領主息子「そこそこやる様だが所詮は女と言った所だな」

美女殿「あらあら。ではスピードを上げましょうか」

領主息子「む」

美女殿の剣を振るう速度が上がる。

領主息子は驚きながらも捌く。

美女殿「まさかこれ程度で終わりだと思ってませんよね？」

そう言うときさらに速度を上げた。

笑みは完全に消え必死の形相で剣を裁く領主息子。

美女殿「頑張りますね。ではもう少し上げましょう」

領主息子「っ！」

さらに速度が上がる。

何回かに一回の確立で裁ききれなくなってきたている。

美女殿「頑張らないと死にますよ？」

さらに速度を上げる剣を前に元々裁ききれなくなっていた上に焦りと疲労で半数以上が体に迫る。

だがどの剣戟も体を傷つける事無く衣服だけを切り裂く。

どれだけの時間をそうしていただろうか。

実際はさほどの時間では無いが領主息子には永遠に感じただろう。

疲労で尻餅を付いた領主息子の目の前で剣を止める美女殿。

呆然と見上げる領主息子を見て一歩下がって剣を収める。

—まさかここまでの者とは

美女殿「貴方は私が言葉に込めた殺気を気付くことが出来なかった」

—最後まで息も切らずとは

美女殿「私を女と思い侮り実力を見抜こうとしない浅慮が貴方を何度も殺しました。」

全身の服に付く傷1つ1つが本気なら死に繋がっていただろう。

美女殿「貴方一人が死ぬなら問題はありますが、領主息子と言う立場ではそうは行きません」

美女殿はこれを伝える為にあのような態度を取ったと言うのか。

美女殿「貴方行動には兵士や領民の命が掛かってます。貴方の浅慮が彼らを殺す事もあるのです。」

領主息子は美女殿の笑顔から目が離せない。

美女殿「考える事を。聴くことを学んで下さい。目に見えるものだけに囚われず、他者の言葉にも耳を貸しその上で決して鵜呑みにせずに自分で判断できるように」

領主息子「……」

美女殿「自分の損得だけじゃなく周りの状況を考慮して結果を予想しながら動けるようになれば、貴方はいずれ素晴らしい領主様になれるでしょう。」

翁がよく言ってくれたとうれしそうに「よく言ってくれた」何度も頷く。

美女殿「よき領主様になって民や兵を導けるよう、ご精進致して下さい。」

そう言うと「無礼を働き申し訳ありません」と笑顔で優雅に腰を折った。

第7話 救出

ゆっくりと笑顔を上げて姿勢を正す美女殿はまるで歌劇的一幕を切り取ったような雰囲気だった。
誰もがその姿に声を出せないで居ると翁が拍手をしながら美女殿に近づいた。

翁「素晴らしい腕だった。そしてよう言ってくれた」

美女殿は笑顔で軽く会釈する。

翁はまだ尻餅について呆然とする領主息子を見て言う。

翁「大海は知ったか？」

領主息子ははっと我に返ると立ち上がる。

色々思うところが在るのだろうがこの場から逃げ出さないだけの矜持はあるようだ。

翁「美女殿の言った意味は理解できたか？」

領主息子「…はい」

翁「美女殿に敗れた事に屈辱を感じておるのか？」

領主息子「……いえ」

心中は穏やかではないが怒りを露にするほど愚かではないようだ。

翁「もしその事を恥に思うおなら間違っている。恥に思うべきは見
た目に騙されて本質を見抜くことが出来なかった己を恥じよ」

領主息子「…」

翁「まあワシもこのような見目麗しい女子が居たら騙されてしま
うだろうがな」

豪快に笑いながら「どうじゃ？うちの孫の嫁に」と翁が言うのを「
私には仕えるべき主がいますので」と笑顔で流す。

翁「蛙は大海かわずを知った。ならやるべき事は分かるな？」

領主息子「はい」

領主息子の目に恥を飲み込み変わろうとする強い意思が宿る。
今の気持ちを忘れずに邁進すれば将来が楽しみだ。

領主息子「美女殿、数々の無礼お詫び申し上げます」

美女殿「私のほうこそ差し出がましい事を申しました」

領主息子「いえ。目が覚めました。貴方の言うとおりでした」

気持ちを入れ替え生まれ変わった領主息子にはもう美女殿を見下したりする気持ちは無く、まるで師事すべき師を見るような眼差しになっている。

周りの兵士達も同じような目で美女殿を見ていた。

—というより教祖とか神を見るようだな

同じ事を思っていたのか翁は私を見た後に繭を少し上げ「まるで宗教じゃな」と呟いた。

もしかしたら新しい宗教がここに生まれたのかもしれない。

翁「さて準備と選抜はどこまで進んでおる」

現領主に声を掛けるとはっとしながらも「ほぼ終わっております。もう出れます」と言った。

現領主も例外では無かったようだ。

選ばれたのは兵士隊長を含めた30人。

街道付近まで進み、一部の人数で姫を救出する。

残りのメンバーはもし敵に発見された時のための護衛要員である。

爺「翁が行かないとは予想外だな」

翁「本当は行きたいがワシもしなければならぬ事があるからな」

爺「ほう？」

翁「ワシらだけでは数が足りん。集めねばならん」

爺「大丈夫か？」

翁「幾人か前から連絡を取ってる信頼できる者達がいる。連絡を取れば2000くらいは集まろう」

時間を掛ければ領民などからも兵を募れば一領主でも1000を超える兵を集めることが出来るだろう。

だが兵は何も常時金がかかる。

領主が抱える専属の兵士となると普通は50名から多くて200程しかない。

少ないところは10数名という小規模領主もいる。

中には一声掛ければ5000以上を集める大領主もいるが、それは自分の一門の領主や貴族の私兵を集めてであり、個人で数千もの兵を持つ領主は居ない。

王宮だけは別格で幾つかの騎士団等を抱え、全部集まれば万を超えるかもしれない。

翁の領主は国境に面しているが隣接国とは第一王女が嫁ぐぐらいの良好な関係が築かれているのでそれほどの兵数は居ない。

それでも有事の際は最前線となる為に350名の騎士を召抱えてお

り、武具なども豊富に揃えている。
数十年前、まだ隣国と緊張感にあった時は最大で600名近く居たらしい。

翁「皆、今の国のありように心を痛めているものばかりだ。必ず呼応してくれる」

国の混乱を憂いている者は意外と多い。

先のクーデターの時も手は貸さなかったがクーデターが旨くいけばいいと思っていた者も居ただろう。間に合わなかっただけの者も居たかもしれない。

その後の国の荒れように危機感を抱いている者も多いはずだ。。

このまま内部からの腐敗を止めないと内外部両方からこの国は死んでしまうだろう。

その事を理解している者達が手を貸し手くれたら今度こそいけるかもしれない。

翁「領主息子よ。今のお主なら何故お主が選ばれないか分かるか」

領主息子「はい」

翁「そうか。反論は無いな」

領主息子「はい」

翁は満足に頷くと美女殿に振りかえる。

翁「お願いがあるのだが」

美女殿「出来る程度の事でしたら」

翁「領主息子を連れて行ってもらえんだろうか」

姫「わかりました」

領主息子が驚きの顔で美女殿を見る。

翁「感謝する。領主息子よ」

領主息子「はい」

翁「美女殿に付いて色々学べ。盗めるものは何でも盗んでこい」

領主息子「はい！」

翁「美女殿、よろしく頼む」

翁は軽く頭を下げそう言うのと、自分も他の領主に連絡を付る為に動き出した。

王女救出部隊が集まった。

よく見ると美女殿のさっきの反応した者は殆どおり、全部で30名だった。

「指揮をお願いします」という兵士隊長が私に言ってくるのを首を「私より適任者がいる」振って否定し横を見る。。
兵士隊長も美女殿を見た。

爺「お願いできますか？」

美女殿「他の人がいいと思うのですが」

領主息子「貴方なら依存は無い」

「困りました」とさほど困った風でもなく呟く美女殿に他の兵士達も頷く。

―やはり信仰に近いな

爺「他のものも依存は無い様だし。頼みます」

美女殿「では、やれるだけだけやってみます」

館を出る前に地図で姫たちの居る場所とその近くの街道を確認すると作戦を話し出した。

日が昇ると街道を抜けにくくなってしまふ為、ここからは時間の勝負だ。

美女殿「まず10名の騎士がこちら（地図上で目的地と90度方向が違う方向）へ出発してもらいます。」

爺「この館も監視されてると？」

美女殿「2人か3人は居るでしょうね。1刻ほど走ったら2人一組に分かれて4方バラバラに分かれてここ（目的地の街道から少し離れた場所にある林）へ向かってください。もし追われている人がいたら数刻ほど走った後に大回りをしてこの館に帰還してください。指揮は兵士隊長様お願いします。」

兵士隊長「様はいりません。了解しました」

美女殿「次は少しして15名と馬車に出てもらいます。方向は最初の10名と逆の方へ行ってください。1刻ほど進んだら適当な場所に隠れてください。指揮は爺様お願いします。」

爺「わかった」

美女殿「隠れる場所は周りの開けた場所にある小さな茂みなどがいいですね。少ししたら10名はそのまま先へ進み最初のメンバーと同じように半刻ほどで2人一組で散ってください。」

爺「馬車は？」

美女殿「馬車は場合によっては邪魔になるので無理には連れて行きません。10名が発発して半刻たったら馬車と共に目的地と別の方に移動し3刻後に大回りで館に戻ってください。」

美女殿「領主息子様と最後のメンバーは半刻後に私と共に目的地方向へ向かいます。1刻ほど進んで追われてそうなら国境方面に方向転換して途中で同じように2人一組で分かれ、後は同じやり方で。全員の目的地はここ（街道から半刻ほどの距離）です」

美女殿が指差した場所を確認し全員が頷いた。

美女殿「鶏鳴の始め（1時頃）に集まりを見て街道を越えるメンバーを決めます。遅れた人はここに待機になるので頑張って時間までに集まってください。」

時間との勝負である。

美女殿「皆さんお願いしますね」

笑顔で告げる美女殿に皆は敬礼した後、行動を始めた。

一組目の部隊が館を出た。少し待って私達も出発する。
馬車を無理が無い程度に急がせながら一直線に走る。

半刻進むも適した場所が見当たらずにもう少し進む事になった。
途中、開けた場所にある小さな林を見つけ入る。

追われているかは今の状況では分からない。

5名を選び追手に十分に気をつけるようお願い馬車を任せて先を急ぐ。

2刻ほどして最初の手はず通りに2人一組に分かれる。

追手の気配は無いようなので目的地へ向かって向かった。

目的地の林に着く。

美女殿と領主息子と兵士隊長はすでに着いており、他の幾人かの兵
と共にいた。

10名ほどが目的地に付いているようだ。

その後も兵がばらばらと集まりだし鶏鳴前までに全員が揃った。

迎えに行くのは美女殿、私、領主息子と兵2名。

兵士隊長には「日が昇りだしても戻らない場合や発見された場合は
館に戻るように」と伝え、この場を指揮してもらうことになった。

徒歩で街道に向かう。

未だに数名の歩哨が居るが闇が濃くなったお陰で見つからずには渡れそうである。

美女殿が街道の向こうにある小さな岩を指差す。

あそこに行けと言う事らしい。

歩哨の位置を確認し、私が先に行く。

出来るだけ低く音を立てないように走り岩の後ろに隠れる。

すぐにもう人一人の兵士が来た。

岩は小さく2人が隠れるがやっとなので兵に奥の森へ隠れるようにいうと音を立てずに移動する。

次の兵も同じように伝え領主息子も森へと消えたのを確認して私も森へ隠れる。

奥へと伝えると領主息子は「美女殿は？」という顔をしたがすぐ後ろに美女殿が居て驚きの声を上げそうになる。

街道から十分離れてから走り出す。

もうすぐ目的地という場所で美女殿が皆に姿勢を低くして下がるように合図をする。

少し戻った所で美女殿に話を聞く。

爺（どうしました？）

姫（知らない兵が居ます）

爺（！！）

姫（姫と若が無事なのか分かりませんが数が多いようです）

領主息子と兵は無言でどうするか判断を待っている。

姫（結構の数が居そうですが、とりあえず様子を見てまいります。）

「少し待っててください」というと美女殿は気配を消して目的地の方へと向かった。

第8話 少年

僕を切りつけようとしていた男が何かに弾かれたように転ぶ。

妖精少女「お兄ちゃんを助ける！」

仲間が急に転んだことに意識が行った相手の剣を押し戻しそちらをみると

妖精少女が馬車から身を乗り出し指を突き出していた。

僕「隠れてるんだ！」

魔王『もう遅い！』

妖精少女に走り寄ろうとした所、別の男に妨害されてしまう。

—このままでは妖精少女が！

姫「私が守ります！」

妖精少女の前に庇うように立ち懸命に剣を掲げる姫。
2匹の子狼も健気に2人の前に立ち威嚇をする。

―だめだ！

この集団は普通の野盗なんか足元に及ばないほどの使い手だ！
姫では手も足も出ないうちに殺されてしまう！！

揺れる剣先を懸命に敵に向ける姫。

―だめだだめだ！

目の前の敵に阻まれ2人に届かない。
姫ににじり寄る男達。

―このままでは守れない。どうすれば！

魔王「後ろから来るぞ」

自分の身すら守れない。

姫「私が相手になります！」

懸命に震える声で叫ぶ姫の声がより一層僕を焦らす。

―何か手は！

魔王『後ろからもくるぞ！』

姫に切りかかろうとする男が見える。

僕は無我夢中で鏑迫り合いをしている相手を力任せに押した。

すつとバターでも切るような感触で相手の剣が2つに切れる。

あまりの事に驚く相手の男をそのまま押し倒し姫に向かって走る。

―間に合わない！！

謎の男「待て！！」

その一言に全ての男が動きを止める。

良く分からないがその隙に姫の前に躍り出た僕は剣を突き出した。

謎の男「もしかしてその声は第2王女様では！？」

黙っている僕達を無視して謎の男は剣をしまうと跪く。

すると周りの男達も剣を収め跪いた。

根元から折れた剣を突きつけた僕は何がなんだか分からずにキョトンとする。

姫「貴方達は？」

謎の男「私は第4王子直属の騎士隊長です。」

信用して大丈夫かな？と姫を見ると頷いた。

姫「確かにあの顔は第4王子と一緒にいる所を何回か見たことがあります。」

騎士隊長「姫とは知らずご無礼を働いた事をお許してください」

姫「このような暗闇の中では仕方ありません。誰も――」

と周りを見渡して負傷者が居ないことを確認し

姫「誰も怪我をしなくて幸いでした」

しっかりと話す姫を見てさっき僕と話していた普通の女の子が遠くへ行ってしまったように感じた。

――ちょっと寂しいな

と思ってたら姫が震える手で僕の手をそっと握ってきた。
見知った顔だったとしても先ほどの恐怖は中々消えないのかも知れ

ない。

僕も何も言わずに姫の手を握り返した。

魔王『いい所すまんが、何時まで折れた剣を突き出してるのだ？』

―べ、別に忘れていた訳じゃないんだからね！

――

謎の集団は第4王子直属の騎士団らしい。

騎士団長「爺はどちらに？」

姫「翁の所へ支援を要請に行きました。」

騎士団長「お一人ですか？」

姫「いえ手馴れたものが一人、一緒に向かいました。」

騎士団長「そうですか。ああそうだ、まずは我々の陣営へお越しください」

その申し出に僕を握る姫の掌に力が入る。

魔王『用心しろ』

—どうということ？

魔王『顔見知りだとしても敵である可能性はぬぐえない』

—第4王子付きの騎士団長なのに。

魔王『脅されたり敵に降ったりしているかもしれない。』

—そんな事が。

魔王『ありえない事ではない。相手の話に乗らず様子进行をしろ』

力が入る姫の手を優しく「大丈夫だよ」と伝える為に優しく握る。
伝わったかは分からないけど。

僕「いいでしょうか？」

騎士団長「何か？」

僕は騎士団長に自己紹介をする。

とある地方の貴族の三男で見聞を広める為に旅をしている。

妖精少女の正体は羽が隠されておらず精霊魔法を使ったのを目撃されているので隠しようが無く、旅の途中で出会って一緒に旅をするようになった僕の妹のような存在と説明。

そして爺と共に向かったのは僕の従者であることを伝えた。

僕「僕達は爺達が戻るまでここを離れる訳にはいきません」

騎士団長「それは何時頃戻られる予定なんでしょう？」

僕「一昨日の夜に出ましたので早ければそろそろ戻ってくるかと」

僕の嘘に姫の掌が震える。

もし相手が敵に通じている場合はこの事を聞いたときに何かの反応が見られるだろう。

出来るだけ警戒していない風を装いつつ周りの騎士も注意深く観察する。

騎士団長「分かりました。では我々も合流して待ちましょう」

騎士団長は少し考えるそぶりを見せるもすぐに頷いて周りの騎士達に指示を出す。

魔王『まだ安全と決まったわけじゃない。油断はするな。』

―わかった。

慌しく一人の騎士が森の奥へ走って行く。

周りに注意を払いながら姫に小声で話しかけ知り「合いでも敵にな
っている可能性もあるので気を抜かないように」と伝えるとすぐに
小さく頷き返してきた。

その可能性を姫も考えていたようだ。頭がいいなあ。

僕は折れた剣を鞘に戻し姫の剣と交換してもらった。

そうしていると騎士団長が近づいてきたのを感じた2人は僕の近く
に寄ってくる。

妖精少女は服のすそを、姫は剣の交換に離していた手を握ってくる。

騎士団長「すぐに我々の仲間が参ります」

―相手は友好的な感じだがもし敵ならこれ以上増える前に逃げたほ
うがいいのかな？

警戒心を露にした僕達を見て騎士団長が肩をすくめる。

騎士団長「安心してください。私達は味方です。」

魔王『まだ信用は出来ない』

騎士団長「といっても今のような敵の多い状況では難しいかもしれないが、これからこられる方にお会いになれば信頼していただけると信じております。」

―この流れからしたら第4王子か。それとも別の信頼できる人物か？

魔王『捕まえた美女と爺を目の前にして降伏を強制してきたりな』

―なんでそんな怖いことばかり思いつくの。

魔王『魔王だからな』

―確かに！

魔王『ただ、そういう最悪の状況も想像できないと様々な対処法は思いつかない』

―魔王がまじめなことを言ってる。

魔王『我はいつも真剣だ』

少しすると数人の人物が僕達の馬車に近づいてきた。
その人物をみた姫はハッと息を呑む。

姫「第4王子！」

大人に囲まれた相手は少年だった。

魔王『ほう、あれが』

―僕と同じくらいの年だね

魔王『だが威厳は奴のほうが数段上だな』

―悪かったね。

第4王子と僕は互いに自己紹介をする。

どうやら先ほど走っていた騎士にある程度話は聞いていたようで、妖精少女を見ても驚くことなく微笑んでいた。

その笑みはどこと無く姫に似ている。

王子「姫姉さまを助けて下さったそうで、お礼を申し上げます」

僕「い、いえ」しどろもどろ

王子「君もありがとうね」

妖精少女にも礼を言う。

王女の後ろから王子を眺め「うん」と呟く妖精少女。
どっちが守られてるのか分からない。

姫「よくご無事で―」

王子「姫姉さまこそ」

お互いに今までの状況を話す。

王子は裏切りの事実を知り姫の救出へ向かうも間に合わず、逆に敵の前面におびき寄せられ追い詰められて逃げ落ちる結果となっただしい。

何とか騎士団長を含む20名ほどの騎士と逃げ切ることが出来き身を隠しながら信頼出来そうな領主の館を極秘裏に回っていたらしく、翁の所に向かう途中だったようだ。

姫は急な裏切りで背後から攻撃を受け動揺している所を敵に攻撃され挟撃の形となり軍は瓦解。

逃げ延びて山の麓に拠点を構え仲間達と時期を探っていた所、居場所がばれてしまい攻撃を受けた。

みんなは姫の脱出の時間を稼ぐ為に敵と奮闘をし、その間に爺と2人で脱出した。

その後は一時撒いたと思った敵兵に見つかり追いかけている所

で僕達に出会ったらしい。

お互いの話が終わった後に爺がもうすぐ戻ると言うのは嘘で、早くても明日の夜けぐらいだと説明する。

それを聞いた騎士団長は「あの場合は当然でしょうな」と僕の嘘に頷いてくれた。

戻ってくるまで丸1日あるということで騎士達は野営の準備を始めた。

とはいえ天幕などがある訳でもない。

人数も居ることだし見張りも十分つけると言うことで火が2つほど焚かれた。

小さな光を見た姫がほっと息を吐く。

王子「見張りは騎士達が交代で行いますので今日はゆっくりお休みください。」

姫「ありがとう」

王子「ただ我々より信頼のおける人物が居るようですが」

王子は未だに繋いだままの僕と姫の手を見て笑顔で言う。

それを聞いて繋いだままだったのに気が付いたのかぱっと手を話で俯く姫。ちよっと残念。

僕は気が付いていたけど手を離すのが惜しくて黙ってただけなんだ

けどね。

と、あいた僕と姫の手を掴み「私も繋ぐ」と言う妖精少女（可愛い！）

王子「暖かい飲み物を用意させますのでどうぞ火のそばへ」

笑顔の王子に促され焚き火へと歩みを進めた。

姫と妖精少女は女性と言うことで馬車で寝る事になった。

僕は馬車の横で剣を振りながら一人考える。

—まさか第4王子と出会うとはね。

魔王『確かに低い確率ではあったが同じ相手を目指しているなら必然と言えよう』

―でもこんな幸運があるなってまるで物語みたい

魔王『だがそういう幸運にも恵まれているからそこ何かを成し遂げることが出来るんだ。だからその後語り継がれるのだろうか。』

―確かに

剣を振っていると騎士団長が近づいてきた。

騎士団長「鍛錬ですか」

僕「はい」

騎士団長「剣は誰に教わったのですか？」

僕「従者です。今、爺と共に行っている」

騎士団長「さぞお強い男性なのでしょうね」

―あれ？美人さんは女性だって言わなかったっけ？

魔王『言っていないな。面白いし黙っておこう』

騎士団長「よければお相手いただけませんか？」

僕「あ、はい」

別の事に気を取られていた僕はつい返事をしてしまった。
さすがに妖精少女と姫が寝ている横で剣をぶつけるわけにも行かず
少し離れた場所に向かい合う。

騎士団長「闇夜の戦闘経験は？」

僕「少しだけ」

騎士団長「そうですか。では軽く流しましょうか」

騎士団長は軽く剣を構えると僕に笑いかけた。

魔王『いきなり来るぞ。下がるなよ』

—え？

魔王のつまらなそうな一言に聞き返そうとした瞬間に騎士団長は一
気に距離を詰める。

僕は魔王の「下がるな」という一言を信じてすぐに前に出る。

前に出た僕に軽く繭を動かした騎士団長は剣を振り下ろしてくれ
る。それに剣を合わせながら押しつぶそうとする騎士団長の力に負けな
いように押し返す。

ふと「力押しだけでは引かれたときに体が泳いで危ないですよ」と
いう笑顔の美女さんの言葉が浮かび力を少し緩める。

急に僕が力を緩めた事に体が流れそうになりながらも力の方向を変
えて僕を突き飛ばそうとする騎士団長。

その力を流しつつ互いの体の位置を入れ替える。
彼我の距離はどちらかが一步踏み出せば剣が届く。

―待つ必要は無い！

僕は一步踏み出し剣を振るう。

僕の剣を弾いて切りかかかりそれを剣で受け流し再度剣を振り、弾かれ、流され、避け、受けられる。

互いの剣が何度も何度も重なり合う。

互いの剣が弾かれた瞬間に距離をとる。

気合を貯め再度飛び込もうとした時

王子「そこまで！」

声に動きが止まる。

見ると王子と姫と妖精少女がそばまで来て見ていた。

―あれ？寝ていたんじゃない？

魔王『近くであれだけ騒がしければ冬眠中の獣でも飛び起きるだろう』

―そんなに煩かった？

一歩引いて剣を収める騎士団長を見て僕も剣を収める。

王子「素晴らしい剣術ですね」

僕「いえ、ありがとうございます」テレ

騎士団長「いえ、騎士団にもそこまで使えるのは中々いません」

王子「これほどの使い手がいたとは」

騎士団長「彼に剣を教えている従者殿はさらにお強いらしい」

王子「なんと！」

僕を囲んで褒め称える王子と騎士団長。

―誉められ慣れてないのもう勘弁してください。

魔王『これぐらいでいい気になるな。』

―その毒舌の所為だからだからね！

周りで見ていた騎士にも解散が告げられる。

どうやら見張り以外の者は僕達の仕合を見ていたらしい。
ものすごく恥ずかしい。

騎士団長「騎士の剣を押すだけで2つにしましたが、あれは？」

―魔力の事は言っても大丈夫かな？

魔王『それくらいならかまわんだろう。珍しいとはいえ人族でも出来る奴はいる』

僕「剣に魔力を通して切れ味を増やしました」

騎士団団長「魔法剣士なのですか！」

僕「いえ、そんなすごいものではありません。」

持ち上げられるのが照れくさくて頭をかく。

妖精少女が「お兄ちゃん強かったね」と膝に抱きついてきた（可愛い！）

姫は少し離れたところで見ていたが僕と目が合うと「そろそろ寝ましょう」と妖精少女を呼んで手を引いて行ってしまった。

―嫌われてしまったかな

魔王『…なぜそう思う？』

―目を合わされるとそらされるし、近くに行くと身を強張らせるし

魔王『そう思うならそうなのではないのか』

—そっか。。。

凹んでる僕に魔王の「やれやれ」という雰囲気伝わってくる。
呆れなくてもいいじゃないか。

—少しくらい仲良く出来たらいいな

魔王『ソウカ。ガンバレ』

—ありがとう魔王

滅多に無いあまりにも優しい言葉に勇気付けられる。

激しい運動で乱れた呼吸は戻りつつある。

目を瞑って馬車に寄りかかる。火照った体に夜風が涼しい。

—美女さんと爺は無事かな。

そう思ったときに騒然とした音が聞こえた。

すぐに駆け寄ってくる王子と騎士隊長。

騎士団長「見張りをしていた兵が人影を見たようです」

僕「敵ですか？」

騎士団長「分かりません。ただ用心は必要です」

緊張した瞬間、周りの兵が剣を抜いた。
一人の人物が歩いてくる。

美女さん「ただいま戻りました」

僕「美女さん！」

周りの兵は緊張を解かないものの笑顔で悠然と歩く美女さんに困惑している。

騎士団長「お知り合いですか？」

僕「爺さんと一緒に行った人です。こんなに早く何かありましたか？」

美女さん「無事戻ってきました。爺様と他の兵も居ます」

僕「もう行って返ってきたの！？」

明日の夜になるんじゃないかったの？とい疑問に笑顔で返す。
手短に王子と騎士隊長に挨拶をすると「とりあえず皆さんを呼びますね」と言い騎士隊長と数名の騎士を連れて森の奥へ消えていった。

第9話 溜息

合流した爺は王子を見るとすぐに腰を折り「よくぞご無事で」と涙を流さんばかりに喜んだ。

一緒に来た領主息子という人と2人の兵も膝を折る。

姫も起きたらしく、半分寝ぼけた妖精少女の手を引いて現れた。

首輪が無い事と羽を隠していない事をみた美女さんは何も言わなかったがある程度察したようだ。

姫にも長い礼を尽くそうとしていた領主息子は「時間は余りありませんよ」という美女さんの一言に短い礼をして共に後ろに下がった。すぐに情報交換をする。

とりあえず翁の方は話がついて何人かの信頼できる人物に連絡を取ってくれているらしい。

街道には歩哨が居る為に兵を待機させ一部の兵で来たらしい。

王子の方も幾人かの領主と話は付けており翁を頼ろうとしていた矢先に僕達に出会ったという事を伝える。

王子「姫姉さまと爺はこのまま翁の元に向かってもらった方がいいと思う」

姫「王子はどうするのですか？」

王子「僕は話を取り付けている領主の下へ行き、姫と翁が立ち上がるのに呼応して兵を挙げます」

姫「一緒に翁の所へは？」

騎士団長「兵が集まらないうちに一箇所に集まるのは危険です。」

爺「王子が話を付けている領主というのはどこですか？」

騎士団長「こことここと――」

地図に丸と三角を付けていく指揮団長。

騎士団長「丸が協力を必ず得れる領主。三角が兵は出せないが国王側には付かないと約束を取り付けれた領主です」

王子「三角は状況によっては兵を出すでしょう」

爺「丸の兵を集めると1500と言ったところですか。」

騎士団長「2000近くはいくかと。三角は1000を越えないといった所ですね」

領主息子「爺も2000は集めると申しておりました」

爺「合わせて4000集まるかどうかという所か。後はどれだけ味方に付くかだが」

僕「敵はどれくらいの数が居るんですか？」

王子「近衛騎士団1000名、白の騎士団2500名、赤の騎士団2000名、黒の騎士団4000名、それに国政を掌握している有

力貴族の一門とその取り巻きが10000名で合計20000といった所ですか。」

魔王『ものすごい物量差だな』

騎士団長「それに王宮に頭を垂れる者達が数千といったところですね。」

美女さん「多いですね」

騎士団長「そうですね。周りの領主を取り込んで増強しないと厳しいですね」

僕「一つ質問があるんですがいいですか？」

手を上げた僕にみんなが注目する。

王子「どうぞ」

僕「何で3つの騎士団で兵数に差があるんですか？」

王子「黒の騎士団は先のクーデター後に新設されました」

騎士団長「我らを裏切った褒美でのし上がったヤツが騎士団長に任命されてたんです」

騎士団長が苦々しく言う。

美女さんは僕を笑顔で見つめてる。

僕「人物像は？」

王子「有力貴族達に迎合する小物ですね。」

姫「私も何回か合ったことがあります。が、纏わり付くような嫌な視線を送る人でした。」

騎士団長「大事な場面で自分の出世の為に王子と姫を裏切った忠義の欠片も無い屑です」

僕「嫌な奴なんだね。ごめん。話を逸らしましたね」

本当におどましい事を思い出すように言う姫に「嫌な事を思い出させてごめんね」と言う。姫は少し微笑んで「たいしたことはありません」と言った。

それに安心して僕は騎士団長に先を促す。

騎士団長「ヤツは有力貴族に取り入り有力貴族と反発気味だった白赤両騎士団長を幽閉して両騎士団の兵を自分の騎士団に組み込んだのです。」

僕「それで黒だけ数が多いんですね。今の白赤の騎士団はそれで誰がまとめているの？」

爺「白赤両騎士団の団長に自分の子飼いの者を置いているそうです。」

僕「不満が多いだろーね」

騎士団長「素晴らしい両騎士団長を幽閉して、あのような能力が無いヤツラが上に立ってるという状況に怒りを感じている者は多いでしょう」

僕「じゃあ何で誰も不満を言わないの？」

騎士団長「言えれば自分は投獄されるのが目に見えてますからね」

僕「なるほどね」

―これは案外しけるかもしれない？

僕「兵を挙げるとしてすぐに騎士団が来ると思う？」

騎士団長「私ならここ（王都までの間にある大砦を指差す）に騎士団を配置しますね。ここは王都へ行く兵を止める事が出来ます。」

僕「なるほど」

騎士団長「そうして周りの領主に呼びかけて兵を集めながら敵が来るのを待ち受けます。」

爺「定石じゃな」

魔王『つまらん手だ』

―なら魔王ならどうするんだ？

魔王『大砦まで行きまわりの領主から兵を徴収する』

―一緒じゃないか

魔王『その後は大砦の防衛兵を残して全力で敵を蹂躪する！待つな
ど好かぬ！！』

―なるほどね

僕「黒の騎士団長の人間性を考慮に入れてどう動くと思う？」

王子と騎士団長と爺が考え込む。

爺「いくらあ奴が愚かでもこの大砦の重要性は理解できるだろうから大砦までは来るな。」

王子「小心者なので3つの騎士団全部を全部連れてくるでしょうね」

僕「小心者なんですね。じゃあ8500を連れて来たとして、半分以下の約4000の兵に対して籠ってしまふかな？」

騎士団長「小心者ですからね。その大人数でも籠って出てこないでしょう」

王子「多分出てこないでしょうね」

僕「本当にそうかな？」

王子「といいますと？」

僕「4000と半分の上にその軍隊には王子と姫がいるんだよ？」

僕の言葉に王子と爺と騎士団長の三人が思案する顔になる。

僕「2人を捕らえるなり仕留めるなりしたらものすごい武勲だよ。ね。そんな武勲を虚栄心の塊の人が頼って置くかな？ 半分以上の兵数だよ？」

爺「確かにそれは出て来ざるを得ないですな」

王子「それでも自分を危険にさらすような真似はしないんじゃないかな？」

騎士団「白赤合わせて4500、近隣の領主を合わせてこれを使ってくるでしょうね」

僕「自分の5500は出さない」

騎士団長「出しません。自分の騎士団は傷つけないようにし、両騎士団で取った武勲を自分の手柄にしようと思います。」

爺「いっそ両騎士団の数を減らして、いずれ自分の騎士団に吸収して1つにしようとか考えるじゃろうな」

僕「なら都合がいいね」

笑う僕に「どういう事だ？」とみんなが首を傾げる。

僕「相手が両騎士団を出してくれるんだから取り込もう」

ぽかんとする一同。

美女さんだけ相変わらぬ笑顔だけど。

僕「両騎士団は騎士団長を幽閉されて怒りを覚えているからね」

騎士団長「その騎士団長の命を盾にされているので、こちらに靡なみく事はありませんよ」

僕「別に僕らと共に戦ってもらう必要は無いですよ」

王子「どういう事でしよう？」

僕「両騎士団の今のトップは騎士団に受け入れられていないと思います」

王子「そうですね」

僕「なのでその2人を倒して残りの騎士団には傍観に徹してもらいましょう」

王子「は？」

僕「王宮は騎士団長の命を盾に取っていますよね」

爺「そうですね」

僕「実際に処刑すると思いますか？」

騎士団長「もし両騎士団が裏切ればするでしょう」

僕「今のままだと出来ませんよ」

爺「どういことですか？」

僕「今は両騎士団で4500、黒の騎士団の一部もあわせると5000以上の兵が両騎士団を慕ってます。その状況で処刑すれば、それだけの兵を敵に回すということです」

僕の台詞に感心する王子と爺と騎士団長。

姫がじっとこっちを見ている事に緊張する。

美女さんが微笑んで見ているのは僕を査定しているようでもっと落ち着かない。

魔王『美女は確実にそうだな』

—だよね！

僕「ですので敵に回れば処刑されますが、戦闘放棄なら処刑しよう

が無いんです。」

王子「なるほど！黒の騎士団も奴の子飼いは100程度で他は元々両騎士団の騎士。それが傍観を決めたら勝機はあります！」

―それだけしか子飼いが居ないの！？

魔王『張子の虎だな』

僕「とりあえず当面は2つの騎士団をおびき出す方法を考えましょう。あまり大砦に近ければこちらが危ういのですが、適度の距離でいい場所がありますか？」

騎士団長「大砦から馬で半日ほどの距離に小砦があります。大砦を取れない状況では拠点にするに適した場所はここですね。」

僕「爺、翁の場所から小砦までかかる時間は？」

爺「そうですね。朝から向かって1日といった所ですか。翌日には小砦につくでしょう。ただ翁もまだ兵を集めて居ないと思いますので集めるのに2日見て3日ですかな」

僕「王子が兵を集めて着く時間は？」

騎士団長「今から向かって兵を集めるのに3日。小砦まで2日で5日目には付けるかと」

僕「小砦の兵数は？」

騎士団長「200という所でしょう」

僕「近隣領主が小砦を守る可能性は？」

爺「あっても500には届かないでしょうから、全体で700といった所ですね」

僕「王宮から騎士団が小砦に来るまでの時間は？」

王子「翁が兵を集めているのが伝わるのに1日。出陣の準備などがあるので先発隊で数百ほどが飛ばして到着に半日。本陣が大砦に来るのは3日後くらいですね。」

僕「爺。一日で落とせますか？」

爺「厳しいですが出来るでしょう」

僕「翁の兵力でどうにか先に小砦を落としておくので、ここで合流しましょう」

王子「はい」

僕「ではその後の方針はあった時にきめましょう」

そう言うともんな慌しく動き出した。

「ほう」と息を吐くと姫と目が合った。

調子に乗って話していた事に恥ずかしくなって照れ笑いを浮かべると「そんなことはありません」と言ってくれた。

姫「本来なら関係ないのに一生懸命考えて下さってありがとうございます」

僕「いえ、気にしないで下さい。」

姫「何もお返しできませんが、この国が平和になった時は出来る限りの事をします」

深々と頭を下げる姫に困惑する。

そこまで大した事を考えてるわけじゃないのに！

一生懸命な姫を少しでも助けたいと思ったただけなのにそういう事を言われてあせった僕はつい口を滑らせた。

僕「じゃあ僕は姫と仲良くなりたいです」

姫「え？」

―何をいつてるんだ、僕は！

僕「えっと、一国の姫に対して大それた事ですが、僕は姫と仲良くなりたいんです」

魔王『一応、我も一国の王子ではあるんだがな』

―確かにそうだった！

姫「えっと、あの―」

僕「妖精少女とかとは笑っているのに僕とは目を合わせてくれない

のが悲しくて。こういう形で言うのはどうかなとも思うんですが、出来れば仲良くできたらなあ…とか思ってみたりして」

あせて取り繕うとして口を滑らせまくった僕の台詞は尻窄しりつぼみになる。

―何を口走ってるんだ〜〜〜

姫「嫌ってなど、その、あの、私も緊張してしまって…」

僕「え？」

姫「あの、よ、よろしくお願いします、」

僕「本当ですか？ やった〜」

魔王『まさに、大逆転！』

―なにそれ？

魔王『わからん。何となく言わねばいかぬ雰囲気だったのだ』

うれしさに姫の手を掴んで握手をすると姫は「あ、あの、準備がありますので」と顔を真っ赤にして走って行ってしまった。

恥ずかしいと言ってたし、手を繋ぐのはいきなりだったかな？

魔王『まさかあそこでああ来るとは。鈍いと思っていたがやるな』

―まさか僕もあんな事を言ってしまうとは思わなかったよ

魔王『まあ結果的には良かったのではないか』

―そうだね。友達になりたいとずっと思ってたし

魔王『は?』

―出来れば仲良く話せる位に友達になりたいよね

魔王『…姫の気持ちを確かめたのではないのか?』

―そんなつもりはなかったけどね。結果的に僕の事を嫌ってないって分かってよかった。

魔王『やはりお前はダメだ』

―え? 何で?

魔王『いや、逆にすごいよお主は』

―まあ僕自信も姫と旨く仲良くなれてすごいと思うし信じられないよ。

魔王がため息をつく。
最近増えてない?

心配事でもあるのかと思ってよくよく考えたら、魔王の国も後継者争いで大変だったのを思い出した。

―早くこの問題を片付けて妖精少女を送ったら魔王の国の事も考えようね

魔王『そうだな』

そういうと僕も急いで準備を始めた。

第10話 氣迫

姫が街道を越えた瞬間につんのめる。

静かな夜に小さな音が響く。

それは小さな音に関わらず意外と響き歩哨の耳に届いたのかこちらに歩いてくる姿が遠く見える。

後ろを走っていた僕は姫に覆いかぶさり「静かに、動かないで」と小さく言う。

今居る場所は街道から見えるか見えないか微妙な場所。

もしかしたら見付からないかもしれない。

足音が近づいてくる。

ちよつと離れた場所に立ち止まり周りを見ている。

早く立ち去れと思ったときに「ん？」と一人が呟いた。

明かりがこちらに向けられている。

「どうした」と言う声に「あれが気になって」と近づいてくる足音。

―見付かった

姫に「このまま」と言う足跡に集中する。

近づく足跡。柄に手を掛ける。

相手が近づいて覗き込む気配がした瞬間にぱっと起き上がり相手を切り裂く。

近くに居たもう一人も剣を抜こうとする前に切り伏せて周りを見る。

10歩ほど先に2人。

一人が抜刀してこちらに向かう後ろでもう一人が笛を取り出し吹こうとする。

あれを吹かれると周りから兵が集まってくるだろう。

ナイフを投げようとするも一人が向かって来たので剣を避けられ
違いざまに切り裂きそのまま走る。

――間に合わない！

そう思ったときに背後に美女さんが立ち笛を咥えた兵の首を一瞬で
捻じ曲げた。

笛の音は「ひょ」と微かに鳴ったが近くの僕でも聞こえるかどうか
だったので周りに知られる事は無いだろう。

すぐにみんなが集まってきた。

妖精少女は街道を越えた先の草むらから顔を覗かせている（可愛い
！）

その場で待っているように言われたようだ。

美女さんが皆に兵に死体を移動するように指示する。

僕も一人運ぼうとするのを爺は「私が」と死体を担ぎ「姫をお願い
します」と言われる。

震えている姫に「大丈夫ですか？」と声を掛けると「私のせいで見
付かって――」

僕「姫、立てますか？」

姫「みんなが危ない目に――」

僕「姫」

震える姫。よほど怖かったのだろう。

ここで優しい言葉でも掛けられたらいいんだけど、こういう経験が全く無い僕には出来そうにも無い。
姫の方を揺する

僕「大丈夫です。問題ありません」

反応が無い姫の顔を両手で掴み多少強引に掴み顔を覗き込む。

僕「聞こえていますか？」

姫「ッ！」

僕「他の兵に知られる前に対応できました。まだ大丈夫です。」

「殺した」という言葉は避ける。

僕「ただここに居ると他の兵に見付かります」

動かない姫に僕は心を鬼にして言い捨てる。

僕「これ位で怯えないで下さい。今までも多くの人が犠牲になりました。これからもっと血が流れます。知り合いの血も！それでも貴方は毅然としなければならぬ立場なんです！！」

姫は目を大きく見開き同様に揺れる。

僕「僕が貴方を（友達として）支えます。貴方は一人ではない。だから辛くとも負けずに前に進んでください。」

姫が驚きに目を開き強い意志が宿る。
その顔は高揚している。

―元気が出て良かった！

魔王『…わざとだよな？』

―もちろん発破をかけてやる気を起こしてもらおう作戦だよ

魔王『もう聴かん』

―何だというんだ。

立ち上がる姫に手を貸す。

死体は街道から外れた草むらに隠した。
美女さんが街道上の争った後や落ちているものを処分して近づいてくる。

「日が昇るくらいまでは時間が稼げると思っています。急ぎましょう」

そういうと他の兵の待機する場所に向かって走りだす。

待機している兵はすぐ近くに居た。

美女殿が手早く馬を受け取る。

―馬なんか乗れませんけど！

とか言える感じでもなく馬を渡される。

魔王『私は乗れて居たんだ。その体を持つお主も乗れる』

―そうなんだ！よし！

他の人のやり方を見て同じように乗ってみる。

―乗れた！

魔王『本当に乗れたのか！』

―え？

魔王『まさか本当に乗れるとは』

―言い切ったくせに確信なかったの？

魔王『まあ美女の訓練で体が動くようになって来たからな。元々体が覚えている事が出来だしても可笑しくないとは思っていた』

『結果良ければ、だ』と笑う魔王に馬の操作を簡単に習う。
ちよつと歩かせて方向転換して止まる。
軽くその場で駆け足で回る。

―いけるかな？

魔王『走り出したら後は馬のリズムに合わせろ』

―できるかな

と爺が「姫を乗せてください」と僕の所に姫とくる。

2人乗りはしたこと無いし（本当は乗るのも初めて）だし「そういうのは爺とか美女さんの方がいいのでは？」と聞くと、美女さんは妖精少女を乗せているし爺は敵の追手があつた場合に指揮を取るので姫を乗せられないと言う。

では別の兵にと言うと「おいそれと姫の体を若い男に触れさせていいと思うんですか！」と怒られた。

―僕も若いんだけど

とりあえず他に姫を乗せる相手は居ないらしい。

「僕でいいですか？」と聞くと姫は頷いたので手を持って引き上げ

る。

爺が後ろから足を支えて何とか馬に横乗りじゃなく跨った。

―あれ？後ろにのるんじゃ？

魔王『これから飛ばすのに後ろに乗ったら振るい落とされるかも知れんだろう』

―そういうものか

なんかこんなに密着したらどきどきするな、いや今は非常時そんな事を考えたらでもいい匂いがする様な―

出発の号令が聞こえ美女さんを先頭に走り出す。

僕も「行きますね」と姫に声を掛けて出発する。

意外といけそうかも、とか思っていたら周りがどんどんスピードを上げていく。

姫が前で馬の揺れに体を揺らしていたので片手で肩を掴む。

片手で姫を支えながら操作は難しかったのでそのまま僕に背を預けるように誘導し腕をおなかに通して固定する。

姫が何か言ってるけど風の音でよく聞こえないが多分、馬の速度に驚いているんだろう。

どうにか安定しそのまま領主の館まで休みなしで走り通した。

昼遅くになってやっと目を覚ます。

疲れと久々のベッドと言う事もありぐっすり寝てしまった。

明け方に着いた僕達は翁と現領主に面会した。

簡単な自己紹介を行うと「お主が美女殿の主か」とまじまじと見られた。

妖精少女の事も正直に話すと「妖精族を見ると幸運が訪れると言われておる。縁起がいいな」と翁が笑った。

どういう言い伝えなのか気になって後で聞いたら「嘘じゃ。ああでも言っておいたら妖精少女を蔑ろにする奴はおらんじやろう」と翁は豪快に笑った。

このおじいさんすごい。

王子に会った事を伝えると翁はものすごく喜んだ。

王子たちの計画を聞いて頷いていた翁と現領主は「騎士団を籠絡する作戦」の発案者が僕だと知って「さすが美女殿の主となるほどの人物だ」と感心していた。

「なんでこんなに美女さんの評価高いの!? 確かに色々出来てすごい人ではあるけど!

魔王『一回、しかも短時間しか会っていない筈なのに何があったんだろうな』

美女さんの謎がまた一つ増えた。

他の領主達の伝令は全部送ったらしく早いものは戻ってきているらしい。

すぐに兵を準備してこちらへ向かうようなので昼ごろには集まりだす、と言う。

堀を出す領主達に再度、2日後の朝に出発するのでそれに間に合わないようならまた連絡をくれるように早馬を飛ばす。
行き先は念のためにまだ伝えない。

まずは休息を取ろうという話になり、僕達は部屋を宛がわれ久々のベッドで眠った。

そうして起きた？時前ほじ（15時頃）に話は戻るのである。

と言っても「何がる」と言うわけではない。

やる事が無かったのでもは寝る前に行う美女さんの剣術指南を受けていただけだ。

美女殿に中庭で剣術指南を受けていたらいつの間にか人が集まってきた。

姫もどこからか用意された椅子に座り、妖精少女を膝に乗せて見ている。

爺や翁や現領主の他まで警備以外の全員が来てるんじゃないだろう

か。

なんかものすごくやりにくい。

「いろいろな人と剣を合わせるのはいいい事です」という美女さんの同じく見に来ていた領主息子と手合わせをする事になった。

美女さんの開始の合図でお互いに間合いを詰める。

領主息子さんは見た目とは裏腹に力任せな攻撃をお行う事は無く、細かい剣捌きを見せてくる。

しかし一つ一つの剣に重さが無いためにそれほどの脅威ではない為に、剣を捌きつつ隙をうかがう。

こちらの隙を見てぱっと離れた領主息子は納得いかないという感じで何回か件を振った後に「もう一度お願いする」と剣を構えた。

剣を構えながら様子の変化に今回は間合いを詰めずに様子を見る。剣を構えていた領主息子がじりじりと間合いを詰める。

と一気に間合いを詰めたかと思うと先ほどより大降りで剣を振ってきた。

受けようとして剣の重さに受けから流しに変える。

急に変えたせいで少し体制を崩しそうになる所に相手の剣が迫る。それを流しながら体制を立て直す。

剣質が変わった事へで戸惑ったが3合4合と合わせる内にこちらが本来のスタイルだと気がつく。

このままでは押し負けるのを待っただけだ。

どうにか手を出したいが相手の剣が重く次の一手が出せない。

魔王『気迫を出せ』

答える事も出来ずに剣を弾く僕に魔王が言う

魔王『手が出せないなら気迫を出せ』

どういふことか分からず防戦一方になる。

魔王『手が出なくても相手の急所や隙がある場所に一瞬だけ切るといふ気迫を出せ。場所は見なくていい』

どういふことか分からないが言われたとおりにする。

だからなんなのだと言ふ感じで特に何があるというわけでの無く、防戦一方の僕。

魔王『気概が足りない。手合わせだと思ふな。相手を殺す気でいけ』

と言われてもよく分からない。

領主息子の攻撃に後ろに下がりそうになる

魔王『相手をにくい奴だと思え！撒けたら妖精少女や姫がひどい目に合わされてしまう相手だと思つてやってみろ！』

捌くのが辛くなりつつある。

魔王『お前がやられたら2人はどうなるかな。普通に殺される程度なら良いが、妖精少女はまた奴隷になって首輪生活かもな。』

もし追うなっただらと思うと血の気が引く思いがする。

魔王『姫は確実に陵辱されるだろうな。もしかしたら妖精少女もされるかも知れん。妖精族は珍しいからな。歪んだ趣味を持つ奴もいるだろう。』

もしそうなっただらと思うたら怒りがわき、歪んだ趣味を持つ奴という言葉で怒りが一気に冷める。

—そうなっただら殺す

魔王『お前が負けたらそうなるかもな』

—なる前に殺す！

剣が捌き切れずに引きそうになる所と半歩踏み込む。

相手は剣の間合いを乱され半歩下がる。

少し剣が乱れた時を狙って気迫を畳み込む。

場所が逆手の首筋。

下がりながらも剣を振っていた領主息子が一瞬何かに反応しかけつつ剣を繰り出す。

捌きながら別の場所を切る！」という気迫を送ると一瞬そこに意識を取られるようで動きが遅れる。

―次はやる！

振り下ろした剣を捌いたときに相手の「剣を持つ手首を切り落とす！」という気迫を打ち込むと相手が手を引く瞬間に前に出る。

それを察して後ろに引く相手を逃がさないようにさらに前を出て剣を突き出す。

相手がさらに後ろに逃げようとするがこちらの手が早い。
相手の胴に剣先が刺し「そこまで！」

美女さんの声に剣を止める。

そこで相手が妖精少女と姫を狙う変態ではなく領主息子だと思い出す。

僕が剣を胴に突き刺そうとし、領主息子は剣をなぎ払おうと構えている所で止まっていた。

どうやら僕の一手の方が先に届く状態である。

魔王『のめり込み過ぎだがいい気迫だった。怒りではなくアレが出来るようになれ』

剣を引いて収めるとお互いに礼をすると大きくため息をつく。

「さすが美女殿の主だ。」と領主息子が握手を求めてくる。
だから美女さんは一体何をいたんだろう。

美女さん「中々の気迫でした。相手に押し負けず前に出たのも良かったです。ただ全ての剣を流すのは良くないですね。何手か受け止めるべき瞬間がありました。が捌くのに必死で見逃してしまってます。ああいう時に受けて押し返すなりして相手の体制を崩しに掛からないとダメですよ」

美女さんの聞きながら先ほどの戦いを思い返す。

確かに全て捌くと変化が無く防戦一方になってしまいかもしれない。でもどこら辺が受ける時だったのかは分からないという事は余裕が足りないという事だろう。

美女さん「全体を通して中々良かったですね」

僕「ありがとうございます」

領主息子「もしよければ私にもお教え願えないだろうか」

その申し出に美女さんは笑顔で首を振る。

美女さん「私は弟子などではありません」

領主息子「しかし若には教えているでは無いのですか？」

美女さん「若は弟子ではなく主です。そして私は若の従者です。」

領主息子「どういう事ですか？」

美女さん「従者として若の身の安全を守るのが使命です。ですので若には自分でも身を守るように私の出来る事をお伝えしてるだけです」

領主息子「弟子ではないと？」

美女さん「違いますね」

領主息子「どうしてもダメですか？」

美女さん「良い悪いじゃなくて、弟子を取るような事はないだけです」

周りにも聞こえるように言っていた美女さんは「ただー」と言う。

「若の相手をして頂けるのは助かりますー」と。

美女さん「私達がいる間の話だけですけどね」

その後も旅に着いて来るといいうのは無しですよ、と美女さんは微笑む。

領主息子はあきらめた風で「よろしくお願いします」と一例を下がった。

その後、兵士隊長も「お願いします」と言ってきた。

美女さんの「では時間を区切って仕合ましょう」という一言で手合
わせする事が決まった。

兵士隊長は領主息子と同じくらいか少し上の腕前のようにで全然反撃
の糸口が掴めないまま美女さんの終了の合図を聞いた。
かなり息も上がり疲労もたまっている。

にも拘らずその後も爺と現領主と兵士3人まで相手にさせられた。
5人程相手をして1勝、2敗、2引き分け。

爺に負け現領主は引き分け。
意外と強い現領主。

兵士隊長に「こちらで水が浴びれますよ」と井戸に案内してもらい
上着を脱ぎ捨て水を浴びる。

ついでに喉を潤すと冷たい水が気持ちいい。

一息ついて空を見ると真っ赤に染まっていた。

—こんな夕日は初めて見た

元の世界ではもちろん、こっちに着てからも夕日をゆっくり見るの
は初めてだ。

着たばかりの事は夜の静けさと星の多さにビックリしたがすぐに飽
きてしまった。

「どうしたんですか？」と声を掛けられ振り返ると姫が居た。

僕「空が真っ赤なので見てました」

姫も夕日を見上げる。

僕「燃えるような夕焼けというのはこういう事を言うんですね」

姫「そうですね」

初めての感動に姫が相槌を打つまで声を出していつている事に気がつかなかった。

―恥ずかしい。

「燃えるような夕焼けというのはこういう事を言うんですね」とか
一体お前何者！

「燃えるような」とか！

「燃える」が「萌える」だったら「萌えるような夕焼け」ってどんなだよ！

夕焼けに萌えるってレベル高すぎだろ！

魔王『萌えとはなんだ？』

―説明難しいよ

魔王『そなに難しい一言なのか？』

―少なくとも僕には無理だ！

萌えとはなんだろう？とか良く分からない事を考え逃げようとしていた僕に「お疲れ様です」と姫が乾いた布を渡してくれる。お礼を言って体の水分を拭き取りながら夕焼けを見上げる。

―あれ？これってよく聞く「部活上がりに女の子がタオルを差し出す」という夢の場面じゃない？

魔王『ぶかつあがりとおるとは何だ？』

状況を理解して舞い上がっている僕は魔王の台詞が聞こえていなかった。

第10話 氣迫（後書き）

誤字修正 笛を加えた ↓ 笛を咥えた

第11話 新興宗教

布を受け取り体の水滴を拭きながらテンションが上がっている僕に背後から声が掛かる。

美女さん「思ったより元気そうですね」

僕「え？」

美女さん「呼吸は戻りましたか？」

僕「あ、はい」

美女さん「では馬上剣術の稽古を行います。」

―マジですか？

マジでした。

美女さんの馬上剣術は熾烈を極めた。

まずはお互い騎乗状態での剣の振り方や馬の動かし方、相手が剣のときと槍の時に叩き込まれる。
というか何度も叩き落される。
美女さん槍も使えるんだ。

その後は相手が騎乗の場合を教わる。

相手がどのような攻撃で来るのかを剣と槍で。

その次は自分が騎乗で相手が勝ちの場合。

止まらず動き回る事と乱戦でも敵を近づけないようにと叩き込まれるというより叩き落される。

美女さん「一対一ならともかく戦場では落馬したら周りの兵士に取り囲まれて死にますよ。自分だけではなく馬も守るように動いてください」

美女さん「乱戦の時はどこから来るか分かりませんよ。周りにも意識を抜かず敵を馬に近づけない！」

美女さん「相手だけを攻撃せずに馬にも攻撃してください。馬を倒せば半分は倒したも同然です。だからと言って止めを刺すまで気を抜いてはいけません」

美女さん「あまり近づきすぎると馬に蹴られて死にますよ。騎手に届かないなら馬を狙ってください」

美女さん「攻撃の最中も馬の動きを止めない。絶えず動きながら攻撃しつつ優位な位置取りを心がけてください」

美女さん「体だけで避けない。馬ごと動かないと次には動けなくなりますよ。」

美女さんの指導は容赦なかった。
周りで皆が見ている。

兵士隊長が「いいか！今の言葉を忘れるな！」と言い兵士達が頷く。
何なのこれ？

一人の兵士が呼ばれて騎乗する。

「今回は馬への攻撃は無しで」と言うとお互いに間引きされた剣を
持たされて手合わせさせられる。

どうやら相手はさほど剣術が旨くないようで何とか出来ているが馬
の操作に気を取られ攻撃が出来ない。

何とか攻撃をしようと思ったら美女さんが抜き身で寄って来るのが
見えたのでさっと馬を動かして背後を取られないようにする。

すると美女さんは元の位置に戻る。

―何なの？気を抜いたら来るの？

何回か僕が攻撃しようとしたら美女さんは近づいてくる気配を出し、
それに気がつき位置を変えると元にも戻るを繰り返す。

攻撃しようとした時に毎回来るわけではなく、何回に一回の割合で
来るのはランダムなのか何なのか。

魔王『分かったぞ』

―何が？

魔王『美女の動きだ』

―何？

魔王『お主が馬を止めて攻撃しようとした時だけ来ようとしている。動き回れというのを実践できて無いからなのでは無いか？』

試しに何回か動きを止めて攻撃しようとしたら美女さんが動く気配がした。

―当たり前だ！

魔王『止まるとラスボスが来るぞ』

魔王にラスボス扱いされる美女さん。

―否定できない。

馬の動きを止めないように意識を集中すると相手の死角を付けそうになる機会が増えてきた。

と思ったら2人目が追加された。

どうやら2対1のようだ。

攻撃をすることは出来ずに剣を弾きながら馬を移動させまくる。

背後を取られないように動く捌く動く捌く。

気がついたら3人目が来てた。

2人でも精一杯なのに3人は無理！とか思ったけど、馬の体が大きくて3人同時には来れない。

ただ3人目が退路を邪魔するように入れ替わるので旨く逃げれない。

このまま捌いていても無理なので剣を受け止めて押し返して隙を作る作戦に出る。

捌きの中に受け止めて弾くという動作も入れる。

左の兵士が体を崩した瞬間を狙って馬で当たりながら囲みを突破する。

逃げるわけにも行かないので2人が来るのを待ち構えたところで「そこまで」という声が掛かる。

先ほど押した兵士は落馬は免れたようだ。

—魔王GJ!

魔王『ぐっじょぶ?』

—いい仕事したって意味だよ

美女さん「馬は守らなければなりません、囲まれそうな時などは相手を崩すのにもっと馬を当てて行かなければ行けませんよ」

—なるほど。

兵士隊長（少し離れた場所で）「忘れるな!相手を崩すのに馬を当てるのも有効だ!」

兵士達（少し離れた場所で）「はっ!」

美女さん「囲まれる前に相手の輪の外に出るよう心がけてください。

再度囲おうとするのに連携が乱れたりするのでチャンスです。外へ外へですよ」

兵士隊長（少し離れた場所で）「分かったか！外へ外へだ！囲まれるな！！！」

兵士達（少し離れた場所で）「はっ！」

……

美女さん「対峙した状態で回頭させる時は大回りではなく小回りで素早く行って下さい。相手より遅かったら体制を整える前に来ますよ」

兵士隊長（少し離れた場所で）「回頭は小さく素早くだ！相手に遅れるな！！！」

兵士達（少し離れた場所で）「はっ！」

美女さん「少し煩いですよ」

兵士隊長（少し離れた場所で）「静かにしろ！」

兵士達（少し離れた場所で）「はっ！」

だから何なの？このコント。

美女さん「とりあえず今日はここまでにして明日にしましょう。明日は朝からしますよ」

僕「マジですか？」

美女さん「まじです。明後日には戦になります。全然時間が足りません」

そうだった。

明後日以降は戦が始まるんだ。

美女さん「ですので明日はもっとびしびし行きますよ」

少しはなれた所で「よし！今までの内容を忘れぬよう訓練開始だ！」
と言う兵士隊長の言葉に兵士が「はい！」と答えて騎乗すると訓練を始めた。

何だこの士気の高さは。

晩御飯はなかなか豪勢だった。

翁が「姫がおられるから料理係も張り切ったのだろう。戦場では贅沢できないからせめて我が館にいる間だけでもな」と笑った。

夜は魔法の講義だが妖精少女も勉強したいと言い出した。

どうやら昨晚のピンチに何か思うところがあつたようで「お兄ちゃんを助ける」と言っていた(可愛い!)

魔力の制御に関しては後は実践しながら精度を上げていくだけなので僕の口を介して魔王が精霊に付いて講義する事になった。

どうやら精霊について知っておくことは無駄では無いらしい。

美女さんと爺は僕の講義を笑顔で眺めている。

意外な事に姫が興味津々に妖精少女と聞いていた。

僕(魔王) 『まあ「人族でも魔族でも波長の合う妖精が居たら使えるし、理論上は気に入られれば上位精霊とも契約を結べるから」な』

姫「魔力が無い私でも妖精と契約できたりするのでしょうか？」

僕(魔王) 『「契約に魔力の多さは関係ない。確かに魔力を多い方が好まれる傾向にはあるようだが、魔力が無くても問題は無い(な)です」』

姫「なるほど」

僕(魔王) 『「そもそも生きている限り魔力が0と言う事は(無い)ありません。」』

姫「そうなんですか？」

僕（魔王）『「魔力の源は精神^だ力です。これはどんな生き物でも持っている生そのものだ。無ければ死んでいる」』

頷く姫と首を傾げる妖精少女。

妖精少女にはもう少し分かりやすく言わないとダメだな。

「博識なんですね」という姫に笑って誤魔化し続ける。

僕（魔王）『「その精神力を魔力にどれくらい変換できるか、それを魔法と結びつけるかどうか魔法の有無に繋がる。」』

姫「変換と繋ぐ事ですか」

僕（魔王）『「こればかりは感覚だから教えようが無い。それで変換効率で魔力の大小が生まれる。中には魔力は甚大でも魔法が使えない（馬鹿者「うるさいよ！」）者や、魔力ではなく法力に変える者もいる（しな）ようです」』

姫「魔法と神法は一緒なんですか？」

僕（魔王）『「元は一緒^だです。感覚で覚えるか、神の声で目覚めるかでの違いに過ぎ（ない）ません。」』

姫「と言う事は両方使える事もあるんですか？」

僕（魔王）『過去には居たようだがものめずらしい程度^{だぞ}ですね』

姫「そうなんですか？便利そうですが」

僕（魔王）『「確かに使える術は増えるのは便利だですね。（しかし）でも精神力の総量はそうそう変わらない。両方使えると言う事は精神力を2つに分けると言う事になる。」』

姫「どういう事でしょう？」

精神力と言うのは魔力と法力の源ではある。

だからと言って消費したら精神力からいくらでも補充するというわけには行かない。

大きな器に水が一杯満たされている状態をイメージする。

器が人のキャパシティであり水が精神力である。

器の大きさは人によって小ささまざまあり、その大きさはそうそう変わらない。

もちろんその中に貯まる精神力も器の容量を越える事は無い。

その器の一部を区切った中身が魔力や法力で使える精神力となる。

その区切りの大きさが変換率とも最大魔力や法力とも呼ばれる。

区切る範囲の大きさはも人それぞれで基本的には変わらない。

その区切りに入った精神力は魔力か法力のどちらかに変換される。

魔力と法力は精神力の使い方が違うからである。

そして魔法などを使うと区切りの中の魔力は無くなっていき、枯渇すると魔法が使えなくなる。

いくら区切りの外に精神力があっても区切りの中に無ければ魔法は使えない状態になる。

区切りの中の失った魔力はどうやって回復するのか。

それは休息を取る事により区切りの外の精神力が溜まり、それが溢れて区切り内に流れ込む事によって回復していく。

だから休みを取らなかつたり体調を崩したり、精神的に弱っている時は回復しにくい。

では魔力と法力を同時に使った場合はどうなのか。

先ほど言ったとおり2つは使い方が違うので一緒に出来ない。

なのでそれぞれに区切る必要がある。

しかし器に空きがあろうが区切りは一つしか出来ない。

一つの区切りをさらに細かく2つに区切る事になる。

片方が枯渴してももう一方から分ける方法は無い。

だから両方覚えるのは単純に使える魔力を減らしてしまう事に繋がる。

しかも2つの大きさは選ぶ事が出来ないので、場合に拠っては得意な方が容量が小さくなってしまう事もある。

ただ魔力は何時、何処でどの様に目覚めるかは分からず、法力に至っては神の気持ち一つなのでどうしようもない。

—長いよ

魔王『仕方あるまい。事実そうなのだから』

このままでは妖精少女が寝てしまう！

一応、うんうんと頷いているけど本当に理解してるんだろうか？

妖精少女か飽きないように簡単に話さなければならぬ。

でも同時通訳だとあまり考えて話せない。辛いところだ。

精霊は火・水・土・風・光・闇の6つあり、精霊王、上級、中級、下級の精霊に分かれている。

それぞれの属性の他に光は正の感情、闇は負の感情を司ると言われている。

基本的に精霊はどこにでも居るが大抵は下級精霊である。

妖精少女に協力してくれているのもそうであろう。

ただ水の中などに火の精霊が存在できないように、基本的にはそれぞれ属性と対する場所では数が少ない。

逆に自分の属性の場所、水なら湖、火なら火山などの場所にはそれぞれの属性の妖精が多いだけではなく中級の妖精も居たりする。

上級や妖精王クラスになると妖精界と呼ばれる別の世界に居て自らこちらに出てくる事は無い。

各地にある特定の場所のみで交信することが可能だが、人ではなかなかたどり着けない場所だったりする。

妖精と契約をし力を借りるのには精神力が必要だが妖精少女のようにお願いして力を借りる場合には一切必要ない。

ただ力を借りるのは相手に気に入られないと無理だし、借りれる力も周りのものを利用するだけなのでそれほど多くの力は使えない。頑張っても妖精少女のように風の力で相手をよろめかす程度が精精である。

契約を結ぶのはまずは相手に認められる必要がある。

その上で契約を結ぶのだが、精神力に魔力や法力とは別の区切りが出来る。

これが精霊魔法を使う為の霊力になる。

霊力は同じ属性の精霊なら同じく切りで区切りで使う事になる。

この多きさも精神の器以上は大きくならないし、魔力や法力とは一緒に出来ない。

ただ魔力と法力と違い霊力は新たな契約で増える事がある。

だからと言って下級と数多く契約を結んでも増えるわけで無い。

例えば呼び出すのに霊力3が必要な下級精霊と契約を結ぶとする。その時に最大霊力10の容量が出来た。

霊力10のうち3で呼び出して残り7えを使って下級精霊で出来る

精霊魔法を使う事になる。

次に同じ属性の霊力4の下級精霊と契約を結んだとする。

その場合は最初に契約した際にできた最大霊力10で十分呼び出せるので霊力は増えない。

霊力ある10あるので4と3の2つの精霊を呼ぶ事も可能だ。

2つの精霊を呼ぶ事により

だが使える霊力は残りの3になるのでそれほど多くの精霊魔法は使えなくなる。

霊力が増える状況はどういう場合か。

それは最大魔力10の状態で霊力20必要な同じ属性の中級と契約を結んだ時である。

10では呼び出す事も出来ないので最大霊力が50に増える。

気をつけないといけないのが精神力の最大値以上の契約を結んでしまった場合である。

精神力の最大値が100の時に呼び出すのに霊力150が必要な上級精霊と契約を結んだばあい。

最大霊力は100までしか増えない。

その状態で霊力150の上級精霊を呼んでも霊力が0になるだけで呼ぶ事は出来ない。

気をつけないといけないのが説明しやすいように霊力を数値にしたが、実際は感覚でしか分からない。

なので自分の最大値は分からないし精霊を呼び出すのに必要な霊力もどれくらい分からない。

僕（魔王）『「精霊に気に入られるのはどうしたらいいのかは分らない」りません。』』

姫「そうなんですか？」

僕（魔王）『「精霊と契約を結んだ事も無いし、精霊は（我々）僕達とは思考が違うから（な）」』

妖精少女「でもお兄ちゃんの周りには多いよ？」

魔王『ほう』

僕「え？そうなの？」

うんと頷く妖精少女

―多いのか。なんでだろう？

姫「見えるんですか？」

僕（魔王）『「霊力を持つと精霊が見れるようになるらしい。霊力が低いと上のクラスの精霊は見えないが気配を感じるくらいは出来るだろう。」』

姫「では妖精少女は霊力を持っていて妖精が見えるんですか？」

僕（魔王）『「妖精族は昔から妖精と強い結びつきを持っている。」

住んでいる森にも多くの精霊が住んでおり幾人もの精霊使いが居るだろうから、小さな時から触れ合ってわずかでも霊力が付くのは理解できる。そういう種族性が精霊に好まれる要因の一つかもしれない」

「精霊が見えるなんて素敵ですね」と呟く姫。

妖精少女が「えへへ」と少し得意げにする。(可愛い！)

僕(魔王) 『「霊力が無くても日頃から意識をしていたらいつか精霊から語りかけてくるかも知れないな」』

姫「そうなんですか！頑張ってみます」

僕(魔王) 『「妖精少女が精鋭と契約を結ぶ方法だが」』

妖精少女「うん」

僕(魔王) 『「精霊の属性の強い場所で精霊に語りかければ後は精霊が判断してくれる(だろう)よ」』

姫「そんな事でいいのですか？魔方阵を描いたり必要なものがあったりとかは」

僕(魔王) 『「中級までは必要ありません。上級以上は場所だった^{だの}り儀式が必要ですけどね」』

なるほどと頷く姫と「今度やってみる」という妖精少女。

こちら辺に精霊が集まる場所はあるのだろうか？

とりあえずは今日はここまでと言う事にし、それぞれの部屋に戻った。

第12話 小砦攻防戦

翌朝から続々と兵が集まってる。

姫と爺は翁と現領主・領主息子と共に挨拶に来る領主に面会で大忙しだ。

僕は美女さんの指導の下、馬上剣術の訓練と言う名のしごきを受ける。

その後ろでは美女さんの言葉に過剰反応する兵士隊長と翁の兵士達。本当に意味が分からない。

僕に声援を送る妖精少女に注目が集まっている気がする。

昼は姫や翁達と新たに来た領主と昼食を行う。

挨拶をすると意外とすんなり受け入れられた。

どうやら姫を助けた事や騎士団の無力化などを考え事で評価されているらしい。

ちよつと照れる。

妖精少女に関しては翁が言ってた「妖精族を見ると幸運が訪れる」

という話を理解しているらしく「出会えて幸運です」と言っていた。どうやら他の領主にも早馬で話は通していたらしい。

それで兵士達は妖精少女を見に来ていたようで一安心。

夕方には館を立つ為に昼は訓練を行わず集まった領主や各兵士隊長達と作戦を話し合う。

僕と美女さんは姫と一緒に本隊にと言われたが美女さんの一言で翁の兵を100名程預かり遊撃部隊となった。

妖精少女は姫の移動用馬車に乗る事になった。

姫は移動の際は馬車を使うが戦場では馬に乗り兵士を鼓舞するそう

だ。

目標の小砦攻略の作戦を話し合い解散となる。

――

日入（にちにゆう、18時頃）翁の館を出発する。

集まった兵は約1700名。

間に合わなかった領主達は途中で合流する事になっており、もう400程増えるらしい。

後はどれくらい静観を決めている領主を取り込めるかといった所である。

現在集まっている者の殆どが騎乗している為に進軍スピードはなかなか速い。

通過する近隣の領主にドンドンと通過の挨拶と参軍の呼びかけを行う。

内容は

「国の乱れを憂いて姫を旗頭に兵を挙げた」

「近くを通過するのに挨拶しないのは失礼だと思い、急だが挨拶だけでもさせて頂く」

「我々が勝利した暁に国を腐らせる逆賊を一族も加担したものの厳罰に処し国を正しい方向に導く所存」

「もし国を思う気持ちがあるならば一緒に兵を率いて戦わないだろ

うか？」

「勝てば今回の戦の功績に見合った以上のものを与えるつもりである」

「まずは小砦攻略を考えているが、ここが一番の正念場になると思われる」

「ただ王子も別方向から兵を率いて小砦に合流する事になっているので、小砦を落とせば後は問題なく勝てるだろう」

「王子も王女も今回の国の後輩に本当に心を痛めており、勝利した暁には国賊の一族とそれに加担したものの財産を全て没収し国の復興に当てる事を決定している」

「もちろん国難に何もしない者や我が身可愛さで代わりに勝ち馬に乗るような節操の無いものも国の荒廃に加担したとして資産の一部を差し出してもらおうし、よりよい国作りの為に立場も改めさせてもらおう」

「もし我々の勝利が聞こえて来たならば多くは報いる事は出来ないと思うが駆けつけてください」

簡単に言うと

「とりあえず今から戦争しに行くけど一緒にどう？今から参加してくれるなら勝った時に頑張り次第で褒章考えるけど。敵対したら全部財産没収の上にお家断絶、傍観したままでも財産の一部と利上げと身分を下げたりするけどね。ちなみに一番しんどいのは小砦だから。そこで王子たちも来るから勝利は確実だけど、これ以降に来た奴は小砦攻略に参加した者より確実に功績は低いね。」

と言う事だ。

そんな「敵対したら」とか「傍観でも」とか過激な発言してもいいのかな？とも思ったけど魔王が『どうせ撒けたら全て終わりだ。それなら過激な事を行っても周りの奴に発破をかけて引き込むしか

あるまい』と言うので納得した。

『敵に情けをかけることも無い。勝てば一族郎党皆殺しは基本だ』
と言うのはどうかと思うけど、中途半端にして後々反乱を起こされ
ても困るので仕方ないらしい。

夜に野営を行う。

僕为天幕は姫为天幕の横にあるもので爺と一緒に使う。

美女さんと妖精少女は姫と一緒に为天幕で休む。

さすがに大所帯だと見張りをする兵がいて夜も休めるようだ。
ただ戦場ではあるので夜襲などには気をつけないといけない。

日が昇る頃には起きて移動の準備を行う。
すぐに準備を終了、移動を開始した。

？時（ほじ、16時頃）に砦まで1刻ほどの距離に付く。
兵士の数は3000まで膨れ上がった。爺と翁の脅しの効果が出て
いる。

兵士が隊列を組む。

本陣は姫、爺、翁 約1500

右翼は現領主 約700

左翼は領主息子、兵士隊長 約700

遊撃は僕と美女さん 約100

小砦には敵領主軍はあまり集まっていないようだ。

居ても元居た小砦兵と敵領主兵を合わせて500居るかどうかのようだ。

まだ騎士団は到着していない。

原因はわからないが居ないなら小砦を攻めやすくなるので、それはそれでいいかと気持ちを切り替える、

戦が始まった。

右翼と左翼で砦を半方位しながら近づいて弓を射掛けては離れてを交互に行う。

嫌がらせでしかない。

左右に敵が寄ったときに本陣の部隊の一部が城に取り付こうと近寄るそぶりを行う。

相手は援軍が来るまでは持ちこたえようと必死で弓を射掛けてくるが盾に阻まれてそれほどの損害は受けない。

小砦への敵領主軍の援軍は実は来ていた。

ただ取り囲んでいるこちらの軍に気がつき行動が取れなくなってい

た。

そこにこちらから兵と使者を送る。

内容は「よく参軍してくれた！さあ一緒に小砦を落とそう！！」というものである。

敵として来たのを知っていながら。である。

そうしてここに来るまでに他の領主に伝えたのと同じ内容を伝え「一緒に勝利の栄光を！」と押し切る。

「自分は国王軍側だ！」と言えば自分より数の多い本陣に襲われ全てを失いという恐怖から否定できないまま反国王軍側へと祭り上げられる。

無理やり反国王軍側に仕立て上げられたにも関わらず「今、小砦を攻撃している所ですが、来たばかりで兵もお疲れのようですので今回は後方で休まれた方がよろしいのでは？」と言われる。

本来なら参加したくない戦になった場合には相手の言い分に頷いて兵力を温存し、時機を見て領地に帰ればいい。

だが今回に関しては姫だけでこれだけの兵が居るのに後に王子の兵も来る。

国王軍が勝てばいいがもし負ければ傍観していたらまずい。

もしもの時は「ここでやら無いと功績は殆ど認められない」という気持ちと、適当に戦闘に参加して体裁だけ保って後は状況を見て勝ち馬に乗ろう、という打算が働いて「このまま参戦する」と言っていた。

そうして国王軍側として着たのにも関わらず丸め込まれ反国王軍になった領主達は次々と左翼と右翼に割り振られていった。

反国王軍は丸め込んだ領主達を信用はしていなかった。

わざと右翼も左翼も弓を射掛けて逃げると言う消極的な行動を取っていた。

丸め込まれた領主軍はここに組み込まれ一緒に「これ位なら自分の兵はさほど被害が出ないか」と消極的な行動を取る。

どんどん取り込まれる領主達が左翼と右翼に組み込まれるたびに、元々居た反国王軍の兵士達が気が付かれない様に少しずつ右翼と左翼から抜けて本陣に戻る。

半分以上が元国王軍派の領主の軍になり、国王軍派の援軍も途絶えだした頃に右翼と左翼がいつもより深めに小砦に近づき弓を掃射する。

目を疑ったのは小砦の兵士である。

自分達の援軍として着てくれるという約束だった領主達が裏切り反国王派に付いたばかりか、先陣を切って攻撃して来るのである。

小砦の指揮官は怒りに顔をゆがめて裏切り者の領主の旗を狙えと叫んだ。

元国王軍派の領主達も急に小砦からの猛攻に驚き必死で応戦する。そうなるともう国王派、反国王派関係無く自分を攻撃するものは敵である。

特に自分達を狙い攻撃して来るのである。

信頼関係はすれ違いにより敵対が決まった。

こうなればもう相手を倒すしかない。

「壁に取り付け！」という指揮官の声と周りの兵士の動きに合わせて一緒に壁に取り付くべく前進した。

僕達別働隊は戦場を離れ本陣後方に居た。

魔王が騎士団が不在がどうしても解せないというのだ。

その事を美女さんに伝えたところ「もし隠れているなら本陣への急襲しかないでしょう」と言うので大回りをして本陣後方に配置し隠れる事にした。

今は美女さんが5騎程連れて偵察に行っていた。

美女さんが戻ってきた。

赤白合わせて200名ほどの兵士がいるらしい。

そのうち50名ほどが陽動の為か離れて移動したのでそれを狙う事になった。

50名を背後から100名範囲を狭める。

魔王の『これ以上は確実に悟られる』の一言に他の兵に合図を送る。すると50名の隠れる場所の前を斥候を装って美女さんと数名の兵士が通りかかるふりをする。

隠れながらどうするかを合図で話し合う騎士達。

「やり過ぎそう」という結論に出たあたりで「ん？」と美女さん扮する斥候が何かに気がついた振りをする。

その瞬間に飛び出そうとする騎士達の背後から僕達が一斉に飛び出

し騎士達を取り押さえる。
出来るだけ殺すなどと言っていたが、何とか全員無事に取り押さえたようだ。

捕まえた兵士は45名
全員を武装解除して縛って馬に乘せ連れて行く。
向かう先は残りの約150名の騎士の場所。

少しはなれた見渡しのいい場所で縛った騎士を座らせ兵士で周りを
囲んで見張る。

僕と美女さんは数名の騎士とともに45人の中で一番偉いだろう騎士
を縛ったままつれて150人の騎士の下へ向かった。

僕達が近づくと約150名の騎士が殺気立つ。
十分な距離を取って話しかける。

魔王『交渉は堂々と威厳を持って、そして相手には主導権を渡さず
自分に有利に進めるのだ』

—そんな難しいことはできないよ。

魔王がそんな事をいうので「こういう時にどういえばいいのか分か

らなくなってしまった」
それで出た一言が

僕「こんにちは」

返事は返って来ない。

僕「責任者の方と話したいのですが」

そういうと一人の人物が名乗り出た。
赤の騎士団中隊長と言うらしい。

僕「お話を聞いてもらえますか？」

赤の騎士団中隊長「人質を取ってか？降伏なら受け入れない」

僕「人質は話を聞いてもら手段なだけで降伏を勧めに来たわけじゃ
ないわけもないか」

赤の騎士団中隊長「どういうことだ？」

僕「とりあえず他の44名も全員生きてます。」

赤の騎士団中隊長「全員無事だど？」

僕「少しくらい怪我をしている人もいるので無事ではないですが、元気だと思えます。お話を聞いてもらった後は全員解放します。」

赤の騎士団中隊長「何が目的だ」

僕「話を聞いてもらうことです。僕の話を最後まで」

赤の騎士団中隊長は話してみろと促す。

僕「赤と白の騎士団には戦に参戦せず傍観して欲しいんです」

赤の騎士団中隊長「何を馬鹿な事を」

僕の言葉を一笑する赤の騎士団中隊長。

その赤の騎士団中隊長に僕は「騎士団長が投獄されているのに笑ってられるんですね」と言うと赤の騎士団中隊長が殺気を放つ。

僕「助けたくは無いですか？騎士団に正式な団長を迎えたくないですか？」

赤の騎士団中隊長「…」

僕「僕達が国王軍を倒せば騎士団長は開放の上で騎士団長として復帰してもらうし、恥知らずの黒の騎士団長一味も処刑しますよ？」

赤の騎士団中隊長「…どうやって勝つと言うんだ」

僕「そのために赤と白の両騎士団には戦闘に参加せずに傍観して欲しいのです。」

赤の騎士団中隊長「だが団長の身の安全をちらつかされて戦闘を強制されるとどうしようもない」

それに関しては裏切ったらまだしも傍観では処刑できないという根拠を説明をする。

赤の騎士団中隊長「…たしかに理屈は通っている。だがそれでも団長の命をかけることは出来ない！」

僕「どちらにしてもじりじりと戦力を削られ、脅威で無くなった時点で処刑されてしまいます」

赤の騎士団中隊長「っ！！」

周りの騎士団も僕の言葉に悔しそうに唇をかむ。
どうやらみんな薄々気が付いてはいた様だ。

座して団長の処刑を待つか、打開できるかもしれない案にのるか。

僕「姫も王子も赤と白の騎士団とは争いたくないと考えてます」

赤の騎士団中隊長「……」

僕「それは手ごわいと言うのもありますが、両騎士団が国にとって必要だからです。こんな無駄な戦いで消耗していい存在ではありません」

赤の騎士団中隊長「姫と王子の気持ちは心から光栄に思う」

僕「ですのでこの案に乗ってもらえませんか？」

赤の騎士団中隊長は僕を見つめ「それで交渉のつもりか？」と聞いてきた。

良く分からない僕は首をかしげ「お願いなんですけど」と言うと赤の騎士団中隊長が少し笑った。

赤の騎士団中隊長「私では判断が付かない」

僕「ではこの話を上に上げてください。あ、でも黒の騎士団団長や領主の手勢にはやめてくださいね」

赤の騎士団中隊長「分かった、赤の騎士団副団長に話してみよう」

僕「白の騎士団にも伝えて欲しいのですが」

赤の騎士団中隊長「赤の騎士団副団長が白の騎士団副団長にも話すだろう」

「大丈夫だ」と頷く赤の騎士団中隊長。

僕「そういえば白の騎士団の先発隊は来て無いんだろう？」

赤の騎士団中隊長「王子側の軍隊の足止めに行かされている」

まさか僕の独り言に答えが返ってくるとは思わなかった。
もしかしたら赤の騎士団中隊長は僕の意見に傾いてくれているのか
もしれない。

赤の騎士団中隊長「貴殿の意見は聞いた。赤の騎士団副団長にも必
ず伝えよう。」

僕「お願いします」

赤の騎士団中隊長「だが何もせず戻ると疑われかねない。それは団
長の命に関わる可能性があるので出来ない」

僕「うーん…ではここで戦闘しましょう」

赤の騎士団中隊長「何？」

僕「正確には僕達とであって戦闘になって痛みわけしたと言う事で」

赤の騎士団中隊長「……」

僕「向こうに小さな怪我をした騎士も居るので丁度良いですね」

赤の騎士団中隊長「捕虜を解放すると？」

僕「話は聞いて貰いましたからね」

赤の騎士団中隊長「捕虜を解放した後の貴殿らに襲い掛かる可能性があるぞ？」

僕「それなら大丈夫だと信じてます」

赤の騎士団中隊長「これくらいの数是对処できる兵士達だと？」

僕「いえ。赤の騎士団中隊長をです」

彼は騎士団長を敬愛している。

その騎士団長を守る為、助ける為に僕は害する必要は無いと感じている。

赤の騎士団中隊長「――っははは！まいった！」

僕（?????）

魔王『男にも効果ありか』

――なにが？

赤の騎士団中隊長「分かった！必ず伝える。捕虜の変換も感謝する」

そういうと騎士団たちは剣を収めた。

僕達は捕まえていた騎士団達を解放し武器を返す。

赤の騎士団中隊長が去り際に「貴殿の名前は？」と聞いてきたので「若と言います」と伝えた。

赤の騎士団中隊長は頷くと騎士達を連れて小砦とは別の方へ去っていった。

赤の騎士団を見送った僕に美女さんが「お疲れ様です」と微笑む。

僕「あんなので良かったのかな？」

美女さん「大丈夫です」

魔王『交渉としては最低だったが、結果としては上々だ』

2人の言葉にほっと息をつく。

あゝ怖かった。

いつ切られるかと心臓ときどきしてたよ。

ふと戦場から響く声が大きくなったので見てみると壁に取り付いた兵がはしごをいくつも掛け、小砦の壁を乗り越えているのが見えた。

魔王『決まったな』

美女さん「塀を越えればもう決まったようなものです。時間の問題です」

僕「結局、小砦攻略は参加しなかったね」

美女さん「でもそれに匹敵するくらいの功績は挙げたと思いますよ」

僕「だと良いんですけどね」

美女さん「さあ戻って姫に報告しましょう。きっと心配で倒れそうになってますよ」

確かに自分の命を掛けた博打の結果に関しては、どうなったか心配で仕方ないと思う。

美女さんと魔王が『「勘違いしてる気がする」』という。

僕「そうだね！早く戻らないと失敗と勘違いするかもしれない！」

僕達は本陣へと急いだ。

第13話 願望

小砦は陥落した。

小砦の指揮官と生き残った領主達は投降。

どうやら小砦には450名の兵が居たらしいが生き残ったのは260名程だった。

犠牲者は殆ど領主の兵で、反国王軍が塀を乗り越えて来るのを止める事が出来なくなった時点で指揮系統が壊滅し混乱し各自が独自で動いた結果、同士討ちもあったようだ。

それに対して反国王軍は戦闘が終わった時点で動ける兵は3200。戦闘中に来た元国王軍の領主達を取り込んだータルで3800まで膨らんだ。

犠牲の約600の内の7割が元国王軍領主の兵であった。

捕まえた領主は今度の対応として「国賊」として財産、領地、爵位は没収と伝えと膝を折って許しを乞うた。
それを無視して牢屋へ送る。

小砦の指揮官は昔から小砦を守っている人物である。

本人は「生きて虜囚の―」とか言ってたけど、よくある「死ぬほうが不忠義だ!」というので自害は留まった。

ただ今の状況で小砦の指揮官に復帰するのは混乱を招くとして、指揮を副官に任せ自室に自主軟禁となった。

僕「その行動も自己満足だと思っただけだな」

美女さん「そういう儀式をしないと動けない人もいるんです」

面倒な人は多い。

戦争は奇麗事だけじゃない。

小砦にいた領主の一族を捕らえに領地に兵を派兵する。

その兵は元国王軍領主の兵だ。

元々同じ国王軍だったのだから家族ぐるみの付き合いがある場合もあっただろう。

「これは踏絵じゃよ」と翁はいう。

国王軍に寝返るか反国王軍のままにいるかの踏み絵だ。

領地に向かう領主と兵に姫直々に言葉を与える。

姫「略奪や暴行は一切してはなりません。齒向かう者は仕方ありませんが領主の一族は国賊とはいえ丁重に扱ってください。わが部隊からも兵は同行します。略奪暴行があった場合はたとえ兵のしでかした事でも領主の罪になります」

翁「暴行略奪を行ったものは死罪、その者を抱える領主は財産と領地の一部を没収。領主が行った場合は財産、領地、爵位を没収の上で一族も同罪。国賊の一門を逃がした場合は国王軍に組したとして国賊と同じ扱い。匿った場合も同じく国賊と同じ扱い。」

領主達が顔を青くして聞く。

翁「逃亡した国賊の一味を捕まえた者には誰でも褒章を取らせる。ただし過剰な暴行略奪を行っていたり、不正があった場合は死罪。これに関しては国中に触れを出す」

元国王軍の領主達は各領地へ行き今回の小砦に関わった9割近い国王軍の一族を捕らえてきた。

接収した領地には反国王軍の兵士が強盗などが入らないように警備に立った。

集めた国王軍の領主の一族は成人男性と子供の3つに分けられ、大人の男は砦の牢屋に入れ、大人の女と乳幼児、子供はそれぞれ後方の別の館に軟禁されて元国王軍派の領主の兵士に守られる事となった。

領主の一族を拘留するのが一通り終わった頃には翌日の昼になっていた。

一睡も出来ず顔を真っ青にしながら報告を聞いていた。

「少し休みます」の声とともにみんなが下がる。

だが休めるわけが無い。

今はそれなりの対応、軟禁は仕方ないとしても人として最低限が守られていたとしても、彼ら彼女らに待っているのは戦後の断頭台である。

幼い子供は助けられるかもしれないが、それでも親兄弟が殺されるというのは幼心にどれだけの傷を与えるか分からない。

せめてその日まで酷い目にあわないうようにと思い「略奪暴行を絶対させないで下さい」と翁に頼んだ結果がああのような厳しい厳罰だ。

だが逆に言えばあそこまでしないとそういう事が行われる可能性が高いという事だ。

しなくてはいけない事だとしても罪の気持ちに押し潰されそうになる。

椅子から立ち上がることも出来ずに俯いていた視線の端に足が見えて顔を上げた。

一睡も出来なかっただろう事は顔色を見たらわかる。

報告を聞いた後に「休みます」と呟いた姫の顔は見えなかったが国王派の領主の一族の今後の事で胸が張り裂ける思いをしているのだろう。

敵の一族のみまで案じて「略奪暴行禁止の徹底」を姫は熱望していた。

これは何とか守られたようだが、処刑は免れない。

今も立ち上がることも出来ず項垂れている姫が心配で近づいて行った。

姫が顔を上げる。

いつもは白い肌も今は血の気が失せた様に真っ白だ。

姫「大丈夫ですっ」

僕が声を掛ける前に姫が口に出す。

僕「全然、大丈夫そうに見えませんか」

姫「分かってます。仕方ない事なんです。大丈夫です」

自分に言い聞かせるようににいう姫。

座る椅子の手すりを硬く握り締める姫のに手を添える。

僕「姫はどうしたいですか？」

姫「私がどうしたいかじゃありません。しなくてはいけない事で――」

僕「しなくてはいけないのは分かりました。姫はどうしたいですか？」

姫の目が泳ぐ

僕「ここには僕の他には誰も居ません。心の内を吐き出しても誰も文句は言いませんし言わせません。」

姫「――っ」

僕は姫の言葉を待つ。

姫「――たい――す」

唇が震える。

姫「助けたいです」

その一言を吐き出すと堰を切ったように言葉が溢れる。

姫「みんなを助けたいです。殺したくない死んで欲しくない。小さな子に家族全員が殺される思いもさせたくない。一緒に暮らせるようにしてあげたい。でもどうしてもできない―」

僕「やりましょう」

姫が止まる。

僕「出来る限り助かるよう一緒に考えましょう」

姫「え―」

僕「国王軍に加担した者は基本的に助ける事はできません」

呆然と聞く姫

僕「ですので国王軍に参加した人を助命できる方法を一緒に考えましょう」

姫「……」

僕「もしかしたら状況的に仕方なく国王軍に付いた人で、復興に必要な人材もいるかもしれません」

姫「そう、ですね」

僕「状況を見て助けましょう」

姫の目に色が戻る。

僕「でも状況なんて曖昧ですね」

姫「え、ええ」

僕「基準も曖昧で線引きが難しい」

探るように僕を見る姫

僕「なのでいっそ、全員助けましょう」

姫「は？」

何を言ってるのか分からないと止まる。

僕「国王派への加担は領地と財産と爵位の没収です」

姫「そうです」

僕「ではそこまでして命を取る必要はありません」

姫「でも状況がそれを許さないのですー」

僕「そうですよね。なので処刑しなければならない人だけ処刑します。」

どういふことか分からない姫に説明する。

僕「まず全員、領地と財産と爵位の没収を行います。これは決定です。」

姫「はい」

僕「その後、彼ら一族には最低限の家と畑を元領地のどこかに用意し一領民として今後は生活してもらいます。」

姫「……」

僕「新しい領主は今回の戦で貢献した人の中から信頼の置ける人をつけられたいと思います。そうすれば褒章の問題も一挙解決しますしね」

そんな事でいいのかな？と考える姫。

僕「領民から搾取や圧政を行っていた元領主は、元領主と…一族の成人男性は処刑をするしか無いでしょう他の女性と成人前の男子はその場での生活は危険なので離れた他の領主の土地で一領民として生活してもらう事になります。」

姫「成人男子もだめですか」

僕「本来なら子供以外全員と言われるのです。仕方ありません」

姫「―ッ」

僕「圧政を敷くことなく領民を守っていた元領主は、自分の元土地で数年間の開墾を行い、その後に何かしら理由をつけて領主に復帰してもらう。処刑も無し」

姫「!」

僕「ただし復帰の事は言わない。領地は代理で誰かが治める…と後々揉めるかな？」

姫「―国王の直轄地という扱いなら問題ないと思います」

僕「じゃあそれでいきましょう。いい領主だったかは領民が判断してくれます。これで殆ど処刑せずに済むかも知れません」

そういうと姫は大きく見開いた目から涙を流した。
力が抜けて縋って来る姫を受け止めながら言う。

僕「まだです。まだ現実ではありません。これから翁を納得させないと。それが出来ないと実現しません。一緒に頑張って説得しましょう」

姫は何度も頷きながらも涙を流し続ける。

魔王『黙って聞いていたが、面白い事を考えるな』

—どう思う？

魔王『後々の事を考えると一族郎党皆殺しが良いと思う』

—それは姫には出来ない

魔王『だろぅな』

—無理だと思う？

魔王『するんだろぅ？』

—そうだね

少ししたら姫が寝てしまった。

疲労に緊張感が切れたせいだと思うけど、困った。

と思っていたらドアが開いて美女さんがと爺と翁が入ってきた。

僕が寝ている姫を抱えているのを見て爺が「よかった」と言う。

姫を部屋に運んで寝かせる。

心配そうに姫を覗き込んでいるの妖精少女の頭を「大丈夫だよ」と撫でる。

僕が部屋を出た後に美女さんが寝やすいように衣服を緩めて寝やすいようにしてくれる手はずになっている。

「姫を見てあげていてね」と妖精少女に言う。僕は部屋を後にした。

部屋を移して先ほど姫と話していた内容を話す。

大体は聞こえていたようで翁は険しい顔をした。

―説得は難航しそうだな

翁「わかった」

僕「はや!」

翁「姫のたつての要望だしの。出来ない事でも無いしの」

「少し詰めて考えてみよう。」と翁は言う。と部屋を出て行った。

どうやら翁の説得はうまく行ったらしい。

後は王子だが、王子なら賛同してくれる気がする。
確証は無いけど。

とりあえず僕も寝てないので一眠りしようと部屋へと向かった。

夕方に国王軍の領主の兵、約2500が現れる。
小砦を見下ろす小高い丘の上で陣を敷いていた。

小砦を攻めるには兵力が足りないが何もせずに引き返すのも癪で、
一体どうしようといった所か。

長い間そうしていた国王軍の領主はとりあえず一戦交えて撤退しよ
うという判断になったのか兵を2つに分け城を包囲しようとした。

だが決断に時間を掛けすぎた。

僕と美女さんは100騎程連れて小砦を気が付かれない様に出てい
た。

離れた場所で国王軍派の領主が2つに兵を分けるのを見て小さな集

団の方の背後に回りこむ。

国王軍が小砦を両方から包囲を狭めて行くのを見ながら時期を計る。

小砦からの弓が届く範囲に近づく直前に、流れ矢に当たるのを嫌った領主と取り巻きが動きを止め、兵の隊列から分かれる。

兵士が盾で矢を受けながらじいじりと小砦に近づき別のものが矢を射返す。

領主達と兵が少しは離れた所で僕達は声を出さずに飛び出した。

無言で馬を駆る。

領主達は幾つかに集まっているようで、その一番外側の集団に僕は50名ほど引いて突っ込む。

美女さんも反対側の端の集団に50人で襲い掛かって居る所だろう。

相手は20ほどの集団でこちらに気付いておらず、気が付いた時には肉薄していた。

すれ違いざまに兵士3人ほどを切り倒し領主らしい人物を1人馬から叩き落す。

振り返ると20名は制圧されていた。

生き残りは5人。

素早く周りを見渡し、10人の兵に死んだ領主の遺体を一人の兵に馬に乗せるようにいい、生き残り5人を武装解除と捕縛して連れ去るように指示をし、残りの兵を伴って少しは離れた場所の領主の集団に襲い掛かった。

恐慌に陥った一人の領主の撤退指示により小砦を包囲していた半分の兵が連鎖的に撤退しだす。

その撤退の音を聞いた反対側の領主達も体制を崩したところに小砦から飛び出した2000の兵が襲い掛かった。

すでに崩れていた国王軍側の領主軍は支えきれずに数を半数以下にしなから撤退していった。

討ち取った領主とその一門の人間は15名。20名近い者達を捕らえた。

捕らえられた者たちは身代金を払うので釈放しろと騒ぎ立てた。

しかし元々国王軍に組した領主は戦後に財産と土地と爵位は没収だと通達しているという話をする、顔を顔を真っ青にして心を入れ替えて反国王軍に下ると言い出した。

その嘆願に翁は「状況も読めない愚か者は必要ない」と縛られたままの領主達を牢屋へ入れるように命じた。

今回捕まえたり討ち取った領主達は国王軍派の支配地の領主が多く一族を抑える事は出来ていないが、領主も兵も居なくなりよっぽどのが無い限りもう出ては来ないだろう。

国王派領主軍を圧倒的に撃退した事は瞬く間に伝わった。

国王派で近くまで来ていたが心変わりをしてこちらに付く領主も出てきて、数は5000程に膨れ上がった。

斥候に出ていた兵から続々と「大砦に領主軍が集まっている」という情報がは入る。

大砦のもともとの人数は焼く1000。

集まった国王軍派の領主たちは約6000。

7000近い兵が集まっているようだ。

日が落ち辺りが暗くなる頃に赤と白の騎士団が大砦に入ったと知らせが届いた。

その内の一人の斥候が周りに気が付かれない様に翁に言葉を伝え何かを手渡す。

部屋に姫と爺と翁と領主と僕と美女さんが残る。

「姫宛に預かったようです」と手紙を差し出した。

聞けば斥候途中に騎士団の斥候と出会い戦闘になって取り押さえられたい。

どこの所属かと聞かれ黙っていると、その騎士団は姫に必ず渡して欲しいと手紙を渡し開放してくれた。

姫が封を開けるとさらに封筒が入っていた。

短く「若殿へ。人定前^{にんじょう}（21時頃）あの場所から待つ」と描かれていた。

相手は赤の騎士団中隊長で「あの場所」と言うのは話をした場所だと思われる。

みんなに説明する。

「一人で行くのは危険だ」と言う意見が出たが相手も少数だろうし、他の領主に悟られても面倒なのでからこちらも少数で行くと伝えた。一番「危険です」と言っていたのは姫だったが、美女さんと爺が付き添うという話で納得してもらった。

黄昏（こうしん、22時頃）美女さんと爺と翁の兵士隊長のほか3名ほどの兵を連れ立って斥候の為という建前で小砦を出た。

第13話 願望（後書き）

誤字修正

450名の塀が居たらしいが ↓ 450名の兵が居たらしいが

反横行軍 ↓ 反国王軍

取り込みトータルで ↓ 取り込みトータルで

皇帝の直轄地 ↓ 国王の直轄地

すでに崩れていた ↓ すでに崩れていた

領主軍派 ↓ 領主軍は

第14話 憧れ

約束の時間より早かったが、約束の場所に着くとすぐに一人の人物が近づいてきた。

赤の騎士団中隊長である。

彼は僕達を見ると一言「こちらへ」と言い、歩き出した。

少し離れた場所に案内され、そこで数人の人物と落ち合う。

赤の騎士団中隊長が「連れてまいりました」というと相手は頷く。

こちらを見るとまずは爺に挨拶して僕の方へ向くと「赤の騎士団副団長です」と挨拶した。

思ったより若く30代といったで赤の騎士団中隊長の方が年上かもしれないというのに驚いた。

僕も名を名乗る。

赤の騎士団副団長「話は伺いました。」

魔王『なかなかの手馴れだな。』

赤の騎士団副団長「本来ならこの場に白の騎士団副団長も来る予定だったのですが、さすがに両騎士団副団長が大砦を出るのは不自然であつた為に断念しました。」

代わりに白の騎士団からは連隊長2人がきていた。

魔王が『今回もどの様に話を転がして楽しませてくれるか傍観させてもらう』とうれしそうに言う。人事だと思って！

赤の騎士団副団長「貴方の話は突飛無く、とても正気は思えない。」

僕「—そうでしょうか？」

赤の騎士団副団長「敵を前に手を拱こまねいているのは騎士団の規律に反する」

白の騎士団連隊長をみやる。

どうやら話は赤の騎士団副団長が担当するらしい。

その赤の騎士団副団長の目をしっかり見ながら告げる。

僕「敵と言うのは誰のことでしょうか？」

赤の騎士団副団長「もちろん、貴方達反逆軍です」

僕達は反逆軍らしい。

僕「僕達は反逆軍ではないですよ？」

赤の騎士団副団長「では何だと？」

僕「国と民を憂いて奸臣を討つべく立ち上がった、いわば王国軍です
ね。」

相手が国王の地位、突き詰めればその周りの甘い汁を好き放題吸っている者達の地位を守る為の国王軍だとしたら、僕達は国や民の将来を思い立ち上がった王国軍である。

僕「まあただの言い方の違いでしかないのもいいですけどね。それほどまでに僕の意見は実現不可能ですか？」

赤の騎士団副団長「可能不可能の話ではなく、騎士団の規律に反する言っている」

僕「規律とは？敵前逃亡や戦闘放棄がですか？」

赤の騎士団副団長「そうですね」

僕「敵とはなんでしょう？」

赤の騎士団副団長「……」

僕「いえ、この話はいいでしょう。時間ありません」

本当の敵は団長を捕らえている王国軍側という話をしてても意味が無い。

そんな事はとうに理解しているはずだ。

それでも彼らはそれでも団長を案じ今の状況に身を置いているのだ。

僕「このままでは遠く無い未来に団長が処刑される可能性は？」

赤の騎士団副団長「∴そのような事が無いよう行動しています」

僕「どのように？」

赤の騎士団副団長「戦で功績を立て、我らの存在意義を示し続ける事です」

僕「その結果、騎士団は疲弊していき脅威と看做みなされなくなり、結果団長は処刑される事になると」

僕の言葉に赤の騎士団副団長が口を閉ざす。

僕「どうせ黒の騎士団長辺りから無理難題を押し付けて貴方方の戦力をそごうとしているんではありませんか？」

赤の騎士団副団長は微動だにしない為に何を考えているのか分からない。

僕「もし両騎士団が僕の案に乗ってくれたら、騎士団長を取り戻せるかもしれません。」

赤の騎士団副団長が「案に乗った前提での作戦」に興味をしめす。

僕「まず聞きたいのは幽閉されている場所はわかりますか？」

赤の騎士団副団長「王宮の一の郭の館に軟禁されています。」

僕「城の地下の牢だったり高い塔の上ではないんですね？」

赤の騎士団副団長「兵は多く配備され我々は一切近寄る事は出来ないが、さすがに我々を刺激しないように配慮はされています」

僕「そんなに多くの兵を配備されているのですか？」

赤の騎士団副団長「せいぜい50といった所で騎士団長は一の郭内だったらある程度の外出も許されているが、その場合は護衛と称した見張りが大人数付いて回るようですね」

僕「もし騎士団団長を助け出すとなると、相手は見張りの50人程度だけですか？」

赤の騎士団副団長「館の周りは50名しか居なくても何かあれば周りにから倍以上の数が集まってくるので、場外に逃げるまでに取り囲まれてしまうでしょう。」

僕「一の郭に騎士団は上がれますか？」

赤の騎士団副団長「騎士団本部は二の郭にあり、日中は門が開いているので騎士団なら通れますが必要なければ行く事は無いですね。」

僕「すでに騎士団長が処刑されている可能性は？」

赤の騎士団副団長「月に何度か、騎士団長の家の者が騎士団長の状

況を報告してくれてます。その者は騎士団長の家に古くから仕える者なので信用できる人物です。」

僕「ならよかった」

もし近寄れない場所だったり騎士団長が衰弱していると難しかったが何とかなりそうだ。

僕は騎士団長救出作戦の方法を伝える。

僕「大砦は王宮から物資を運んでいると思います。多くの国王軍派の領主が集まったので、これは当たり前の事です」

頷く赤の騎士団副団長。

僕「しかも黒の騎士団も出てくるとなると大砦の蓄えではすぐに備蓄がなくなってしまうでしょう。」

赤の騎士団副団長「それが？兵糧攻めでもするのですか？そちらにもそれほどの蓄えはあるとは思えません」

僕「ああ、大砦は両騎士団が手を結んでくれれば半日で落とせるので問題ありません」

赤の騎士団副団長「何ですって？いくら我らが手を結んで参加しなくても黒の騎士団4000と国王派領主軍で1万近い数が居るんですよ?。」

僕「その話は後にして順番に話しましょう。まずは団長救出の話です。」

赤の騎士団副団長「……」

僕「補給物資は大切です。奪われる事も考慮して騎士団が受け持っているのでは？」

赤の騎士団副団長「そうですね。」

僕「それを使います」

赤の騎士団副団長「物資を送るなど？無理です」

僕「いえ、違います」

赤の騎士団副団長「では何を」

僕「王宮に戻る補給部隊に紛れて両騎士団の騎士を王宮にひそかに戻すのです。」

赤の騎士団副団長「どうやって？」

僕「戦力を殺ぐ為に、きっと両騎士団は不利な状況で前線へと送られます。」

赤の騎士団副団長「……」

棒「その戦いで一部の人は死んでもらいます」

赤の騎士団副団長「！」

僕「そうして死んだ人たちは隠れて潜み、補給部隊が帰るところに合流して王宮に隠れます。王宮にも騎士団の詰め所などで隠れる場所がありますよね？」

赤の騎士団副団長「え、ええ」

僕「数は100名程度、できれば200名居れば大丈夫だと思います。数日隠れる場所がありますか？」

考えて頂く赤の騎士団副団長。

僕「僕達は騎士団が兵を王宮に送り込んで準備が出来たら大砦を攻め落とします。」

赤の騎士団副団長「どうやって」

僕「そこでまた両騎士団に手を貸してもらいます。」

訝しように繭を潜める赤の騎士団副団長。

僕「黒の騎士団のメンバーも元は両騎士団の団員だったと聞きます。」

赤の騎士団副団長「ええ」

僕「取り込んでください」

赤の騎士団副団長「何？」

僕「一斉放棄の仲間に取り込んでください。大砦攻略の際に黒の騎士団の一部と両騎士団にやってもらいたいことがあります。」

赤の騎士団副団長「あからさまな裏切りは団長の身を危なくするの
で無理です」

僕「伝わらなければ大丈夫ではないですか？」

赤の騎士団副団長「というと？」

僕「大砦を攻める際は両騎士団は外からの大砦との挟撃を進言し出
てください。」

赤の騎士団副団長「進言しても無視されるかもしれない。」

僕「黒の騎士団と国王派領主軍あわせて10000近くいます。そ
の上で大砦に守られています。両騎士団が疲弊するのを望むので問
題なく通るでしょう」

赤の騎士団副団長「……」

僕「両騎士団はそのまま大砦と王宮の道と僕達が包囲していない方
面に隠れてください」

無言で先を促す赤の騎士団副団長。

僕「次に僕達が大砦を攻めだして幾許いくばくかした時に黒の騎士団達には騒ぎを起こして貰います。」

赤の騎士団副団長「騒ぎ？そんなのすぐに取り押さえられてしまうでしょう」

僕「数人ならそうですが、黒の騎士団の大半は両騎士団の団員と聞きました。それにも関わらず少数しか取り込めませんか？」

赤の騎士団副団長「……そんな事は」

僕「では成功するでしょう。内容は『裏切りだ！領主が逆賊に内通しているぞ。』です。そうして周りを煽りながら言いまわってもらいます。」

赤の騎士団副団長「それでもすぐにばれてしまう」

僕「一時の混乱で構いません。そうして混乱した中で門の警備は自分達が行うと言い張り門を制圧してもらいます」

赤の騎士団副団長「……」

僕「その後。門を開けてもらい我々が突入して制圧します」

赤の騎士団副団長「黒の騎士団にいる我々の仲間の身の保障は？」

僕「大砦の一部、3箇所程度に安全箇所を設け、そこにいる黒の騎士団には手を出さないという方針で行きましょう」

赤の騎士団副団長「その事に対しての信頼は？」

僕「信じてもらうしかありません。我々も攻撃されないと信じて放置します。もし安全地帯の黒の騎士団の中に黒の騎士団長派が居た場合はそちらで制圧してもらえると助かります。立ちはだかる黒の騎士団は黒の騎士団長側として討ち取らせて貰いますが。」

赤の騎士団副団長「戦場です。仕方ありません」

僕「門が開いて両騎士団と黒の騎士団の一部が放棄すれば、残りは国王派領主6000と黒の騎士団の残り。我々の軍は王子が合流すればそれ以上になる。しかも相手は混乱している。半日も持たずに大砦は落ちます。落ち延びる領主達は両騎士団で誘導して我々の軍隊にまで引っ張ってきてください。」

赤の騎士団副団長「それで？」

僕「取り囲んで武装解除の後に捕らえます。両騎士団が味方のところまで送ります。といえば信じるでしょう」

赤の騎士団副団長「：騎士団長救出の方法は？」

僕の話聞いていた赤の騎士団副団長は、大砦の話が一段落したら聞いてきた。

僕「それは両騎士団に行ってもらいます」

赤の騎士団副団長「方法は？」

僕「大砦から王宮の間の道を塞ぎ、大砦と王宮からの伝令をは全て捕まえてください」

赤の騎士団副団長「それで？」

僕「騎士団から伝令に扮して偽の情報を伝えます。それは大砦が伝令を送らなくてもです」

赤の騎士団副団長「ほう」

僕「内容は増援を求める伝令といった所ででしょうか。」

赤の騎士団副団長「それでは兵が来てしまつて大砦が落とせないのでは？」

僕「来るまでに十分落とせます。」

赤の騎士団副団長「……」

僕「大砦を取られると喉元にナイフを突きつけられるのと同じなので、王宮から慌しく出兵の準備に入ります。その混乱を狙つて団長を守る警備の兵に入れ替わつて団長達を連れ出してください。その際に危険ですが身代わりで残る人物が必要です。」

赤の騎士団副団長「……団長の身代わりなら喜んでなるでしょう」

僕「連れ出してもすぐに外に出るのは危険です。ですので団長は隠れていてください。」

赤の騎士団副団長「すぐに城を抜けた方がいいのでは？」

僕「出来そうならいいですが城を抜け出せない場合もあるかも知れません。もしもの為に、その後の脱出の機会是我々が作ります。」

赤の騎士団副団長「どのように？」

僕「大砦を奪った僕達は大砦の先の領地を攻め、王国軍に加担した領主の一族の身柄を拘束します。殆どの者が領地には家族を残し兵は少ししか居ないでしょう。そこに2〜3000の兵で攻めます。もちろんわが軍派略奪暴行は死罪としますので行いませんが、手向かう場合は切り捨てていいと伝えます」

赤の騎士団副団長「自分の領地を守る為の兵に紛れて城を脱出するという事ですな」

赤の騎士団副団長の言葉に頷く。

僕「はっきり言ってザルと言っても良い程の作戦です。殆どを両騎士団にお願いしている上に、方針は伝えましたが細かい『隠れる場所』や『どうやって警備兵と入れ替わる』など、色々な部分を丸投げします」

赤の騎士団副団長「……」

僕「そもそも両騎士団が拒否したら一つも実行できない辺りがもうダメですね」

赤の騎士団副団長「……」

僕「だからお願いするしかありません。一緒に手伝ってください。」

赤の騎士団副団長「……」

僕「団長を取り戻すついでで構いません。」

僕を見つめていた赤の騎士団副団長が「いいですか？」と呟く。

僕「为什么呢？」

赤の騎士団副団長「この国の者では無い貴殿がここまでする理由は？」

僕「姫に出会ったから、ですかね？」

赤の騎士団副団長「？」

僕「偶然なんですけどね。でも姫と友達になったんです。」

赤の騎士団副団長「……」

僕「……」

赤の騎士団副団長「∴それだけ、ですか？」

僕「え？ですけど？」

他にどう言えはいんだろう？

何か言わなきゃと思い、考えて思いついた事を言う。

僕「姫の手を取って国を救う為に戦うって、囚われの姫を救う事の次ぐらいに子供の頃に憧れた状況じゃないですか？」

白の騎士団連隊長が「確かに――」と呟いたのが意外と大きく響いた。その声に騎士団のメンバーが笑う。

赤の騎士団副団長「確かに！私も昔は憧れたものです！」

豪快に笑うと赤の騎士団副団長の張り詰めていた気配が和らいだ。

赤の騎士団副団長「実は貴方の案に乗る事は決定していました」

――なんという驚きの事実！今までの緊張感を返せ！！

赤の騎士団副団長「だが私自身も貴方の人となりを見たかったためにああいう態度をとらせてもらいました。」

失礼な態度で申し訳ありません。という赤の騎士団副団長。

赤の騎士団副団長「それがまさか団長救出まで考えているとは」

僕「穴だらけの計画ですけどね」

赤の騎士団副団長「確かにそうですが、我々の用意していた方法と組み合わせれば実現可能だと思います」

僕「では――！」

「手を組みましょう」と頷く赤の騎士団副団長。

あまりのうれしさに差し出された手を飛びつかんばかりに掴んでいた。

その後、連絡の取り方や決行日を決めると互いの陣に向けて戻った。

第14話 憧れ（後書き）

サブタイトル付けてみました。

誤字修正

打つべく ↓ 討つべく

だった聞きます ↓ だったと聞きます

すですけど ↓ ですけど

第15話 新兵器

赤の騎士団服隊長との密会の帰り。

僕「これで大砦はなんとかかなりそうだけど、問題は王都か―」

爺「そうですね」

僕の呟きに爺が答える。

まだ大砦攻略を攻略していない状態で別の事を考えるのは良くないとだとは分かっている。

でも次の展開を考えておかないと行き詰ってしまう。

僕「王都を攻めるこれと言う手が思いつかないんですね」

爺「手ですか―」

僕「このままだと兵力では相手に勝る事が出来るだろうけど、王都に籠もられて攻めあぐねてしまう」

爺「そうなると長期戦になりますな」

僕「王都はどれくらいの間、籠城できると思いますか？」

爺「そうですね、月の満ち欠けが2周するくらいは持つかも知れません」

約2ヶ月と言ったところか。

僕「それだけ時間を掛けるのは気厳しい？」

爺「こちらの兵糧の問題などはどうにかなるとして兵の士気の維持と隣国の状況がどうなるか――」

僕「隣国が攻めてくる可能性が高い？」

爺「さすがにそれだけ時間を掛けると来られても防ぎようがありませんからな」

僕「出来るだけ短期で決着をつけないとダメなのか」

王都の状況を知らない状態で考えても何も思いつかない。

――戻ったら情報を集めよう

そう決めると帰路を急いだ。

翌日の夕方に王子達の軍勢約6000が小砦に合流し、これで合計11000程になった。

すぐに王子と騎士団長を含めて現状と明日以降の確認が始まった。

王子「お待たせしました」

姫「道中大丈夫でしたか？」

王子「途中、白の騎士団に阻まれましたが、途中で撤退していったので大した被害も出ずに済みました」

みんなと挨拶をした王子と騎士隊長に赤白両騎士団との密約と大砦の攻略について説明すると「なるほど、それですか」と納得がいった様だ。

大砦の今の戦力は黒の騎士団が到着して15000程になっていた。現状は大きな戦闘は起きておらず、小康状態となっている。

赤白騎士団の戦死偽装は順当に進み王都にある程度送る事は出来ているようだ。

王子「では大砦攻略は明後日決行という事でいいでしょうか？」

翁「そうですね。あまり時間を掛けると相手が攻めてくるやも知れませんしな」

やれる事はある程度やった。
後は実行するのみである。

話し合いは手短に終わり解散となる。

皆が席を立つ中、疑問に思った事を爺に聞く。

僕「明後日の大砦の編成を聞いて思ったのですが、攻城兵器の話は無かったのですがどれくらいあるんですか？」

騎兵や槍兵などは記載されているが攻城兵器の話は出なかった。

爺「こうじょうせんへいき、ですか？何でしょうかそれは」

僕「城を落とす為の武器と言うか道具です」

爺「そういう物となりますと、丸太は予備も含めて2本、大槌は数本、後は梯子を数十台という所ですね。」

僕「それだけですか？」

爺「少ないですか？大体こんなものですが」

僕「数ではなく、他に何か無いんですか。」

爺「他と言われましても――」

どうやら他には無いらしい。

それならもし作れば戦を優位に進める事が出来るかもしれない。
出て行こうとする王子と王を呼び止める。

僕「攻城戦の兵器などはないと伺いました。作って使えば王都の攻略が有利に進むかも知れません。」

王子「へいき？」

僕「城を落とす為の武器です」

王子「落とすと言うと？」

僕「門や壁を壊すようなものです」

翁「丸太や大槌のようなものですか」

僕「いえ、大きな岩を飛ばしてぶつける道具です」

翁「大きな岩を？」

僕「応用すれば油の入った樽などを投げる事も出来ますね」

翁「それはどういったものですか」

僕は木のスプーンに小石を乗せ、スプーンをしならせて小石を飛ばす。

僕「原理はこれです。これを大きく作れば子供くらいの岩なら飛ばせるようになると思います」

それを聞いた爺は工兵長と数名の工兵を呼び出した。
工兵長達が来るまでの間に魔王に確認をする。

―この世界には伸び縮みする素材と言うのはある？

魔王『どんなものだ？』

―強度があり、引っ張ると急激な勢いで元に戻るような奴

魔王『そういうのは無いな』

―そうか、ありがとう。

現れた工兵長達に「今から若の話を聞いて作れるか言ってくれ」と言う話を促した。

僕は先ほどと同じようにスプーンで小石を飛ばす。

僕「これを大きなサイズで作ります。」

工兵長「大きくとはどれくらい？」

僕「スプーンの部分だけでも人の2倍」

工兵長「そんなに？」

僕「それくらい無いと大きなものは飛ばせません」

工兵長「大きいのはいいとして、飛ばす勢いはどうやって作るんですか？」

僕「^{おもり}錘でつけます」

工兵長「錘をどうするのですか？」

僕「スプーンの柄の部分の下の方に棒を通します。」

僕は説明をしながらスプーンの柄に木の枝をあてる。

僕「これで木の枝を持てばスプーンは回ります。木の枝を左右から支え、自由にスプーンが自由に回転するようにします。」

工兵長「ふむふむ」

僕「スプーンの柄の部分の方に錘をつけます。錘の重さは飛ばすものの2倍はいるでしょう」

工兵長「なるほど！それで物を載せた後に錘の重さで飛ばすんですね。」

僕「ええ、柄と錘のが床に付かない様にするといいかもですね。」

古兵長「ふむ」

僕「それとスプーンのを乗せる方は紐で引けるようにしてください」

工兵長「そうですね。そうしなひとなかなかスプーンをおろせません」

僕「そうして紐を引く方法は巻き取り式にしましょう」

工兵長「巻き取り式ですか」

僕「その方が人の手で引くより力強くひけるしね。小砦の跳ね上げ式門と同じ構造でいいと思います。あれに少し手を加えれば」

工兵長「手とは？」

僕「あのままでは引いた後に元に戻らないようにしないといけません。それを勝手になるように細工が必要です。」

工兵長「ほう」

僕「歯車を2つ重ねて一方は逆に回らないように細工します。そうすれば勝手に戻る事も無いでしょう」

工兵長「その状態だと飛ばす事も出来ないのでは？」

僕「逆にしか回らないようにした齒車を横に滑らせるようにして、発射のときに横に移動させればいいんです。」

工兵長「なるほど！」

僕「横に滑らせたり戻す方法も考えないと手をはさむと危ないですけどね。そこら辺は無ければ無いでしかたありません」

工兵長は「考えてみます！」という和其他の工兵たちとあれこれ話出した。

翁が「どれくらいでできる？」と聞くと「試作品は今晚中にと」工兵長は言った。

工兵長「でも試し打ちをしたり改良したりで数日は必要です」

翁「明日の大砦攻略には間に合わないか」

工兵長「はい」

僕「大砦は攻略法があるので必要ないでしょう。王都攻略までに間に合えば」

工兵長「それまでにはいくつか作るようにします。とりあずは今から製作にとりかかります」

そういうと工兵たちは部屋を飛び出した。

明日の朝には試作機が出来るらしいので、とりあえずは明日にその

出来を確かめようと言う事になった。

翌朝、兵器の試作品が出来ていた。

すぐに小砦のすぐ横の広場から平野に向けて試し打ちが始まる。

岩は小砦に常備している岩を飛ばす。

飛んだ距離にさほどの誤差が無い事を確認をした後に棒を取り外す。
どうやら長さの違う棒が何種類かあるようだ。

その後何個か飛ばした後に一番飛んだ長さを選ぶ。

次は距離を測り大きな岩に向かって飛ばす。

何回か外した後に直撃した岩を確認。

岩にヒビが入っているのを見て工兵長が頷く。

工兵長「数を作って同じ場所に何発も打ち込めば壁も崩せそうです」

翁「距離は最大どれくらいだ」

工兵長「岩が転がる範囲で良いなら弓の範囲外からでもいいけますが、壁に当てるとしたら弓の射程内に入るしかありません。」

翁「射程は変えられるのか？」

工兵長「距離を伸ばす事は無理でも引く長さを変える事で短めに飛ばす事も可能です」

翁「なるほど。王都攻略までにどれくらい作れる」

工兵長「作り自体はさほど難しくありませんので慣れれば一日十何機かは作れるでしょう。持ち運び用に組み立て式にします。これにより数も運べるでしょう」

翁「そうか。それに平行して飛ばす為の岩も用意するようにしよう。すぐに作成に取り掛かってくれ」

工兵長「はい！」

今日中だけでも数機は作れるので試しに大岩に持っていくか？という話も出たが、出来るだけ敵に新兵器の情報を知られないほうが良いという話になった。

僕は弓の範囲から出れないと聞いて岩を取り付けたり発射したりする人が矢から身を出来るだけ守れるように盾を付けるようにお願いした。

この案に工兵長は「わかりました」と頷いてくれた。

大砦の攻略を明日に控え小砦内は忙しくなる。
忙しくなっているのに全然忙しくない僕。

―なんで皆あんなに忙しそうなんだろう

魔王『明日の戦に向けて準備があるからだろう』

―なんで僕は忙しくないんだろう

魔王『ああいう者の殆どがああやって準備をしている雰囲気を出しているんだ。実際には戦の準備などする必要が無い者ばかりだ』

―何の為にそんな事を？

魔王『不安だからだ。ああやって明日への心構えなり諦めを付けていくのだ』

―やっぱりみんな不安なんだね

魔王『まあ上に立つものは本当に色々忙しいんだがな』

―うん、僕は上に立つものじゃないからいいんだ

魔王『美女も色々忙しそうだな』

―…うん、僕は上に立つものじゃないからいいんだ

その時、美女さんが部屋に入ってきた

美女さん「若、ちょっと手伝ってもらっていいですか？」

僕「もちろん！」

美女さんに連れられて廊下を歩く。

―やっぱりやる事があるっていいよね！

魔王『そうだな―』

廊下を進み扉の前に立つとノックをし「若をお連れしました」と言葉
葉を掛けるする美女さん。

中から「どうぞ」という声と共に中に入る。
あれ？ここは―姫の部屋？

中に入ると王子と爺と翁がいた。

どうやら姫に何かを言っているようだ。

妖精少女が姫の横に腰掛けて姫を心配そうに見ている。

何でこんな所に呼ばれたのだろうか？

爺「おお若、忙しい中わざわざ済みませんな」

魔王『忙しくないがな（うるさいよ！）』

僕「いえ、どうしたんですか？」

爺「姫が今回の大砦攻略に参加すると言い出されて。」

今回のというより今後の戦は姫は出陣しない事になっていた。

出陣する兵士達に激励を送った後は後方で待っていてもらう事になっていたのだ。

それが何故か前日になって自分も行くと言い出して聞かないらしい。

王子「姫姉さまの説得をお願いします」

僕「は？」

王子「姫姉さまの説得をお願いしたいんです」

翁「ワシらは準備があるでな」

爺「また来ますのでその間、説得をお願いします」

美女さん「さ、妖精少女も一緒に手伝ってください」

妖精少女「うん」

そういうと子狼を抱いて皆出て行ってしまった。

―あるうえ？

魔王『はめられたな』

―だよね！

腰を下ろして俯く姫を見る。

とりあえず向かいにある椅子に腰を掛ける。

僕「姫」

ビクツとする姫。

なんで怯えてるんだろう？

僕「姫、何で今更行くと言い出したんですか？」

姫「……」

僕「前に話し合ったときには残る事に納得してくれたじゃないですか？」

姫「……」

僕「姫、（友達の）僕にも言えない理由ですか？」

姫「…大砦攻略で多くの兵が危険に見舞われ帰らぬ事もあると思うと、私だけが安全な場所に居られません！」

僕「そうか―でもね、姫。姫が戦場に出るとその分だけ守る為に兵が裂かれる。そうなるかどうか分かりますか？」

姫「―」

僕「大砦を守る人間が減ります。その分、戦が伸びて傷つき倒れるものが増えます」

魔王『極論だな』

―そうだけどね。仕方ないよ。

姫「それでも―」

僕「それを分らない姫じゃ無いと思うんだ。」

姫「でも―」

僕「その上で我侬を言う本当の理由は何なんですか？」

その言葉に姫が声を詰まらせる。

僕「本当の所が分からないと僕は賛成も反対も出来ません」

姫「言いよどむ。

僕「僕は姫の味方で居たいと思う。でも危ない目にもあって欲しくないと思う」

姫「…みんなが心配だからです」

姫が話すのをゆっくり待つ。

姫「王子が、爺が、翁が、美女さんが、わ、若が――」

――そうか、優しいからこそ心を痛めて悩むのか。

「姫」と呼ぶと顔を真っ赤にして俯く肩がピクツとゆれる。

僕「大丈夫です。（僕達は）必ず貴方の元に帰ってきます」

姫「えっ？」

僕「貴方を悲しませるような事が無いよう、必ず（みんなで）！」

そう伝えたと顔を真っ赤にしながら「――待ってます」と姫は呟いた。

僕「姫が無事を祈ってくれるだけで（兵士達は）それを励みに戦えるのです。笑顔で送って笑顔で出迎えてください」

魔王『またか？またなのか？』

魔王が何か言っているが良く分からない。

姫は「――」言葉に出来ない声を出しコクコクと頷く。

分かってくれた姫に一安心をし「爺たちを呼んできましようか」と席を立とうとした時に姫が「あっ」と呟く。

――ん？何か言いたいのかな？

魔王『……』

魔王の呆れる雰囲気を感じ立ち上がるのを辞める。

きつと「僕が気が付いていない何か」を見落としているはずだ。

今ここで立ち去るのは良くないらしい。

――でも見落としているんだろう。姫の何かかな？

姫を見ると俯いてはいるがこちらをちらちら見ている。
でも決して真っ赤な顔を合わせようとはしない。

—どういう意味の態度なんだろう。

深く注目する。

—顔が真っ赤で恥ずかしそうにこつちを盗み見てる。そして僕が出て行こうとすると何か言おうとした？

そこで僕はひらめいた！

—そ、そうなのか？

僕「と、思いましたが爺も準備に忙しいといっていましたし、後で来るといっていましたので急ぐ必要は無いですね」

その言葉に姫が顔を上げる。

僕「時間もありそうですし、よければお話しませんか？最近姫と殆ど話す機会も無くて残念に思っていたんです」

真っ赤な顔をこくこくと頷く姫。

―やはりそうか！うれしいな！

魔王『一応、何に気が付いたか聞いてみようではないか』

―姫は待つと決め手も怖いし不安なんだ

魔王『…それで？』

―だから独りになりたくないんだ！

魔王『……そこから導かれた答えは？』

―僕を友人としてた頼ってくれている！！

魔王『ナンダッテー！』

本当にうれしい！

うれしさが溢れた僕は笑顔があふれ出してにやけ顔が止まらない。
「話そう」と言っても話題が見付からないのか視線を泳がせる姫

僕「姫、別に何でもいいんです。時間はあります。」

姫「は、はい」

僕「僕は（爺たちが来るまで）ここに居ます。話す言葉を無理に搜

す必要尾ありません。無言でもいいじゃないですか。ゆったりした時間を過ごしましょう。思いついたら何でも話せばいいんですよ」

僕は出来るだけ姫がリラックス出来るように話しかける。

本当はここでいろんな話題で話を盛り上げることが出来たらいいんだけど、現実世界で女の子と話した事が皆無に近い僕には引き出しの中が空っぽだ。

実際は僕自身が沈黙に耐えれないからああ言っただけだ。

—こういう時はどういう話をしたらいいんだ！

魔王『だから何でもいいんだろう？』

—そうだけど取っ掛かりが無いよ。

沈黙が部屋を包む。気まずい。

容量の少ない脳味噌をフル回転させて思いついた事を口に出してしまおう

僕「妖精少女は—」

—なんで用事も無いのに部屋から連れ出されたんだろう？

魔王『…馬鹿か？』

この質問はダメらしい。

別のを、と思ったら姫が「え？」と反応した。
えーと。

僕「―最近どうですか？」

姫「最近？」

僕「あ、え、姫に任せきりになってるので元気にしてるかな？とか
迷惑あけてないかな？とか」

姫「迷惑なんて事は全然ありません。妖精少女と居ると心が暖かな
気持ちになります。逆に一緒に居れて嬉しいです」

「私、昔に妹が欲しかったんです」と微笑んだ。

姫の笑顔に選択が間違えてなかったと思ってほっとした。

その後はものすごく弾むという訳でもないけど会話が長時間途切れる
事も無く、ゆったりとした時間は爺たちが来るまで続いた。

第15話 新兵器（後書き）

誤字修正

攻略に付いて ↓ 攻略について

納得が行った ↓ 納得がいった

そういうのとなりました ↓ そういう物となりますと

出来ますね ↓ 出来ますね

逆にしか魔わらに歯車を ↓ 逆にしか回らないようにした歯車を

無視でも ↓ 無理でも

急ぎそうだな ↓ 忙しそうだな

第16話 大砦攻防戦

「みなさん、無事帰ってきてください」

姫の演説が終わった。

本来なら1万近い人物に肉声が届くはずは無いが、妖精少女が風の精霊をお願いをして声を遠くまで届けてくれているらしい。

各所で敬礼の合図が係り兵士が敬礼をする。

次に妖精少女が呼ばれる。

いつの間にか殆どの兵が「妖精族は幸運を運ぶ」と言う噂を信じている。

最初は翁の妖精少女の立場を守る為の粹な嘘だった。

次に姫と王子の無事は妖精少女と出会ったお陰だという噂がたった。そこから小さな噂が聞こえて来るようになった。

「出陣前に妖精少女に会った斥候部隊が敵陣深くまで入り込んだにも関わらず損耗0で帰還した」

「翁の部隊が当初から妖精少女を熱烈に崇めているらしい」

「妖精少女を馬鹿にした部隊が部隊を維持出来ない状態になったら
しい」

「妖精少女に『頑張って』と言われた部隊が赤や白の騎士団と何回も出会っても死者0で戦果を上げている」

最初の斥候はたまたまだと思う。

翁の部隊は妖精少女へと言うより美女さんへの信仰だと思うけどね。妖精少女を馬鹿にした部隊は不和を警戒した翁に解散させられバラ

バラの部隊に配置されただけ。

最後のは僕達の部隊で、両騎士団とヤラセを行ってるだけです。ありがとうございました。

こういう偶然と勘違いとこじ付けが殆どの兵士が信じだしていた。もちろんずっと姫と一緒にいる事や人見知りする性質などから人目に滅多に出ないのも噂に拍車を掛けているらしい。

台に上がった妖精少女は王女の後ろに隠れながら「…頑張って」と一言小さく言った。

その小さな声が風に乗って端まで届く。

その声を聞いた兵士達が号令も無く敬礼をしていく。

魔王『新たな宗教が生まれるかもしれないな』

―ありえそうだから怖いよね。

その後、王子の挨拶があり「出陣」の掛け声と共に先発隊から随時出発していく。

僕達は遊撃なのでいつ出発とかは無いが、とりあえず王子の部隊と一緒に行くことにした。

さすがに万を越える数になると出陣も一苦勞である。

続々と出発する部隊を見ながら王子と会話していると姫と妖精少女が来た。

2人の足元を転がるように子狼も一緒にくる。
周りの兵が敬礼する。

姫「気をつけてくださいね」

王子「はい。大砦で会いましょう」

姫は僕の方を向く。

姫「ご武運を」

僕「ありがとうございます」

妖精少女「頑張って！」

僕「ありがとう。妖精少女も子狼と一緒に姫をお願いね」

妖精少女「うん！」

妖精少女の頭をなでて言うと言った笑顔で頷いた。
すると近くの部隊から「出陣！」と聞こえてきた。
そろそろ僕達も出る時間だ。

僕「では行ってきます」

姫「…どうかご無事で」

僕「はい、必ず無事に戻ってきます」

見送る姫と妖精少女に手を振り、僕達は小砦を後にした。

？時（ほじ、16時ごろ）、日が傾きだした頃に小高い丘に立つ大砦が視界の先に見える。
進軍を一度止めて隊列を組む。

反国王軍 総数約11000

大砦攻略 約10000

本隊、王子、騎士隊長、兵数約4000

右翼、翁、兵士隊長、兵数約3000

左翼、現領主、領主息子、兵数3000

遊撃、僕、美女さん、兵数約200

小砦待機

姫、爺、妖精少女、兵数約1000

対する国王運は大砦に籠るつもりらしい。

斥候の話では赤と白の騎士団は首尾よく大砦を離れたようだ。

国王軍、総数約14200

大砦内 兵士計、約10000

黒の騎士団、兵数約4000（殆どが戦闘放棄予定）

国王派領主軍、兵数約6000

大砦外、兵士計、約4200

赤の騎士団、兵数約1900（戦闘放棄予定）

白の騎士団、兵数約2300（戦闘放棄予定）

大砦の側でも塀の上に人が並ぶのが見える。

続々と編隊完了の知らせが届き王子の「前進！」と言う言葉にラッパが鳴り響き、至る所から「前進！」と聞こえ全軍がゆっくり進みだす。

四方に斥候隊が走り回り伏兵が居ないかを探し回る。

前進を続ける隊列の先頭に大砦からの弓が届くが、盾を掲げながら

も前進を続ける。

ある程度進んだ所でこちら側からも弓が届く範囲に入り弓を打ち出した。

弓矢の応酬が続く中、右翼と左翼がそれぞれ展開をしだし大砦を包囲する。

数刻が過ぎても敵の応酬は激しく兵が大砦に貼り付けない。

兵の損害も決して少ない。

このままでは消耗戦で負けてしまうために一度引く事にする。

もし敵が追撃に出てきたらすぐに反転し野戦に持ち込もうというのだ。

後退のラッパが鳴り響き兵をじりじりと下げさせる。

そのまま矢の範囲外に出ても敵は追ってこない為に一度大きく後退をして態勢を立て直す。

反国王軍（死者、怪我人で先頭離脱を引いた数）

本隊、王子、騎士隊長、兵数約3900

右翼、翁、兵士隊長、兵数約2850

左翼、現領主、領主息子、兵数2800

遊撃、僕、美女さん、兵数195

隊列の立て直し、矢などを補充すると、すぐに再度進軍する。

矢の応酬が再開されて数刻、日は陰り大砦の兵に数え切れないほどのかがり火が炊かれる。

大砦の上の兵は倒しても倒しても次々と沸き壁に張り付く事は出来ず、どれくらいのダメージを相手に与えているかが全く見えない。

日が陰って少しして変化が起きる。
大岩の塀の上が慌しくなり兵の補充に隙が出来る。

―きたか！

偶々（たまたま）かもしれない。
はやる気持ちを抑え門の上の敵兵に弓を射る。

門の周りが騒がしくなったと思った瞬間に巻き上げ式の橋が倒れてきて門が開きださず。

僕「突撃！城門を確保しろ！！」

僕の号令に遊撃部隊が弓を捨て剣を抜き盾を掲げて門へと馬を走らせる。

僕「仲間が来るまで門を死守しろ！」

門を閉じようと来る敵兵を切りつけながら叫ぶと半数の兵を連れて奥へと進む。

あっという間に敵が押し寄せてくるが敵は混乱しているようで統制が取れていないようだ。

部隊毎に向かってくる敵を切り奥へと進んでいると後ろでひとときわ

多いな関の声が上がった。

騎士隊長が2000程引いて門へ突撃してきた。

騎士隊長「若と美女殿に遅れるな！」

兵士「応！」

押し寄せる騎士隊長率いる兵隊で門の中は溢れかえる。

騎士隊長「無抵抗の者は武装解除だけして無視しろ！ 齒向かう者には容赦はいらない！」

元々、兵力的に無抵抗な人間を全員相手にする余裕は無い。

もし無抵抗な敵を無駄に切ってまた完全に敵に回られると数で負けるので武装解除だけして最低限の兵で見張る事に決まっております。

だが戦場で興奮して忘れる兵も居るかもしれないので念を押しているのだろう。

騎士隊長「旗を持っている奴は塀の上の弓兵を処理しろ！」

門が先に敗れた場合など城壁などに上って敵を倒すが、その際に日が落ちた後などは味方に弓で射られないように合図を送る為に旗を用意したりする。

すぐに左右の壁へ200ずつくらいの兵が登っていく。

混乱の為に立ち向かう敵は少なく2枚目の門の向こうに逃げようとする者が殆どだった。

だがその門も半分近くが閉まりかけている。

その門へ向かって走りながら僕は力の限り叫んだ。

僕「このままでは我らの味方が門の中に閉じ込められてやられてしまう！門が閉じる前に味方と合流するんだ！」

門を閉めようとしていた相手がぎょっとしたように後ろを振り返って身構える。

その男は何かを叫ぶと近くの男に切りかかった。

どうやら僕が叫んだ言葉に疑心暗鬼になって、たまたま目に付いた相手を敵だと認識したようだ。

その相手も自分が切りかかった相手が敵と内通していると勘違いをし、お互いの仲間同士で仲たがいを始めたようだ。

その間に距離を詰めた僕は半分閉まった門に無理やり突入した。

周りの敵を切り伏せながら30名の兵にを守るように伝えさらに置くに進む。

しかし砦の建物の門は硬く閉ざされていてしまっている為に仕方なく広場の敵の排除を行っているとすぐに後続の兵が雪崩込んできた。

すぐに砦の上の兵へ弓が雨のように打たれ、門を破壊する丸太が届く。

門は何回か丸太が当たると切れ目を大きくしていった。
そこに向かって丸太を打ちつけながら周りから大槌で門を叩く。
壊れた門の間から槍を突き出して応戦しようとしてくるがある程度
隙間が大きくなった時に勢いをつけて丸太が門にぶち当たると片方
の門が壊れて開いた。

すぐに敵が門からの侵入を防ごうと門へ殺到してくるのを見て弓矢
を門へ向かって一斉に放つと臆したのか敵の足が竦んだ。
その間に突撃を命じると兵士達が門の間から内部へとなだれ込む。

僕「一般人と投降するものは傷つけるな！ 齒向かう者は一般人だろうと兵士だろうと容赦する必要は無い！」

僕は建物内部に入り、内部の人間に聞こえるように叫ぶ。
周りで部隊長が同じように周りの敵兵に聞こえるように叫んだ。

僕は美女さんと数十名の兵をつれて上の階へと上がる。
上に上がると数人の兵が廊下を塞ぐように立っていた。

僕「今、投降するなら命はとらないが？」

そう言うのと頷き指示通り剣を鞘に収め床に置くと壁に向かって膝立ちになり手を頭に載せた。

兵士に剣を回収させて後から来た兵に階下へ連れて行くように指示する。

さらに上の階に上ると階下とは構造が違う広いフロアに黒の騎士団と思われる騎士が30名ほど待ち構えていた。

投降を呼びかけたが無視したまま何も言わずにこちらに剣を向ける。

僕「投降しないと?」

無言のままこちらを見つめる黒の騎士団団員達。

僕「では交渉決裂ですね。行きます」

そういった瞬間に美女さんが黒の騎士団の中に飛び込んで1人切り倒す。

僕もすぐに飛び出して2人きりつけるとそのまま先に抜けて振り返る。

美女さんも同じ考えだったようで、これで黒の騎士団は僕・美女さんと他の兵に挟まれた状態になる。

あまりの事に呆然としたままの黒の騎士団が「投降する!」と剣を床に落として手を上げる。

僕「は?」

黒の騎士団A「投降する」

僕「何故今更?」

そういうと彼は美女さんに切り倒された奴を指差して「…黒の騎士団副団長だ」と言った。

―弱！副団長弱！！

決して弱い訳ではないんだろうけど美女さんの相手では無かっただけという事か。

僕「では全員、武器から離れて頭で手を組んで床にうつ伏せになるんだ」

兵士達が武装解除を行うのを横目に見ながら黒の騎士団Aに話しかける。

僕「黒の騎士団長と他の領主は上か？」

黒の騎士団長A「…そうだ」

僕「この騒ぎに降りても来ないが、逃げた後か？」

僕の質問に首を振る。

黒の騎士団A「…上に居る」

僕「どれくらい？」

黒の騎士団A「黒の騎士団長と領主のお気に入りが合わせて20名
といった所だ」

僕「待ち伏せか」

黒の騎士団A「……っている」

僕「は？」

黒の騎士団Aの言っている意味が分からず聞き返す。

黒の騎士団A「酔い潰れているッ！」

吐き捨てるように言う黒の騎士団A。

どうやら黒の騎士団団長は来てからずっと酒を飲んで居たらしく、
反国王軍との戦闘が始まった時も「ヤツラの足掻く様を見ながら飲
むのも一興と」と領主達とお気に入りの部下を呼んで酒盛りを始め
たらしい。

そうして今はもう皆酔いが回って剣も十分に振れない状態のようだ。

すぐに兵を上にながらせて確認をさせると証言通り黒の騎士団団長
と領主達が酔い潰れて居た為に苦も無く全員を拘束した。

それを確認して黒の騎士団長と領主達の身柄の拘束と戦闘の終了を告げる。
すると兵が窓に駆け寄り反国王派の旗を掲げると先頭終了のラッパを鳴らす。
すぐに至る所から勝利の歓声が聞こえて来た。

戦闘が終わって時間は深夜になったが大砦は慌しく人が動いている。
戦闘終了後、主だった人物が砦最上階に集まった。
どうやら全員無事だったようだ。

大砦攻略後戦力

反国王軍 総数約10000 ↓ 総数約8,200 (重傷者約300名、軽症者多数。)
死者約1800

それに対する大砦防衛だった国王軍は

国王軍、総数約14200 ↓ 総数約10550 (重傷者1600、軽症者多数)

死者2550、逃走者1100

戦闘放棄者約8000名

大砦内 兵士計、約10000 ↓ 約6350

黒の騎士団、兵数約4000 ↓ 兵数約3850 (内、約3800が元赤白騎士団)

国王派領主軍、兵数約6000 ↓ 兵数約2500

大砦外、兵士計、約4200

赤の騎士団、兵数約1900 (戦闘放棄)

白の騎士団、兵数約2300 (戦闘放棄)

投降拘束した兵だけでも約6350名。

全員を国王派領主軍と黒の騎士団と黒の騎士団 (元赤白騎士団員) で別々に10名ほどに分けて兵舎 (6人部屋) に監禁した。

翌日の朝に美女さんと領主息子が兵2000を率いて姫と妖精少女を迎えに大砦を出す。

兵数が重傷者を抜いて5900ちょっとと厳しくなるが、姫をいつまでも兵数の少ない小砦に居てもらうのは心許ないので仕方ない。

昼過ぎに元国王派の領主が大砦より王宮側の領地を総兵数1500程の兵で落とし、国王派の領主達の身内の身柄を確保して回る。もちろん、前のとときと同じく暴行略奪に対する刑は重くしている。ただ今回は王宮から兵が来たらすぐに逃げるようには言っている。赤白両騎士団団長が王都から逃げる為の牽制はしっかりしないといけない。

もちろん国王軍派の領主への脅しもあるけど。

翌日の昼前に大砦のバルコニーに立つ。

—やっ和大砦攻略か

魔王『やっただな』

—まだ王都があるのにこの兵数でどうにかなるんだろうか

魔王『そなたの言っていた新兵器もある。やるしかあるまい』

—そうだね

遠くをぼんやりと眺めながら魔王と取り留めない会話をしていた。ここで姫達の軍勢が見えるのを待っているのだ。

どれくらい時間が経っただろうか。

大砦内部の広場が騒がしくなる。

眼下に3騎の馬が大砦に飛び込んでくるのが見える。

入り口で兵士達に止められた3騎は下りるももどかしそうに兵士と何かを言い争っている様だ。

そこに兵を連れた騎士隊長が現れて3騎の兵に話を聞いていたが、周りの兵に幾つか指示を出すと何人かの兵が厩うまやへ走っていく。

3騎の兵は馬から下りると騎士隊長と兵達に囲まれて砦の中へと足早に入って行った。

騎士隊長と3騎の兵が砦内に消え、厩へ走った数名の兵が騎乗して大砦の外へ飛び出していくのを確認すると僕は状況を確認する為に翁の元へと向かった。

第16話 大岩攻防戦（後書き）

誤字修正

殆どが強戦闘放棄予定 ↓ 殆どが戦闘放棄予定

先頭離脱 ↓ 戦闘離脱

炊かれる ↓ 焚かれる

第17話 影響

翁「国王軍が来るらしい」

現れた僕に翁が言う。

先ほどの3騎はその事を知らせる為に来た斥候だったようだ。

翁「出兵した兵数はまだ不明だが、1000や2000じゃきかない数のようじゃ。」

王子「こんなに早くに兵を出してくるとは」

騎士隊長「赤白両騎士団の出した偽の伝令に載せられたのか。はたまた大砦攻略後の疲弊した我らを一気に倒してしまう算段でしょうか。」

翁「ただ単に領地を攻められて頭に血が昇っているだけなのかも知れないがな」

そういうと翁は笑った。

だが実際は笑っていられる状況ではない。

こちらの兵力は4400程しか居ない。

姫を迎えに行ってる兵が戻っても6500にしかない。

国王派領主の土地を回っている1500の兵は元々国王派の領主の兵の為に、大砦が劣勢に陥ると裏切りかねない。

3騎の兵によると国王軍到着予測はは明日の朝か遅くとも夕方だ。

騎士隊長「唯一の救いは外壁の門を壊さなかった事です。そのお陰で大砦に籠城してもある程度は持ちそうです。」

籠城したからといって援軍はない。

だからと言って撃って出るのは危険すぎる。

どの様な状況にせよ籠城しか取る策は無い。

皆、その事を理解しており、すぐに籠城に向けて動き出した。

姫を迎えに行っていた兵たちが戻る。

大砦内の広場に降り立った姫は周りを見渡していたが、妖精少女の「お兄ちゃんだ」と言う言葉に反応してこちらに駆け寄ってきた。

姫「良くぞ…ご無事で」

僕「（皆で）無事に、と姫と約束しましたから。姫との約束は何があっても破れません」

笑顔で答えた僕の言葉に姫が嬉しそうに頬を染め俯く姫。

やはり皆が無事で嬉しいらしい。

美女さんに手を惹かれていた妖精少女は僕を見ると膝に抱きついてきた。（可愛い！）

すぐに今まであった事を色々報告してくれている。

「昨日何を食べた」とか「大砦に来る途中に狐の親子を見た」「子狼がどうしたこうした」「お兄ちゃんたちが出た後は小砦が静かで少し寂しかった」などの内容だったけど、逆にそういう何気ない事を一生懸命に話す妖精少女が可愛くて仕方ないので頭を撫でながら話を聞く。

その様子を美女さんも姫もにこやかに見ていたのに妖精少女が「お姉ちゃんが迎えに来た時に姫お姉ちゃんが一番最初に聞いたのはおにー」と言った所で「王子にも挨拶に行きましようね」と連れて行ってしまった。

真っ先に王子に会わないと行けないのに僕を見かけて来てくれたらしい。

姫は本当に優しい。

妖精少女の手を引いて遠ざかっていく姫の後姿を見ると爺がにこやかに話しかけてきた。

爺「無事で何よりです。」

僕「爺こそ」

爺「姫は若達が出撃した後は心配で寝ていらなかったようで、姫殿が迎えに来た時もすぐに大砦に向かおうと言うのをお止めしなければならぬくらいでした。」

僕「それほど心配なさっていたんですね」

爺「美女殿に無事を聞いても自分の目で無事を確かめたくて仕方ない様でした。いえ、逆に無事だったからこそすぐに合いたかったのかもしれないね」

いつの間にか戻ってきていた姫に「爺！早く！！」と姫には珍しい大きな声で呼ばれていた。

爺はその姿に笑みを一層濃くすると「それではまた」と姫に付いていった。

「勝手な事を言わないで！」と真っ赤に怒る姫ににこやかに「申し訳ありません」という爺を見送る。

―よっぽど王子の無事が心配だったようだ。

姫と爺を見送る僕に『逆にここで教えたなら我の負けのような気がする』とか何とか魔王が言ってたが意味を尋ねてもその後は『何でも無い』と答えてくれない。

まあ本当に大切な事ならちゃんと伝えてくれるだろう。それくらいは無条件に思える程度には僕は魔王を信用していた。

魔王『ニヤリ』

―信用しているからね！

籠城の準備は夜を徹して行われる。

結構な数の投石器が届いたので投石器を急いで塀の上に配置する。夜が深ける頃には何とか全方位の塀に十何機かずつ配置できた。

だが数がまだ足りない。

工兵長が大砦の工兵に作詞柄方法を教えるのには実際に作り方を見てもらい一緒に作り、その後に実際に作って貰わないと難しいらしい。

この世界の物作りは一人、もしくは数人の集団で完成までを作る。完成品に対する職人の自負なのだろうか？

作業の一部を誰かに投げると言うやり方はしない。

だからこそ教えるのに時間がかかる。

だから僕は部品毎に作る人間を分けて作成する方法を工兵長に言う。最初は戸惑い否定的だった工兵長も、一つの作業に特化する事がどれだけ作業が単純化し作業が楽になるかを説く僕の話真剣に聞いていた。

僕という事を理解した工兵長はすぐに投石器の工程を7つに分ける。そして工兵達と大砦の工兵も7つに分けると作業を指示した。

翌朝、主だったメンバーが集まって朝食を取っていた。本来なら他にも色々な領主を呼ばないとダメらしいが、誰を呼んだ呼んでないの話になってしまい煩わしい事この上ない。だから領主達は誰も食事に呼ばないようにしたそうだ。

卓を王子、姫、爺、翁、現領主、領主息子、僕、美女さん、妖精少女で囲む。

当初はテーブルの一番遠くに座っていた姫が、昨日の晩から隣で食事を取るようになっていた。

余りにも自然と隣に座られたので反応も出来なかった。

特に場所など決まって無いが、通常の王族は上手に座るものなのではないのだろうか？

―上手下手なんて分からないけど。もしかしたら僕が間違えたのかな？
かみて

王子を見ると僕の対面に座っているし誰も何も言わない。ただの食事の席順の話だし深く考える必要も無いか。

食事の後はそのまま今後の方針を話し合う。

斥候の情報をまとめると国王軍は約10000。
それだけの兵を出せるという事は国王軍はもっと多くの兵が居るの

かもしれない。

それを考えると鬱積したものを感ずる。

とりあえずは目の前の敵をどうにかするのが必要である。

少数による奇襲なども出たが、防衛を考えるとそれ程の兵を割ける訳でもなく、数百程度の兵では無理なので却下となった。

王子と姫を逃がすという話も出たがこちらは当人2人が猛反対した。

王子の「自分はこの軍の旗頭だから逃げる訳にはいかない」という言い分に爺と翁が「ご立派です」頭を垂れる。

だが姫も同く「自分も王族で逃げる訳には行かない」という言い分は誰にも受け入れられなかった。

姫には一度、国外へ出てもらった方が安全だという話で纏まりそうになった。

まだ反撃しようとする姫に美女さんが笑顔で立ち塞がる。

美女さん「姫様、今の状況は把握されていますか？」

姫「はい」

美女さん「それでも残ると？」

姫「はい」

美女さん「この国の為に戦う兵を置いていけないと？」

姫「そうです。私は――」

何かいいたそうな姫をそっと制し

美女さん「それなら国を出るべきです」

姫「何故!」

美女さん「わかりませんか? 旗頭になれる人物が同じ場所に居るのは不都合があります。しかもその場所は戦火に巻き込まれるんです」

姫「……」

美女さん「国を思うなら今後を考えて一時的に国を出るべきです」

姫「それならせめて小砦に――」

美女さん「そうすると今度は姫を守る兵を裂かないといけません」

姫「――っ!」

「他に残るべき理由はありますか?」という美女さんに俯く姫。少しの間、姫を待っていた美女さんはこちらを見て「姫と2人で話をさせてください」と僕達を部屋から追い出した。

そう長くない時間で部屋の扉を開き、美女さんと姫と妖精少女が出

てくる。

どういう話し合いが行われたのかわからないが美女さんはいつもの笑顔で姫は俯いており、妖精少女は姫を心配そうに見ている。

美女さんは僕を見ると頷いた。

何とか美女さんがちゃんと説得してくれたようだ。

美女さん「お待たせしました」

爺「姫は納得いただけましたか？」

美女さん「その前に、若」

僕「はい？」

急に呼ばれて驚く。

美女さん「若はどう思います？姫を国外へ、という話は」

僕「寂しいですが姫の安全を考えると仕方ないと思います」

美女さん「寂しいんですか？」

僕「もちろんです。出来ればこのまま（皆と）一緒に居たいくらいですよ。」

僕の言葉に姫がふらつくの妖精少女が支える。

やはり美女さんの説得で納得していたとしても悲しいのだろう。
僕は出来るだけ姫の気持ちを和らげてあげようと思った。

僕「僕は姫に元気に笑っていて欲しいからこの戦争に加担しているんです。だから――」

美女さん「だから？」

僕「だからその姫を出来るだけ危険な目に合わせたくない」

美女さん「『僕が守る』くらい言えればいいのでは？」

僕「今の状況はそれだけじゃ済まないくらい危険なんです。とても言えません」

美女さん「言えるなら言うത്？」

僕「もちろんです。（友達の）姫の笑顔を守る為なら！」

美女さんは笑顔で頷いた。

姫はもう座り込んで両手で顔を覆ってしまっている。

妖精少女が「よしよし」と姫の頭を撫でていた。

自分だけ逃げるように言われる状況に涙が止まらないのかもしれないかもしれない。

美女さんは翁と爺を見た。

美女さん「姫と話をしまし、納得しました」

翁「では――」

美女さん「はい。姫には残ってもらいます」

—寂しいけど仕方ないよええええええええ！

美女さんの言葉に翁が「は？」と言う。

美女さん 「私も国の為なら出るべきだと諭しました」

爺「では何故!？」

美女さん「国の為ではなく一人の人間として大切な人を残して自分だけ安全な場所に居るのは嫌だ、と言われ私が納得しました」

確かに王子や付き合ひの長い爺を残していくのは本当に心苦しいだろう。

「姫…」と爺が諭すような声を出す。が姫は顔を覆ったまま首を振る。それを見た爺が僕を見る。

—え？ 何で僕？

よく見ると姫以外の人が僕を見ていた。

―何なの？

魔王『…何か言えば良いのでは？』

僕が口を開く前に「先ほど、若の意見を聞きました」と美女さんが言う。

美女さん「若が姫の笑顔を守るというなら、従者の私はそれに従うだけです」

そうか、だから美女さんは僕に話を聞いたのか。
顔を覆ったままの姫を見る。
顔を覆い俯いて座り込む姫は本当に小さく弱々しい。

美女さん「若」

美女さんを見ると笑顔で僕の言葉を促した。

僕「―姫にこのままいてもらう事は出来ないでしょうか？」

一同が僕を見る。

僕「姫の脱出に多くの兵は避けません。でも少数だと無事脱出できるかも分かりません」

爺「それで？」

僕「姫が大砦を出るとなると士気にも関わります」

翁「だから残るべきだと？」

頷く僕。無理やりなこじ付けだ。

小砦に行けば少しは兵が居るので、そこから出せば問題は無い。

姫が残ると士気が上がるのは確かだが、王子がいればそれほど問題は無い。

それを承知でこじ付けたのだ。

翁もそれを理解の上で首を振り否定的な事を言おうとしたのを制して僕が先に口を開く。

僕「姫の望む事を叶えたい」

翁「それが危険だとしても？」

僕「姫の笑顔に為なら」

翁「なぜそこまで？」

僕「姫は（友達として）大切な人だからです」

翁と視線を外さずに言う。

ここは目を逸らしたらだめだ。

後ろで姫の「はうわあ」という良く分からない台詞と、妖精少女の「ひ、姫お姉ちゃん!」という声が聞こえてくる。

どうなってるのか物凄く見たいけど翁から視線を逸らすわけにはいかない。

翁「それでもだめじゃ」

翁はどうしても譲らない。

僕「では僕もここまでです」

王子「なんですって?」

僕「姫と一緒に国外に出ます」

翁「何をしてるのか判っておるのか?」

僕「はい」

翁「今、この大事な時に?」

翁の言葉に怒気が孕む。
それを僕は無表情に見る。

僕「ええ」

翁「とち狂ったか！」

僕「僕はずっと正常ですよ」

翁「この状況で投げ出す事など許されん！」

僕「誰の指図も受けない」

翁「何？」

僕「先程も言ったとおり、僕は姫の笑顔を守る為にここにいます」

翁が「だからどうした」と言わんばかりに僕を睨む。

僕「はっきり言ってそれ以外興味が無い」

翁が眉をひそめる。

僕「この国なんか知ったことではない」

僕の言葉に翁が一喝しようとする前に

僕「姫がこの国と民を守る事を望むから僕はここにいます」

爺「……」

僕「もし姫が逃げる事を望めば連れて逃げるし、国を潰す事を望むなら潰す」

翁「な、に？」

僕「僕は自分のしたいようにする。その『したい事』に『姫の笑顔を守る』というのが当てはまったから反国王軍にいるだけだ。他人に指図される覚えは無い」

僕の言葉に翁が黙る。

僕「邪魔立てするなら――」

僕は楽しくて仕方なくなり冷笑を浮かべる。

僕「――全員敵だ」

その雰囲気に関わり何人かが腰の柄に手をやる。
それを見ながら「やるならやるよ」とばかりに冷笑を強くする。
一気に緊張が高まる中、翁が「さて」と周りを制する。

翁「―美女殿の意見は？」

美女さん「若の意のままに」

美女さんが笑顔で言う。

翁「ここには6000以上の兵が居ても？」

美女さん「若が望むなら」

迷いもなく言う美女さんに翁は何も言う事が無く僕を見る。

翁「若、本気か？」

僕「それはこっちが聞きたい。」

翁「……」

僕「時間は無いので今すぐ決めてくれ。国王軍が来る前に姫を連れて出ないといけないのでね」

翁「姫も連れて行くと？」

僕「元々国外に逃がすのだろう？俺が第一王女とやらの所まで連れて行ってやる」

翁「ならんと言ったら？」

僕「仕方ない」

僕は全然「仕方ない」感じを出さずに腰の剣を隠すように半身立ちになる。

実際にどうでも良かった。

邪魔するなら排除するだけだ。

俺が出るより一瞬早く「わかった」と翁が言った。
半身立ちのまま翁を見る。

翁「姫には残って頂く」

それを聞いても俺は動かない。

翁「だからここは収めてくれ」

俺は翁を見たまま「姫」と呼びかけた。

姫「は、はい」

僕「姫はどうしたい？」

姫の言葉を待つが反応は無い。

僕「ここに残り今まで通り国王軍を倒す為に戦うか―俺と来るか」

姫「え、あ…」

僕「笑顔になれる方を選べば、俺はそれを手伝うさ」

姫「…戦います」

僕「そうか―」

それを聞いた僕は半身立ちから体を戻し姫に振り向く。

僕「姫がそう望むなら俺は国王軍を倒そう」

姫「！」

驚きで顔を真っ赤にする姫を見て面白い事を思いついた。

僕「姫、立って」

俺は姫の手を引き立ち上がらせる。

俺「今から俺が言う事に納得できたら剣を取って何か言え。気に入らなければ剣を取らずに何か言え」

姫「え？」

俺「それでいい。『はい』でも『いいえ』でも『あ』でも『え』でも何でもいい。最初に発した言葉で判断する」

立っている姫と向かい合い、一步下がると片膝をついた。

剣を鞘ごと抜き取り葉の部分を自分に、柄の部分を姫に向ける。

僕「我が剣を姫に捧げる。」

姫が声を出しそうになり無理や飲み込む気配を感じ顔に出さないようにほそく笑む。

姫が震える指で剣を受け取り「はい」とか細く言う。

俺は立ち上がると姫を真っ直ぐに見つめ

僕「敵を打ち滅ぼすまで貴方の剣となり戦いましょう。剣を――」

呆けている姫に「剣を」と再度言うにあわてて渡してきた。

僕「貴方の笑顔を守る事をこの剣に誓う」

そう言うとは振り返り翁を見た。

翁「どういうことじゃ？」

僕「見ての通り」

翁「今までどおり戦ってくれると？」

僕「国王軍を倒すまでは、。それに――」

翁「それに？」

僕「今まで通りじゃないですよ」

翁「？」

僕「僕は姫にのみ忠誠を誓いました。他の誰の指図を受けるつもりもありません」

翁「姫の騎士だと？」

僕「そうですね」

「国王軍を倒すまでです」が」と言うとき翁が「わかった。お願いすると笑い出した。

「わらしのー」という姫の声と「姫お姉ちゃんがまた!」という妖精少女の声が聞こえて振り返ろうとした時に爺が声を掛けた。

翁「先程の誓いの作法はなんじゃ?」

僕「昔見たとある騎士の叙任式を自分なりにアレンジしてやりました」

翁「なるほどのう」

美女さんが「とりあえずお部屋に戻りましょう」と姫と妖精少女を連れて部屋に戻る。

王子「しかし先程の若殿はすごい迫力でしたね」

爺「全くです。危うく腰の剣を抜くところでした」

僕「そうですか?」

「そんなに酷かったかな?

爺「普段はどちらかと言えば温厚に見えたのに、いやはや全く見かけによりませんか」

翁「なぜ美女ほどの者が従者として付いているのかと若干不思議に思っていたのじゃが、あれを見ると納得じゃな」

皆が驚きをあらわすが、実は自分自身が一番驚いている。
普段の自分からは想像も出来ない態度と口調だった。

—もしかして魔王が体に乗っ取った？

魔王『乗っ取っておるのはお主だろう』

—そうだけど！

魔王『別に入れ替わったりしたわけではない。やり方もわからんし、出来るならとうにしている』

—確かに、じゃあ何だったのだろう？

魔王『眠っていたお主の本性では？』

—まさか！

魔王『あの状況で女に告白とは、見下げた性根だ』

—ば、僕はそんな奴じゃない！それに告白違う！！

魔王『だろうな。冗談はさて置き、あれは私の意識と長い期間いる事による影響だな』

—どういう事？

魔王『一つの体に二つの精神があるのだ。本来ならどちらか弱い方が吸収されて消えるのが、それが起こらずに長い間一緒に居るんだ。互いに影響しあっても可笑しくあるまい』

—じゃああれは魔王の性格の所為じゃ無いか！このエロ！！

魔王『子供のお主と違って我は大人だからな。あれくらい何とも無い』

—くっ、もういいよ。で、このままずっとこの状態だと僕達はどんなの？

魔王『分からん』

—わからんって

魔王『今まで聞いた事も見たことも無い状況だ。今言った事も所詮は状況から見た推測でしかない。先の事はわからん』

確かにそうだ。

—魔王も僕に影響されているの？

魔王『かもな』

― かもなっ

魔王『先程みたいに変化が顕著ならわかるが、徐々になら気がつかないだろうしな』

― そうか

魔王『だからこそ怖いのかもかもしれないな』

これ以上魔王に悪影響を受けないように、この戦いが終わって妖精少女を送ったら元に戻る方法を探そうと心の中で思った。

第17話 影響（後書き）

誤字修正

作詞柄方法

↓

作成方法

第18話 夜襲

翌日の夕方。

大砦の周りには国王軍が犇ひしめき今にも怒号を上げて襲い掛からん状態だった。

なんて事は一切無かった。

本来なら夕方には大砦に到着するはずの国王派領主軍はまだ姿を見せてなかった。

何かの作戦で到着を遅らせているのかと探らせた。
もしかしたらまだ援軍が来るのかもしれない。
別働隊が回り込むのを待っているのかもしれない。

斥候を四方に飛ばし色々確認したが、どうやらただ単に進軍速度が遅いだけのようだ。
もしかしたらこちらを焦らして不安感や焦燥感を煽る為なのかもしれない。

―逆にそうであってくれ！

相手の意味の分からなさに良く分からない事を願う。

斥候から国王軍の到着が朝以降になるだろうという報告が入った。

爺「なんというか―」

翁「やはり奴らは無能じゃな。」

僕「え？」

翁「時間を開ければ開ける程、こちらが準備を進めるとというのが理解できておらん」

僕「何かの作戦とかでは？」

騎士隊長「その可能性は無いと思われます」

翁「ただの馬鹿なのじゃ。どうせ有力貴族の誰かが疲れたただの何だの言って遅らせているのじゃろう」

僕「それなら一部の兵だけ置いて他は先に行かせるべきでは？」

翁「そこら辺が無能の極みなんじゃ。」

爺「怖くて10000の軍勢を分けることが出来ないんでしよう」

魔王『そんな俗物を相手にしなくてはならんのか』

王子「有力貴族は国内でも屈指の兵数を持っているが戦闘自体はし

た事が無いものばかりです」

翁「だから戦の何たるかを知らん。逆に言えばこそが我々の付け入る隙となろう」

防衛の準備は夜通し行われたお陰でかなり充実した。

これも国王軍が夕方には現れると思われていたからである。

それがまだ来ない。

兵士の緊張感が肩透かしによって若干緩んでいる。

僕「もしかしてコレを狙ったとか！」

翁「現実をみよ。ただ遅いだけじゃ」

僕「ソウデスカ」

爺「でも兵士の緊張感が切れてしまったのはまずいですね」

王子「どうにか士気を上げる事が出来たらいいんですが…」

うむむ、と皆が考え込む。

僕「姫と美女さんと妖精少女が部署周りしながら『頑張って』って

言ったら上がりすぎてヤバイ事になりそう」

王子・爺・翁・騎士隊長・現領主「」「」「それです（じゃ）！」
「」

僕の冗談で呟いた言葉に一斉に反応する。

―マジですか？

魔王『いや、士気を上げる策としては最善だろう』

すぐに姫と美女さんと妖精少女へ行ってくれる様をお願いをした。
姫は軍隊の指揮を上げる必要があると聞かされ2つ返事で了解した。
美女さんは笑顔で「それくらいなら構いませんよ」と答え、妖精少女は「お兄ちゃんが一緒なら」と頷いてくれた（可愛い！）

魔王『王子にも行かせろ』

―王子？

魔王『少なからず女の兵士も居る。その為だ』

―なるほど

僕はすぐにその事を伝えたと王子も一瞬困惑したが納得した。

部隊への激励は功を奏している。

というよりは上がり具合が過剰すぎて怖い。

幾つか部署を回って兵士達の上がり具合を見ると、何となく分類が見えてきた。

美女さんと妖精少女のファンの色の違いが凄すぎて際立っている。多くは語らない。

さらに幾つか回って疑問に感じる。

兵士達が腕に付けている紐が気になる。

最初は気にも留めていなかったが、途中で気になたものの元の部隊の目印か何かだと思っていた。

だが殆どの兵が何かしろの色を付けている。

しかも数種類を付けている人も居る。

謎だ。

幾つか回った時に気が付いた。

色は全部で5種類のようなのだ。

もしかしたらまだあるのかも知れないが、今のところは見えない。

一時半（約3時間）程たって半分ほど回った。
残り半分である。

とある女性部隊で謎が深まった。

女性兵士と話をしていた所に王子が近づいてきた。

王子の笑顔にテンションが上がる水色をつけた女性兵士達。

王子「もうしわけありませんが、そろそろ次へ行かないといけません」

僕「もうそんな時間ですか」

女性兵士達に別れの挨拶をしその場を去ろうとして王子が木材の破片に足を取られる。

とっさに腕を掴んで倒れるのを防ぐ。

僕「大丈夫ですか？」

王子「ありがとうございました」

女性兵士水・女性兵士黒・女性兵士水黒「」「」「――――

――！！」「」「」

ものすごい超音波が飛んできて驚いて後ろを振り返ると女性兵士達

が発狂してた。
なんか怖い。

と、良く分からないテンションのまま女性兵士水黒の一人が女性兵士水に黒い紐を手渡し、女性兵士水がそれを受け取り腕につけて女性兵士水黒にクラスチェンジした。

握手を交わす女性兵士水黒と新たに水黒になった女性兵士。

「水黒？黒水？」などとどちらでもいいような良く分からない事を話し合っている。

―何の儀式なの？というかいつも紐を持って歩いてるの！？

他の色の紐をつけていた女性兵士達も次々と水色と黒色の紐を受け取って付けている。

周りの部隊でも同じようなやり取りがなされている。

謎は深まる。

次の部隊に行く為に部隊を離れるときに注意深く兵士を見ていたら、どこの部隊でも激励の後に新たな紐の交換会が行われていた。

あれは兵士間のコミュニケーション手段なのだろうか？

この世界の流儀はまだよくわからない。

とある部隊では男性全員が黒だった。

姫や美女さん、妖精少女の激励も物静かに聞いている。

今までと違い落ち着いた部隊だ。

王子が挨拶し僕も「頑張ってください」と言い終わった後に「はっ！！」と全員が一斉に敬礼した。

全員話終わったからと言っていきなりそういう事されると焦る。正直ビックリした。

騎士隊長の部隊は全員が赤だった。

美女さんの挨拶に全員直立不動で聞いている。ますます反応が信仰っぽくなってきた。

全ての部隊を回り終わった。

どこの部隊でもやはり紐の受け渡しと握手が行われていた。

気になるのは姫がいつの間にか黒の紐をしていた事だ。

どうしたのか聞いたら「女性兵士の部隊で貰いました」としどろもどろに答えた。

どういう意味か聞いたら物凄く目が泳いでいた。

「お守りみたいなものですよ」と美女さんがいい「そ、そうなんだろう！」と姫が囁んでいた。

僕「お守りですか。どういう意味があるんですか？」

美女さん「紐によって違うようですよ」

僕「そうなんですか。僕も何かつけようかな」

姫「！」

僕「何色がいいかな。黒が一番付けやすい色かな」

美女さん「願掛けのような物ですから色で選ばず内容で選ぶべきかと」

僕「何色が何かわかりませんから」

姫「も、桃色なんてどうでしょうかつ！」

僕「どういう意味があるんですか？」

姫「え、えっと――」

美女さん「幸運を呼ぶんです」

姫「そ、そうなんです」

僕「姫のつけてる黒は？」

姫「――っ！」

美女さん「大切な人の無事を祈る、ですよ」

僕「なるほど、じゃあ桃色でいいか。後で誰かに貰おう」

美女さん「どうぞ」

「なんで持ってるの？」と思ったら姫が貰った女性部隊で貰っていたらしい。

それを腕につける。ミサンガみたいだ。

美女さんは妖精少女に「私達は姫と同じ黒にしましょうか」といい、嬉しそうに頷く妖精少女に付けていた。

子狼の首にも巻いていたが、危ないのだろうか？

姫が後ろを向いて小さくガッツポーズをしていた。

妖精少女と一緒にうれしいらしい。

その夜にいつもの面々で食事を取っていた時の事。

翁「若は桃色をつけているんですか」

翁が僕の腕の紐を見ている。

隣で姫が「カチャ」と食器を鳴らす。めずらしい。

僕「ええ幸運の色だと聞いたので」

翁「ほう。幸運ですか」

僕「はい」

翁「黒は？」

僕「たしか、無事を祈る？」

美女さん「大事な人の無事を祈る、ですよ、若」

僕「そうです」

翁は姫を見て「なるほどのう」と言った後は、別の事を話し出しこの話題には触れなかった。

翌日の日入前にちにゆう（17時頃）になって国王軍が現れた。

国王軍は大砦の横を流れる小さな川のあたりに集まると陣を引き出した。

爺「あんな所に陣を引くとは」

爺「おおかた水欲しさでしような」

場所としては悪くないが大砦から近すぎる。

自分達の数が圧倒的に多い事と大砦から弓が届かない距離という事を考慮しているらしいが、本来ならありえない距離である。

僕「舐められてますね」

翁「それもあるが、やはり馬鹿なのじゃろう」

僕「届きますね」

翁「届くな」

僕「夜にでもやりましょうか」

翁「今じゃなく夜とは人が悪い」

翁が「それがいい」と笑った。

すぐに主だったメンバーが呼ばれる。

国王軍の居場所を確認し投石器が届く距離なので夜中に打ち込むと言う話をする。

翁「夜なら敵も何が起こったかわかりにくく混乱するじゃろう」

僕「ついでに夜襲も掛けましょう」

騎士隊長「しかしそれはこの前、無謀という結論に至ったのでは？」

僕「この前と状況は変わりました。投石器の混乱に紛れれば十分可能だと思います」

一同が考え込む。

爺「しかし投石器で石が飛んでくる状態では味方も危ないのでは？」

僕「撃つ数を決めたらいいですよ。各2発撃ったら突入等とね」

爺「ふむ」

僕「一撃離脱で離れたら砦に合図をし投石をまた始める、という感じ」

この方法なら投石器にやられる危険はある程度は危険は減る。

王子「確かに今のうちに出来るだけ削っておいた方がいいと思います」

翁「これで崩れてくれれば、万の兵が一夜でやられたという情報で我が方に乗り換えるヤツラも出てくるかも知れんな」

王子の「やりましょう」の一言で夜襲決行が決まった。

夜襲は僕と美女さんと領主息子、騎士団長が行く事になった。

兵は多すぎてもばれる可能性がある。

僕、美女さんと領主息子、兵士隊長の2組に分かれて各200名ずつ兵を率いる事になった。

夜中の間に小分けにして兵と大砦外に出る。

そのまま2手に分かれて国王派領主軍の左右に陣取る。

鶏鳴（けいめい、2時頃）、予定の時間に差し掛かる。

後は混乱し出したら突入するだけである。

じりじりと時間が過ぎるのを待つ。

見付からないように少し距離をあけて待機しているのでもしかしたら声が聞こえないかも？などと思っていたら「どん」という鈍い音と共に人の悲鳴が聞こえてきた。

それを合図に僕達は馬を駆る。

無言で馬を走らせ国王軍の陣に乗り込むと、そのまま声を出さずに手当たり次第に切り倒しながら陣を進む。

人もテントもかがり火も。

何でもかんでも剣でなぎ払いながら無言で走り、そのまま国王軍の陣を通り抜け追いつかれないように遠くへ逃げる。

合流地点に向かうと領主息子の部隊は先に居た。

ドンという鈍い音が聞こえてくる。

どうやら投石を再開したようだ。

領主息子が再度の夜襲を提案してきた。

2回も来るとは思っていないはずで今なら混乱もしているので大打撃を与えるはずだ、と言うのが言い分である。

確かに理屈は分かるけど僕は否定した。

領主息子「なぜですか？」

僕「投石中で石が飛んでくる中に突っ込むのは危険です」

領主息子「大砦に伝令を送り止めてもらえばいい」

僕「伝令を送り戻ってくるのを待っている間に敵は撤退するよ」

領主息子「伝令を送ってすぐに出ればいいではないか！」

僕「それはタイミングが不確定すぎる。」

領主息子「投石が止まったタイミングで行けばいい」

僕「それだけでは止まったのが夜襲の為なのかたまたまなのかが分からない。」

領主息子「削れるうちに削らないと!」

僕「それは分かります」

領主息子「なら!」

僕「でももう遅いです」

領主息子「何と?」

僕「今から向かってても敵は移動してしまってますよ」

領主息子「何故分かるんです?」

僕「領主息子は岩が飛んでくる所にいつまでもいますか?」

領主息子「だからこそ急ぐのです」

僕「だから間に合いませんよ。もう投石も止まっていますし」

そういう話をしている間に石の落ちる鈍い音がなくなっている。

領主息子「なぜ止まった?」

僕「暗闇で国王軍の撤退は分かりにくいですが、明日の籠城戦もあります。石を無駄撃ちしない為にちよつと早いかなくらいで止めたんでしょう」

領主息子「美女殿はどう思われる」

美女さん「若の意見に賛成です」

領主息子に無言で指名された兵士隊長も「同じです」と短く答えた。その意見を聞いて「やはり自分はまだまだ思慮が足りないな」と言う。「わかりました。戻りましょう」と領主息子は笑顔で言って帰路についた。

夜襲メンバー総勢400名のうち未帰還者25名、負傷者14名。一万の陣営に飛び込んでこの結果なら上場だと言えるだろう。後は日が昇った後の相手の損害予測だけだ。

斥候から国王軍の現在の位置が伝えられる。どうやらある程度大砦から離れたようだが未だに撤退せずに残っているようだ。

日が昇り国王軍の陣営後が見えてくる。意外と陣営は天幕などが綺麗に残っていた。確かに石が押しつぶした場所や夜襲で通り抜けたであろうあたりは

無残な状況だが、それ以外の場所は天幕などが綺麗に残っている状態である。

どうやら投石と夜襲の混乱が恐怖を呼んで連鎖的に撤退していったようだ。

国王軍の場所を確認しすぐに兵を出して国王軍が置いていった補給物資がある程度大砦に運び込む。

本当は全部回収したいが国王軍が戻ってきては元も子もないのでもっていけない分は火を放つ。

これで国王軍の物資は大幅に減り短期決戦を挑むか撤退しかなくなるだろう。

陣営に残っていた死体から夜襲と投石で10000〜20000くらいは死んだようだ。

国王軍の残りは多くて9000。
対する僕達は6500。

まだまだ厳しい状況は変わらない。

昼前に国王軍が来た。

機能見たときより若干、みすばらしく感じるのは昨日の夜襲のイメージの為だろうか。

一部の兵が陣営後の中を回っていたがすぐに国王軍本隊へと戻っていった。

もしかしたら置きっ放しの物資を期待していたのかもしれない。

すぐに国王軍から前進のラッパが聞こえていた。
やはり短期決戦しか無いという判断だろう。

翁「やはりすぐに来たか」

爺「諦めればいいものを」

翁「さすがに何もせずに逃げ帰るとまずいという頭が働いたのかの」

爺「頭に血が上ってるだけで無いといいが」

国王軍が隊列を組んで向かってくる。

こちらの矢が届くかどうかあたりで盾を掲げて一気に走ってくる。

翁「頭に血が上っていたようじゃ」

兵士隊長の「撃て！」の合図と主に矢と投石を撃ち始める。

矢は前に走る雑兵に降り注いだ。

しかし投石は雑兵を飛び越えて少し置くに落ちると敵を巻き込みながら小坂を転がって止まった。

どうやら国王派領主軍の正規兵の一部に当たったらしく明らかに距離を取り出した。

雑兵と正規兵の間が開く。

数刻がたった。

矢と投石で国王軍は未だに塀に近づけないでいる。

―このままなら行けるかもしれない！

誰もがそう思った瞬間に物見やぐらの兵が「敵影発見！」と叫ぶ。
仰ぎ見ると物見やぐらの兵が領主軍の方を指差していた。

「領主軍右後方より接近する部隊があります。数不明、1000以上はいる模様！」

ここに来ての敵への増援は大砦にいる者に大きな衝撃を与えた。

第18話 夜襲（後書き）

第19話 死亡フラグ

「―3000以上はいる模様！」

その声を聞いて僕は塀の上に掛け昇った。

軍勢は遠くてよく分からないが騎兵が多いようだ。

敵の援軍だと知り兵の士気が下がるのを感じる。

魔王『このままでは崩れるぞ！』

目は振り返り大きな声で叫んだ。

僕「手を止めるな！撃て！」

僕も弓を打ちながら叫ぶ。

―このままでは

僕「たかが数千増えるだけだ！やることは一緒だ！！」

周りの兵を叱咤する。

―敵に押しつぶされる

僕「ここでやらなきゃ押し込まれるぞ！」

士気の低下が止まらない。

―そうしたら姫と妖精少女が

僕「打たなきゃ死ぬぞ！姫や妖精少女が死ぬぞ！僕はそんなのは嫌だ！！」

必死で弓を打つ僕の言葉に弾かれたように周りの兵が弓を打ち出す

―嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ

僕「嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！そんな目には合わせたくないんだ！！！！」

必死で弓を打つ僕を「出すぎです」と数人の兵が僕を羽交い絞めに
して物陰引きずり倒す。

どうやら必死すぎて塀から身を乗り出さんばかりだったようだ。

気がつくとも周りの兵が「姫を守れ！」「妖精少女の為に！！」と声
を出しながら弓を射ていた。

砦の広場でも同じように叫んでいる。

魔王『何とか耐えたな』

―何か疲れた

まだ始まったばかりなのに物凄く疲れた。

隙間から先ほどの軍勢を探す。

国王軍の後方から来た軍勢はほぼ騎兵で国王軍に合流しようとしているようだった。

―どこの軍勢だろう。

そう思った瞬間にその軍勢が牙を剥いた。

ゆっくりと国王軍に接近した軍勢はいきなり鬨の声を上げると国王軍の側面に突撃した。

その光景を見ていた兵の一人が「赤と白の騎士団の旗だ!」と叫ぶ。

それを聞いた僕は塀を飛ぶように降りて騎乗すると近くの王子の所に駆け寄る。

僕「来たのは赤と白の騎士団で国王軍に攻撃してます。今がチャンスです」

「撃って出ましょう」と僕が言うと王子は僕を見つめて「分かりま

した」というと「撃って出る！開門！！」と叫んだ。

それに合わせて僕は「赤白両騎士団がこちらに付いた！今こそ国王軍を打ちのめすぞ！」と叫んだ。

門前の弓がやむ。

それを好機と見て門に突っ込もうとしていた敵集団は、開いた門から出てきた騎兵に浮き足立った。

「蹴散らせ！」と叫びながら突っ込んでいく騎士隊長。

そのまま一部の塀を連れて回り込むように塀に張り付こうとしていた敵兵に当たっていく。

僕達はそのまま真っ直ぐ国王派領主軍の正規兵集団に向かっていく。

乱戦になる。

このままでは犠牲が増えてしまう。

ふと見ると乱戦の輪の外に巻き込まれるのを避けるように退避する集団が見えた。

僕「目の前の敵だけに掛かりきりになるな！敵の指揮官が逃げるぞ！近くの者は優先的にあいつを狙え！！」

剣を突きつけて叫ぶ。

そんな事は無理なのは分かりきっている。

ただ相手の頭が逃げる事を敵に教えているだけだ。

そこからの決着は早かった。

僕に剣を突きつけられた相手は剣が届く距離でもないのに「ひっ！」と声を出すと「早く逃げるぞ！」と乱戦から離脱して行った。それを見た兵たちが次々と後を追うように逃げていく。その動きが連鎖的に加速してあつという間に国王軍は撤退をしていた。

僕は兵に追わない様に伝え大砦に引き返した。

3刻ほどして大砦に赤と白の両騎士団が現れた。両騎士団から4名の人物だけが砦の門の前に進み出る。その内の一人が自分は赤の騎士団長でもう一人が試論騎士団長、残りの2人が両騎士団の副団長である、と言った。

赤の騎士団長「反国王派への帰順を求める。王子に面会を！」

すぐに騎士団長と爺が門の上に立ち確認する。
爺の「確かに両騎士団団長ですな」という言葉に門を開いた。

広場で出迎えた王子と姫に騎士団全員が跪く。

赤の騎士団団長「赤の騎士団総勢1900名、王子に忠誠を誓いま

す」

白の騎士団団長「白の騎士団総勢2300名、同じく王子に忠誠を誓います」

王子「感謝します」

王子が「ありがとう」と再度言おうと騎士団は立ち上がる。

そんなにすぐに信じて大丈夫かなと思ったら、元々両騎士団団長は王子派らしく、それで危険視されて幽閉されてしまっていたらしい。それに姫も小さな頃から知っているらしく、妹のように感じているようだ。

すぐに3800名の元両騎士団出身の騎士のことを伝えたと両騎士団副団長が再編入する為に何人かの騎士を連れて走っていった。

赤の騎士団団長「遅くなって申し訳ありません」

王子「いえ、無事で何よりでした」

白の騎士団団長「王子達が騎士団員達に策を授けてくれたお陰です」

王子「その策を考えたのはこちらの若です」

急に話を振られて驚く。

僕「どうも」

両騎士団団長が僕を見る。

どちらも団長という割には若く見える。

30代後半といったところか。

両騎士団副団長の方が年上のような気がする。

赤の騎士団団長「貴殿が若殿か」

僕「はい」

赤の騎士団団長「貴殿のお陰で我々もこうして自由になれた。感謝する」

僕「いえ、そんな」

白の騎士団団長「全くその通りだよ。憎い有力貴族に一泡吹かせてやることも出来たし、本当に感謝してるよ」

白の騎士団団長が笑う。

どうやら両騎士団の団長は少し毛並みが違うようだ。

赤の騎士団団長「騎士団を再編成したらすぐに追撃に出撃します」

王子「少しは休んだ方がいいのでは？」

赤の騎士団団長「いえ、今が好機です。ここで攻め込まないと！」

白の騎士団団長「敵は削っておくに越した事も無いですしね」

翁「そうじゃな。こちらも一部の兵を出そう」

王子「全軍で向かうべきでは？」

翁「物資なども運ばなくてはなりませんからな。」

すぐに大砦の兵から2000の騎兵が出兵の準備を行う。

同時に物資を運ぶ後発隊の準備も始まり、両騎士団の編成と合わせて大砦内が慌しくなる。

両騎士団団長と何かを話し合っていた翁と王子に呼ばれる。

王子「若に追撃部隊の指揮をお願いします」

僕「はい？」

王子「追撃部隊の、指揮です」

僕「僕が？」

翁「今までの事情を鑑みて適任と判断したのじゃ」

王子「お願いします」

僕「は、はい」

王子の気迫に押されて頷く。

王子「今までの事でかなり若の評価は高いですが、ここでもう一押しして置きたいんです」

いつの間にか僕の評価が高くなっているらしい。

魔王『方針の決定、敵の取り込み、投石兵器の発明…中々の戦果だろう』

—そうかな

評価されるのは単純にうれしい。

王子「姫姉さまの為にも」

—姫？

確かに敵を減らして王都に向かう事は姫の願い一步も二歩も近づく。

爺「そうですね。チャンスがあればどんどん行かないと行けません」

翁「周りを黙らせるくらいにな」

うんうんと頷く爺と悪そうに笑う翁。

やはり相手が弱っている時にはがつつりと行かないとダメだね！

僕「分かりました」

王子「よろしくお願いします」

僕と一緒に美女さんと領主息子、兵士隊長が行く事になった。

赤白両騎士団団長にも挨拶をする。

赤の騎士団団長「よろしく願います」

白の騎士団団長「お手並み拝見ですね」

どちらの騎士団団長も僕が行く事には特に不満は無いようである。
気になって赤の騎士団団長に聞くと「赤の副団長から話は聞いた」と言っていた。
初めてあったときの事だろうけど、特に大した事をした記憶は無い。

白の騎士団団長は美女さんに笑顔で挨拶していた。

白の騎士団団長「初めましてお嬢さん。白の騎士団長と申します。
お見知りおきを」

美女さん「若の従者をしている美女と申します。」

白の騎士団団長「若殿はこんな美人を従者にしているなんてうらやましい」

僕「はあ、どうも」

白の騎士団団長「どうですか？戦が終わった後に食事でも」

美女さん「私は若の従者ですので」

白の騎士団団長「つれないですね。貴方に食事を頼むのに若殿に決闘を申し込まないとダメですかね」

—なんでそんな話に

白の騎士団団長「今のうちに約束でも取り付けておきましょうか」

そう言うと白の騎士団団長が僕の方を見て笑う。

美女さん「若に危害を加えようというのなら私がお相手しますよ?。」

白の騎士団団長「ダンスのお誘いならうれしいのですが」

美女さん「それなら他を当たってください」

白の騎士団団長「ではお願いしましょうか」

そう言うと美女さんに向き直る。

剣の柄に手を当て立つ白の騎士団団長。

数歩踏み込むと一瞬で剣を抜き美女さんにせまる。

美女さんは笑顔でそれを眺めたままピクリとも動かない。

剣先を美女さんの首に当てた状態で止まる。

少しして剣をしまう白の騎士団団長。

白の騎士団団長「ご無礼をお許してください」

美女さん「もうよろしいのですか？」

白の騎士団団長「大体分かりました。ありがとうございます」

美女さん「そうですか」

白の騎士団団長は僕にも向き直り「急に申し訳ありませんでした」と笑顔で謝罪した。

僕「いえ、切られなくて良かったです」

どちらが、とは言わなかった。
それで白の騎士団団長も分かったらしく、笑顔で「まったく」と頷いた。

あの騎士団団長も「聞きしに勝る」と言っていた。
いつどこで美女さんの噂を聞いたのか知らないが自分で噂を確かめてみたらしい。

姫と妖精少女が現れた！

普通に妖精少女の手を引いた姫が王子と翁達と来ただけだけど。

2人は激励に来てくれたようだ。

赤の騎士団長がこれまたどこで聞きつけたのか「あれが幸運の少女か」と妖精少女を見て呟いた。

「彼は迷信やまじないを信じる性質たちなんだよ」と白の騎士団長が小声で教えてくれる。

まじないと聞いて花占いを想像し、花占いをする赤の騎士団団長を想像して笑ってしまった。

妖精少女「おにいちゃん、気をつけてね」

僕「うん。美女さんも領主息子もいるし大丈夫だよ。」

妖精少女「うん」

姫「若…」

姫が真剣な表情でこちらを見ている。
やはり戦は不安なんだろう。

僕「必ず勝ちますよ」

姫「どうか、ご無事で—」

僕「次に会うときは姫を王都へ迎える時です。僕が迎えに来ますので待っていてください」

姫「は、はい！」

そう言って自分の馬のところに戻る。
それを見ていた赤白両騎士団団長が近づいてきた。

白の騎士団長「中々いい感じですね」

—何がいい感じなんだろう？

首を傾げようとして思い立つ。
姫と妖精少女が来て兵の士気がかなり上がっている、その事だろう。

僕「そうですね」

白の騎士団団長「これは頑張って姫を早く迎えないといけませんね」

僕「ええ、最後まで気を抜かないようにしないと」

白の騎士団団長「この戦が終わったらあの子にーですか」

ー何？その死亡フラグ

魔王『死亡フラグ？なんだそれは』

魔王に手短に説明をしながら今度こそ首を傾げる。

僕「ああ、姫を迎えに行くと言う話ですか」

白の騎士団団長「そうそれです」

僕「早く姫を安心させてあげたいですからね」

白の騎士団団長「この戦が終わった後も色々あると思いますが、姫を支えてあげてください」

僕「出来る限りの事はしますが、いつまでもこの国に居る事は出来ませんので」

赤白両騎士団団長「「は？」」

今まで黙って聞いていた赤の騎士団団長も白の騎士団団長と声を合わせる。

僕「妖精少女も早く故郷に連れて行ってあげたいですし、僕もやる
ことがありますから」

白の騎士団団長「ちょ、ちょっと待ってください」

僕「はい？」

白の騎士団団長「戦が終わったら国を出るつもりですか？」

僕「つもりも何も最初からその予定ですが？」

赤の騎士団団長「姫を支えるのではなかったのか？」

僕「ここには姫を支えるたくさんの仲間がいます。戦が終われば後
は皆さんの仕事です」

僕の言う事に言葉をなくし王子達を見る両騎士団団長。

白の騎士団団長「ま、さか？」

王子・翁・美女さん「そのまさか、です（じゃ）」

3人が唱和する。

白の騎士団軟調「赤の騎士団団長を超える御仁が居たとは」

赤の騎士団団長「その物言いは納得行かないが、さすがにこれは俺でもわかる」

僕達を見つめる姫と妖精少女に手を振っていると「若殿」と赤の騎士団団長が声を掛けた。

赤の騎士団団長「用事はどれくらいかかるんだ？」

どれくらいだろうか？
想像も付かない。

僕「いつ終わるかわかりません。」

赤の騎士団団長「それまで待たせると？」

僕「待たせる？」

赤の騎士団団長「もちろん――」

そういった所で翁と白の騎士団団長が赤の騎士団団長を止める。

翁「できれば戦が終わった後も姫を助けて欲しいんだがな」

僕「妖精少女を早く連れて帰ってあげたいんです」

白の騎士団団長「本人に聞いてみましょう」

そういうと姫と妖精少女を呼ぶ。

白の騎士団団長「妖精少女は戦が終わった後も姫を助けてくれるかな？」

白の騎士団団長を警戒するように姫の後ろに隠れていたがコクリと頷いた。

白の騎士団団長「でもそうすると故郷に戻るのが遅くなるよ？」

妖精少女「…姫お姉ちゃんと居たいからいい」

白の騎士団団長「だ、そうです」

僕「妖精少女、いいの？」

妖精少女「うん」

白の騎士団団長「もちろん、その間も我ら我が妖精少女の故郷と連絡を取る手配をしますよ。ねえ翁殿」

翁「もちろんじゃ」

妖精少女が良いと言うなら良いのだが、問題はもう一つある。

――魔王

魔王『なんだ』

――魔王の方はどうなの？

魔王『どうもこうも無い。我にはどうしようもないしな』

――僕は魔王の問題を放置するつもりは無い

魔王『我も無い』

――なら

魔王『だがそれほど急いでもおらん』

――いいの？

魔王『良いも悪いも無い。まだ力が足りない。今戻っても何も出来ない』

—そうか

魔王『そうだ』

—ありがとう

白の騎士団団長「どうですか？もし良ければ戦が終わっても姫を支えてもらえないでしょうか」

僕は考えて美女さんに話しかける。

僕「美女さんはどうですか？」

美女さん「ご随意に」

美女さんを見つめるもいつも通りの笑顔は変わらない。

僕は頷くと翁と白の騎士団団長の方を向いた。

僕「…いつまでも、とは行きませんが」

白の騎士団団長「それでかまいません」

僕「時期が来たら旅立ちますからね」

翁「それはかまわんよ」

僕「最後に地位も名誉も不要です。それが条件です」

翁「いらないと?」

僕「いません。土地も何もかもいません」

翁「じゃが姫のそばに居る為にはある程度の地位についてもらわんといかん」

僕「じゃあこの話はもう終わりですね」

白の騎士団団長「まあまって。」

僕「なんですか? 交渉は決裂したじゃないですか」

白の騎士団団長「まだだよ。まだお互いの意見のすり合わせの段階じゃないか」

僕「…なるほど」

白の騎士団団長「姫のそばに居ても周りから文句が出ないようにする為にはある程度の地位を得てもらうのが一番簡単なんだけど、それでもダメかい?」

僕「なるほど」

白の騎士団団長「理解してもらえたかい?」

僕「ええ、話し合っても無駄だと判りました」

赤の騎士団団長「地位をくれると言うのに何が不満だ!？」

僕「何もかもが不満ですね」

白の騎士団団長が赤の騎士団団長に「話がややこしくなるから黙っててね」と言う僕に「何でそう思うの?」と聞いた。

僕「話の起点から食い違ってるんですよね」

白の騎士団団長「どういう風に」

僕「僕は別に『この国に残りたい』なんて言ってません」

白の騎士団団長「そうだね」

僕「でもみんなが『姫を支えてあげて』と言うので条件付で条件を受け入れるつもりでした」

白の騎士団団長「そこまではお互い認識があってるね」

僕「なのに『姫と居るのに地位が居る』と言う」

白の騎士団団長「おかしいかい?」

僕「おかしくないですか?」

白の騎士団団長「どこが?」

僕「：僕は『居たい』んじゃない『居るようにお願い』されたんです。なのに『居る為に地位が居る』というのはおかしいと思いませんか？」

白の騎士団団長「なるほど、『お願い』されているのに『押し付け』られるのは不快だと言う事だね」

僕「そうですね。」

翁「じゃが姫のそば居る為には仕方ないんじゃない」

僕「だから無理を言わずに話を流そうとしてるんです」

翁「むうー」

白の騎士団団長「どういう状態なら受けてくれるんだい？」

僕「地位など不要な状態で『姫の騎士』として近くにいれるのなら」

白の騎士団団長「それは騎士団などにも所属しないと言う事かい？」

僕「そうです」

僕は正直、このやり取りに面倒くさくなってきていた。

だから働かない宣言をしてさっさと諦めてもらうことにした。

白の騎士団団長は「ちょっと待ってもらえるかい」と言う王子と翁と赤の騎士団団長とで話し出す。

―はやく出陣準備が終わらないかな

魔王『やさぐれておるな』

―正直、面倒になってきたよ

魔王『地位くらい受ければいいではないか』

―だめだよ、いずれ出て行くのにそんなのを受けると、それを理由に引きとめられる事が予想される。だから面倒事は事前に避けないと。

魔王『…そうか』

話し合いが終わったようでまたこちらに来た。

翁「話は了承した」

僕「では？」

翁「地位等無くても姫のそばに居る事ができるようにする」

僕「そうですか」

翁「『姫の騎士』という地位を新たに作る」

僕「はい？」

翁「『姫の騎士』じゃ」

僕「だから地位とかは――」

翁「安心せい。姫のそばに居れるだけで他には何も無い名誉職のようなものじゃ。姫の命のみに従えばいい地位じゃ」

僕「他の誰にも？ 貴族や王族にも」

翁「そうじゃな：おぬしなら王の命でも納得できん場合は従わんじやろうしな。地位的には執政と同じ地位にしよう」

魔王『執政は国王の次に偉いな』

僕「物凄い地位じゃないですか」

翁「実権は何も無いよ。王に礼を尽くさなくて良いわけではない。それくらいはしてくれるじやろう？」

僕「ええ。でもそんな地位を作ると後々、拡大解釈されて大変な事になるのでは？」

翁「まあそこら辺は追々詰めるとして、実権は無いが立場は執政と同じ位にしとくか」

僕「大丈夫なんですか？」

翁「大丈夫じやろう」

本当に大丈夫か不安だ。

僕「とりあえず実権の無い『姫の騎士』という地位は受け入れます。でもそれ以外の地位も土地も何も要りません。」

翁「うむ」

僕「後々、どんな理由でも押し付けられる場合は出て行きます。時期が来たら出て行きますけどね」

翁「わかった」

僕「ここにいる面々が証人です。後で証文が無いとかは聞きません。いいですね」

王子「は、はい」

僕は疲れてため息を吐く。

僕「何でまだ戦も終わってないのに終わった後の話をしてるんだろう」

翁「終わった後では話をする前に居なくなってるかも知れないではないか」

白の騎士団団長「まあまずは邪魔な敵を倒しに行きますか」

話している間も準備は刻々と進んでおり出陣の時間が迫っていた。

第19話 死亡フラグ（後書き）

誤字修正

「ありあとう」 ↓ 「ありがとう」

しているらしく ↓ 知っているらしく

ああの騎士団団長 ↓ ああの騎士団団長

着たのか知らないが ↓ 聞いたのか知らないが

第20話 独断専行

追撃が始まった。

追撃部隊は総数約9900

僕、美女さん、領主息子、兵数約2000

赤の医師団 兵数約3900

白の騎士団 兵数約4000

斥候の情報では敗走した国王軍は10000の軍勢を大幅に減らしながらも何とか体裁を保って王都への帰路についているようだ。

戦闘後半刻（約1時間）程は死に物狂いで進んでいた様だが追撃が無いと判断したのか、今は速度は遅い。

一時（約2時間）程で追いつく予定だ。

斥候が王都へ戻る国王軍を見つけた。

悟られないように距離を開けて一旦停止する。

赤の騎士団団長「このまま行くか？」

白の騎士団団長「そうですね」

僕「今のスピードで行けば野営地はここ（地図上を刺す）あたりで
しょうか？」

赤の騎士団団長「通常で考えたらそうだが、そこよりこの辺り（僕が指した場所より王都方面）だりうな」

僕「そこになると着くのは夜中では？」

赤の騎士団団長「それでもここまでは確実に行くだろう」

白の騎士団団長「そうだね。ここから先は有力貴族の土地だからね」

「自分達の勢力圏まで戻らねば安心して休むことも出来まい」と赤の騎士団団長が言うことに白の騎士団団長も頷く。

僕はその有力領主の領地の直前にある箇所を指を刺して聞く。

僕「ここは？」

白の騎士団団長「そこは小さな溪谷ですね」

僕「溪谷？」

白の騎士団団長「ええ、徒歩でも2〜3刻も掛からずに抜けることが出来ます。」

僕「幅は？」

白の騎士団団長「そこそこの広さがありますね。馬車がすれ違う程度には」

僕「有力領主の土地に入るにはここを通った方が早い？」

白の騎士団団長「早いですね。迂回だと一時（約2時間）は掛かります。」

僕「じゃあここを通りますね」

赤の騎士団団長「通るな。確実に」

僕「では回りこんでここで待ち受けましょう」

赤の騎士団団長「何？」

僕は地図を指しながら説明する。

国王軍は溪谷に掛かるまでまだ時間はかかりそうである。

その間に両騎士団には回りこんで溪谷の出口に布陣してもらう。

そうして国王軍が溪谷に半ば入った辺りで僕達が国王軍の最後尾に奇襲を掛けるので、出口側から出てきた国王軍を両騎士団で襲ってください。

赤の騎士団団長「両騎士団が出口に行くよりは、分かれて挟んだほうがよいのでは？」

僕「いえ、確実に来たして行くには出口に多く配置するべきです」

赤の騎士団団長「どうということだ？」

今の国王軍は予想しなかった大敗で士気が下がっている。
そんな状況では溪谷を抜けたら自分達の勢力圏だという事で気も緩みだすだろう。

そこに背後から敵が迫れば恐怖で「溪谷を抜ければ安全」という幻想に向かつて我先にと入って行くことが予想される。
その恐怖の一押しには人数はそれ程必要ではない。

僕「精神的に弱っているその恐怖の一押しをするのにはそれ程の人数は必要ありません」

赤の騎士団団長「確かに」

僕「本当に怖いのは出口です。相手は死に死に物狂いで出てきますので」

白の騎士団団長「それでも溪谷に押し入るには少なく無いか？」

僕「すぐには溪谷内の敵には突入しません」

赤の騎士団団長「何？」

僕「狭い溪谷内は逃げ惑う敵で阿鼻叫喚でしょ。危険ですので相手の最後尾がわかる程度の距離を保ち進入します」

白の騎士団団長「それで？」

僕「敵が溪谷を抜けたら弓で攻撃してください」

赤の騎士団団長「それ程多くの弓は持ってきてないが」

僕「構いません。出口の敵を弓で射って出口を封鎖してください。そうすれば溪谷内で足が止まるでしょう。」

赤の騎士団団長「なるほどな」

白の騎士団団長「中々辛辣な手を思いつきますね」

僕「そうですか？『獲物を前に舌なめずりは三流のすることだ』ってとある人が言っていました。その通りだと思います。」

「手加減する余裕も無いですしね」と言う僕に両騎士団団長が頷く。

僕「そこを今度は僕達が背後から弓を射ってさらに混乱させます。その後に降伏を勧告します」

白の騎士団団長「今の状態で捕虜を取っても困るだけでは？」

僕「捕虜にしませんよ？大多数は武装解除の後に逃がします」

赤の騎士団団長「なに？」大多数という事は、領主などだけ捕まえるのか」

僕「正確には領主と領主の正規兵の指揮官クラスですね」

白の騎士団団長「それでも500近い人数になるのではないか？」

僕「そうですか。それは多いですね」

赤の騎士団団長「なら領主だけに抑えればよいのではないか？」

僕「出来るだけ兵がまとまる可能性を下げたいんですね」

白の騎士団団長「いっその事全部切るかい？」

僕「それが楽でいいんですが」

両騎士団団長が黙る。

僕「戦後、民衆を味方につけるにはちゃんとした処刑でないとダメだと思っうんですね。姫も望まないでしょうし」

赤の騎士団団長「ならどうする？」

僕「いっその事、全部の敵を溪谷に封じ込めましょうか」

溪谷は出入り口を塞げば逃げ道の無い牢獄になる。

武装解除し武器を取り上げた後に領主と指揮官は騎士団が身柄確保。他の兵士達は溪谷内に監禁する。

僕「ここなら半日くらいで大砦から後発隊が来るでしょう。来たら領主達を受け渡して補給物資を受けて王都へ行きましょう。」

これなら残存兵が王都に逃げ込むを防ぐことが出来る。
すぐに両騎士団は敵に悟られないように迂回しながら目的地に向かった。

本隊は敵から少し離れた場所を進み、少数で敵の背後を追尾する。
やっと溪谷が見えてきた。

あそこを通過せずに回り込まれると作戦は失敗するのだが、どうやら通過しそうで一安心である。

領主息子「そろそろ行くか？」

僕「いえ、もう少し待ちましょう」

領主息子「何故？」

僕「溪谷にある程度入らないと、反撃される恐れが高くなります。」

領主息子「なるほど」

僕「ある程度入ったら突撃します。当初の作戦目的は溪谷に敵を押し込める事です。深追いに注意を」

そう言い敵を見る。

まだこちらには気が付いていない。

どの兵士も疲労困憊という感じで俯き加減にたまに進んでは立ち止まるを繰り返していた。

「そろそろ――」そう告げたときに敵兵の一人が何気なくこちらを見ようとするのが見えた。

それを察して「突撃！」と叫ぶと敵の集団に襲い掛かった。

大声を張り上げ半包围状態で敵に牙をむく。

2000の兵が扇状に突撃してくるのだ。

本来そのような事をすれば厚みが減りすぐに包围を突破されてしまうが、相手は士気が下がり放心している所への襲撃で正常な判断も出来ない。

魔王『まあ、元々正常な判断が出来ていないようだったがな』

我先にと溪谷へ逃げ込もうとする敵兵を背後から切りつける。

反撃しようとするものなど殆ど居ない。

一方的な虐殺の後に敵が溪谷に逃げ込んだのを確認し停止の号令を掛ける。

隊列を組みなおす。

前から兵士隊長、僕、領主息子、美女さんの部隊の順に各500で

隊列を組む。

領主息子「是非、我を先発隊に！」

誰が先発になろうが作戦通りに動くのであれば問題は無い。

唯一あるとすれば敵に仕掛けるタイミングを間違えると大打撃を受けかねないという事くらいだが、それも敵が戻ってこようとするタイミングでいいのでさほど難しくない。

だが―と考える。

先日の夜襲の際の領主息子を思い出すと、任せるのには2の足を踏む。

状況判断が出来ないわけじゃないが、若干、目の前の事に囚われてる感がある。

領主息子「是非！」

僕「…作戦のタイミングを間違えるとこちらが崩れる可能性が高いですよ」

領主息子「理解している」

僕「何があっても敵がこっちに来るまで手を出したらダメですよ？」

頷く領主息子に再度念を押し任せる。

美女さん「大丈夫でしょうか？」

僕「大丈夫だと信じたいです。ただ用心はしておきましょう」

領主息子の部隊が溪谷にゆっくり侵入していく。

溪谷の入り口を僕の部隊を中心に左右に美女さんと兵士隊長の部隊で包囲する。

後は結果を待つだけだ。

程なくして溪谷から伝令が飛んてくる。

確認すると領主息子の軍勢が敵と交戦を始めたそうだ、

僕「交戦？　どういうことだ？」

聞くと領主息子は予定通り敵に近づき過ぎないように溪谷に入って行ったそうだ。

そうして駅軍の最後尾の動向を見張っていたらしいが、その内に敵兵が同士討ちを始めたらしく、それを見ていた領主息子は攻撃を始めたらしい。

美女さんに伝令を送り状況の説明と内部への突入を命じた。

兵士隊長にも状況を知らせる伝令を走らせる。

すぐに美女さんの部隊いくのを見やっため息をついた。

兵の集団が飛び出して来る。領主息子の部隊だ。

やはりと言うか何と言うか、かなりの被害が出たようだ。

すぐにこちらに來た領主息子は悔しそうに「申し訳ない」と一言いう。

傷だらけの姿が惨状を物語っている。

ざっと見る限りでは深い傷は無い様だが後方で手当てを受けるように指示する。

美女さんの部隊が迫り来る敵を受けながら溪谷から出てきた。

後退する美女さんの部隊が左右に分かれた所に僕と兵士隊長の兵が弓を降らせる。

敵が怯んだところに兵士隊長の部隊が突っ込み、程度敵と交戦するとすぐに離脱した。

そこに僕の部隊と美女さんの部隊が弓を射かけ僕の部隊が突撃し、兵士隊長と同じくすぐに離脱し敵兵と距離を取る。

その攻撃は敵の勢いを削いだがすぐに溪谷から飛び出してきた。

僕「無理に当たる必要は無い！」

そういう向かってくる敵に当たる。

正面から受けずに部隊を少し左に寄せて敵の退路を作る。

そこに向かって逃走していく敵を見ながら向かってくる敵だけを倒す。

数刻で敵が方々へ逃走していく。
それを確認した後、すぐに兵を集め被害状況を確認する。

僕と兵士隊長の部隊はそれぞれ合わせて十数名の犠牲者で済んだ。
美女さんの部隊は領主息子を逃がした後に敵の猛撃を防ぎながら溪谷を撤退したために20名近い被害が出た。

そして領主息子の部隊である。

敵に突っ込みすぎたようで一時は囲まれてしまったようだ。

80名近い死者とそれに倍する重傷者を出した。

両騎士団が溪谷を抜けて合流した。

敵が居なくなったのでおかしいと感じたようだ。
状況を説明する。

赤の騎士団団長「何故計画を守らずに突っ込んだのだ？」

領主息子「敵が混乱で同士討ちを始めたので…」

赤の騎士団団長「それで好機だと思ったのか？ タイミングが大事だと言われなかったか？」

領主息子「言われておりました」

赤の騎士団団長「それなのに突っ込んだと？」

領主息子「…はい」

赤の騎士団団長「その結果、敵を逃し味方に損害を与えたのか」

悔しさに震える領主息子から視線を外した赤の騎士団団長が今度の方針を聞いてくる。

赤の騎士団団長「どうする？」

白の騎士団団長「捕虜はいないし、先に進みますか？」

僕「ここは一旦戻りましょう」

赤の騎士団団長「何？」

僕「当初の目的では王都まで行く予定でしたが、状況がかわりました」

白の騎士団団長「状況ですか」

僕「大砦から後発部隊が向かってきていると思います」

白の騎士団団長「そうですね」

僕「本来ならそれを前線で待てばいいのですが、先程多くの敵を取り逃がしました」

赤の騎士団団長「それが補給部隊を襲うと？」

僕「可能性の話ですが」

白の騎士団団長「しかし補給部隊とはいえ護衛の兵もついています

？」

僕「そうなんでしょうが、今回は急遽出撃したので準備が整ってません。僕達に出来るだけ早く物資を届ける為に随時出発している状態です。そうなると一隊毎の人数が少ない可能性が高いですね」

白の騎士団団長「確かに」

僕「補給部隊の安全の確保もありますが、敗走する国王軍を一応は壊滅させました。ここは一度大砦に戻ってしっかりと攻城戦の準備をして出たほうが、王都攻略が少しは有利に運べるでしょう」

赤の騎士団団長「そうすると1日から2日程王都へ行くのが遅れるが？」

僕「今更遅れても王都の戦力が大幅に増える事は無いと思います。逆にこちらに降る領主等出てくるのでは無いかと」

白の騎士団団長「確かに、国王軍が一方的にやられて残るは王都のみですしね」

赤の騎士団団長「領主息子の件はどうする？」

領主息子は静かに話を聴いていた。

僕「そうですね。翁に委ねましょう。翁ならまさか命までは取らないでしょう」

白の騎士団団長「命令違反と独断専行、それによる危機存亡と。」

赤の騎士団団長「その場の現場指揮官による採決で死罪になってもおかしくないな」

皆の言葉に領主息子が反応した。

そこまですとは考えてなかったのかもしれない。

赤の騎士団団長「軍隊における命令違反はそれ程重いものだと言っ
と気がついたのか？」

領主息子「状況により判断するのはいけないのですか？」

赤の騎士団団長「状況判断を読み間違えて勝手に行動したのがいけないと言っている」

領主息子「それは…今回は結果的にそうだったのであって、状況的に判断は間違ってたかと思えます」

赤の騎士団団長「そんなこともわからない愚か者なのか!!」

領主息子の言葉に赤の騎士団団長が叫ぶ。

赤の騎士団団長「誰の目から見てもこの結果になる事は予想できる
だろう！」

白の騎士団団長「そうだね。だからこそ最初から作戦を組んでいたんだし。」

領主息子「なぜそう言えるのですか！」

白の騎士団団長「まず立地。両脇を溪谷に囲まれて逃げ場が無い空間である事」

赤の騎士団団長「そこを襲われたら死に物狂いで逃げようとするに決まっている。しかも片方の出口は我々両騎士団が抑えているのだ。暴発する方は反対側に決まっている」

領主息子「では作戦通りにしても同じ結果だったのでは無いのですか！」

赤の騎士団団長「起きなかった事について言うのも馬鹿馬鹿しいが」とため息をついて

赤の騎士団団長「暴発が予想されたからこそ近づかずに追撃し、敵が戻る気配を感じたら弓を撃てと言っていたのだ！」

白の騎士団団長「そうすれば敵との距離も保てるし「相手に近づく前に殺される」という事実から気力も削げるからね。そこに投降を呼びかける手はずだったんだよ」

赤の騎士団団長「どちらが被害が少ないか想像できるか？」

無言で俯く領主息子。

赤の騎士団団長「若の作戦に誰も異を唱えなかったのは、それが効果的で味方の損害も少ないと予想されたからだ」

「他に言いたい事があれば大砦で聞こう」そう言うと赤の騎士団団長は「一時的に領主息子の指揮権剥奪が必要でしょう」と僕に言う。僕は頷いて領主息子の軍勢を美女さんの指揮下に置く事と、領主息子も美女さんの下に付く事を伝えた。

僕「では戻りましょう。今から戻れば夜中には大砦に戻れるでしょうから」

魔王『今回の領主息子の独断は今までの戦果が状況が生んだのかもしれないな』

—どういう事？

魔王『勝ちすぎなのだ。小砦も、大砦も、防衛線も』

—勝ちすぎ…

魔王『本来ならもっと苦労している戦いばかりだ。小砦では騎士団の攻撃は無かった。大砦は内通者が門を開けた。防衛線は相手が戦を知らない馬鹿だった』

—その勝ちすぎて気が緩んでいると？

魔王『緩んでいると言うよりは相手を安く見すぎているな』

―その結果が無謀な独断専行

魔王『逆にこの程度で済んでよかったとも言えるな』

―もっと酷い状況も予想された？

魔王『それこそ大きな戦で全軍が崩れるくらいの事はあったかもな』

―そうになると、この件を気を引き締める事に利用するしかないね

魔王『処刑するか？』

―それは…したくない

魔王『出来ないのではなく？』

―そうだね。出来ないと言ってもいいかもしれない。命は助けたい。

魔王『甘いな。甘すぎる。いつか痛い目を見るぞ？』

―そうかもしれないね

魔王『かもではない。確実だ』

―出来るだけ気をつけるよ。とりあえずはこの件については翁に任せるよ。

魔王『責任転嫁では無いか？』

—そう言われても仕方ないけど、でもここで切るのは良くない気がする

魔王『どういうことだ？』

—旨くいえない。ただ切るのが嫌なだけかもしれないしね

魔王『ふむ—』

それっきり魔王は黙ってしまった。

僕はそつとため息をついて空を仰いだ。

勝ち戦が続いているにも関わらず、気分は敗戦者だった。

第20話 独断専行（後書き）

誤字修正

確実にたして ↓ 確実を来たして

杯背後から ↓ 背後から

員人数 ↓ 人数

第21話 ルール違反

途中で補給部隊を回収しながら夜半（やはん、0時頃）に大砦に入る。

前もって状況と帰還を伝えていたので大砦では受け入れ準備が行われていたようだ。

王子と翁と爺が僕達を迎える。

王子「状況はある程度把握しております。領主息子」

領主息子「はい」

王子「処分を検討します。それまで自室で待機を」

領主息子「はい」

領主息子が自室へと2人の兵士をに連れられて行く。

大砦への帰還の帰路の途中で領主息子と両騎士団を交えて少し話をした。

酷い内容だが領主息子は快くと言っては変だが引き受けてくれた。

翁が「申し訳ない」と頭を下げるのを止めて「その件で処遇にお話があります」と伝える。

翁はすぐに頷くと僕と両騎士団団長、美女さんを会議室に案内する。

「食事を作らせておるが？」という申し出に「まずはこの話を終わらせてから」と伝えた。

翁「領主息子の処遇だが、厳しい処分が必要だとワシは思っておる」

王子「翁!？」

翁が処刑もありえると言葉に含むのを王子が止める。

翁「王子、事は反国王軍の士気に関わる問題じゃ。身内だから甘い処罰では反国王軍の結束を乱しかねん」

赤の騎士団団長「ここで甘い処罰をすると、独断専行をしても許される。結果、戦果を上げればよし、という風潮を生みかねない」

白の騎士団団長「その結果、反国王軍は内部から瓦解する」

僕「そうですね。ですが余り厳しすぎるのもどうかと思います」

翁「でもそれでは他のものに示しがつかん!」

僕「領主息子はここまで来れた功労者の一人です。その戦功と差し引いて0にしましょう。」

赤の騎士団団長「それでは周りが納得せんだろうか?」

だから厳しく処罰するべきだと言うのだ。

僕「後から来たものより確実に戦功があるのですから、それが無か

った事になるのは厳しいといえると思いますが」

白の騎士団団長「それでも、そういう事を理解出来ないものは多いんだよ」

僕「そうですか。では、財産を献上してもらいましょう」

翁「財産だと？」

僕「そうです。領主息子はどれくらい持ってますか？」

翁「領主息子本人のとなると、殆ど無いのではないだろうか」

僕「では翁と現領主に泣いてもらうしかありません」

翁「…それで領主息子が助かるなら安いものじゃ」

僕「どれくらいが妥当でしょうか？出来ればそこらの領主ではそうそう出せないぐらいが良いのですが」

翁「そうじゃな…領地の年収の半分と領地を幾つか…か」

僕「領地の年収は高い方？」

翁「中堅領主なみじゃな。有力貴族の4分の1程度じゃ」

白の騎士団団長「有力貴族は搾取してますからね」

僕「では土地はいいので年収の2倍としましょう。4年の分割で払ってもらいましょう」

翁「わかった」

僕「本来なら幾つかの土地と翁の領地の年収4倍の財産を没収の所を、今までの戦功を差し引いて年収4倍のみ。その上で領主息子は後方支援部隊への配属を言い渡す。と言う事でどうでしょう」

王子「それではもう戦功は立てませんが？」

僕「そうですね」

王子「厳し過ぎませんか？領主息子の面子を潰しすぎの氣もします」
白の騎士団団長「すでに領主息子には納得してもらってます」

翁「何と？」

僕「今回の件については今までの戦の勝利が起因していると思います」

王子「戦の勝利？」

僕「勝ちすぎました。それも殆どの被害を出さずと言っていいほどの」

赤の騎士団団長「それによる楽勝ムードが気の緩みを生み、相手を低くみるようになっていいる可能性がある、と言う事です」

僕「ですので、今回の件を逆に利用して気を引き締めます。『翁の所の領主息子ですらミスをすれば罰を受け、今後の功績を立てるチ

ヤンスをなくされる』とね」

王子「なるほど」

僕「当初から参加をし戦果を上げてても独断専行をしたらこれだけの罰を受けるんです」

白の騎士団団長「そうですね。言い方は悪いですが、本来ならそこまでの失敗ではありません。」

赤の騎士団団長「そうだな。兵を無駄に死なせた罪はあるが、本来なら今後の戦で取り戻せ、という所だな」

それを分かっている領主息子に「処刑もありえる」と言い切る赤の騎士団団長も人が悪い。

僕「これは他の領主への警告と、今後降る領主達への警告です」

翁「今後降る？」

僕「今回の防衛と追撃で国王軍に対して圧勝を収めたと言えます。この状況を見たら降る領主もいるでしょう」

王子「それに対する警告とは？」

僕「今まで傍観してた者に対しては、今更来る事に対しての精神的重圧になるでしょう」

白の騎士団団長「一番の功労者である翁一族にもミスに対する処罰で財産の没収があるんです。今まで傍観していた者は焦るでしょうね。最初に『傍観している者には財産没収』と通達してますし」

僕「国王軍に付いていたものに対しても財産を差し出させ安くなりますね」

赤の騎士団団長「翁であれだからな。敵対してた者は我が身の命を守るために土地も財産もある程度出すだろう」

僕「そういう事です。領主息子を処刑してしまうと、逆に彼らに『今更行っても処刑されるだけかもしれない』という想いを抱かせかねません」

王子「なるほど」

僕「翁と現領主に関しては、戦後の功績で今回の件以上の物を得てもらえばいいでしょう」

王子「そうですね」

僕「そして僕に対する処遇ですが」

翁「そなたにもかか？」

僕「指揮官としての責任は問いませんと。部下に行わせてーと言うのもありえますしね」

翁「むう」

僕「今までの戦功剥奪と、土地や財産の無い僕には戦後の土地の分配無し、でいいのでは？」

爺「なんと!？」

僕「元々、土地は貰わない約束ですし、痛くも痒くもないですね」

翁が唸るのを見て笑う。

僕「何かしらの理由を付けて押し付けるつもりだったでしょう。そうは行きませんよ」

爺「厳しすぎませんか？」

僕「厳しいくらいがいいんです。その分、良い働きには十分に報いてあげてください。信賞必罰です」

処遇については概ね決まった。

後は出撃の時期だ。

ずっと準備を行っていたお陰で明日の昼には準備が終わるらしい。

だが兵に休息を取らせないとまずい為に出発は明後日以降となった。

僕「そうだ、王都に降伏勧告を行ってみましょうか？」

爺「何？」

僕「勝手に暴走して処刑されても困るので、王子と有力貴族のトップの2人の身柄の引渡しと王都の無血開城で他の者の土地と財産の一部を認めると」

爺「土地と財産の？」

僕「土地と財産の、です」

翁「馬鹿でもさすがに自分の命に関しては気がつくだろう」

僕「では命も助けると言いましたよ」

翁「だがヤツラに財産を残したら、また何をしでかすかわからんだろう」

僕「そうですね。ですので戦後に責任を取らせて没収しましょう」

翁「は？」

王子「待ってください。財産は一部認めるのでは？」

僕「はい。王都攻略時の接收は行いません。ですが、戦後の敗戦処理では罪を償う為に差し出してもらいます」

赤の騎士団団長「何と悪辣な…」

白の騎士団団長「言葉遊びではないですか」

僕「何か問題が？今の王都にいる顔触れで惜しむ人物でもいますか？」

翁「：おらんな」

僕「では良いではないですか。命は助けるのですから。財産を全て没収されても命が残るだけマシでしょう。それでも財産を残したい人は死んでもらって遺族に一部財産を渡ししょう」

赤の騎士団団長「一部？」

僕「ええ、女性と子供が一般家庭で1〜2年間生きていくのに困らない程度に渡します。後は前に決めたように土地を耕して生活してもらえばいい」

赤の騎士団団長「男は？」

僕「え？拒否の場合は全員、処刑されているのでは？」

翁「確かにそうじゃが…」

僕「なら考えなくても良いじゃないですか」

王子「若…急に雰囲気が変わりましたね？」

僕「そうですーか？そうかも知れませんね。姫の騎士と決めた時から、この戦は他人事じゃなくなりましたから」

翁「ふむ」

僕「今後、姫に害する可能性がある存在は潰しておきたいんですよ」

「頼りになると言うか恐ろしいと言うか」と呟く翁。

僕「領主達から接收した土地で今回の戦功に応えて、財産で国の復興に当たる。いい事尽くめじゃないですか」

王子「そうなのでしょうか―?」

本当の所はそうでもないと思う。

でもそれは王子や翁達が戦後の状況を見ながらやっていけば良いと思う。

赤の騎士団団長「無血開城を受けない場合は?」

僕「通常通り王都を攻めるしかないでしょう。投石器を使って外壁一枚壊した後にさらに厳しい条件で再度呼びかけましょう」

赤の騎士団団長「厳しいとは?」

僕「そうですね。身柄の引渡しに有力貴族のトップとその3等身までの男子の身柄の引渡しにしましょう。そしてその他の者は土地は没収で財産の一部と命の保障で。それで受け無い場合は―」

翁「場合は?」

僕「城壁をさらに一枚壊してもっと厳しい条件を突きつけます。前の条件に身柄確保は有力貴族の何名かも追加します。これは今の国

の要職に付いている人物などで良いでしょう。王達が5名ほど選んでください」

翁「わかった」

僕「そして他の者は財産を全て没収。これに応じない場合は以後の降伏は受け入れないものとして女子供も含めた一族郎党処刑」

僕の物言いに一同言葉を無くす。
それを見て僕は笑いながら言う。

僕「これまで言えば相手も折れると見込んでの事です。別に女性や子供を殺したいとは思ってません」

王子「よかった…」

僕「でも仕方ない場合は処刑しかありませんけどね」

王子「……」

僕「王子、僕は姫との約束で命を守る人は守ると言いました。でもそれは『守れる人』です。相手がそれを拒否した場合は仕方ありません。」

王子を真っ直ぐ見る。

僕「戦の旗頭として、王族として決断しなければならぬ時もあります。その時に躊躇した結果、大切な人や多くの者が死ぬかもしれません。」

王子「国の為に多少の犠牲は仕方ない？」

僕「仕方ないと言うのではなく、やるんです。時間を掛ける余裕があり、全員助けるいい方法があるらなそれを選べばいいだけです。戦後、貴方が国を背負うのでしょうか？」

王子「僕が…」

―あれ？違うの？

てっきり王子が国王になると思って居たので翁に聞く。

僕「戦後は王子が国王になるのでは？」

翁「そうですね」

王子「そんな！第3王子を差し置いて僕なんかが！」

僕「その第3王子が国を荒廃させたんです」

王子「それは周りの有力貴族が―」

翁「それでは国民は納得しません」

王子「では第3王子はどうなるのですか!？」

他の者と一緒に処刑されると思ったのかもしれない。

王子が顔を真っ青にして叫ぶ。

僕「通常は退位の後に幽閉でしょうね」

翁「そうじゃな。国王であつた者を処刑はできぬ。生涯幽閉となるじゃろう」

王子「そんな…」

僕「王子が国王にならない方法がありますよ?」

王子「それは!？」

僕「姫に押し付けるのです」

王子「えー?」

僕「姫に押し付けなさい。そうして姫には他国から婿を貰えば国同士のつながりも強化でき一石二鳥です」

僕「そんな事は出来ません!」

僕「何故です?」

僕「ーっ!」

僕「王子は王になりたくないと言う。でも姫が婿を取って国を治めるのは出来ないと言う。」

王子「……」

僕「ならいっその事、反国王軍は解散しましょうか」

王子「なんで…」

僕「戦後に誰も治めない国よりは悪政でも今の方がマシでしょう。我々の大儀も無くなりますし」

皆は僕と王子のやり取りを見守る。

翁「他にも方法はあるがな」

呟く翁に皆の視線が集まる。

王子「どういう方法ですか？」

翁「若が姫と婚姻を結べばよい」

何を言っているんだこの爺さんは？
まじめな話をしている状況でそんな茶化す事を言うとは！

爺が「おお」と言いながら手を打つ。

王子「それだ！」

―それじゃないよ！

僕「何を言ってるんですか。この国の人間でもなく何処の誰かも分からない者を王位に付けてどうするんですか」

翁「それはそれ。今回の戦での最大の功労者はお主であろう。姫の危機を助けたしな」

僕「それならずと守ってた爺が上でしょう！」

爺「それでも今までの勝利は全て若の作戦のお陰ですからな」

僕「周りが認めませんよ」

翁「そうでもない。『姫の騎士』として十分に名が知れ渡っておる」

王子「頼る先も無い姫の窮地に駆けつけその身を守り通し、軍勢を集め今までの勝利の立役者として認知されてますね」

僕「何で昨日の今日でそんな通り名が通ってるんですか！」

翁「戦後に『姫の騎士』の立場を確立する為にと思い、触れて回ったのじゃ。まさかこうも役に立つとは」

呆然と翁と王子と爺を見る。
何でこの人達はこんなに笑っているんだろう。

僕「：姫を政治の道具にするのは感心できません」

翁「先程、お主は『他国から婿を取れ』と言っていたではないか」

僕「それは王子に発破を掛ける為の方便です。もしその方向に動いたら、そんな事が無いように動くつもりでした」

翁「それは何故じゃ？」

僕「政略結婚などさせません！」

翁「おかしい事を言う。王族の結婚は政略結婚が基本じゃ。貴族間ですら似たようなものぞ？」

棒「姫には笑顔でいて欲しいのです。姫の意に沿わない結婚はさせれません」

翁「意に沿えばよいのか？」

翁が邪悪に（というしか形容が無い顔で）笑う。
姫は「国のため」と言われれば受けるだろう。
それくらいに責任と優しさの溢れた人だ。

僕「姫なら自分の気持ちを押し殺して受ける可能性が高い」

翁「そう思うなら何故、お主が娶ろうとしない？」

僕「だから姫の意に沿わない事をさせたくないと言っているでしょう」

翁「意に沿えばいいのじゃな？」

僕「丸め込むのは無しですよ！それじゃ意味が無い」

翁の笑顔の裏にあるものが読み取れない。

だが決して良いものではないような気がして必死で翁の道を塞ぐように言葉を紡ぐ。

元々、なんでこんな話になったのだろうか？

魔王『気がついていないのはお主だけだ』

―何か分かってるなら教えてくれ！

魔王『……』

―魔王！

僕と翁が言い合っていると赤の騎士団団長が「まさか―」と呟く

赤の騎士団団長「まさか本気でそこまで姫の気持ちに気がついて無いだと？」

部屋が静かになる。

赤の騎士団団長の方を見ると横で白の騎士団団長が「あちゃ〜」という感じで顔を抑えていた。

僕「―はい？」

赤の騎士団団長「本気で姫の好意に気が付いていないのか？と聞いている」

そういう赤の騎士団団長を白の騎士団団長が押さえつける。

赤の騎士団団長「何をする。一度ちゃんと確認したいと思っていたんだ！皆もそうであろう！！」

白の騎士団団長「例えそうでも、直接聞くのはルール違反です！」

赤の騎士団団長「何故だ！面倒なのは好かぬ！」

白の騎士団団長「それでもこの場合はルール違反です。もし貴方が自分の気持ちを他人に勝手に言われたらどう思いますか！」

赤の騎士団団長が「う、うむ…そうか」と言って席に座る。

―姫が好意？誰に？

理解が及ばない。

白の騎士団団長「本当に申し訳ありません。こういう形でお伝えするのは不本意ですが、こうなっては仕方ありません。貴方の意見をお聞かせ願いたい」

僕「―え、あ、その…赤の騎士団団長の勘違いでは？」

何か言おうとする赤の騎士団団長を手で制して言葉を繋ぐ

白の騎士団団長「そんな事はありません。みんなそのように認識しております。気がついていないのは貴方だけだ」

白の騎士団団長の言葉に周りを見る。

王も爺も王子も僕が見ると頷く。

視線を彷徨わせて美女さんに縋る様に見ると笑顔で口を開いた。

美女さん「気がついていないのは若ご本人だけですよ」

魔王『ちなみに我も気がついていたが？』

—ええええええええええ

いきなりの展開（おぬしの中だけでな）に僕はどうしていいかわからなかった。

第21話 ルール違反（後書き）

赤の騎士団団長がやってくれました。

こんな方法で姫の気持ちに気が付く予定ではなかったのですが、若
が朴念仁を通り越して植物に成らないように考えたらこのタイミン
グとなりました。

丁度いい汚れ役もいましたし。いい意味で！

話は元の予定を大幅に超えて行ってます。

何処へ向かうのでしょうか？

そろそろタイトルも決めたいのに何も思いつかない。

終わるまでに決まると…いいね。

誤字修正

戦功に答えて ↓ 戦功に応えて

菜穴井方法がありますよ ↓ ならない方法がありますよ

面倒なの好かぬ ↓ 面倒なのは好かぬ

第22話 告白

―あのまま王都に攻め込んでいたほうが良かったかもしれない。

魔王『まあ先延ばしにするだけだがな』

急に出てきた新事実（と僕だけ思っている内容）に僕は困惑していた。

僕「でもそれは、皆がそう思っているだけでは？」

美女さん「そんな事はありません」

僕「何故そう思うの？」

美女さん「今までの若の行動や言動に対する姫様の反応を見てれば」

僕「どこが？」

美女さん「言ってもよろしいのですか？」

―よろしく無い！

そういう間もなく美女さんが今までの出来事を上げる。

翁に会った後に迎えに言った時の事、王の館までの道中、翁の館での事、小砦での姫との話、大砦から迎えにいった時の姫の態度、大

砦での僕の忠誠を誓ったときの事。
次々に出てくる内容に他の面々が「ほほう」と頷く。

―殺せ！　いつそ一思いに殺せ！！

余りの恥ずかしさに悶死しそうになる僕。

美女さん「などという状況を総合する限り、事実ですね」

美女さんが話を締めた。

僕は顔を真っ赤にして死に体である。

翁「でじゃ、先程の話に戻る」

翁が後をついで続ける。

翁「王位は王子が付くのが順当なのでそれは変わらないとしても、
姫と婚姻を結ぶ気は無いか？」

僕は余りの事に口をパクパクするしかない。

―婚姻？僕が？姫と？

冗談にもほどがある。

―しかも僕は魔族だし

魔王『魔族も人族も元は同じ種族だと言っただろう。子をなす事も出来るぞ？』

―KO！

魔王『まあ我には元々婚約者と呼ばれるものが何人かおるしな。一人くらい増えても問題なからう』

混乱した僕に魔王が更なる爆弾を落とす。

―こんやくしゃ？！

魔王『馬鹿っぽいぞ。その言い方』

―聞いてないよ！

魔王『言って無いな』

―大事な事なら言わないと！！

魔王『とはいえ、王族そして宛がわれたただけであつた事もない者ばかりだぞ？行方不明になって大分立つ。今頃破棄されているだろうよ。』

―そ、そうか

魔王『それに魔族は一夫多妻制だ。問題ない！』

―大アリだよ！

魔王の衝撃の発言に突っ込むのが必死で僕は黙り込む。
まあ唯単に現実から逃げているとも言うけど。

翁「どうなのじゃ？」

現実そうそう逃がしてくれない。
逃げられないのは魔王からだけじゃないんだ。

僕「少し―考える時間を下さい」

翁「そうも言ってもらえんのだが」

僕「今のままの気持ちでは拒否以外ありません」

翁「ふむ―では明日の夜まで待とう」

そう言うと話は終了した。

僕は茫然自失となりながらも美女さんに「話があります」と言う部屋に戻った。

――

部屋で美女さんと向かい合う。

僕「どうでしょう」

美女さん「若がお決めになる事かと」

僕「姫が―その、アレなのは間違いないんですか？」

美女さん「そうですね」

僕「―魔王に婚約者が居る事は知ってますか？」

美女さん「そうなのですか？でも居てもおかしく無いですね」

知ってるそばかり思っていたが、意外と知らないらしい。
不思議に思っていると「私は若の従者となって日が浅いので」と言
った。

長寿の魔族の「日が浅い」がどれ程の物か分からないが、とりあえ
ず知らないらしいので簡単に説明した。

美女さん「なるほど。でもそれがどうしました？」

僕「え？」

美女さん「別に実際に妻が居る訳では無いでしょう。それに魔族は
一夫多妻制ですし」

—美女さんまで！

美女さん「問題は他にあると思いますが？」

僕「……」

美女さん「まずは若の気持ちです」

僕「それは—」

美女さん「少なくとも好意は持っているでしょう。程度の差はあれ
ど」

僕は考えて頷く。

美女さん「それが姫を愛おしいと呼べる感情かをゆっくりとお考え下さい」

僕「ーうん」

美女さん「そして最大の問題は、魔族ということです。」

僕「……」

美女さん「魔族と人族は突き詰めれば同じです。結婚も子をなす事も可能でしょう。ですが王族との婚姻となれば問題は山積みとなります」

「しっかりと考えて答えを出してください」と言うと言席を立つ。

何処に行くのかと尋ねたら「姫が気になります。この事が耳に入る前に私から説明したいと思います」と言い部屋を出て行った。

ー姫をどう思うかーか。

魔王『好意を抱いているのだろう』

ーそうだね。今までは友人としてだったつもりだけど、考えてみるとそれ以上の気持ちを無理やり「友人」として抑えていたかもしれない。

魔王『なら悩む事もあるまい』

―でも

魔王『魔族の事か?』

―それもあるけど、それは姫や周りの人に話をするしかないと思う。

魔王『ではなんだ?』

―もしここで姫を受け入れたら、魔王のやるべき事の支障になるかもしれない。

魔王『……』

当初、魔王は剣もろくに使えない僕に「こんな事では魔王になれないぞ!」とか「他の魔王に勝てない」と言っていた。

それがいつの間にか言わなくなっているのは、魔王の優しさだと思う。

だがその優しさにいつまでも甘えているわけには行かない。

魔王『魔族の争いは最終的に勝てばよいのだ。何十年も戦うなど良くあることだ』

そんな事を言う魔王。

そんな魔王に「ありがとう」と言うと『べ、別にお主の為を思っている訳じゃないからな!』とツンデレ発言した。

精神が2つある影響が悪い方向に出ている気がする。

この問題も早く何とかしないといけないのかも知れない。

どれくらい時間がたっただろうか。

疲れているのに意識が冴えて眠れず魔王と話をしていると、明け方頃に部屋の扉がノックされた。

返事をするに「よろしいでしょうか？」と美女さんが声を掛けてきた。

僕「起きてますよ」

美女さん「そうですか。よければ姫様とお話なさいますか？」

こんな明け方まで姫が生きていた事にビックリだ。

美女さん「姫様も若に気持ちを知られた事に対して動揺しておいででしたが、今は落ち着かれました。お話しするなら早い方が良いでしょう？」

僕「そう—ですね。」

僕は頷い美女さんに言う。

僕「魔賊の事も伝えようと思います。その後、王子や翁にも。場合

によっては今日中にここを出る事になるかもしれませんが。妖精少女の安全の確保をお願いします」

美女さん「分かりました。一緒に居るようにします」

そういうと美女さんは僕を促して部屋を出ると廊下を渡り姫の部屋をノックする。

中から「どうぞ」という姫の声がして美女さんは姫の部屋の扉を開ける。

美女さん「失礼します。若をお連れしました」

その言葉に椅子に座る姫が身を硬くする。

僕も逃げたい気持ちを押し殺して姫の部屋に入る。

美女さん「さすがに未婚の女性の部屋に早朝とはいえまだ夜も空けていない状態で男性と2里には出来ませんので、私も控える事になりますがよろしいですか？」

姫「お願いします」

美女さん「妖精少女、こちらへ」

子狼と戯れていた妖精少女を呼んだ美女さんは妖精少女をベッドの端に座らせるとその傍らに立った。

僕と姫は無言で向き合う。

目も合わせる事が出来ない。

それを見かねた美女さんが「このままですと何も話が出来ないまま誰かが来てしまいますよ？」と言う。

僕「え、あの、その、聞きました」

姫「ーっ！」

僕「正直な気持ちを言うと戸惑ってます」

僕の言葉に姫が震える。

僕「でもうれしい気持ちで一杯なのは確かです。」

姫が顔を上げる。

僕「僕は今まで姫を友人だと思って接して来てました。」

姫「……」

僕「でも姫の気持ちを聞いて、そうじゃないと初めて理解しました」
出来るだけ姫に僕の気持ちが伝わるように言葉を選ぶ。

僕「姫と僕の立場の違いを知っていたので、知らず知らずの間に『友人以上の好意を抱いてはダメだ』と思うようになっておりました」

僕の言葉を必死の面持ちで聞く姫。

僕「僕達の立場の違いが何を指すかご存知ですか？」

姫「私がこの国の姫という事ですか」

僕「それも一つです。だがそれくらいなら何とも思いません」

姫「：やらねばならない事がある、という件ですか？」

僕「そうですね。それが大きいし、それに起因する事なのです」

姫「そえは―」

姫の問いに一瞬、言いよどむもしくはかりと姫を見て言う。

僕「僕は魔族です」

姫「―っ!!」

僕「僕は魔族であり、やるべき事と言うのは魔族の土地での王位継承争いです」

姫は僕の言葉に何も言わない。

僕「魔族なんです。魔族も人族も元々は一つだったと言ったのは覚えてますか？」

頷く姫。

僕「それでもこの2つは分かれて長い時がたちました」

姫は僕を凝視している。

僕「その間に生まれた魔族と人族の心の溝は小さいものではない」

そう、何百年と争ってきた。

決して昨日今日の出来事ではない。

僕「本当は黙ったまま去るつもりでした。」

僕の言葉に姫が口を開きかけるが何も言わない。

僕「でもそれでは姫に不誠実だと思ったのでお話しました」

姫が痛いほど見つめてくる。

僕「僕は魔族です。でも姫の事を愛としく思っている事も事実です」

姫「―っ」

僕「僕が誓った姫の笑顔を守りたいという気持ちにも一切の偽りはありません」

話し終えた後に冷えの言葉を待つ。
無言に耐え切れずに「もし許されるなら―」と僕は言う。

僕「王都攻略までいる事を許してもらえないでしょうか？」

姫「!」

僕「僕は王都攻略後は戦の中で戦死した事にして国を出ます。もしそれもダメなら今すぐここを出て行こうかと思います」

そういった後は何もいうことが無くなり黙り込む。
どれくらい沈黙していただろうか。
姫が何か呟いた。

姫「―。」

よく聞こえなかった僕は姫の言葉に必死で耳を傾ける。

姫「―そんな事は関係ありません」

姫の言葉を待つ。

姫「私は若が―好きなのです。魔族とか関係ありません」

顔を真っ赤にしながらもそういう姫に「ありがとう」と僕は言う。

姫「それに―人族と魔族はむ、結ばれないとか、そういう事はない
のですよね？」

美女さん「人族と魔族の夫婦は居ますよ。珍しいだけで」

姫「それなら―」

美女さん「子も為せますしね。」

その言葉に顔を真っ赤にする姫。

「今言わなくてもいいじゃない!」と美女さんを見ると微笑んで言った。

美女さん「でもお伝えしましたが、お二人の婚姻を望む声は出ておりますし」

僕「そうだけど、するかしないかはまだ分からないよ!」

そういう僕に姫が顔を挙げ「私は―!」と言うとさらに顔を真っ赤にして俯いた。

姫「―私はそう、望んでいます」

姫のストレートな言い方に死にそうになる。

僕「え、あ、その、それは―」

姫「それは?」

何か吹っ切れたのか姫が顔を真っ赤に聞いてくる。

僕「やるべき事もあるので、それが全て終わってから話し合おうと言う事でーいいでしょうか？」

姫「どれくらいかかりますか？」

僕「えとー」

美女さん「数十年はかかるかと」

美女さんの言葉に絶句する姫。
そしてそのまま固まって涙をこぼしだした。

美女さん「泣かせましたね」

僕「美女さんの言葉ででしょう！」

美女さん「でも嘘は申ししておりません。空手形で逃げようとした若の所為です」

そう言われると辛い。

僕「姫…決してそのようなつもりでは」

姫「では、どうして」

僕「―それは、いつ帰るか分からない状況で姫と婚姻を結ぶ事は出来ず、かといって連れて行くことは出来ないと思い―」

姫「かまいません!」

僕「そういう風に―はい?」

姫「それでも構いません。足手まといならここで待ちます」

そういうと姫は一生懸命語りだした。

恥ずかしいので割愛するけど、とりあえず僕を好いてくれているようだ。

恥ずかしさに死にそう。

姫「ですので、私を―」

そういうと姫は真っ赤になって俯いてしまった。

それを見て僕は色々考える。

「どうするのがいいのか?」などという事から「可愛いなあ」という事まで。

1..9の割合で『馬鹿だな』―否定できない

―魔王は僕が姫と結婚してもいいの?

魔王『そうだな。特に問題は無いな』

—そう、なの？

魔王『お主は我で、我はお主だからな。問題ない』

—魔王の存在も話したいんだけど

魔王『お主がそう判断したならよいだろう』

—そっか

僕は姿勢を正すと姫に話しかけた。

僕「姫—」

姫「はい」

僕「もう一つ伝えないといけない事があります」

僕は自分が別の世界で生まれて理由は分からないがこの世界に来た。その時にこれも理由は不明だがこの世界の魔王の体に入り込んだ事。そしてその魔王は僕の意識の中で残っている事を伝えた。

姫「その…魔王さんは今もいるんですか？」

僕「います」

姫「その…今の姿は魔王さんの姿なんですか？」

僕「良く分かりません。僕はこの体を僕の…元の世界と同じ体だと認識してます。ただ魔王も同じように自分の体だと認識している様です」

姫「よくわかりませんね」

僕「僕もわかりません。ただもとの世界と姿かたちが変わっているわけでは無いですね」

姫「…」

僕「これが僕の真実です」

姫「…私に剣を捧げてくれたのは若ですか？」

僕「僕です。魔王は意識は残ってますが行動に影響を及ぼす事は出来ません」

姫「…そうですか」

僕「この事を知っているのは美女さんと姫だけです。妖精少女にもまだ話してませんし、王子達には魔王の事は言うつもりはありません」

姫が僕を見つめる。

僕「これを聞いて姫が僕の事を嫌いになったのなら今までの話はなかった事にしましょう。できれば魔王の事を黙って置いていただけると有難いです」

姫「誰にも…いいません」

僕「ありがとうございます」

そう言うのと互いに黙り込んでしまった。

どれくらいそのままだっただろうか？

体感では長い時間だったが、実際は一瞬だったのかもしれない。

姫が「今度、魔王さんの話も聞かせてもらえますか？」と言った。

姫「若は若です。私は今の若をす、好きに…なっただんです」

顔を真っ赤にする姫に僕は感動すら覚える。

純粹に好意を寄せられた事が嬉しい。

僕「では婚姻というか婚約、という事でいいでしょうか？」

姫「…っはい！」

僕「王子や翁には魔王の事は言いませんが魔族である事を伝えます。」

」

姫「―はい」

僕「そこで反対されたら婚姻はダメになると思ってください。」

姫がそれを聞いて泣きそうになる。

泣いて欲しくなんか無いのに。

僕「だからそうになると、姫には選んでもらう事になります」

姫「え？」

僕「国か僕かを」

姫が息を呑む。

国を選べば僕と分かれる事になり、僕を選べば国を捨てる事になる。
どちらにしろ辛い選択を迫る事になる。

姫「わかりました。でも―受け入れられる可能性もあります」

僕「そうですね。そうなった場合は、僕はいつかやるべき事の為に
国を出る事になります」

姫「―！」

魔王『まあ、行きっぱなしも無いだろうし、数ヶ月出て戻って、また数ヶ月という感じも出来るがな』

―そうなの！？

魔王『移動手段はあるのだ。出来ない事ではない』

再度涙を浮かべる姫にあわてて言う。

僕「でも向こうに行きっぱなし出はなく、数ヶ月に一度は戻ってきたりします！」

それを聞いて姫が少しほっとする。

「それでも数ヶ月は離れ離れで心配です」という姫は本当に可愛い。

僕「僕が魔族の王になったら姫を迎えに上がる事になります」

杯「はいー！」

僕と姫が見詰め合う。

美女さん「まとまってよかったですが、まだ言うべき事がありますよ？」

僕「え？」

美女さん「婚約者です」

僕「あ！」

その言葉に姫が「婚約者？」と聞いてくる。

僕「僕も魔族の王族なので婚約者候補が何人も居ます。」

美女さん「殆どが面識の無い方々ばかりで、若が行方不明になって半年以上立っておりますので、破棄されている可能性は高いですね」

僕「そ、そうです」

美女さん「でも魔族は一夫多妻制ですので、姫様と婚姻されても政略的に複数の別の姫君とも婚姻関係を結ぶ事があります。その事は最初にご了承ください」

― そうなの！？

魔王『それは魔王だから仕方あるまい。』

姫はその事に驚いているようで固まってしまった。

沈黙が部屋を満たす中、「私もお兄ちゃんのお嫁さんになる！」と妖精少女が元気に言う。

それを美女さんが笑顔で頭を撫でながら「それはいいですね」と笑う。

—いいのか!?

魔王『まあ妖精族とも子は為せるだろう』

—ええええええええ

魔王『何を驚く、たいていの種族となら出来るぞ?』

—わざわざ人族と魔族は元の種族とか説明要らなかったのでは!?

魔王『いらんな』

—じゃあ何故!

魔王『しかし、そういう説明があったほうが踏ん切りがつくだろう。実際ついただろうし』

その通り過ぎて魔王の言葉に言う事が無くなる。

僕が黙っていると姫が少し笑って言った。

姫「そうね。妖精少女なら、妖精少女と美女さんなら私は大丈夫」

—姫!?!何で美女さんまで!?!

「あら私もよろしいので？」と笑う美女さん。
冗談にしても恐ろしい未来である。

姫「ええ、他の――婚約者の方達は分かりません。想像もつきません」

僕「……（茫然自失）」

姫「でも、王族の義務として子を為す為に妾を囲う事があるのは私も知ってます。そういうものだと言われます」

以外と言うか何というか、驚いている僕をよそ目に「それでこそ魔王の妻です」と美女さんが笑った。
「これでお兄ちゃんと姫お姉ちゃんとずっと一緒に居れるね」と笑いながら姫に飛びつく妖精少女の頭を撫でながら「そうね」という姫。

――何このハーレム

魔王『爆^はぜろ？』

――いやだよ！

魔王『冗談はさて置き、旨く行ってよかったのでは？』

――そう、なのかな？

魔王『まあ婚約者の方も、本当にたいていの者はもう破棄していると思うので大丈夫だ』

―そ、そっか

魔王『危険なのは数人だ!』

―え？

魔王『まあがんばれ!』

―冗談だよね？

魔王『ソウダネ』

―茶化さないで真剣に答えて!!

魔王『まあ、危険と言うか、まだ婚約を守ってそうなのが一人二人いる可能性があるだけだ。それ程たいした事にはならんさ』

―ああああ、なんかフラグっぽくて嫌だ!

魔王『死亡フラグだな』

―死ぬのは嫌だ!!

心の中で魔王と漫才をしていたら美女さんに声を掛けられる。

美女さん「で、王子様達にはいつ話しますか？」

忘れて―は無いけど、逃げてた。

そうか、早く話しないとダメだね。

僕「今から―話そう」

姫「若…」

僕「王子と翁と爺と話し機を作ってください。」

美女さんに言うとして少し考えて答えた。

美女さん「姫様がよろしければ、姫様のお部屋にお呼びしてお話するのはどうでしょう？」

僕・姫「「え？」」

美女さん「ここなら邪魔者はいりません。その場で姫様のお気持ちもお伝えできます」

姫「―そう、ですね。」

僕「いいの？」

姫「はい」

「よろしくお願いします」と姫が言うと美女さんは一礼してすぐに部屋を出て行った。

緊張で互いに言葉を無くす僕と姫。

―2人きりって何を話せばいいんだ？

魔王『2人だけじゃないがな』

―確かに魔王は居るけど！

魔王『そうではない』

―え？

そういうといきなり「何でも言わないの？」という声が聞こえてきた。

その声にビクリして妖精少女をみる。

―妖精少女の存在を忘れてた！

魔王『おろかな』

自分の愚かしさに笑いそうになって姫を見たら、どうやら姫も同じ

だったようでお互いに顔を見合わせて笑った。

妖精少女が良く分かってない感じだが僕達が笑っているのがうれしいのか一緒に笑ってる。

「ずっと一緒に居られるのがうれしい！」という妖精少女を優しい笑顔で撫でる姫を見ながら「妖精少女を娶るとかは想像つかないけど、養女にするのはいいかも」と勝手な事を考えていた。

第22話 告白（後書き）

予想外の展開で姫と若が心を通わせました。
姫おめでとう。

話が一段落したら後書きに、当初の予定とどう違うのかが後書きに
でもちよこつと書けたらと思っています。

ここから当面「爆ぜろ！」と言う場面が続きます。
こういう話を求めてなかった方、すみません。
本当にすみません。

第23話 公開処刑

僕の話聞いた王子と翁と爺は無言で僕を見ている。

翁「姫は何と？」

姫「―それでも若と居たいです」

しっかりと答える姫。

顔が真っ赤なのは愛嬌だと思うのは惚れた弱みなのだろうか？

翁「王子はどう思われますか？」

問われた王子は我に返り考え出す。

王子「魔族も人族も元は一緒の種族なんですよね。なら王族同士の婚姻と言うだけなのでは？」

翁「しかしまだ王位をついではおりません」

王子「それを言うなら僕も姫姉さまです」

翁「しかしその事はもう目の前まで来ております」

王子「その立役者が若です」

その言葉に翁が黙る。

王子「関係ないのに何の打算もなく手を貸してくれました」

翁「打算が無かったといえますか？」

王子「今ならはっきりと言えます」

翁「それは――」

王子「まず第一に地位や土地を求めないばかりか拒絶していた事。これは自分が魔族である事を差し引いても、そういう事に欲が無いと判断できます」

翁「……」

王子「それに姫に無条件で剣を捧げた事。王族である身でそんな事をするのは危険にもかかわらず、です。僕は若を支持します」

翁「…爺は」

爺「支持」

翁「早！もう少し考えい！」

爺「私は皆より少し長く若を見ている。その中で姫を任せれる御仁

と判断した」

目の前で繰り広げられる僕への賛辞に、これは公開処刑なのでは無いかと思わざるを得ない。
何でこうなった。

王子「それに王族同士の婚姻は両国を結びつける事となりますしね。」

そう笑う王子。

爺「して、聞いてばかりの翁はどう思うのじゃ？」

翁「…ワシも賛成じゃ」

その言葉に姫が「―――！」と聞き取れないが喜びの声のようなものを出す。

爺「賛成なら良いではないか」

翁「一人くらい反対意見を出すものが居ないと議論にならん！」

爺「面倒くさいのう」

爺が翁を茶化して笑うという不思議な光景を見る。

えっと、こんな簡単でいいの？

「まだお伝えする事が―」という美女さんの言葉に僕は婚約者の話もする。

翁「まあ王族なら仕方あるまい」

爺「そうですね。姫が第一王妃となるなら問題は無いです」

そういう2人に妖精少女が「私もだよ!」と笑う。

「は?」という2人に美女さんが笑顔で答えた。

美女さん「姫様のお許しを得て妖精少女は第2王妃になりました」

王子・翁・爺「「は?」「」」

美女さん「言葉の意味の通りです」

頷く姫が「美女さんが第3王妃です」と言うと3人は動かなくなつた。

「ねー」と言い合う姫と妖精少女。

美女さんは「そういう事になりました」と笑顔で答える。

僕「―冗談ですからね」

僕の言葉に3人が息を吹き返す。

「危うく死ぬかと思ったわい」という翁に「冗談では言ってません」と姫が爆弾を落とす。

姫「ありえる未来です。」

王子「姫姉さまはそれでよろしいので？」

姫「はい。妖精少女と本当の家族になれるんです。うれしい以外の気持ちはありません」

王子「はあ…」

「もちろん、美女さんともです！」と力説する姫に笑顔で「ありがとうございます」と言う美女さん。

—なんだこのカオス

魔王『おぬしが要因だな』

—でも原因は違うよね！

魔王『もう嫁に板ばさみか』

—それも何か違う

翁「と、とりあえず姫との婚姻は問題ないと言うことじゃな」

翁が話を纏めに掛かる。

王位継承争いで年に何ヶ月か留守にする事も伝えている。

「まあ王位は王子が継ぐから問題ないじやろう」という翁に王子が何か言いたそうにしていた。

もしかして王位をこちらに押し付けるつもりだったのか？

正式な婚姻はすぐには無理だ。

だからとりあえずはこの戦が終わった後に婚姻を発表する事に決まった。

話も終わり皆で部屋を出て行こうとした時に「そういえば」と美女さんが言った。

「腕の紐の本当の意味を知ってますか？」と。

僕「本当の意味？」

美女さん「桃色は姫のファンが付けている色です」

僕「え？」

美女さん「黒は若のファンです」

僕「え、だって、幸運とか無事とか――」

美女さん「ああ、あれは嘘です。」

僕「は？」

美女さんを見ると「嘘です」と笑顔で再度言った。

姫を見ると真っ赤になり俯いている。

その腕に黒い紐があるのを見て、桃色の紐を進めたのが姫だと思い出し、本当の意味で理解する。

顔が熱い。

そんな僕を笑顔で見やり「ではそろそろお休みになれますか？」

美女さんが僕に言う。

美女さん「若は戦続きでここ2日程寝て無いでしょうし、姫も昨日から一睡もして無いでしょう」

確かに寝てないかもしれない。

気が高ぶって気がつかないただけで物凄く眠いのもかもしれない。

美女さん「それとも皆さんと食事にしますか？」

それはなんだか恥ずかしいのでとりあえず少し時間が欲しい。
そして眠い。

美女さん「お二人で寝ますか？」

その言葉に皆固まる。

妖精少女だけが「じゃあ私も一緒に寝る！」と元気に言ってる。

僕「は、はは、はははは、び、美女さんは面白い事を言うな―」

無理やりそういうと「とりあえず昼まで寝ます」と言うのと姫の部屋を出て一人で部屋に戻った。

魔王『一緒に寝ればよからう』

―出来ないよ！

魔王『何故だ？』

―っ！

魔王『もう夫婦のようなものだろうに。何をためらう』

―色々あるんだよ！

魔王『―へたれめ』

—ごめんね!!—

もう眠たいせいか良く分からなくなってきた。
ベッドに倒れ込むように—

目を覚ます。

日差しが高いのが分かるがまだ眠たくて起きずにまどろむ。

魔王『目覚めたか?』

—あ、うん—

魔王『そうか』

—何か変な夢—

魔王『夢じゃないんだがな』

魔王の言葉に覚醒する。

―夢じゃ、ない―

魔王『無いな』

―姫との婚約も？

魔王『現実だ』

―魔族と伝えた事も

魔王『全部現実だ。魔王と言う事も伝えたのも全部現実だ』

―それじゃ…

魔王『妖精少女と美女を嫁にするのも現実だ』

―っ！

魔王『その上「この世の女全ては俺のものだ！」と叫んだのも全て夢じゃない』

―それは嘘だよね！

魔王『覚えて…無いだと！？』

え？どういう事？本当にそんな事言ったの？
昨日の出来事を必死で思い出す、

―やっぱり言っただけだね！！

魔王『だが妖精少女と美女を嫁にするのは現実だ』

―え？あれは皆の冗談だと思うよ？

魔王『そうだと良いな』

―え？ええ？

その時部屋の扉がノックされる。

「どうぞ」と言う美女さんが「お食事をお持ちしました」と入って来た。

テーブルに並べられる食事を見ながら美女さんを盗み見る。

―魔王が変なことを言うから意識しちゃったじゃないか！

魔王『そんな事は知らん』

美女さん「どうかしましたか？」

僕「いえ…」

美女さん「それとも食べさせて欲しいのでしょうか？」

僕「は？」

美女さん「第3王妃として『あーん』とかした方がいいのでしょうか？」

僕「び、美女さん!？」

「冗談です」と笑う美女さん。
心臓が悪い。

美女さん「それは第一王妃である姫様が一番最初にするべきですかね」

美女さんの物言いにガックリと肩を落とす。

僕「美女さんまでその冗談に乗るんですか？」

美女さん「と言うと？」

僕「別にもう良いでしょう。僕を苛めてうれしいのですか？」

美女さん「それはーうれしいですが」

ーうれしいんだ！

美女さん「まあ半分は嘘ですが」

僕「半分って―」

美女さん「第3王妃については構いませんよ」

僕「は？」

美女さん「構いません」

―何？ ということなの？

魔王『そのままの意味だろう』

美女さん「今と変わりませんし」

僕「はい？」

美女さん「私は若の従者です。若に従いついて行くのみです」

僕「従者も王妃も同じだと？」

美女さん「若の所有物には変わりません」

笑顔で言い切る美女さん。

僕「美女さんが望むなら従者を続けなくても良いですよ？」

魔王『何を言う』

美女さん「どういふことですか？」

僕「美女さんを縛るつもりはありません。もしやりたい事が見付ければ従者を辞めても良いですよ』

その言葉に美女さんが少し繭を寄せた。
笑顔以外の顔は珍しい。

美女さん「もうー必要ないと？」

僕「そんな事は無いですよ！ただ美女さんは美女さんの―」

美女さん「では私は若につき従います」

そういういつもの笑顔を浮かべた。

美女さん「第3王妃ですしね」

―もう勘弁してください

食事を取りながら美女さんに今の状況を聞く。
王都は動きがなく敗走した国王軍は殆どが自分の領地に戻ったようだ。
こちらの準備はほぼ終わっている。

だが今日一日は兵の休日という事で、明日以降も大砦防衛で残るメンバー以外は反休暇状態らしい。
だから僕達も今日一日は休んでいて良いらしい。

―というか美女さんはいつ寝てるんだ？

美女さん「食事の後はどうしますか？」

僕「そうですね。明日に備えてもう少し休みます」

美女さん「添い寝しましょうか？」

僕「ええええ！」

美女さん「冗談です。それも第一王妃の姫が先です」

僕「―心臓に悪いのでその冗談は辞めてください」

「分かりました。控えます」と美女さんは笑顔で答えて、僕が食べた食器を片付けると部屋を出て行った。

僕は食事後すぐというのに疲れがぶり返し横になるとすぐに眠ってしまった。

途中、部屋の扉がノックされた。
起きようとしたが疲れが酷く目を開けることが出来ない。

訪れた相手は何かを呟いたがよく聞こえない。

入り口で立っていたが静かに部屋に入ってくる。

そして僕の隣に立つと「寝ているんですか？」と微かに聞こえる声で呟いた。

「起きていますよ」と言おうとしたが体がいう事を効かず声に出せなかった。

相手は少し笑って僕を見下ろしていたが寝ていると確信したのか、僕の恐る恐る前髪を触りだした。

そのうちに大胆になってきたのか最初は恐る恐るだったのが堂々と触るようになる。

すると耳元で「ふふ…」と笑う声が聞こえる。

どれくらいそうしていただろうか。

不意に触るのをやめたかと思うと、そつと頬を触りすぐに部屋を出て行ってしまった。

僕は結局、疲れに勝てず最後まで起きる事が出来ないまま再度眠りに落ちた。

夕方に目が覚める。

久々にゆっくり寝た為か体が痛い。

夕食まではまだ時間がありそうだ。

体をほぐしてどうしようか迷迷う。

―今日一日寝て過ごしたし、少し体を動かすかな。

そう思い剣を持ち館の脇のちょっとした広場で剣を振るう。体が熱くなり薄っすらと汗が出てきた頃に声を掛けられる。

白の騎士団団長「稽古ですか」

振り返ると白赤両騎士団団長が歩いてきていた。

僕「今日一日、寝て過ごしてしまったので、晩御飯までに少しおなかをすかそうかと」

白の騎士団団長「よければ手合わせしますか？」

赤の騎士団団長「それなら俺と！」

僕「えと…では軽く。まず先に言われた白の騎士団団長と…」

全然軽くなかった。

飄々として物腰の柔らかい感じの白の騎士団団長だが、そこはやはり騎士団団長。

流れるような剣捌きで隙が無い。

僕もそれを受けながら合間を見ては攻撃し返すが、全ていなされる。お互い一步も引かずに剣戟を打ち重ねていると不意に「そこまで！」と声が掛かった。

赤の騎士団団長「いつまでやっている。次が控えているんだ」

赤の騎士団団長がそういつて白の騎士団団長を押しつけて前に出てきた。

白の騎士団長は肩をすくめると「続きはまた今度」と言って下がった。

赤の騎士団団長が剣を構える。

僕もすぐに剣を構えた所に白の騎士団団長の「はじめ」の声が掛かる。

赤の騎士団団長の剣は正確に似合わず力任せ一辺倒ではない。

こちらもさすが騎士団団長といった所だろう。

「なかなかやるな」「これならどうだ」等といいながら結構騒がしい。

それに白の騎士団団長が「あなたは手数より口数が多い」と言われて「うるさい」と返していた。

赤の騎士団団長ってもっと硬派なイメージだっただけに驚きもひとしおだ。

赤の騎士団団長と剣を合わせていると白の騎士団軟調が僕に話しかけてきた。

白の騎士団団長「姫と婚約したそうですね」

僕の剣が揺れる。

僕「な、な―」

赤の騎士団団長「俺も聞いたぞ」

タイミングをずらされた僕は必死で赤の騎士団団長の剣を受ける。

赤の騎士団団長「まさかいきなり婚約まで行くとはな」

僕「な、何で―」

白の騎士団団長「翁に聞きました。」

僕「え、あ―」

白の騎士団団長「安心してください。知っているのは一部の人間だけです。」

赤の騎士団団長「発表は王都攻略後に落ち着いてからにする予定だそうだ」

もう2人の言葉に翻弄されて僕は剣筋が乱れ赤の騎士団団長の剣を受けるので必死だ。

赤の騎士団団長は「ふっ」っと笑うと距離を取って剣を収めた。それを見て僕も剣を収め息をはく。

物凄く疲れた。

赤の騎士団団長「心を乱しながらも我が剣を受けきるか。さすがだな」

僕「心を乱した時点で負けてますけどね」

僕はやさぐれながら言う。

「確かに」と笑い声を上げた赤の騎士団団長は急にまじめな声を出す。「お前の事も聞いた」と僕を見て言った。

白の騎士団団長も真剣な表情で僕を見ている。

これは僕にも分かる。

魔族という件の事だろう。

赤の騎士団団長「だからと言ってお前への評価は変わらない」

そう言う赤の騎士団団長は僕の肩を叩きながら大きな声で笑った。

白の騎士団団長も「僕も同じ意見です」と笑顔で言ってくれた。

それに対して「ありがとうございます」とだけ僕は答えた。

2人の気持ちがうれしくてそれだけを言うので精一杯だった。

赤の騎士団団長「戦が終わって落ちついたら茶化し無しの真剣な仕合をしよう」

そういう赤の騎士団団長に僕は頷いた。

第24話 特使

日が落ちる頃に王都からの使者が来た。
降伏勧告の返答を携えてきたようだ。

広間の玉座に座る王子と姫。

脇にはそれぞれ翁と爺が立ち、その前に両騎士団が立つ。
僕は美女さんと脇に控えていた。

広間に入ってくる4人の人物。

そのまま進み王子と王女の前で膝を折り臣下の礼を取ると、その中の一人が「有力貴族の娘、国王の親書を持って参りました」と挨拶した。

無言で頷く王子。

赤の騎士団が進み出て貴族娘から親書を受け取ると王子に渡した。
王子は無言のままその手紙を読むと「使者殿もお疲れでしょう。夕食の用意をさせますのでそれまでお休みください」と一言だけ言った。

それでこの会見は終わりである。

使者が退席すると王子が深いため息を付いて背もたれに体を預ける。

手紙を受け取った爺は一瞥すると「馬鹿らしい」と言った。

爺が受け取り内容を読む。

爺「降伏を受ける条件として以下の要求を提示する。」

・王子と有力貴族の娘の婚姻

- ・身柄の引渡しから有力貴族のトップを外す事
- ・国王派の家（地位・土地・財産）・命の保障
- ・新政府には反国王派と国王派の半分ずつ就任

僕「こちらの条件と、それを断った後の降伏時の条件は伝えませんでしたっけ？」

爺「伝えましたな」

僕「なのに何でこんなに上目線な条件を出してくるんだろう？」

翁「状況が読めて無いだけじゃろう」

白の騎士団団長「こちらの降伏勧告を自分達の言いように解釈したのでしょう」

僕「自分達のいいように――？」

白の騎士団団長「『王都攻略が厳しいから降伏勧告をしてきた――』とでも」

僕「なるほど。では？」

翁「突っぱねるに決まってる」

僕「王子？」

黙ったままの王子に違和感を感じ呼びかける。

はっと顔を上げた王子は「受け入れることは出来ません」と言った。違和感は拭えないが話は続いているのでそちらに意識を向ける。

白の騎士団団長「そうなると開戦ですね」

翁「そうじゃな。明日の朝にでも使者に伝え、そのまま王都へ向かう」

全員がその言葉に頷き、明日に備えて各自の自室に帰る途中で「若」と王子に呼び止められる。

振り返ると「少しよろしいでしょうか」と言い先を行く王子の後を僕は付いていった。

王子と2人でテーブルを囲う。

部屋の作りは姫と似た感じだが若干質素だ。

王子「先程の国王軍からの使者の話です」

僕は王子に先を促す。

王子「受けた方が―良いのではないかと」

僕「受けた方がいい？」

王子「あ、いえ、一部です…けど」

僕「国王派の申し出のうち、新政府に国王派を、というのは受け入れられません。これは絶対です」

王子「はい」

僕「財産・土地の保障も無理です」

王子「はい」

僕「有力貴族のトップの首は…正直どうなんだろうね」

王子「え？」

僕「命まで必要なのかは疑問ですよね」

王子「…それは、やはり首謀者の命でしかこの戦は終わらない」

僕「なら答えは出てますね」

王子が驚いたように僕を見る。

僕「そうになると王子の引っ掛かってる事は領主娘との結婚」

王子「…別に結婚したいわけじゃないです」

そう言うとき王子は黙り込んだ。

僕は王子の表情から真意を捉えようとして諦める。

――元々、僕に人の気持ちを量るのは無理だ

魔王『そうだな』

――そうだけど！

僕「王子――僕を（友人として）信じて話してください」

王子「そうですね。僕は若を（義兄として）姉妹さまを任せることが出来るほど）信頼しています」

そういうとき王子は「彼女を助けたんです――」と呟いた。

僕「――彼女が好きなんですか？」

王子「――っ！……わかりません。違うと思います……」

王子の言葉を待つ。

王子「有力貴族娘は―僕の幼馴染なんです」

王子の言葉に僕は耳を傾ける。

王子「有力貴族は昔から王宮に出入りしてました。その関係で有力貴族娘とは子供の頃によく遊んだんです」

懐かしそうな顔をする王子を見やる。

王子「彼女から今の状況が想像できません」

僕「結婚が想像できない？」

もう時「違います。このような状況を受け入れる女性ではない、です」

真っ直ぐ僕を見つめる王子

僕「―助けたいとは？」

王子「え？」

僕「有力貴族の娘の命を助けたいといいましたが、それはどのような

な意味を？」

王子「…それは」

僕「それならこのまま何もしなくても助かりますよ。」

王子「えー？」

僕「戦後に処刑されるのは成人男性だけです。女性である有力貴族娘は助かります」

僕の言葉に王子が首を振る。

王子「—そうじゃ、そうじゃないんです」

僕は首を傾げたまま王子の声を聞く。

王子「僕は—」

そう言うとき王子は固まってしまった。

僕「命が助かるだけでは無理だという。王子の言う助けるとは、ど
ういう事を指すのですか？」

俯き黙る王子に僕はそれ以上の言葉を発さずに見る。

少し立って王子の部屋の扉がノックされる。

黙って答えない王子の変わりに僕が返事すると扉が開き美女さんが入ってきた。

美女さん「若、こちらにおいででしたか」

僕「どうしたの？」

美女さん「姫様がお呼びです」

僕「そうー王子」

僕の呼びかけに答えない王子。

僕「今の話の続きは食事の後にしましょう。それまで考えて居て下さい」

僕の言葉に王子が小さく頷いたのを確認すると「失礼します」と言
って部屋を出た。

美女さんは何も聞かずに僕を姫の部屋まで案内している。
姫の部屋を美女さんがノックし扉を空ける。

「失礼します」と言って入った僕に2人の女性が迎える。

一人は姫でもう一人は——有力貴族の娘だった。

美女さんはそのまま扉を締めて出て行ってしまった。

妖精少女と子狼は居ないようだ。

テーブルに案内され座った僕に有力貴族の娘が挨拶をした。

有力貴族の娘「先程はご挨拶が出来ずに申し訳ありません。有力貴族の娘と申します」

僕「こちらこそ、申し訳ありません。若と申します」

何故姫と有力貴族の娘は居るのか？

何故僕がここに呼ばれたのか？

状況が飲み込めず戸惑う。

姫「私と有力貴族娘は幼馴染なんです」

僕「は？」

有力族の娘「私は小さな頃から王宮に出入りしてたので、そのご縁で姫と仲良くさせて頂いておりました」

なるほど。

よく考えれば姫も王子も王宮に居たんだ。

王子の幼馴染と姫の幼馴染が同じでもおかしくない。

姫「小さな頃から一緒に遊んだり勉強したりしてたのです」

有力貴族の娘「懐かしいですね」

姫「有力貴族の娘は私達の中で一番勉強が出来たんですよ」

有力貴族の娘「そういう姫もかなり勉強されていたではないですか」

そういってお互い笑う。

仲は本当によさそうだ。

有力貴族の娘「…こんな事になるまでは姫には仲良くして頂きました」

姫「私は今でも親友だと思っております！」

有力貴族の娘「姫—ありがとうございます」

有力貴族の娘はそう言う目には涙を浮かべた。

—悪い子では無いようだね

魔王『女はわからんがな』

―そ、そう？

魔王『まだ様子を見るべきだ』

姫「若をここに呼んだのは、有力貴族の娘と昔約束した事を守ろう
と思っ」

有力貴族の娘「約束―」

姫「有力貴族の娘、この若がわ、私の―王子様なのでしゅ！」

―囁んだ

魔王『囁んだな』

それを聞いた有力貴族の娘は何を言われているのか分からないよう
だったが、少しして意味を理解すると「ええええ〜〜〜〜！」と
声を上げて席を立った。

有力貴族の娘「お、お、お―」

姫「王子様」

恥ずかしそうに言う姫に僕も赤くなる。
それを見ていた有力貴族の娘は僕を睨むと「説明を―」と腹の底か
ら出すような声を出した。

僕「えっと、何というか、気が付いたらそういう事になってました。」

有力貴族の娘「気がついたらって何ですか!!」

姫「落ち着いて有力貴族の娘。これはもう皆納得してるの」

有力貴族の娘「みんな―?」

姫「王子も爺も翁も。今回の戦が終わった後に私達の婚約を発表する予定なの」

「キヤッ」と頬を染める姫は可愛いが、僕を睨む有力貴族の娘が怖い。

「ぐぐぐ…」と何かを堪えていた有力貴族の娘は拳を振り上げると「これは今すぐ戻って兵を再編しなければ!!」と叫びだした。

有力貴族の娘「姫ちゃんを誑かす魔手から一刻も早く救い出さねば!!」

豹変した有力貴族の娘を姫が「まって、まって」と宥める。
少しして落ち着いた有力貴族の娘は「失礼しました」と席に座る。

姫「私が望んだことなの」

有力貴族の娘「姬ちゃんが？」

姫の呼び方が「姬ちゃん」になっているのにも気がつかない有力貴族の娘。

姫がそう呼ばれるのが嬉しそうなので言わないけど。

姫「私が懂れて…でも若は私を友人としてみていない事が分かったの」

黙って話を聞く有力貴族の娘。

姫「でもとある事から私の気持ち達が若に知られて、ダメだと思ったけど若が真剣に答えてくれたの」

「嬉しかった―」と呟く姫に僕は悶死しそうになる。
それを止めたのは「とある事？」という有力貴族の娘の低い声だ。

姫「赤の騎士団団長が口を滑らせてしまったようなの」

有力貴族の娘「それまで若は姬ちゃんの気持ちに気がついてなかったと？」

僕「う、うん―」

有力貴族の娘「あの（自主規制）！余計な事を――」

――えゝ！何この豹変振り！！怖い

魔王『やはり女はわからんな』

――そういう意味じゃなかったくせに！

姫「最初は『何でそんな事を言うの？』って思ったけど、若が気持ちを受け入れてくれたから、今は感謝の気持ちで一杯」

有力貴族の娘は僕を睨み殺す勢いで見つめ

有力貴族の娘「貴方は姫ちゃんの気持ちに気がついてなかったというけど、では何故戦争に参加してたの？」

僕「え？友人が危ないんだ。出来る事をしよう――」

有力貴族の娘「本当にそれだけ？姫に取り入って地位や土地を得ようと思ったんじゃないの？」

僕「そんな事無いよ！」

有力貴族の娘「本当かしら」

姫「本当よ」

姫の言葉に有力貴族の娘が「え？」と声を上げる。
姫は嬉しそうに、誇らしげに語りだす。

姫「若は本当にそういうのに興味があったの」

有力貴族の娘「そうしてそう思うの？」

姫「国王軍が大砦に迫った時に私に剣を捧げてくれたの」

有力貴族の娘「それは兵士として当然――」

姫「若はこの国の人ではないわ。それでも私の笑顔を守りたいと言ってくれたの」

有力貴族の娘「……」

姫「たとえば友人としても嬉しかった」

有力貴族の娘「それが無欲とどう繋がって――」

姫「その時に土地も権力も要らない。ただ私を守るって」

有力貴族の娘「――！」

姫「その後も爺たちに戦後に国を支えて欲しいという事を言われたけど、その度に土地も権力も要らないと跳ね除けてるわ」

それを聞いた有力貴族の娘は僕に目を向ける。

有力貴族の娘「本当に――？」

僕「要りません」

有力貴族の娘「土地も？」

僕「土地の治め方なんか知りませんし」

有力貴族の娘「権力も？」

僕「土地も分からないのに国なんか――」

有力貴族の娘「お金とか――」

僕「まああるほうが良いですが、生活できる程度あれば」

有力貴族の娘「――何の為に戦ってるの？」

僕「最初は友人である姫を助けるため。」

有力貴族の娘「最初は？では今は？」

僕「姫の笑顔を守るため」

恥ずかしくて「大好きな」とは言えなかった。
有力貴族の娘は顔を真っ赤にしている姫と僕を眺めるとため息をつ

いた。

有力貴族の娘「――分かりました。貴方なら信頼できそうです」

そういうと有力貴族の娘はまじめな顔をした。

有力貴族の娘「本題に入りましょう」

第24話 特使（後書き）

新キャラ登場しました。

あまり増えると扱いきれなくなるのに：

タイトルを「（仮）」しました。

「無題」よりはマシだと思ったんですが、どっちもどっちでした。

第25話 世界

有力貴族の娘「国王軍は現在、2つの勢力にわれています」

僕「2つ―」

有力貴族の娘「交戦を続けるべきだという一派と降伏するべきだという一派です」

「私は降伏派です」と有力貴族の娘は言う。

有力貴族の娘「降伏派はこれ以上の内乱は他国を引きいれかねないとし、反国王軍の要求を呑むつもりでした」

僕「……」

有力貴族の娘「しかし交戦派は自分達の利権が無くなる事を良しとせず、徹底抗戦を唱えております」

僕「それなのに良く特使が出せましたね」

有力貴族の娘「そこは折衷案で条件に『土地・財産・命の保障』と『戦後の権力』を折込み納得させました」

姫「貴方のお父様は―？」

有力貴族の娘「父は―有力領主は交戦派です」

その言葉に姫が息を呑む。

有力貴族の娘「ですが実情は降伏派です」

僕「そうなる」と――

有力貴族の娘「この度の戦の責任を取らされるでしょう。」

責任というのは処刑の事だろう。

姫「!!」

有力貴族の娘「父も、もちろん私もそれは納得しております」

姫「そんな――」

僕「では何故、交戦派と言っているのですか？」

有力貴族の娘「有力貴族の身の安全を守るためです」

僕「どういう事でしょう」

有力貴族の娘「もし今の状態で降伏派と言うと、交戦派に暗殺されかねません」

僕「……」

有力貴族の娘「交戦派と同じく愚かな発言をする事により身を守ってます。戦後に責を追う為に。」

姫「ーっ！」

有力貴族は戦後に責任を取る為に嘘をついてまで生き延びていると言う。

姫「なぜそこまで――」

有力貴族の娘「それが有力貴族の誇りです」

毅然と言い放つ有力貴族の娘は美しかった。

有力貴族の娘「先程の王宮からの手紙に『王子と有力貴族の娘の婚姻』と言うのがありました。」

僕「ええ」

有力貴族の娘「あれも嘘です」

姫「は？」

有力貴族の娘「正確に言うと私が王都から脱出する為の嘘です」

僕「王都を出る為？」

有力貴族の娘「はい。今の王都はかなり危険な状況です。隙を見せると仲間であるはずの国王派から殺害されかねません。それを回避しつつ王子に真意を伝える為には私が出向くように仕向ける理由が必要でした」

僕「それが王子との婚姻だと？」

有力貴族の娘「ええ。そういう条件を載せた後に『直接会った方が王子を落としやすい』と言いくるめました」

中々したたかな女性である。

有力貴族の娘「私の本当の目的は内通です」

僕「内通？」

有力貴族の娘「はい。父である有力貴族が率いる一部の兵による決起と王都の開城です」

僕「それは――！」

有力貴族の娘「反国王軍が王都に来た晩に行う予定です」

有力貴族の娘の言葉が真実なのかを見抜こうとした。

それを察した有力貴族の娘が笑顔で答える。

有力貴族の娘「嘘は申ししておりません。拷問をして頂いても結構です。元より、こちらに來た時点で無事に帰れるとは思ってません」

そう言う「この場で直接体に聞きますか？」と言う有力貴族の娘に僕は首を振った。

僕「冗談でもそういう事は言わないで下さい」

有力貴族の娘「冗談ではありませんが？」

僕「なおさらたちが悪い」

有力貴族の娘「姫が気になるのでしたら別の部屋で行いましょう。ただの拷問です」

魔王『丁度いい、練習がてら試せばよいではないか』

― 黙れ

僕「そんな事はしません」

有力貴族の娘「では別のものにさせますか？」

僕「それもさせません。拷問は一切しません」

有力貴族の娘「…信じると？」

僕「はい」

有力貴族の娘「何故？」

僕「貴方が姫の親友だからです」

有力貴族の娘「—そのような振りをしているだけの可能性は？」

僕「姫がそう信じてます。だから僕も信じます」

そう言うとき姫が「若—」と嬉しそうに呟いた。

僕「それに僕は試されるのが気に入りません」

姫「試される？」

僕「ああ言って僕が心を動かされるか…有力貴族の娘に惑わされるかを見てたんです」

姫「何故？」

僕「姫にふさわしいか見る為でしょう」

有力貴族の娘「分かりましたか」

僕「分かりますよ。貴方の目を見れば」

挑発的にこちらを見る目を見つめる。

僕「貴方はそこまで安い人じゃない」

有力貴族の娘「私の覚悟を嘘だと？」

僕「いえ、本物でしょう」

有力貴族の娘「でしたら――」

僕「気を抜いた時に僕を殺して自害するぐらいの覚悟を持った女性を相手にする勇氣はありません」

有力貴族の娘「何故そう思うのですか？」

僕「姫と似ているからです」

その言葉に息を呑む2人を見やり「似てますよ」と再度言った。

僕「見た目はもちろん性格も似てません」

有力貴族の娘「では――」

僕「でも根っこの部分、芯を持っている感じは同じだと感じました。さすが親友同士ですね」

そう言うのと姫は嬉しそうに、有力貴族の娘は顔を赤くしてそつぽを向いてしまった。

有力貴族の娘「こ、婚姻は国王軍を騙す嘘ではありますが、本当にしない訳ではありません」

姫「有力貴族の娘？」

有力貴族の娘「王子は無理でも我が一族の存亡の為に誰でもいいから有力な人物に取り入ろうと考えてまいりました」

姫「ーっ！」

その言葉に姫が僕を仰ぎ見る。

「どうにかできないか？」という事だろう。
必死で頭を回転させる。

僕「一族の存亡とは、どこまで助かればと考えてますか？」

有力貴族の娘「成人男子は仕方ないとしても、女性と成人前の子供の命と、生活の保障」

僕「財産、ではなく生活の保障？」

有力貴族の娘「そこまで高望みは出来ません」

女子供は助命と決めてはいる。

ただ有力貴族の一門となると状況によっては成人前でも男児は全て処刑の対象になる可能性が高い。

それを成人前の男児まで確実に助けるほどの力を持った人物となると誰だろう。

僕「王子、翁、爺の3人か？現領主では少し弱いし領主息子は無理だ。両騎士団団長はダメだな。他の領主達は…出来そうな人物は少ない上に、口約束だけで付け入ろうとするかもしれない―」

ぶつぶつ言う僕に有力貴族の娘が頷く。

有力貴族の娘「やはり王子と翁と爺くらいですか。」

僕「そう…ですね」

有力貴族の娘「王子なら―いえ、今の時期に私が近づけそうにもありません」

僕「確かに。でもそれだけの事をするとなると王族か余程の権力者でないと難しいので、そうなる後は姫ですが」

有力貴族の娘「姫なら私に手を貸して下さると信じておりますが―」

姫「私が出来事ならどんな手助けも！！」

姫の言葉に「ありがとうございます」と言い首を振る。

有力貴族の娘「それでも姫だと押しが弱いのです」

姫「何故―」

僕「政治に介入できないからです。」

有力貴族の娘「そうですね。他に王族などの候補が要ればよかったのですが」

「王族―」と呟く姫。

僕と有力貴族の娘はあでもない、こうでもないと言位置を探るもルールしてしまい答えが出ない。

応酬される言葉の合間に姫の呟きが通る。

姫「若も王族になるのですよね？」

僕と有力貴族の娘が姫を見る。

姫「私と、その、け、結婚するなら―」

有力貴族の娘「―確かに」

有力貴族の娘が僕を見る。

いやいやいやと首と手を振る僕の手を掴み

有力貴族の娘「若の妾になればいけます！」

僕「ちょっとまって！」

有力貴族の娘「待てません。これしか手はありません！」

姫に助けを求めようとしたが姫は僕達をじっと見つめている。

「姫」と情け無い僕を見て姫は頷くときっぱり言った。

姫「有力貴族の娘なら」

僕「ええええええええ」

有力貴族の娘「本当ですか！」

姫「えっと、本当は嫌だけど…有力貴族の娘を助ける為なら、が、がまんしゅる」

目に涙を浮かべる姫。

それを見た有力貴族の娘が僕の手を離し落ち着いた声を出した。

有力貴族の娘「やはりこの話は無かった事に」

姫「え!？」

有力貴族の娘「私は姫ちゃんを泣かせてまで無理を通そうとは思いません」

姫「だめ、だめだよ」

有力貴族の娘「姫ちゃんが泣く方がダメです」

有力貴族の娘が姫に手を添えると優しく微笑んだ。
それを見た姫が「だって、だって」とぐずる。

姫「有力貴族の娘は、綺麗だから、若が取られちゃうと思って――」

それを聞いた有力貴族の娘が「そんな事ありませんよ」と優しい言葉を掛けながら僕に合い図を送る。

どうやら「お前も何か言え」という事らしい。

僕「姫、僕は姫の騎士です。姫が何より大切です」

それを聞くと姫が泣き出してしまった。
有力貴族の娘は僕を睨みながら姫をあやす。

少しして落ち着いた姫は鼻声で「有力貴族の娘も若のー」と言った。有力貴族の娘が何か言いそうになるのを制して姫は「それしか方法は無いから」と言う。

それでもなお否定しようとした有力貴族の娘に「これでいつでも一緒に居られるね」という姫の一言で有力貴族の娘は反撃する気力を奪われた。

―僕の気持ちは？

魔王『考慮された事が今まで幾度あった？』

―ですよねー

「よろしくお願いします」という有力貴族の娘に「こちらこそ」と頭を下げる僕。

お互い偽装だと分かっている。

姫「若は優しくてかっこいいから、すぐに有力貴族の娘も好きになるよ」

笑顔で姫が言う。偽装だと分かってるよね？

先程取られると泣いていたくせに、決まればこういう事を言うのは、姫が変なのか王族が変なのか一度確認した方がいい気がする。

誰に確認すればいいんだ？

有力貴族の娘「姫ちゃんあのね―」

姫「これからは一緒に居られるなんて、嬉しいな」

有力貴族の娘「うん。嬉しいーじゃなくてね」

姫「嬉しくないの？」

有力貴族の娘「嬉しいに決まってるじゃない！」

姫「良かった」

有力貴族の娘「でね―」

姫「有力貴族の娘は第4王妃だね」

世界！（日本語訳）

時が止まる。

ぎぎぎ、と音がしそうな感じでこちらを見た有力貴族の娘は「第4？」
「呟いた。」

僕の長い戦いが、今始まる！！

—ご声援ありがt（ry

結局説明に時間が掛かった。

第2と第3の名前が出ると「さっきの美人！」と有力貴族の娘が嘸み付く。

妖精少女が本当に少女だと聞くと魂まで凍りつきそうな目で見られた後に「本当に可愛いんだ」という姫の笑顔にとろける有力貴族の娘。

「そういう事になってるけど実際は違う」という事を有力貴族の娘が受け入れられそうになった瞬間に「でもみんな有力貴族の娘と同じで納得してるよ」という姫の一言で燃料投下され、再度火が燃え上がる。

説明して理解してもらおう頃には僕は精神的疲労で燃え尽きそうになっていた。

僕「…とりあえず、決まった内容は食事の後に話をしましょう」

そう言って姫に食事中に言わないように伝える。

食事には特使も呼ばれるはずで、そこで計画がバレルのはまずい。食事後に王子や翁、爺を呼んで話を詰めないといけない。

部屋を出て廊下を歩きながら有力貴族の娘と話をする。

僕「そういえば王子がもし婚姻を受け入れると言ったらどうするんですか？」

有力貴族の娘「その場合は諦めるよう説得します」

僕「王子のほうが確実では？」

有力貴族の娘「王位を継ぐ人間が私のような立場の人間を引き入れたらダメですよ。王妃で無ければまだ分かりますが」

僕「では妾としてならいいと？」

有力貴族の娘「王妃が正式に居ない状態では無理ですねーいえ、居てもやはり無理でしょう」

僕「何故？」

有力貴族の娘「あの子に囲われるのは想像できません」

僕「はあ」

有力貴族の娘「それに丁度いいのを見つけましたしね」

僕「はあ…」

有力貴族の娘「何でそこでため息つくんですか」

僕「出来るだけ早く解消できるよう尽力します」

有力貴族の娘「あら？別にいいですよ？」

僕「は？」

有力貴族の娘「若がお求めならいつでもお呼び下さい」

僕「何を――」

有力貴族の娘「それくらいの覚悟はここに来る時には出来ております」

僕「……」

有力貴族の娘「ではまた後ほど」

そう言うとは有力貴族の娘は会釈をして部屋に入っていった。

魔王『違う意味で怖い女だな』

――そうだね

有力貴族の娘の扉を何時までも見つめていても意味が無い。
先程王子に相談受けた後にこんな事が決まってしまったので、王子に事前に話をしようと王子の部屋に向かった。

第26話 王宮ハーレム物語

王子「姫がそんな事を――？」

頷く僕と呆然とする王子。

そうだな。

自分の好きな人が偽装とはいえ妾扱いされるんだ。

僕「本当は王子と婚姻できたらいいのかもしれないんだけど――」

「あの子に囲われるのは想像できません」といった有力貴族の娘の顔が浮かぶ。

王子「――いえ、それは無理でしょう」

考え込んでた王子が口を開いた。

王子「王位を継ぐ予定の僕が、現政府の貴族との結びつきを強くするのは絶対あってはならない事です。それに――」

「もしそうなくても有力貴族の娘が断るでしょう――」と。
そういう王子は無表情ではないものの、嬉しいのか悲しいのか苦し

いのか楽しいのか分からない表情をしている。

僕「あくまで偽装だから安心してね」

王子「え？そうなんですか？」

僕「もちろんだよ！」

王子「何故？」

僕「何故って―王子は好きなんでしょ？有力貴族の娘の事」

僕が言う「はい？」と王子が聞き返した。

僕「え？好きだから助けたかったんじゃないの？？」

王子「まあ大まかに分類すれば好きですが、恋愛感情はありませんよ」

僕「本気で？強がりとかじゃなく？正直に？」

王子「嘘でも強がりでもなく本気です。」

僕「じゃあ何で―」

王子「幼馴染が危ないんです。どうにか助けたいと思うのは当然ではないですか」

僕「そうかもしれないけど―」

王子「それに有力貴族の娘は姉のような存在ですからね」

僕「その気持ちを突き詰めたら恋愛感情だったりとか!」

王子「無いですね」

笑顔の王子。

王子「だって、子供の頃に色々酷い目に合わされましたから。将来結婚するならおしとやかな女性がいいと何度思ったか」

僕「そう…なの?」

王子「そうです。もし僕の後という話が出たら全力で拒否しますね」

―そんなになんだ…

僕「…でも僕は引きうける件についてはどうなんですか? 有力貴族の娘に恋愛感情は無くても友情はあるんでしょう?」

王子「そうですね―若ならいいと思います」

僕「偽装だから?」

王子「偽装じゃなくてもいいんじゃないですか？」

僕「は？」

王子「普通に有力貴族の娘を囲えばいいじゃないですか」

また王族の理解できない部分が出た！

何なの？ 囲うとか囲わないとか！

王子がそういう事は言わないで欲しい！

…何となく。

僕「何を――」

王子「姫姉さまも納得しているのでしょうか？ 問題ないじゃないですか」

僕「…そこら辺が良く分からないんだけど」

王子「そうですか？」

「ふむ…」と考える王子に僕の思っている事を言う。

なぜ姫も有力貴族の娘も王子も妾の存在を普通に受け入れるのか。もしかしてこの国は一夫多妻制なのか？

それとも王族だからなのか？

王子「この国は一夫一妻制です。王族だからというのはありますね。」

子を為す義務がありますし」

僕「―でも僕はこの国の相違継承権は無い」

王子「ありますよ？」

僕「は？」

王子「王位継承権で言うとならば第2位あたりです。僕に子供が出来たら話は変わりますが、今の段階では第2位です」

僕「なんーで」

王子「正確には王位継承権第2位は姉妹さまなのですが、姉妹さまが女王として着いたら自動的に王配です」

もしかしなくても謀られた！

王子が笑顔で「そう考えるとすぐに退位するのもアリかもしれまん」と言う。

僕「そんな事したら国を出奔して二度と戻りません」

王子「冗談です」

その冗談は笑えません。

王子を凝視していると「本当に冗談です」と苦笑した。

王子「まあそういう事で若も王族の一員なんです」

僕「……」

王子「まあそんなことは関係なく当人同士が良ければ問題ないので
は？」

僕「―友人が妾などにされるのは問題ないんですか？」

王子「普通の妾なら考え直すように言ったかも―いえ、僕の言葉で
考えを改めるような人ではないですけどね」

僕「では何故」

王子「若だから、ですかね。」

僕「はい？」

王子「僕は若を高く買ってます。その若なら姉姉さまも有力貴族の
娘を任せて安心だと考えてます」

何だろう。

言ってる意味は分かるけど、考え方が理解できない。

魔王『なら考えずに受け入れればよからう』

―そう、なのか？

魔王『別に受け入れても不具合があるわけではない』

—まだわからない

王子「それに姉さまも納得し、有力貴族の娘は受け入れたのでしよう？」

僕「え、ええ—」

王子「なら問題ないでしょう。有力貴族の娘を本当に妾にすればいいと思います」

僕「何を—」

王子「有力貴族の娘がこの件を了承したのであるなら、受けれるでしょう」

僕「—それは、できません」

王子は首をかしげ「なぜ？」と言う。

王子「姉さまを思ってたの事なら、姉さまも有力貴族の娘ならと納得したので問題ないでしょう？」

僕「そういう問題じゃないんです！」

王子「ではどのような問題で？」

僕「―政治の道具のように女性を扱うのは好きじゃない」

その言葉に王子は目を細め「そんなあなただからこそ―」と呟く。

王子「何度も言いますが有力貴族の娘も了承してますよ？」

僕「それは一族の女子供を守るため、にです」

王子「それがいけないと？」

僕「そうは言いません。でも僕は嫌なんです」

王子「では純粹に愛情から有力貴族の娘が本当の妾にしてくれと言ってきたら受け入れますか？」

僕「それもその時にならないとわからない」

王子「そうですか―」

王子は少し考えた振りををして「では」と切り出す。

王子「今の関係は回避できないので、今後の有力貴族の娘との付き合いで人となりを見て判断すればいいじゃないですか」

僕「そう、ですね。別に無理やり手籠めにしろといってる訳じゃないんですからね」

王子「でも姫と婚約した後は月の満ち欠け毎（約半月）に2〜3回は寢所に呼ばないとダメですよ？」

僕「は？」

王子がまた良く分からない事を言い出す。
何時からここは異世界空間になったのだ？

魔王『お主からしたら最初から異世界だな』

―冷静なツツコミありがとう！それよりまた王子が変なことを言い出した！！

魔王『何処が変だ？』

王子「最低でもそれくらいの頻度で寢所に呼ばないと有力貴族の娘の立場が悪くなりますね」

魔王『そうだな。妾の意義は夜伽が世継ぎを作ることだ。それが寢所にも呼ばれないとなると肩身は狭かろう』

王子「場合によっては追放という事になり、一族の女性と子供を守る後ろ盾を無くす事になります」

魔王『そうだな。主に見向きもされない妾など価値も無いからな』

王子「逆に言うと有力貴族の娘を寢所に呼ぶ回数が多ければ多いほど、身の安全は守られます」

魔王『だが正室より多いとそれはそれで問題が発生するがな』

—もう訳が分からないよ！

魔王『とりあえず、有力貴族の娘の意思を守りたいなら寢所に呼ぶしか無い訳だ』

脱力する僕に王子が呼びかける。

王子「最初は呼ぶだけでいいと思います。一晚を過ごしたという事実が必要で別に本当の妾にする必要ありません」

その言葉に僕は顔を上げる。

王子「後は一緒にいる中で若が納得する判断を下せばよろしいかと」

結局は現状は受け入れるしか仕方が無いという事だけはわかった。王子が納得してくれたのは良かったが釈然としないものを感じる。

夕食は静かなものだった。

いつものメンバーに加え有力貴族の娘とお付のうちの一人が同席している。

本来なら騒がしくない程度に世間話などを話しながら食事を取るのに、今日に限っては誰もが無言である。

たまに王子が「お口に合いますか？」「戦場なので大したものがないでございませぬ」等と言い、それに有力貴族の娘が如才なく答える程度である。

食事が終了した後には有力貴族の娘が口を開く。

有力貴族の娘「王子様、宜しければ食後のお茶でも一緒にいたしませんか？」

食後に2人でお茶を飲みましょう、と言うのだ。

王子は「それは素晴らしいですね。姫も一緒にしましょう」と申し出を受ける。

これで有力貴族の娘は王子と密談する場を設ける事が出来た。

有力貴族の娘を王子の后にと考える他の特使は心の中で順調に事が運んでいるとほそく笑んでいるのだろうか。

特使が自室に下がるとお茶会の部屋に皆が集まる。

王子、姫、有力貴族の娘の他に、僕、爺、翁、両騎士団団長、美女さん、妖精少女である。

妖精少女を初めて目にした有力貴族の娘は「姫に聞いてます。有力貴族の娘というの、よろしくね」と優しく微笑みかけ手を差し出した。

日頃は人見知りの妖精少女も有力貴族の娘に対しては何故か物怖じしない。

とはいえ、やはり美女さんの後ろに隠れているのだが、それでも差し出された手にちゃんと触ると言うのは初対面に対しては快挙である。

有力貴族の娘「―想像以上の可愛さ!」

姫「でしょう。もう可愛くて困ってるの」

有力貴族の娘「今後は妖精少女と一緒に居られると思うと、何も苦にならないですね」

姫「子狼2匹も可愛い。私は妖精少女と子狼と毎晩一緒に寝ているのよ」

有力貴族の娘「なんと! うらやましい―姫も妖精少女もうらやましい」

異様な盛り上がりである。

翁が咳払いすると2人は首をすくめると少し笑った。

爺「お話いただけますかな」

有力貴族の娘はそれに頷くと状況を説明した。

今の国王軍の現状、有力貴族の立場と気構え、書状の内容の意味。そして最後に自分がここに來た理由と僕の妾になる事をいい終わるとどまった。

「妾」の部分で姫が「第4王妃です」と言ったが黙殺された。

爺「なるほどー」

翁「先程の姫の物言いから察するに、姫はこの件は納得されてると思う？」

姫「はい」

翁「王子は」

王子「言う事はありません」

翁「若はー納得していないが受け入れる、という顔ですね」

僕の表情から読み取ってくれたようだ。

翁「爺はどう思う」

爺「有力貴族の娘の人と成りという部分では高く評価しておりる」

翁「ほう」

爺「小さな頃から知っておるでな。知識と教養は申し分無く、姫への敬意や好意は過分にある娘じゃな」

爺の言葉に有力貴族の娘は「ありがとうございます」と頭を下げた。

翁「それが国王派にいたと？」

爺「家の都合じゃな」

王子「そもそも前の戦で裏切りを知らせてくれたのは有力貴族の娘の手のものです。…残念ながら間に合いませんでしたが」

有力貴族の娘「私が知った頃にはもう遅かったんです」

翁「なるほど―」

考え込んだ翁に「お願い！」と懇願する姫。

翁「いえ、色々問題はあるのが困ったものですが、それをどうにか出来るなら良いと思います」

王子「問題とは？」

翁「まず有力貴族の娘を受け入れて一族の女子供を助けた場合の周りの影響」

姫「元々、女性と子供は助ける予定ではないですか」

翁「命を助けるのと保護をするのとは違います」

助命は唯の助命、地位も財産も保証はされず、保護となると今まで通りとは行かなくても保護者の裁量である程度の地位は保証される。この違いは大きい。

翁「いざ蓋を開けたら芋蔓式に助ける人間が増えても困りますしな」

有力貴族の娘「人数としては成人女性が5名、成人前の男子が4名、女子が7名、乳飲み子が3名です」

翁「それ以上は増えない？」

有力貴族の娘「はい。これは有力貴族である父の一門の者だけです。他の有力貴族の一門は含まれておりません。」

翁「成人前の男子の年齢は？」

有力貴族の娘「10歳、7歳、6歳、4歳、乳飲み子が生後1年ちよっと、という所です」

翁「その者達に望む地位は？」

有力貴族の娘「お任せいたします」

翁「僅かながらの土地と財産のみで農民として、という事もありえるが？」

有力貴族の娘「そこは若の慈悲に願う他ありません」

翁「若はどう思う？」

僕「どう、と言われましても――」

魔王『通常は保護となると自分の領地の館にでも住まわす、といった所だ』

――そうなの？

黙り込んだ僕に翁が言う。

爺「大体は自分の土地に住居を与えろといった所か」

――魔王と同じ意見だ！

魔王『当たり前だ』

爺「金を与えるだけや農奴にするのも良いが」

2人（実際は3人だけ）の言葉に考える。

僕「僕には土地も財産もないしなあ―」

翁「では土地と財産を与えましょうか」

僕「…短い付き合いでしたね」

翁「冗談じゃよ―」

油断も隙も無い老人である。

僕「そういえば住む家も無い」

僕の言葉に皆が僕を見る。

姫「…王宮ではダメなのですか？」

僕「え？王宮に住んでいいの？」

赤の騎士団団長「逆になんで王宮に住んではダメだと思っんだ」

僕「だって、王宮だよ？王様の住む場所じゃないですか」

白の騎士団団長「王族も住みますけどね。そして貴方は王族と同じ

立場の人になるんです」

言われてみればそうかもしれない。

未だに姫と婚姻するというのが現実味を帯びない。

王子「王族は基本的に王宮に住みますが、中には自分の領地にお城を建てて住む人や、王宮内に自分の館を建てて住む人も居ますよ」

僕「王宮と王宮内の館は同じものでは？」

爺「王宮というのはそのまま城を指します。王宮内の館は一の郭に居を構えて住むという事です」

翁「まあ安全性で言えば王宮の方が格段に高いので王宮に館を構えるのはよっぽどの事じゃな」

僕「姫の住まいは王宮ですか？」

姫「私は王宮にある離れのような場所に住んでいます」

爺「王宮の最上階近くに作られた離れがありましたな。元々は何代か前の国王が後宮として作った場所なんですが、そこを姫と第一王女が使っておりました」

姫「お姉さまが嫁いで出て行かれてからは殆どの部屋が無人ですが」

僕「後宮かぁ。そこが使えたら」

姫「別に今は後宮ではないので若と私のし、し、新居とするのは問題ないと思いますけど？」

僕「そうなんですか？でも王子が後宮を作る時に困りませんか？」

その言葉に王子が笑いながら「後宮を造るかどうかとも分かりませんが」と言った後に「場所は他にもありますよ」と言った。

僕「結構広いんですか？」

爺「そうですね。一番多いときで20名ほどの姫君が後宮に入ったとありますので、使用人を合わせると100名近くは住めたのでは無いでしょうか」

僕「使用人も一緒に住むんですね」

爺「女性何かと手が必要になる事が多いですから」

僕「となるとーいけるかも知れませんね」

翁「いけるとは？」

僕「そこに有力貴族の娘の言う助命する人たちを入れましょう」

翁「何と？」

僕「貴族の立場は守れませんが、姫、もしくは有力貴族の娘付きの侍女としておけば問題は無いと思います。」

爺「なるほど」

翁「しかしいくら子供と言え男子は入れるわけには行かんぞ」

僕「そうですね。男子は近くの部屋に住まわせて会えるようにしましょう。まさか乳飲み子までダメとは言わないでしょう」

翁「ふむ…」

翁が考え込んだ。

僕は有力貴族の娘に尋ねる。

僕「侍女という扱いはダメでしょうか」

有力貴族の娘「私には決める権利はございません。」

僕「それでも意見を下さい」

僕の言葉に探るような視線をした有力貴族の娘は思案するように言葉を紡ぐ。

有力貴族の娘「―王族の侍女というのはかなりの地位のある者しかなる事が適いません。通常は貴族の娘なら、問題は無いかと思えます」

僕「有力貴族の一門の女性でも？」

有力貴族の娘「中には自分を王族と同等かそれ以上と勘違いしている愚か者も居ます。しかし今回私が助命を願い出ている者たちはそんな愚か者ではございません」

僕「侍女になるのは問題ない？」

有力貴族の娘「ありません。それどころか破格の待遇です」

「本当に農奴なりにされてもおかしく無い立場ですから」と静かに言う。

翁「そうーじゃな。若の住まいとしても、妾を囲うのにも侍女として受け入れるにも申し分ないかも知れん。警備もしやすいしな」

僕「え？僕も住むんですか？」

翁「当たり前じゃろう」

皆が「何を言ってるんだ」という顔をする。

―あれ？僕がおかしいの？

魔王『お主がおかしい』

―いきなり異世界に飛ばされて気がついたら剣と魔法の国だった。

魔王『?』

―スリル満点の冒険物だと思ったら国取り物だった。

魔王『何をいつてる?』

―このまま興国物語が始まると思ったたら勝利を目前に「次は後宮ハ
―レムもの」だと言われた。

魔王『……』

―そんな話、誰も求めてないよ!!

魔王『誰に言ってる!誰に』

―展開の速さに僕は着いて行けそうにないよ

魔王『そんなに早いとは思わんが、気がつくのは遅かったな』

何処から間違ったのだろう。

魔王『最初からではないか?』

第26話 王宮ハーレム物語（後書き）

誤字修正

相違継承権 ↓ 王位継承権

女帝 ↓ 女王

自動的に国王です ↓ 自動的に王配です

第27話 「原因は領主息子」

翁「住まいの話と処遇については無事まとまった」

―無事じゃないけどね！

翁「後は今後の影響じゃな」

王子「と、いうと？」

爺「有力貴族の娘の事を知った他の貴族が同じように娘を送ってくるかも知れないと言う事です」

翁「娘ならいいが、赤子まで送ってくる矢も知れんな」

まさかそこまで、と笑おうとしたが翁と爺と両騎士団団長が頷いているのを見て辞めた。

嘘だと言ってよ、バーン（ry

翁「それをどう対処するかじゃな」

爺「難しい所ですね」

みんなが思案する中、王子が「いっそ、若が有力貴族の娘を求めた事にしましょうか」と言った。

―はい？

王子「若は我が身可愛さに女性を差し出すような者を許さないという噂を流します」

僕「―僕は本当にそういう人は嫌いですが？」

王子「嘘か真かはどうでもいいんです」

僕「いえ、嘘じゃ―」

王子「その上で若が有力貴族の娘の美貌に惚れこんで妾にと申し出た」

翁「ふむ」

王子「有力貴族は王子である僕にならという事で差し出したが、若の熱烈な申し出に仕方なく差し出した」

城の騎士団団長「少し無理がありますが、こじつけにはなっているので問題は無いかと」

翁「おおありじゃ。王子から横取りするという話じゃぞ」

王子「元々僕は有力貴族の娘を娶る事はできません。困っている所を丁度良いので押し付けよう、という感じでどうでしょう」

有力貴族の娘「私は不良品か何かですか？」

王子「え、いえ、そうじゃなくて、その、周りを納得させる為に――」
有力貴族の娘「冗談です。それくらいの扱いは何とも思いません。
ただ――」

そう言うとは有力貴族の娘は言いにくそうに「姫は宜しいのですか？」
と聞いた。

姫「私は本当の事を知ってます。問題ありません」

その言葉に有力貴族の娘がほっと胸を撫で下ろす。
話が纏まりそうになった時に僕はとある事に気が付いて、急いでス
トップを掛ける。

僕「ちょ、ちょっと待ってください!」

王子「どうしました?」

僕「有力貴族の娘は僕の妾なので寢所に呼ばないと立場が悪くなる
と聞きました!」

王子「そうですね」

僕「それも最低でも月の満ち欠け毎に2〜3回のペースで!」

翁「まあ最低でもそれくらいで呼ばねば立場は無いな」

僕「それは有力貴族の娘を普通に妾にした場合でしょう！」

翁「それが何か？」

僕「熱烈に希望してなってもらったら月の満ち欠け毎に2〜3回じゃ済まないじゃないですか！！」

僕の言葉に「あっ」という顔をする面々。

翁「確かにそうなるのもっと回数を増やさねばならんな」

僕「でしょう！」

いきり立つ僕に「構いません」という静かな声が聞こえる。

有力貴族の娘「元より覚悟は出来ております」

棒「は？」

有力貴族の娘「と言うよりは、想像より待遇が良くなりそうで安心してます」

僕「な——」

一体どれほどのものを想像してたんだ？

魔王『愛玩ぐらいは覚悟してただろうな』

有力貴族の娘「愛玩道具ぐらいは覚悟しました」

まだ若い娘をそこまで覚悟させるものは何だろう。

家でも土地でも財産でもなく、一族の女子供の為に身を差し出す精神に怒りを通り越して恐怖を覚える。

見つめる僕の目に何を見たのだろう。

有力貴族の娘「もっとも、その場合は諦めて自ら命を絶ちますが――」

僕の間を見つめて「一族の女性と子供は守りたいですが、家畜になるつもりは無い」と言った。

僕にはまだ理解できない。

でも有力貴族の娘の気高さには好感が持てる気がした。

やはりどこか姫に似ている。

有力貴族の娘「閨を共にする覚悟はございます」

有力貴族の娘の刺さるような眼差しに僕は「え、あ――」としか言えない。

翁「ではそこは問題ないとして、寢所に呼ぶ回数ですが―」

姫「有力貴族の娘と半分で構いません」

翁「姫」

姫「有力貴族の娘ならかまいません」

翁「で、では半々ということで」

姫のきっぱりした言葉に翁が押し切られた。めずらしい。

翁「後は他の貴族の娘ですが―」

僕「…もう、そういう事をする者は『自分の娘も大事にできんのか』とか難癖つけて土地でも財産でも地位でも剥奪すればいいんですよ」

やさぐれた僕の言葉に翁が「ありじゃな」と答える。

―ありなの！

翁「まあ戦後間もなく送ってくるような輩は国王軍派の者ばかりじゃろうから、それでいいじゃろう」

爺「そうですね」

翁「そこまでしたらその後、王子に自分の娘を――と画策する者も減るじやろう。出て来たら罰せればよい」

翁「それで王子に対する無駄な政略結婚は減るじやろう」

爺「その後に素晴らしい后を探されると良いでしょう」

釈然としないと言うか、全然しっくり来ないが話はまとまった。

有力貴族の娘と王子の婚姻については当然拒否。

もちろん王宮からの親書も全て拒否となり、そうになると国王派との決戦だ。

特使はすぐに王宮へと帰る事になるだろう。

有力貴族の娘がどうか大砦に残る方法は無いかと考え。

赤の騎士団団長「ぎりぎりまで王子を籠絡できないかがんばって見ます、とでも言えば大丈夫なのでは？」

爺「そうになると、今度は人質にされるかもと勘ぐるだろう」

有力貴族の娘「その場合は自害する、と伝えます」

翁「それで納得するか？」

有力貴族の娘「元々、大砦への特使自体が生きて帰れるかどうかと思われておりました。それに私は有力貴族の娘です」

翁「なるほど。決死の覚悟で大砦に来たのだ。自害ぐらいする気概はあると思われておるだろうな」

頷く有力貴族の娘。

翁「いっその事、人質として身柄を確保してしまおう」

爺「そうすれば人質になるかも、等と思われんな」

翁「もし特使が有力貴族の娘も一緒に戻ると言うならば『王子の后になるかも知れない者が大砦に残って問題でも?』と言えばよからう」

そう言って翁は笑った。

有力貴族の娘「父に文をしたためた物を特使に渡しても宜しいでしょうか?」

翁「文とな」

有力貴族の娘「はい」

翁「内容は?」

有力貴族の娘「取り留めない『王子をどうか説得します』や『私

の事は気にしないで下さい』という内容ですが、私の意見が取り入れられた時に記載する文面を父と決めてましたので、それで父に旨くいったという事を伝えたいと思います」

翁「…文は事前に確かめさせてもらうが？」

有力貴族の娘「構いません。決めた文は『必ず王子を我が夫にします』です。」

翁「そうか」

有力貴族の娘「それが届けば王都二の郭に私の父の軍勢の旗が立ちます」

爺「それで？」

有力貴族の娘「本来は父の軍勢は一の郭に詰めておりますが、二の郭まで降りて皆さんが来られるのを待ちます」

翁「ふむ」

有力貴族の娘「そして皆さんが王都の外壁を攻略した晩に決起して城の門を一斉に開き放ちます。その際に空に向かっていくつもの火矢を飛ばす手はずになっております」

王都の作りは一から三の郭で構成されており、その外に町が広がりそれを城壁で囲う堅固な城だ。
いわば4枚の壁があるのである。

その一から三までの扉を開けてくれるのは嬉しいが外壁はどうにかしろと言うのだ。

有力貴族の娘「外壁も空けたとしても、外壁から一の郭まで行く間に門が制圧されて閉じられてしまう可能性があります。ですので時間短縮の為に外壁は攻略して頂かないと」

白の騎士団団長「まあ一から三の門さえ開けば後は国王軍の兵士の
み」

「後は押し切れるでしょう」という試論騎士団団長に頷く有力貴族の娘。

翁「特使に結果を伝えるのは明日の朝にする。特使が手紙を携えて戻る時間を苦慮して、出発は明後日の昼前、といった所か」

その言葉に皆が頷くと「明日は戦の準備をしっかりとやってくれ」という言葉に解散となる。

翌日の朝食は有力貴族の娘以外の特使は別の部屋である。

有力貴族の娘ぐらいの有力者ならまだしも、本来なら一介の特使程度では王族と一緒にする事は無い。

特使は王子に食事の席に誘われたという件で条件を飲んでもらえ
と勘違いしてしまっているだろう、と言うのが翁の話である。

そして食事後に特使が呼ばれた。

王子が「昨晩はゆっくり休めましたか？」という質問に答える特使。
一人の特使が「有力貴族の娘の姿が見えませんが？」という質問に
「有力貴族の娘はまだお休みのようです」と答える王子。
それを聞いて特使が何を思ったのか笑顔で頷いた。

王子「お持ち頂いた親書の件ですが――条件は飲めません」

特使A「は？」

王子「我々の提示した条件以外は飲めません」

特使A「しかし――」

王子「何か？」

特使A「そうなると国王軍と開戦となりますが……」

王子「そうですね。残念です」

特使A「再考していただく訳にはいきませんか」

王子「再考の余地は元々ありません。我々の出した条件がギリギリ
の妥協点です。」

特使A「そこを何とかお考え――」

翁「くどい！本来なら昨晚の内に追い返しておる所を、王子の好意で一晩留め置かれただけに過ぎない。」

特使A「そんな―」

翁「今より半時（約1時間）の猶予を与える。それ以降も大砦に居る場合は特使ではなく敵の間者として扱わせて頂く事になる」

特使A「こ、後悔なさりませんか!？」

王子「しません」

爺「我々は昼前には立つ。王都に迫るまでに条件を飲まない場合は第一条件は破棄となる。その事をしっかりと伝えて頂こう」

特使A「…分かりました。ではすぐに暇せる事に致します。」

そう言うの特使達は頭を下げようとした。

王子「そうだ。有力貴族の娘はここが気に入ったそうで少しの間、滞在を希望している」

特使A「何ですと？」

王子「そういう事なので特使殿達だけ先にお帰りください」

特使A「…有力貴族の娘に直接お会いしてお伺い致します」

王子「まだ休んでおると申しましたが？」

特使A「有力貴族の娘には申し訳ないが人をやって起きていただく事になります」

翁「構わんが、女性の支度は時間掛かるからの。半時…刻々と時間は過ぎておるが、それで間に合うかの？」

その言葉に特使達が息を呑む。

翁「おおそうじゃ、昨晚、有力貴族の娘に渡されたものがあつた」

そう言うとう翁は懷から手紙を取り出し、白の騎士団の手に渡す。

白の騎士団は受け取った手紙を特使Aに手渡した。

翁「有力貴族の娘から父君へ当てた手紙だそうじゃ」

特使A「…どうしても有力貴族の娘は帰さないと言う事ですか？」

翁「残りがあっておるからのう。本人の意思を尊重しておるだけじゃ」

特使A「なら本人に確認を！」

翁「好きにするがいいが、時間は最初に申したとおり半時だけじゃ」

特使A「∴人質にするおつもりか！」

翁「―言葉に気をつけ為されよ」

特使A「な、何を」

翁「有力貴族の娘は、本人の意思で、残る、と申しておる」

特使A「それは―」

翁「それを人質になどと言う。それは王子の言葉を疑うと？」

特使A「！」

翁「王子への不敬は例え特使でもその場で切り捨てても構わないが？」

そう言うのと両騎士団団長と回りに居る兵が柄に手を掛ける。
それを見て顔を青くする特使。

王子「まあ爺、それくらいにしてあげてください。他のものもよい」

王子の一言で周りの兵は柄から手を離す。

王子「特使殿も有力貴族の娘の身を案じての事でしよう」

コクコクと頷く特使達。

王子「本当に本人がそう言ってるんです。信じて頂けますか？」

特使A「…は、はい」

王子「ではお話はここまでですね。無事王都に戻られるよう。」

そう言うと王が特使の退室を告げる。

特使と他の兵が退出したのを確認すると奥の部屋から有力貴族の娘が出てきた。

有力貴族の娘「ご苦勞様です」

王子「特に苦勞もしてません。それにしてもまさかあそこまで拒否されるとは思っていないとは思いませんでした」

有力貴族の娘「基本的に先が見えてないんです。あれで受け入れられる訳ないのに」

翁「だから救いが無いと言える」

代々受け継がれただけの地位に胡坐をかき自分達の身の丈を知らず、不利になってもそれを認められない俗物はこれだから、と翁が言う。

翁「だから御し易いのだがな」

王子「有力貴族の娘、半時程で特使は砦を出ます。そうなれば自由に動いていただいて結構ですよ」

有力貴族の娘「宜しいのですか？」

王子「若の第4王妃なら問題ありません」

王子が笑顔で言うのを聞いて僕はため息をつく。

今まで存在感は無かったがこの部屋にはちゃんと居た。

それを見た有力貴族の娘は笑い「姫と一緒に居る事にします」と言った。

特使の動きは意外と早かった。

部屋を退出して一刻後には砦を出て、外に待たせていた兵と合流するとすぐに王都へ向けて出発していった。

どうやら早馬も飛ばしたようである。

―決戦の日は近い

魔王『本来なら今頃、王都に攻撃していたかの知れんがな』

―この回り道があったからこそ、有力貴族の娘という得がたい仲間

を得て――

魔王『嫁が4人になったと』

――

魔王『良かったな。それもこれも領主息子のお陰だ』

僕「そうか…全て領主息子のせいかな…」

僕の呟きに翁が「何がじゃ？」と言う。

僕「いえ、溪谷で領主息子が突撃しなければ、今の状況にはなっていないかったのだろうな、と」

王子「確かにそうですね！」

翁「そうになるとアヤツの戦果は物凄い事になるな！」

僕を姫と婚約させ有力貴族の娘を僕の妾にし王都攻略の糸口を掴むきっかけになった。

確かに王都攻略の糸口だけで見たらすごいが、領主息子は特に何もして無いからね！

――というか僕の犠牲分が大きすぎる気がする。

領主息子の居ないところで盛り上がる他の面々。

王子の「姫と若を結びつけた功労者として、婚約発表時に大々的に何かを報いましょう」という言葉に爺が「それはいいですね」と言う。

眩きが斜め上に行く状況を作っているが、姫との婚約も有力貴族の娘を囲うことも変わらない。

それなら領主息子が報われるならいいか、とポジティブな思考を無理やり考えられないとやってられなかった。

第27話 「原因は領主息子」 (後書き)

誤字修正

蒸すかしい ↓ 難しい

特使事態 ↓ 特使自体

第28話 新たなフラグ？

魔王『何故お主は婚姻や女を囲う事を嫌がる？』

魔王が不思議そうに聞いてくる。

僕は剣を磨いていた手を一瞬止めたが、再度磨きながら答えた。

―婚姻に関してはまだ僕には早いと思っているんだ

魔王『別に早く無いぞ？それくらいの歳で結婚する者もいる』

―この世界の結婚は早いんだね

魔王『まあ全てが全てでは無いがな。身分や性別により変わる』

結婚が早いのは貴族の子どもと農家の娘である。

貴族の子どもが男女問わず結婚が早い理由の一つに、この世界の乳幼児の死亡率の高さが上げられる。

貴族が恐れるのは子が出来ず家が潰える事である為に早く結婚をして子を為すのである。

農家の娘は働き手としても期待される為に、どこの家でも若く健康的で力のある娘が求められている。

逆に結婚が遅いのは商いをしている男である。

若いうちから働き、ある程度の財産が出来てからそろそろ結婚という頃にはいい年になっているのである。

魔王『姫も国が荒れて居なければ今頃はどこぞの国に嫁いでいるだろうよ』

―そう、か

魔王『だから決して早いと言うわけではない』

魔王の言葉にどう言おうか迷う。

魔王『姫が嫌いか？』

―そういうわけではない

魔王『では何が嫌なのだ』

―嫌な事は無い

魔王の言葉に僕は言う。
嫌じゃない。これは本当だ。

魔王『ならなんだ？』

―僕は魔王じゃない

魔王『何？』

—この体は魔王のもので僕ではないから

魔王『：だから婚姻を忌避している？』

—僕はいつ居なくなるかわかんないからね

魔王『一つだけ言わせて貰う』

魔王が真剣な口調で言う。

魔王『我とお主は一つだ』

—魔王？

魔王『我はお主で、お主は我だ。そこまで考える必要はあるまい』

—そう、なのかな

魔王『うむ』

—もし僕が居なくなったら：

魔王『そうだな。その時はその時考えればよい。ただ—』

魔王は軽くそう言うと『お主は消えぬよ』と呟いた。

―魔王：

魔王『消えるなら最初から消えてる。お主みたいなしぶとい者は消えぬよ』

そう言うとき魔王は笑った。

魔王『で、だ。問題は解消されたのだから女を困う事に対する抵抗も無くなったであろう』

―それはまた別問題だよ！

魔王『何だ？他にあるのか。面倒くさいな』

本当に面倒誘うに言うとき『理由を申している』と言った。

―僕は一夫一妻制の世界：国で生まれ育ったんだ。

魔王『だから？』

―だから一夫多妻制は考えられないんだ

魔王『それだけが理由か？』

—それだけって

魔王『おぬしの住んでいた世界は分からぬが、この世界では問題ない。慣れろ』

—慣れろって…

魔王『本当は他に理由があるのだろうか？』

『言うてみる』と魔王が言う。

—姫と結婚するのに他の女性をというのは姫に対して失礼な気がする

魔王『その姫が受け入れているでは無いか』

—それでも…

魔王『では領主娘を見捨ててしまうか？』

—そうじゃない！

魔王『では他に方法があるのか？』

—それは…

魔王『無いであろう』

黙り込む僕に魔王が続ける。

魔王『それに有力貴族の娘には手を出さんとか考えておるだろう?』

—うん

魔王『愚かな判断だ』

—どこが?

魔王『そんなのは建前というのがわからんのか?』

—違う

魔王『そうなのだ。それは有力貴族の娘も分かっている』

—そんなはずは無い

魔王『そうでなければ妾に、などと言い出さん。それも初めて会ったばかりの男相手にな』

—それは

魔王『初対面で妾の契約をしたんだ。そうなる事を織り込んで契約している。当初は偽装としても後々求められた場合は拒むまい』

—そんな事は—

魔王『無いと? 何故そう思う?』

—っ

魔王『姫も有力貴族の娘も「ある事」として既に納得ずくだ』

—まさか

魔王『だからお主は愚かだという』

魔王が嘆息する。

魔王『ちゃんと相手をするのは有力貴族の娘を妾として受け入れたお主の義務だ』

—そんな義務は

魔王『まだ言うか？もし本当に有力貴族の娘に手を出さないつもりなら、さっさと解約しろ』

—それは出来ない

魔王『何故だ？』

—そうすると有力貴族の娘の身内を守れない

魔王『なら本当の妾にしろ』

—何で！何で手を出すか助けられないかの2択しかないんだよ！！

魔王『お主は有力貴族の娘を抱かずに置いておく事がどれほど残酷かわかるか？』

―残酷？

魔王『お主に囲われたならもう他に嫁ぐ事は出来ない』

―！

魔王『嫁ぐ場合はお主と妾の契約を解除した時だ』

―その時はそうすればいい！

魔王『そうなると有力貴族の娘は後ろ盾を無くす』

―解約しても後ろ盾として力を貸す事は出来る！

魔王『できぬよ』

―出来る！

魔王『してはならんのだ』

―何で！！

魔王『相手の家に泥を塗る事になる』

―どうしてそれが泥を塗る事に…

魔王『他人の嫁に何時までも口出ししてたらどう思う？それ伴う結末がどうなるかも想像出来ないのか？』

—それは…想像できる。

魔王『それにな。お主は王族になる。王族の妾を欲しがるような不敬なものは居ない』

その言葉に絶句する。

そうだ。

僕が王族だというのは納得できないが、立場的にはそういう事になる。

その王族の妾をという事になると相手は王子しか居ない。

王子が有力貴族の娘と、というのは限りなく0に近い。

無いと言ってもいいぐらいだ。

魔王『その娘に対して子を授かる権利を一生与えないと？』

—そんな…

魔王『おぬしとの妾契約とはそういう事だ』

—なら！なら妾ではなく保護ということに—

魔王『それでは弱いな。有力貴族の娘一人なら保護できるが、身内を全員守れるかは分らない』

—全員保護するのは！？

魔王『それが出来るなら有力貴族の娘も妾契約など最初から結ばん』

—なんで！

魔王『お主が「有力貴族の娘に惚れこんで妾に所望し、その条件が身内の保護だったのでお主が押し通した」という建前があつてこそだ。そうで無ければ敵の、それも首魁の一族の者など助けられるか』

—そんな…

魔王『姫も領主娘もそこまで分かつて受け入れたのだ。何も理解していないのはお主だけだ』

魔王の言葉を呆然と聞く。

—そこまでの事だったなんて

魔王『そこまでではなく、そこ以上のものだった、という事だ』

有力貴族の娘の毅然とした態度と涙を流していた姫の顔を思い出す。

—だから姫も当初は涙を流したのか…

魔王『やっと分かったか』

—う、ん

魔王『…有力貴族の娘も本当の妾にしてやれ』

簡単に返事が出来ない。

本当に言いのだろうか？

魔王『まだ迷うか？』

—それは…もちろん

魔王『理解はしたんだろう？』

—うん

魔王『なら良いではないか』

—そう、なのか

魔王『それでもまだ踏ん切りが付かないなら、有力貴族の娘を見て決めればよろう』

—え？

魔王『一緒に過ごす中で有力貴族の娘を知り、その時が来たなら躊躇わず抱いてやれ』

魔王の言葉をかみ締めて頷く。
無理強いだけはしないようにしよう。

― 今後はそういう契約をする時は気をつけよう

魔王『気をつけても無理なときは無理だがな』

― そんな事言うなよ！

魔王『まあ、少しは気が晴れたか？』

そう聞かれて気持ち少し楽になっている気がした。

姫との婚約にしても有力貴族の娘の事にしても―なるようにしか成らない。

そう思えたお陰かもしれない。

― 魔王ならこんな事で迷わないんだろうね

魔王『当たり前だ。我なら気に入った女はどんな事をしても手に入る！』

― そうですか

魔王が自信満々に言う。

―魔王って女性経験あるの？

魔王『当たり前であろう』

―そ、そうなんだ

魔王『我は魔族の王子だぞ？王妃は居ないが妾は何人か居たしな』

―今はその人たちは？

魔王『さあな。他の王子に連れて行かれたか、それとも逃げ延びているのか、わからんな』

―心配ではないの？

魔王『心配しても始まらん。それに我の妾に簡単にやられるような女は居ない』

―そうなの？

魔王『われは大人しい女は好みではないからな。武芸に長けたような気の強い者が好みだ』

『そういう意味では有力貴族の娘は中々だな』という。

―え？

魔王『あの娘も何かやるだろう。片手剣辺りだろうが、護身術程度

というわけでは無い様だ。そこらの兵士程度なら相手に出来るだろうな』

―まじですか？

魔王『それでも私の好みからしたらまだまだだな』

―そんなに強いのか？

魔王『強いな。ここの騎士団程度なら簡単にあしらうだろう』

―その人達が前に言ってた婚約者？

魔王『そんな分けなからう』

―え？違うのか？

魔王『私の婚約者になる程の地位を持ったものをそうそう妾には出来ん』

―魔王…

魔王『なんだ？』

―その婚約者と妾の人達が現れて酷い目に合わされたりは…しないよね？

魔王『どうだろうな』

―魔王！？

魔王『妾は我のやる事に文句は言わないだろうが、婚約者は我が婚姻を結んだ事にどういう反応をするか…』

―ちよ！

魔王『まあ前にも言ったが、今頃破棄されているだろう。気にするな』

そう言って魔王は笑う。

どう考えてもそういう話をするという事は出てくるフラグなんじゃないやまて！

オープニングでは出てくるのに本編で一切出てこない敵が居たりするんだ。大丈夫！！

魔王『何を言っている』

―ごめん。余りの事に現実逃避してた

魔王『現れたらその時考えたらよかろう』

―他人事のように言うね

魔王『まあ苦勞するのはお主だしな』

―魔王も僕なんでしょう？

魔王『あれはお主を納得させる嘘だ』

―そこで言うの!?

魔王が笑う。

本当に最初の頃のきるような冷たさからしたら考えられないぐらい笑うし冗談も言し、人を気遣う。

これがお互いの精神が影響しあった結果なんだろうか。

僕も変わっているのか?

自分では分からないけど、戦場で相手の剣に怯える事が無くなったのは成長なのか魔王の影響なのか。

そういえば人を斬っても何も思わなくなった。

その事に思い至って驚いたけど、それだけだ。

殺らなければ殺られる状況だった。

別に進んで殺したいとも楽しいとも思わないけど、しなければならぬなら躊躇わない。

そういう風に考える事が出来ること自体が昔の僕ではない証拠だろう。

―いつまでこのままなんだろう?

魔王『さあな』

僕はいつの間にか止めていた剣の磨きを再開する。

この剣は折れたので王子がくれた剣だ。

中々の一品らしく未だに使っている。

毎日、美女さんに言われたようにちゃんと手入れしているお陰というのもあるだろうけど。

—そういえば魔王になるのに魔剣とか無いの？

魔王『魔剣は持ってなかったが、それなりの剣は持っていた。今は無いが』

—無くしたんだ

魔王『まあな』

—すごいの？

魔王『まあ我が魔力を込めても壊れないという頑丈な剣だった』

—へえ。炎の剣とか水の剣とかそういうのじゃないんだ

魔王『それは精霊の加護がついた精霊剣だな。炎の精霊の加護で炎を出したり風の精霊の加護で剣圧を飛ばしたりする程度だな』

—切った相手を呪ったりするような魔剣とかは無いんだ

魔王『そういうのは見たこと無いな。それに魔剣や聖剣と呼ばれるものは多くの逸話を残して後に呼ばれるようになる』

—どうということ？

魔王『お主が今使っている剣を使い続け歴史に残るような事をすれ

ば、いずれは魔剣や聖剣と呼ばれるようになる』

―じゃあ普通の剣と変わらないということ？

魔王『まあそう呼ばれるだけの何かを持っているのは確かだな。そこらの剣では語り継がれる前に朽ち果てる』

―そうか

魔王『我が戦った勇者が聖剣を持っていたな』

―それに相打ちで撃退できたの！？

魔王『私の勝利で撃退、だ』

―え、あ、うん。で、どうやったの？

魔王『どうも何も、普通に戦ったまでだ』

―聖剣相手なの？

魔王『聖剣でもやりようはある』

―どんな性能を持っていたの？

魔王『良く分からんな。切れ味のいいだけの剣に見えた。』

―そうなの？

魔王『まあ剣の性能を知るには食らわねばならんからな。それはさ

すがに出来ない』

―それもそうか

魔王『勇者が持っていたのだ。唯の剣ではあるまい』

―どんな剣だったんだろう？

魔王『さあな。我が剣と相打ちになって両方折れた』

―折れたんだ！

魔王『聖剣は人族が回収したと噂で聞いた。我の剣はどうなったの
だろうな』

―折れた剣は治せるの？

魔王『聖剣、魔剣もだがそのクラスになると普通には無理だろうな』

―でも治す方法はあるんだ

魔王『我は知らんがな。我の剣はそれなりの者が打ち直せば使える
やもしれん』

―じゃあ誰か別の魔王に拾われているかも知れないね

魔王『まあ他の奴に使いきれるとは思わんが』

―そうなの？

魔王『私の魔力を受け止める事が出来るだけの器を持った剣ではあるが、魔力が小さい物が使っても大した威力は引き出せんだろう』

―魔王のほかの候補者は？

魔王『どうだかな』

『最後に会ったのは幼い事だからよくわからん』と魔王は言った。
複雑な家庭のようだ。

魔王『魔族の王族だぞ？後継者争いで殺し合いをするのだぞ？普通であるわけが無い』

―それはそうだ

今、魔王の国はどうなて居るんだろうか？
もしかしたらもう誰かが帝位についているかも知れない。

魔王『それは無かろう』

―なんでそう言えるの？

魔王『本格的に戦が始まれば、幾ら人族の土地と遠く離れてるとはいえ噂ぐらいは聞こえてくるはずだ』

―でも他国の、それも魔族の国の事なんて噂でも流れて来るかな

魔王『来るな。我が国は魔族の国でも大きい方だ。その国の動向は人族の国でも注意を払っているだろうよ』

―そうなの？

魔王『王によっては人族の国への侵攻が行われる事もある。王位継承争いとなると一大事だろうな』

だからまだ大きな戦にはなっていないというが、情報がまだ来てないだけで始まっている可能性もある。
出来るだけ早く魔王の国に戻らないとダメなのではないだろうか？

魔王『今の我には力が無い』

―力…

魔王『戦は我だけでは出来ない。信頼できる力を手に入れるまでは、どちらにしても国には戻れんさ』

―力…か

この国の戦力を使うつもりは無い。
それは魔王も考えていないようだ。
力と言ってもどうすればいいのだろう。

魔王『そう考えると、この国での出来事はいい練習になったのかも
しれないな』

練習という言い方は御幣があるが、そういう考えも出来るだろう。

『まあ今は目の前の事を考えるがよい』と魔王が笑う。
剣の磨きの腰が無いかに日に翳^{かざ}してみる。

綺麗に光を反射させているのを確認し鞘に収める。

―そうだね。まずは王都攻略に集中しよう

魔王『我は姫と有力貴族の娘の事を言ったのだがな』

―ぐっ

魔王はいつも一言多かった。

第28話 新たなフラグ？（後書き）

誤字修正

磨いていたてを ↓ 磨いていた手を

切っても ↓ 斬っても

讓歩がまだ着てないだけで ↓ 情報がまだ来てないだけで

御幣 ↓ 語弊

磨きの腰が ↓ 磨き残し

第29話 弟子入り

やはりと言うか何というか。

国王軍を退けた事により反国王軍へ身を寄せる領主が少なくない数現れた。

その総数約1200。

こんなに早く来るのは国王軍に身を寄せる予定だったのか、それとも元々反国王軍に参加するつもりだったのかは分からない。

中には先の大砦へ来た国王軍に参加していたものも居たが、何かと言いつけては仕方なく国王軍に参加せざるを得なかったという事を熱弁していた。

その領主達と面会をし終えた翁が「やましい気持ちがある者ほど良くしゃべる」と冷笑していた。

僕「まだこんなに参加していない兵が居たんですね」

白の騎士団団長「国内からかき集めたらまだまだ居ますよ」

僕「そうなんですか？」

赤の騎士団団長「我が軍と国王軍を別としても1〜2万近くは居るだろうな」

僕「それが国王軍に参加したら勝ち目がなくなりますね」

赤の騎士団団長「集めるのは不可能だな」

僕「何故？」

赤の騎士団団長「国境警備等と国境近くの小規模領主ばかりだからな。国境の兵を動かす事は出来ないし、いまの状況で国王派に付く領主は居まい。」

翁「今更来た領主には申し訳ないが苦渋を飲んでもらう」

王都攻略では厳しい戦線に送られると言う事だ。

今更来ては文句も言えない上に、もしかしたら戦果を稼げるかもしれないのだ。

どの領主も文句は言えないだろう。

翁「意趣返した領主に関しては、まあそれなりに頑張ってもらった後に理由をつけて責任を取らせれば良いだろう」

「どうせ叩けばホコリしか出まい」と翁は笑う。
酷い様だが国を良い方向に運ぶ為には仕方ない。
今までの付けを帰すときが来たのだ。

兎にも角にも新たに来た領主を含め総数15000を越える兵となった。

――
昼前に一度軍議が開かれた。

方針は既に決まっているので形だけの物に近い。

新しく参加した領主も増えた事により、再度、略奪暴行に対する厳しい対処を取る事をしっかりと徹底させる事になった。

軍義が終わり一人で廊下を歩いていると声を掛けられる。

振り返るが見覚えの無い顔なので新しく来た領主の誰かなのだろう。笑顔で挨拶してくる領主達に同じく挨拶を交わす。

特に何と言う内容でもなく世間話のような内容を振られる事に困惑する。

――一体、この人達は何の為に僕に話しかけるのだろう

魔王『大方、姫と懇意にしている事や反国王軍でも重きを置かれている事を聞きつけて媚を売りにきたのだろう』

――一体そんな事をしてどうなるんだ。

魔王『お主が考える以上にお主は価値が出てきているのだ』

―今までこんな事は無かったのに

魔王『それは周りに護られていたのだ。こ奴らは来たばかりでそれを知らぬからな』

そういう事らしい。

その後も意味の無い会話が続く。

早くこの空間から逃げ出したいが無下に扱ってもいいものか分からず、とりあえず無難に受け答えだけする。

話が僕の事に偏っていき「何処の出身なのか」「今まで何をしていたのか」という話になって来た。

魔王に『適当にはぐらかせ』と言われたので曖昧に答えていたら一人の領主が「よければ私が後ろ盾となりましたらうか」と言い出した。

魔王『本題が来たぞ。絶対に乗るな』

―わかった

後ろ盾に関しては翁と言う事にして相手に伝える。

後で翁に謝らなければならぬ。

さすがに翁相手では強くは言えない様でほっと胸を撫で下ろそうとしたら「よければ我が家の者と婚姻を結びませんか？」と急に言い出した。

もうオブラートに包むつもりも無いらしい。

―何だって僕なんかここまで言うんだ

魔王『反国王軍でも重きを置かれていて付け込めそうなのがお主だ
けだったのだろう』

―

魔王『しかも思ったより価値がありそうだと判断したらしい』

―価値？

魔王『今後の国の重鎮となる翁が後ろ盾だからな』

―面倒だな

『翁じゃ無ければもっと強く後ろ盾として立候補したかも知れぬな。
そうなれば婚姻させようが何しようが意のままにできるしな』

本当に面倒な事になった。

娘や孫や、中には未亡人まで僕に宛がおうと者もいる。
頭がおかしいのではないだろうか。

「今はそんなつもりはありませんから」とキツパリ断ったにも関わ
らず「一度会ってみてもいいのでは」と食い下がる。

魔王『無駄に言質を与えたりいいように解釈されるような事を言う
のは得策ではない。きっぱり断れ』

―わかった。

魔王に領きながら、翁には申し訳ないけど名前を使わせて貰って逃げる事に決める。

後継人である翁からそういう話を既に頂いており、もう大体の事は決まっている、と伝える。

姫との婚約は決まっているので、一部は嘘ではない。

そう言う、「相手は誰でしょう？」と詰め寄る領主達。

中には「気が変わるかも知れないので、良ければ一度会ってみるもの」とあきらめ切れない領主も居た。

本当に面倒になって、そろそろ切れてもいいかな？と思った頃に赤白両騎士団団長が現れた。

2人はざっと見ただけで状況を理解したようで、白の騎士団団長が「騎士団の訓練に付き合ってくれると仰られていたのに来られないと思ったら、このような所にお出ででしたか」といつもより丁寧に言った。

―騎士団の訓練？

魔王『この場を逃れる為の嘘だろう』

僕が「申し訳ありません」と謝罪する。

赤の騎士団団長が「して、皆さんは若に一体、どの様なご用件で？」と言うとしどろもどろに「世間話などを」と領主が答える。

それを聞いて「では訓練の時間も押しますので」と言う赤の騎士団団長は背を向けて歩いて行ってしまふ。

僕がその姿をていると白の騎士団団長が「若も」と僕も連れ出してくれた。

領主達に短く別れの挨拶を言いながら両騎士団団長と共に廊下を歩いていった。

白の騎士団団長「災難でしたね」

角を曲がり領主達から見えなくなると白の騎士団団長が笑った。それを聞いて赤の騎士団団長が鼻を鳴らす。

赤の騎士団団長「あのような奴らを一々相手にしなくてもいいだろうに」

僕「無下に扱うのも問題かなと思ひまして。まさかあそこまでとは思わず」

白の騎士団団長「まあ彼らも家や土地、財産を護る事に必死なんでしょう」

赤の騎士団団長「あの程度の輩に気を使う必要など無い」

ずばっと切り捨てる赤の騎士団団長。

翁の名前を出して話をはぐらかした事を伝えると「いい判断です」と言われた。

ただ話は通しておいた方がいいという事になり、翁に会いに行く。

翁は王子と爺と領主息子と共に話をしていたようだ。どうやら今後の国を治める為の人事を考えていたらしい。話を聞いた翁は「別に構わんよ」と言った後に笑った。

翁「もし恩に感じるなら今後、主要な地位に付いて国政を助けてくれたらいいぞ？」

僕「それは――」

翁には迷惑を掛ける事になる。

しかし国政には何があっても関わりたくないのは本心だ。それをどう伝えようかと考えていたら「冗談じゃよ」と翁が笑う。

翁「逆に今までの恩を少しでも返せると思うと、後見人くらい安いのんじゃない？」

王子「そうですね。僕がなってもいいくらいです」

さすがに王子はやりすぎだろう。

それにもう領主達には翁がと言ってるわけだし。

王子もそこまで本気で無いだろうから別にいいけど。

部屋を退出すると白の騎士団団長が「行きましようか」と僕に笑いかけた。

僕「どこへ？」

赤の騎士団団長「騎士団の訓練に決まっているだろう」

そうやら先程の領主から逃げる為の言い訳を実行しようと言ってるらしい。

僕「あれはあの場を去るための一時的な言い訳では？」

白の騎士団団長「それでも本当に訓練に参加したかは大砦内に居たらわかるでしょう」

僕「確かにそうですが、別に嘘がばれてもいいのでは？」

白の騎士団団長「何を言ってるんですが、領主達の心象を無闇に悪くするのは得策じゃないでしょう。だから貴方も先程困っていたんですし」

僕「そうですが、さっき気を使う必要は無いと…」

赤の騎士団団長「まあいいから付き合え」

赤の騎士団団長はそういうと僕を騎士団の訓練場に引きずって行く。どうやら逃げられそうにはない。

『あきらめろ』という魔王の言葉に僕は溜息を付いた。

騎士団の訓練は実戦形式だった。

剣と同じくらいの重さにされた木剣で行われる。

1対1で騎士団団員を相手に適当にあしらっていたら、5人目辺りで2人目が投入される。

何だ？ と思い両騎士団を見たら美女さんが居た。

―美女さんの差し金か！

魔王『そうだろうな』

『余所見をしてるとやられるぞ』という言葉に2人の騎士に集中する。

一人の騎士を打ち倒し一対一になった所に2人の騎士が投入され、一対三になる。

一人倒す、一人追加される、一人倒す、使いされる、倒す、追加される。

どうやら3人以上は増えないようだ。

これなら何とかなりそうだ。

白の騎士団団長「やりますね」

赤の騎士団団長「一人相手にいつまで遣られっ放しのつもりだ！」

赤の騎士団団長が激を飛ばし騎士団中隊長クラスを呼び寄せる。集まった騎士団大隊長クラスが呼ばれる。

騎士団は約4000名の集団である。

団長と副団長以下、連隊長で2名、大隊長で10名、中隊長で20名、小隊長になると200名、分隊長になると400もの人数になる。

その騎士団大隊長クラスが呼ばれたのである。

両騎士団で20名になる。

赤の騎士団団長「次からお前達に出してもらう。順番を決めておけ」

そう言われると両騎士団大隊長達は手早く順番を決める。

そうして一人倒すと大隊長の一人が入ってきた。

大隊長クラスが一人入るだけでかなりの負担が増える。

攻撃を避けて反撃しようとする と大隊長がそれを阻む。

それでも何とか騎士団員を倒すと後退で大隊長が入ってきた。

3人とも大隊長になる頃には7割近くが防御となり、中々攻撃できない。

それでも半分以上の大隊長を撃退した頃には息が上がっていた。

赤の騎士団団長「相手はもう息が上がっているんだぞ！」

赤の騎士団団長の発破に大隊長達が気合を入れる。

捌ききれなくなってきた防戦一方になり押され始める。

息も上がり疲れている僕は、一人の攻撃を裁いたところで体が空いてしまった。

そこに打ち込もうとする一人の大隊長。

急に全てがスローモーションのようにゆっくり見えた。

ゆっくり迫る木剣の腹を開いた手で押しのけて流れた体に木剣を打ち込む。

その痛みに倒れそうになる大隊長の体を掴み一人の大隊長に向けて突き出す。

怯んでいる間に距離を取って身構える。

赤の騎士団団長「ほう」

白の騎士団団長「やりますね」

そう言うとき白の騎士団団長は2人の追加を呼びかけた。

一人倒して2人追加で一对四になる。

囲まれないように位置取りしながら向かってくる相手を裁きつつ隙を探す。

剣を受けて避いて打ち返しながら捌いていると横から一人突っ込んできた。

剣を何とか避けつつ拳を握って相手の顔面に打ち込む。

いきなりの剣以外の攻撃に顔面を殴られた相手は倒れ込む。

赤の騎士団団長「油断するからだ！」

白の騎士団団長「そうですね。実践ではどんな攻撃がくるか分かりませんから」

2人の騎士団団長の声が遠くに聞こえる。

―後何人倒せば終わるんだ？

魔王『ほれ、またくるぞ』

疲労で深く考える事を放棄した僕は向かってくる相手の攻撃を裁きながら反撃をしながら、時には拳や蹴りで相手を打ちのめす。どれくらいやっていただろうか。

敵の攻撃が止んだ。

剣を構えながら注意深く次を待っていると拍手が聞こえた。

白の騎士団団長「すばらしい！」

赤の騎士団団長「まさか大隊長クラスが全員やられるとはな」

そう言って近づいてくる。

白の騎士団団長「大丈夫ですか？」

僕「…もう、無理、です」

息を切らしながら答える僕に「よかった」という笑う白の騎士団団長。

白の騎士団団長「このまま連隊長、副団長まで倒されたらどうしようかと思いましたよ」

赤の騎士団団長「一人相手にやられるとは、精進せねばならんな」

赤の騎士団団長に頷く大隊長の面々。

その姿を見ながら僕は木の陰に入り腰を下ろす。

と、水の入った器が差し出された。

有力貴族の娘「なかなかやるじゃない」

器を受け取って水を喉に流す。

どうやら汲み立てのようで冷たくて気持ちいい。

姫も近づいてきてタオルを渡してくれる。

有力貴族の娘「私もやるけど、あそこまでは無理だわ」

僕「そう？美女さんにはまだまだ敵わないけどね」

そういう僕に「え？」と驚く有力貴族の娘

有力貴族の娘「あの人、そんなにすごいの？」

僕「すごいよ。多分、僕と同じ数を相手にしても笑顔のままだと思う」

魔王『そのまま騎士団団長まで倒してしまうかも知れんな』

有力貴族の娘「そんな…信じられない」

「それは試して見たいですね」白の騎士団団長が近づいてきた。

両騎士団団長が美女さんと近くまで来たようだ。

僕「下手に行くと両騎士団の団員も新しい宗教に目覚めてしまいますよ」

その言葉に白の騎士団団長が笑う。

赤の騎士団団長「なかなかやるとは聞いているが、そんなにすごいのか？」

僕「連隊長と副団長くらいならまとめて相手にしても平気だと思いますよ」

赤の騎士団団長「ほう」

美女さん「若の冗談ですよ」

笑顔で否定する美女さんに「是非やってみてください」と言う両騎士団団長。

断っていた美女さんも「私もお手並みを拝見したいです」と真剣に言う有力貴族の娘の言葉に笑顔を僕に向ける。

僕「美女さんがよければちょっとだけやってみてあげたら？」

僕の言葉に「よくは無いのですが…」と美女さんが「連隊長2名と副団長2名の4人のみで追加なしなら」としぶしぶ笑顔で了承した。

結果については両騎士団副団長と連隊長達の名誉のために多くは語らない。

決して無様な仕合をしたわけではなく、素晴らしいものだったと言えるだろう。

4名が弱いわけではなく相手が悪かったというだけだ。

赤の騎士団団長が「追加なしなんていわないほうが良かった」と後悔し、白の騎士団団長が「若の女性でなければ求婚している所です」と絶賛した。

別に僕の女性ではない…はずだけど。

そしてやはり両騎士団で新たに改宗するものが続出したようだ。

翁の兵士達から始まった宗教も数を増やし、今や数千に渡る信者を獲得したようだ。

国教になる日も近いかもしれない。

そして有力貴族の娘が美女さんに弟子入りした。

当初は断っていた美女さんだが「私も強くなつて姫を守りたいんです!」と言う言葉に「若の女性ですから特別に」と折れたようだ。

美女さん曰く「中々です」という事なので、いずれ国を代表する使い手になる可能性もある。

僕も切り殺されないように精進しないといけないかもしれない。

第29話 弟子入り（後書き）

誤字修正

域が上がって ↓ 息が上がって

切り殺されないように ↓ 斬り殺されないように

第30話 王都攻城戦

大砦を出て1日半、？時前ほじ（15時頃）王都が見えてきた。
本来ならもっと早めに着ていた場所なのだが、いろいろな外的要因により時間がかかった。
といっても数日の違いだが。

―その数日の所為で僕は大変な目に：

もういいんだけどね。

やっぱりあの時王都に向かっていたら、と思わないでもない。
そういう思いを振り払い王都へ目を向ける。

王都まではまだ距離があるが隊列を組む。

反国王軍 約15000

本隊、王子、翁、僕、美女さん、兵数約4700

前衛、騎士隊長、兵数約1200（大砦後に仲間になった領主軍）

投石部隊、現領主、兵数約1000、投石機100台

右翼、赤の騎士団、兵数約4000

左翼、白の騎士団、兵数約4100

バラして運んでいた投石機がすぐに組み立てられる。

投石機1台に石を積んだ馬車1台、兵が10で一集団である。

投石機が組みあがると、進軍を開始し、速度を合わせて王都を目指して進みだした。

王都の面前まで来る。

国王軍の人数は不明だが、籠城策を取るようだ。

王都から弓が届かない場所で停止をし、隊列を組みなおす。

双方からラッパが鳴り戦闘が開始される。

前衛と両騎士団の一部が前進し弓を射掛ける。

城壁に並ぶ弓兵の数は圧巻である。

弓矢の応酬が続き、双方に少なからず損害だを出し始めた頃に翁が投石兵に指示を出した。

放たれた投石は仲間の頭上を越えて城壁に当たる。

一つでは城壁に小さな傷を残す程度だがいくつも当たる事により大きく揺らすようで、城壁上の弓兵がバランスを崩すのが見える。

しかも投石は数個で一箇所を狙っている為に城壁に与えるダメージは中々なものようだ。

城壁の門を狙って飛ばされた岩の一つが門に直撃をする。

その一つで門に多大なダメージを与えたようだ。

それを見て反国王軍の兵士が歓声を上げ勢いを増すのに反比例して城壁を守備する兵は始めてみる攻撃に動揺を隠せず指揮系統が乱れる。

そこに各所から「押し込め！」という号令が上がる。

投石が飛んでこない箇所の城壁に兵士が張り付き梯子を掛ける。

城壁からも兵士を引き剥がそうと弓を射掛けたり岩を落したりするが、反国王軍の士気は高く次々と城壁に張り付く。

それと時を同じくして投石機より放たれた岩が門を破壊した。
そして門の後ろに控えていた兵を何人か巻き込見ながら城壁の中に
転がっていく。

城壁が開かれたのを見た騎士団長が突撃を命ずる。
盾を掲げて突撃する騎士団隊長の部隊。

すぐに城門付近は敵味方入り乱れた混戦となる。

それを見た右翼の赤の騎士団団長が動く。

待機していた部隊を城門付近へと移動させると、城壁の上に居る弓
兵に山のような矢を射掛ける。

そして城壁の上の弓兵をある程度排除すると赤の騎士団全軍へ突撃
を命じた。

城門を抜けさせまいと必死で抵抗を続けていた城壁守備隊も赤の騎
士団の参軍に戦線を維持できずに崩れる。

そのまま王都へと雪崩れ込んだ騎士団隊長の軍と赤の騎士団は城門
付近を制圧するとすぐに城壁上の制圧に掛かる。

それと平行してすぐに王城への血路を確保する為に大通りの進軍を
始めた。

翁は城壁上に赤の騎士団の団員が登り制圧し始めたのを確認し、投
石機の解体を命じる。

組み立てたままでは移動に時間が掛かる上に、高さ的に城壁を抜け
る事が出来ないからだ。

城壁上がある程度制圧されたのを確認すると白の騎士団団長は部隊
を2つに分けると、敵が逃げ出してきたても対応が出来るように、正
門以外の2つの門が見える位置に配置した。

王都を進む軍は予想以上に苦戦を強いられていた。

王都の家はどこも窓や扉を嚴重に閉めている。

大通りの横道に部隊が潜んでおり横から襲撃されたり、家の屋根から弓兵が現れたりするからである。

それだけならまだしも、中には火を使ってくるものまでいる。

家屋に燃え移るとあっという間に大火事になりかねない。

そういった者を虱潰しに対処していくのが大変なのである。

赤の騎士団団長は思った以上の敵の抵抗に苦虫を潰しながら大隊長を2人呼び出すと各自大隊を率いて裏路地と家屋の上に居る兵の掃討を命じた。

王子率いる4700の兵は城門付近には近づいたものの、王都の中に入ることはしない。

もちろん一緒にいる僕も同じように城門付近で待機である。

戦況は刻々と伝えられているので把握できている。

大通りをすすむ部隊は敵の反撃に遭い一つも着実に一の郭の門へと進軍は続いている。

概ね戦の勝敗は決している。

一の郭の城壁まで肉薄し王都を制圧するのは時間の問題だろう。

―問題は今まで何もしていないって事だよね

魔王『楽で良いではないか』

―それはそうだけどね

近くで命のやり取りが行われているのに見ているだけと言うのは辛いものがある。

死にたいわけでも殺したいわけでもないけど。

だが『見ているのも将としての義務である』という魔王の言葉に我慢するしかなかった。

―別に将になりたいわけじゃないのに

大通りの先の一の郭の門が閉じられるのが犇^{ひし}めき合う兵の向こうに見える。

出来るだけ味方を回収していた様だが、さすがにその為に一の郭を開けっ放しには出来ない様でとうとう門を閉じた。

それを確認し赤の騎士団団長は指示を出す。

指示を受けた赤の騎士団副団長が「門は閉じられた！投降するならよし、抵抗するなら容赦はしない！」と敵兵に呼びかける。

一の郭に逃げ損ねた敵兵はすでに戦う気も失せているようで次々投降して言った。

王都の残り2つの門が開け放たれる。

そこから王都へ入った白の騎士団はすぐに王都内に残る敵兵搜索に動き出す。

「住民への望郷略奪は行わない」「投降する兵士に対する命の保障」「国王軍を匿う、もしくは協力する者は厳罰に処す」と行った内容を触れて回ったのである。

一時（約2時間）程の搜索で国王軍兵約1200と領主3名が捕縛された。

本隊が王都に入る。

一の郭から少しはなれた所にある豪華な宿が一時接收され仮本部となり、そこに入る。

近隣の建物も同時に接收され、両騎士団で守られている。

捕縛された領主3名は同じ宿に軟禁した。

約1200の兵は武装解除の後にいくつにも分けて監視中である。

翁「さて、王都は攻略できたがこの後が問題じゃな」

王子「本当に有力貴族が門を開けてくれるかですね」

騎士隊長「二の郭に有力貴族の旗が翻っているのは確認できましたが…」

赤の騎士団団長「もし何もない場合は、このまま普通に攻略するだけだ」

翁「それはそうじゃな。とりあえず先の王都制圧による被害は？」

騎士隊長「前衛部隊は約450名の死傷。動けるのは750名ほどです」

赤の騎士団団長「赤の騎士団は120名程死傷。動ける兵3800」

白の騎士団団長「白の騎士団は50名程の死傷。動ける4000の内、1000が現在王都治安維持に動いておりますので、実質3000程度」

赤の騎士団団長「そうだな。赤の騎士団からも500程ここの警備を行っているので、実質3300程度だな」

翁「それに本隊の4700で…12000程か。被害も思った以上に少ない。圧勝と言っても良い成果じゃな」

通常の王都攻略ではもっと被害が出ていてもおかしくなかっただろう。

投石機がうまく門を破壊してくれたのと、それにより敵兵が動揺してくれたお陰だろう。

翁「さて、今後の方針じゃが…」

白の騎士団団長「夜に有力貴族が決起して門を開ける事を前提で動きますか？」

今も一の郭との間では絶え間なく弓矢の応酬が行われてはいる。

だがそれは本格的な戦闘ではなく、敵に対する牽制と嫌がらせのようなものだ。

「そうじゃの」と言う翁に僕は手を上げて発言を求める。

僕「一の郭も攻略しましょう」

翁「ほう」

僕「有力貴族の決起は深夜と言う話です。それなら一の郭を攻略するくらいの余裕はあるでしょう」

白の騎士団団長「ここで無理をして一の郭を攻略する意味は？」

僕「一つに兵の士気が高く、相手の士気を下げる事が出来る」

赤の騎士団団長「確かに我が軍の士気はかなり高いが」

僕「二つに相手に城壁に竄っても無駄だという意識を植え付ける」

王子「というと？」

僕「投石機による攻撃は弓の範囲外から門を破壊します。門が破られれば数に劣る国王軍は進入を防ぐ事は出来ない」

白の騎士団団長「確かにそうですね」

僕「それにこの手はもう一の郭の門でしか使えません」

翁「何と？」

僕「地図では良く分かりませんが、実際に王城を見ると結構な高い位置に立ってます」

王子「元々小高い丘に立てられましたからね」

僕「そこなんです。一の郭の門の前は大通りが走っているので投石機を3台ほどは並べる事は出来ますが、二の郭以上は地図を見る限り2台置けるかどうかです」

白の騎士団団長「それでも2台あれば十分では？」

僕「通常ならそうですが、二の郭の門までは一本道でも曲がりくねっており、結構な急勾配だと思います」

赤の騎士団団長「そうだな、敵の侵攻を遅らせる意味もろからな」

僕「坂がきつい場合は投石機を使う事が出来ません」

王子「何故です？」

僕「岩を投げる際に後ろに引っ張るのですが、それにより後ろに重さが掛かって発射する前に投石機が倒れます。そのような無様な弱点を晒す訳にはいきません」

翁「なるほどの。だがそれでも一の郭を攻めるより、有力貴族の内通を待ったほうが良いのでは？」

僕「確かにその方が門も壊さずに済むのでいいのですが、実際に門が開いたからと言って城内までたどり着けるかは疑問なんです」

翁「何故じゃ？」

僕「一の郭の門から二の郭の門まで結構な距離があります。そして二の郭の門から三の郭の門までは、一の郭から二の郭までよりは近いとは言え急勾配と言う事もあり時間が掛かるでしょう。その距離を抜ける間に門を再度閉じられてしまいかねないのです」

白の騎士団団長「その時間を短縮する為に一の郭を制圧しておくと

「？」

僕「そうです。まあ有力貴族の兵が僕達が城に届くまで門を維持し続ける事が出来る程居るのなら別にいいんですけどね」

赤の騎士団団長「居ても100〜200程度だろうな、一〜三と城の門を開けるには少し足りないか」

その足りない時間を一の郭を攻略する事で時間を短縮しようと言うのだ。

白の騎士団団長「攻める理由は納得しましたが、有力貴族がどう動くかですよね」

もしこちらが一の郭を攻撃するのを見て焦って門を開きだすと同じ結果と言うより、普通に深夜に行うより悪い結果になる。

僕「有力貴族という人物はどのような人ですか？」

翁「有力貴族は政治家としては有能だが、戦の経験は殆ど無いな…成功は半々と言ったところか」

僕「半々ですか？困りましたね」

半々では賭けに出るには確立が低い。

せめて有力領主と連絡が取れたらいいのだが、それは無理だ。
やはり有力領主が門を開けるのを待つしかないか。

翁「やはりせっかく門を開けてもらえるのに無駄に破壊する必要も
無からう」

僕「確かにそうですね」

有力領主の内通を待つことに決まった。
夜に向けて準備を始めた。

結果から言おう。

夜に合図の火矢が上がる事は無かった。

第30話 王都攻城戦（後書き）

ちょっと短めですが、すぐに次をUPする予定です。

誤字修正

投石器 ↓ 投石機

閉じられるのが ↓ 閉じられるのが

改宗 ↓ 回収

何もない場合は ↓ 何もない場合は

場内 ↓ 城内

近いとは言え ↓ 近いとは言え

第31話 ちち

二の郭から合図の火矢が上がる事は無かった。
代わりに停戦の使者が現れたのである。

使者は国王軍派の重鎮の一人らしい。

王子の「降伏ですか？」という言葉に「停戦です」と言う使者。

王子「ではこちらの要求を全て呑むという事ですか？」

使者「いえ、その為の話し合いの場を設けたいのです」

王子「話し合いとは何についてでしょう」

使者「戦後の国王軍に居た者の処遇に付いてです」

王子「すでに通達済みだと思うが？」

使者「頂いております」

王子「なら話し合う事はありません。受けるか受けないか、の2択です」

使者「そこを何とかお願いできないでしょうか」

そう言って使者は頭を垂れた。

翁が何かを言う前に王子が口を開く。

王子「話し合いとは誰が参加し、どこで行うのですか？」

使者「話し合いには国王陛下と有力貴族、他5名の大領主が参加します」

翁「陛下も有力貴族も参加するのか」

使者「はい。ですので場所は王城の謁見の間で行いたいと思います」

翁「我ら我に謁見の間に出頭しろと？」

領く使者に「戯言を申すな!!」と翁が恫喝する。

国王に面会するのに謁見の間というのは常識である。

ただ今は通常とは違う。

例えば相手が国王であってもこの状態で謁見の間に足を運ぶというのは、事実がどうであれ反国王軍の旗頭の王子が国王に膝を折ったと判断されかねない。

それ以上に敵軍の真っ只中に何故行かねばならないのだ。

使者「戯言など申しておりません」

翁「何？」

使者「恐れ多くも国王陛下と面談なさるのです。臣下として国王陛下に礼を尽くすのは当然でしょう」

そう言うと使者は醜く笑った。

魔王『小物だな』

—え？

魔王『国王の権威を我が権威と勘違いしている。その上、状況判断が著しく出来ないようだ』

翁「お主はどこまで理解しているのだ？」

翁の静かな声に使者が「何の事です？」と首を傾げる。

翁「今の状況を正しく理解しているか？」

使者「もちろんです」

翁「どうみてもワシと違う判断をされているように見受けるが、ご説明願えるか？」

使者「は？国王陛下から停戦の申し出があり、その為の謁見のご案内に上がったまでです」

何を言われているのか分からないという風に答える使者。
それを見て城の騎士団団長が笑う。

使者「何がおかしいのですか!」

白の騎士団団長「いえ、申し訳ありません」

使者「何を笑ったのかの説明をたまえ!」

白の騎士団団長「では失礼いたしました。使者殿と私の理解している状況の理解の差が驚くべきものでした。真顔でそう言える使者殿は余程の大物と思ひまして」

当初は白の騎士団団長の言葉の意味が理解できずに居た使者も、馬鹿にされていると理解すると顔を真っ赤にした。

使者「なんと言う物言いか!」

その使者に対して翁が「言われても仕方あるまい」と言う。

使者「な!?!」

翁「本当の事じゃろう」

使者「何を!?!」

翁「本当に気が付いていないのか？」

そう言うとき翁はため息をついた。

翁「お主は今すぐ首を落とされてもおかしくない事を言っているのじゃよ？」

使者「は？」

翁「本当に分からないのか？」

使者「わ、私は停戦の使者で…」

翁「その認識の時点で状況判断が出来ていないな」

翁の使者を見る目が冷めて行く。

翁「何故に完全勝利の目の前で勝っている側が負けてる側の停戦を受け入れねばならん？」

使者「それは…」

翁「しかも降伏を受け付けたという内容ならまだしも、停戦してやるからこちらに来いと言う。自殺志望者でもない限り使者として来

ようとは思うまい」

「他に来たがる者は居なかったであろう」と言う翁に心当たりがあったのか、使者は真っ青な顔で黙り込んだ。

翁「で、最後に何か言う事はあるか？」

真っ青になって震える使者に笑いかける。

翁は本当に人が悪い。

翁「何か言う事はあるか？と聞いている」

使者「あ、う、あ…」

翁「何も無いか、では残念だが…」

そう翁が言った瞬間に使者はその先を言わせないと支離滅裂に話し出した。

命乞いなのか責任転嫁なのか良く分からない事を言っている。

喚きだした使者を見ていた翁が「黙らんと今すぐ首を落とすぞ？」と言ったら静かになった。

翁「今回は見逃してやる。だから帰って、今からいう事を一字一句伝える事じゃ」

翁の言葉にコクコクと頷く使者に失笑しながら。

翁「降伏しか受け入れん。条件は前に伝えた通りだ。妥協は無い。今後の使者はお主の様な小物ではなく有力貴族が自ら来るぐらいで無いと首を跳ねられると思え」

「分かったか？」と聞く翁に使者は人形のように頷くのを確認すると「さっさと出て行け」という言葉にあたふたと部屋を出て行った。

王子「あれで少しは現実を見てくれたらいいんですが」

翁「それぐらいで矯正されるならいいのだがな」

国王軍から停戦の使者が来た事により一時的に止まっていた戦争の気配が反国王軍から上がりだす。
使者が帰って一刻もしない内に一の郭の防壁を挟んだ弓矢の応酬が始まる。

再開して半時。

王子「動きませんね」

僕「そうですね」

一の郭の門は開かない。

僕「もう開かないと見て本格的な攻撃を行いましょうか」

王子「そうですね」

すぐに指示が飛ぶ。

組み立てていた投石器が一の郭の門に近づく。

そうして岩を装填した所で一の郭の門の上に使者の旗が立つ。

振り返った赤の騎士団団長は王子が頭を振るったのを見て「撃て！」と叫ぶ。

2台の投石器から飛んだ岩の一つが門に当たり門を軋ませる。するとすぐに城門に新たな旗が立った。

王子「降伏…」

僕「え？」

王子「降伏の旗が立ちました。ただ―」

僕「ただ？」

魔王『交渉の旗も立っておるな』

どうやら各国間で旗が統一されているらしい。
王子が指示を出し停戦のラッパが吹かれる。

反国王軍が戦闘を止め一の郭の門から離れると城門が開き一人の人物が出てきた。
その人物は城壁上に何か言うとともに門が閉まり始め、それを確認するとこちらへ歩いてきた。

使者を迎えた反国王軍の面々は、現れた使者を前に驚きを隠せなかった。

使者が臣下の礼を取ると呆然としていた王子が何とか言葉を発した。

王子「…まさか本当に来られるとは」

有力貴族「お呼びだと伺ったのですが？」

翁「冗談だったのじゃが」

有力貴族「ええ、存じております」

翁が使者に対する皮肉で「いぶし程度の小物ではなく有力貴族ぐらいの大物で無いと話にならない」と言ったのを理解しておきながら、有力貴族はそれに乗って来たらしい。しかも一人で。

王子「前に来られた使者にはお伝えしましたが、降伏しか受け付けませんよ」

有力貴族「はい。降伏を受け入れる事をお伝えしました」

翁「ほう」

有力貴族「ただ条件について一度、話し合いの場を設けて頂きたいと考えております。出席は互いに10名までで。」

翁「王城まで少人数で来いと申すのか？馬鹿馬鹿しい」

有力貴族「いえ、三の郭にある迎賓館で結構です」

王城になると他国からの客が結構な頻度で来城する。客の地位によって一々三の郭の館に滞在してもらう事もある。その迎賓館の内の一つで行うというのだ。

翁「それでも敵の中に飛び込めというのは承認できん」

有力貴族「私は独り出来ましたが」

翁「お主のそれは負ければどうせ処刑との判断で、今死のうが後で死のうが一緒だと言う割り切りだろう」

そう言うとう有力貴族が「そうですね」と笑った。

有力貴族「三の郭までの門を開きます。全員で来られても困りますが、200名程なら一緒に来ていただいて構いません」

翁「ほう」

考え思案する翁。

魔王『止めろ』

—え？

魔王『いくら門を開くといっても相手の勢力圏だ。暗殺の可能性が高い』

—辞めさせろという事？

魔王『違う。条件をこちらの有利な条件にするのだ。後々説明する。翁が返事をする前に発言しろ』

僕「―よろしいでしょうか？」

翁が発言をする前に僕が言う。

ただまだ魔王に何も聞いていないので何を言うのかは自分も分からない。

同時通訳をまたしなくてはいけないようだ。

王子「どうしました？」

僕（魔王）「『会合の条件をもう少しこちら側に（せんと）して頂かないと（まずい）危険です』」

王子「危険？」

僕（魔王）「『ええ、暗殺の危険^だです』」

その言葉に一同が有力貴族を見る。

有力貴族「∴そのような事はいけません」

僕（魔王）「『（貴様）貴方はそうだとしても他の（考え無し）者が勝手に動くかも（知れん）しれません』」

黙り込む有力貴族。

僕（魔王）「『通常ならこの状態で王子を暗殺した場合の弊害を予想して暗殺など行え（まい）ない。だが先程来た（愚か者）…使者の（知能の程—）』」

—まって！

魔王「何だ？」

—もう少し分かり易く言って、同時通訳が辛い！

魔王『……』

僕（魔王）「『—愚かさを見る限り、その事を理解できずに目先の事だけで動く（だろう）でしょう』」

国王軍から会合を申し出ておきながら現れた王子を暗殺したとしたら、その事は必ず他に知れ渡る。

それにより国王軍が勝利を収めたとしても、今後の外交などでの信頼を無くす結果となる。

そうすればどうなるか…という話だ。

僕（魔王）「『（ああいうのが）使者のような方がトップに居る政府ですから、暗殺の危険性は高い（だろう）でしょう。』」

僕の物言いに翁が「たしかに」と頷く。

僕（魔王） 「『（だから） ですので会合は此方緒条件を飲んで（貰う事が前提だ） 頂きたい』」

有力貴族 「：陛下にここまで来いと申されるのか？それは出来ない」

有力貴族は僕を見て誰か分からず探る目をしていたが、反国王軍の面々が僕の発言に対して何も言わない事を見取ってその事に付いては言及しなかった。

僕（魔王） 「『それが出来たら（よいのだがな） いいのですが、そこまでは（言わん） 言いません。』」

有力貴族 「ではどのような条件を？」

僕（魔王） 「『場所は一の郭で問題は（ない） ありません。ただし門を開けるのは一の郭までではなく王城まで全部^だ。そして王城の今まで（我が軍） こちらの兵を（入れる） 入れてらいます』」

有力貴族 「丸裸になれと？」

僕（魔王） 「『降伏（なのだろうか？） なのでしょう？何処に問題が？』」

有力貴族 「……」

僕（魔王） 「『国王軍は全員武装解除』」

有力貴族「それでは国王を守れない」

僕（魔王）「『誰から守る（のだ？）んですか？（我ら）僕達とは一時停戦となるのに』」

有力貴族「賊が居ないとは言い切れない」

僕（魔王）「『それは国王軍の兵が居ても同じ（だろう）でしょう。逆に居た方が（危険だと思うが）』」

―何を言ってるの！

魔王『ほれ、途中で言うのをやめた所為で余計に含んだ物言いになったぞ』

僕が途中で言葉をやめた事により、有力貴族にはこちらの言いたい事が皮肉と通ったのだろう。見る目が厳しい。

僕（魔王）「『（我ら）僕達の兵が変わりに警備するしますので問題ない（だろう）でしょう』」

有力貴族「全ての兵を上に出げると？」

僕（魔王）「『全てとまでは（言わん）言いませんが、結構な数は（上げる）上げます。ただし王城までは兵を上げ（るが）ますが、城の中には入らないようにに（する）します』」

有力貴族「それで安全と？」

僕（魔王）「『（お主ら）国王派が警備するよりは。』」

有力貴族「……」

僕（魔王）「『ただし、それでも暗殺は恐ろしい。（だから）です
のでお互いが口に含む飲み物は自ら用意した物だけに（しよう）し
ましょう。そうすれば暗殺される可能性も（減ろう）減るでしょう』
」

お互いに自前で用意した飲み物を飲む事により、相手「など」から
の暗殺の可能性を減らせるだろうと言うのだ。

僕（魔王）「『会合の建物は（我らが）こちらから派兵して確認し
た建物を選ぶ。それは迎賓館とは限らない』」

有力貴族「……」

僕（魔王）「『いざ建物に入った所を閉じ込められて燃やされても
（困るからな）困りますからね。事前確認を行うのは基本ですね』」

有力貴族「…それだけですか？」

僕（魔王）「『後は降伏の条件^{だが}ですが、国王軍派の領主の家の断絶
は確定^だです。之に関しては一切の妥協無しです』」

有力貴族「その事はこれから会合で話し合うのだ。貴殿が口を挟ん

でいい事ではない」

さすがに出すぎた発言の僕に対して有力貴族は声を荒げる事はしなかったが、不快感を示した。

有力貴族「何の権限でそこまで申すのだ」

そういう有力貴族に王子が答える。

王子「姉姉さまの婚約者としてでしょうか？」

その言葉に有力貴族がありえない事を聞いたという顔で王子を見る。

翁「まだ発表はしていないが、戦後に姫との婚約を発表する事になっている」

有力貴族「一体何処の者なのですか？」

翁「ただの冒険者じゃな」

有力貴族「冒険者に姫を嫁がせると！」

さすがに驚きの声を上げる。

翁「ただの冒険者では無いがな」

有力貴族「…と言いますと？」

王子「まずは爺と姫が国王軍に取り囲まれてもうだめだという所に居合わせて、すぐにこちらに加勢して下さったそうです。その後は2人と一緒に逃亡を続け僕達と出会う事が出来ました」

翁「私の館に来れたのも若のお陰であるし、その後の両騎士団との内通も大砦の攻略作戦立案も、城の門を壊した兵器を作ったのも若だな。功績だけでも反国王軍で敵うものはおるまい」

いつまで立ってもこのような賛辞には慣れない。

王子「何より姫姉さまが若との婚姻を熱望されましたから」

有力貴族「それだけで婚姻を？何を狙ってるかわからないでしょう」

そういう有力貴族に王子と翁が代わる代わる僕が無欲であることを語る。

もう勘弁してください。

僕が全力で地位や権力などを拒否した事に驚き、反国王軍への参加している理由を姫の好意に気が付いておらずにただ「姫の笑顔を守りたいから」と友情の為だったと聞いて有力貴族の顔が変わった。

有力貴族「…恥ずかしくないか？」

僕「……」

―恥ずかしいに決まってるよ!!

（頑張って）無表情にしている僕の顔を見た有力貴族は少し笑った。
だがその笑いが次の一言で固まる。

王子「有力貴族の娘も若に囲われる事になりましたしね」

王子の顔を凝視していた有力貴族がゆっくりと僕を見る。

軋む音がここまで聞こえてきそうだ。

僕はどうしていいのかわからず、有力貴族との視線を外すことは出来なかった。

第31話 ちち（後書き）

誤字修正

死は ↓ 使者

大物棚 ↓ 大物

買ってる側 ↓ 勝っている側

第32話 会談

有力貴族「この、若者が。娘を？」

僕を見つめたまま何とか言葉を発した有力貴族。

その言葉に翁が「そうじゃ」と答えるのが聞こえてくる。

翁「王子の后にする事は出来ん。正室が居ない状況で妾にするのにも具合が悪い。なら有力貴族の娘の願いをかねる事が出来る相手は、姫の婚約者である若ぐらいだろう」

「それともワシの妾になった方がよかったか？」と笑う翁に有力貴族は何も答えない。

僕を見つめたままの有力貴族に何か言わないといけないといけな焦り「成り行きで…」と言ったら「成り行きだと！」と言う声が返ってきた。

翁「まあ成り行きではあるが、有力貴族の娘も納得しているぞ？」

有力貴族「娘が？」

王子「姫姉さまも納得してます」

有力貴族は経緯等を聞いている間は目を閉じていた。

そして聞き終わると体ごと僕の方を向いて「娘を、よろしくお願い

します」と頭を下げた。

それをどうにか辞めさせて話が再開される。

有力貴族「家の断絶は覆りませんか？」

翁「覆らん。ただ命は保障してやる」

有力貴族「命は助けると？」

翁「戦争の責任、という意味ではな」

有力貴族「と言いますと？」

翁「戦争の責任は家の断絶と領地の没収で償わせる」

有力貴族「……」

翁「その後、国を乱した罪により国の復興の責任を取らせて財産を出させる」

有力貴族「全てですか？」

翁「ほぼ全てじゃな。一部、生活するだけの金と生活の場所は用意する」

翁は前に僕と姫が話で決めた内容を説明する。
有力貴族はそれを黙って聞いていたが話し終わった翁の「ただし——」
という言葉に

有力貴族「ただし？」

翁「領民などに対する罪を調べ場合によっては成人男子までの処刑もありえる」

有力貴族「…罪とは？」

翁「必要以上の重税を掛けていた者、領民を虐待していた者などは成人男性まで全員処刑じゃな。後はどれだけの事をしているかじゃ」

有力貴族「それは罪をかぶせて処刑されるだけでは」

翁「領民に決を取らす。有罪か無罪かのな」

その言葉に有力貴族は無言になる。

翁「善政を敷いておれば問題あるまい」

「それに降伏を受け入れなければ一族郎党皆殺しになるじゃろうしな」と脅す。

有力貴族「…殿下は？」

王子「三兄（第三王子）には退位していただき、その後は隠居して

いただく事になります」

もう家族が死ぬのは見たくありません、という王子。

翁「王妃も一緒にな。その後は城の奥で一生をすごしてもらう事になるだろう。もし子が生まれても王位継承権は与えられずに場合によっては里子に出される事となる」

第三王子は王位に付くと同時に国王派の主要貴族の娘の一人と結婚をした。

その相手も軟禁生活で一生を過ごす事となる。

有力貴族「…会合の場所と武装解除については、それで行けると思っています。ただ降伏内容は殿下に伝える事はしても決定は会合での話し合いでさせて頂きたい」

王子「構いません」

翁「こちらは折れんがな」

有力貴族「それと会合場所に我が軍の兵も100名程度付かせて頂きたい」

翁「武装解除は行うぞ？」

有力貴族「……だめですか？」

翁「50なら許そう。」

有力貴族「…それをお願いします」

会合が終わり再び礼をする有力貴族に翁が声を掛ける。

翁「時間を掛けて全ての館に細工をされても詰まらんしな。期限を区切ろうか」

有力貴族「いかほど？」

翁「どれくらい掛かる？」

有力貴族「話をするだけなら3刻程、意見を纏めるにはどれ程の時間が掛かるか」

その事を考えると憂鬱になるのか有力貴族がため息をついた。

翁「長い時間は待てぬ。半時（約1時間）だ」

有力貴族「せめて一時」

翁「…わかった。一時じゃ。半時毎に一の郭の門の前で鐘を鳴らす。2回目の鐘になった時点で返答が無い場合は交渉は決裂じゃ。その後は全面降伏のみしか受けいれん」

今度こそ最終通告である。

これを蹴れば全員処刑以外の選択肢は無いと翁が告げる。

「私も之で終わらせたいと思っていますよ」と笑う有力貴族。

僕「一ついいですか？」

有力貴族「何でしょうか」

退室しようとする有力貴族を引きとめる。

僕「なぜ国王派に付いたのですか？」

僕の言葉に有力貴族は多くは言わず、ただ「今、この状況が全てです」そう言うで一礼して部屋を出て行った。

有力貴族が出て行った後に翁が口を開く。

翁「有力貴族が国王派に付いたのは人質でも取られたのであろう」

爺「元々、国王派の面々を見て国が荒れることを予想して政権につ

いた常識派ですからね」

僕「それは是非…今後に欲しい人ですね」

翁「それは自分の義父に当たる人物の助命嘆願か？」

僕「え、いや、そういうわけでは—」

しどろもどろになる僕に「冗談じゃよ」と笑う翁は「ワシもそう思
っておる」とだけ言った。

一時後、鐘がなる寸前で使者の旗が立ち出てきたのはまたも有力貴
族だった。

会合の場所などの条件を飲む事と武装解除、王城までの門の開放を
受け入れる旨を聞いてすぐに白の騎士団団長が騎士を率いて一の郭
の門をくぐっていった。

さらに一時程立った頃、空が白み始めた頃に白の騎士団団長から準
備が整ったという知らせが来た。

それを聞いた有力貴族は「では私も城に戻って伝えます」と言い、半時後までにお互いに顔を出す事を決め戻っていった。

「何だこれは」と国王派の一人が口に出す。

何だといわれても天幕だとしか言いようが無い。

会談の場所は館ではなく一の郭の広場に立てられた大きい天幕の中で行われる事となった。

天幕は2重に張られ中を伺う事は出来ないように出来ている。

周りの建物なども徹底して人払いをしており、全ての建物や家屋の屋根、城壁上に兵を配置して安全対策も考慮している。

翁「これなら互いに仕掛けのしようもあるまい」

そういう翁に誰かが何を言う前に有力貴族が「そうですな」と同意する。

会合に現れたのは国王と有力貴族の他に国王派の主要貴族が8名のようだ。

先程の使者は来て無いらしい。

対する反国王軍は王子、翁、僕、白の騎士団団長と6名の領主である。

赤の騎士団団長は「小難しい話は好きじゃない」と美女さんと警備の任に付き、現領主は他の反国王軍を率いて宿に控えている。

簡単な挨拶の後に会合は始まった。
が、始まってすぐに国王派の面々が騒ぎ出した。

国王派貴族A「何でこの大事な会合に良くわからない者がいるんだ！」

僕を指差して言う国王派貴族A。それに「そうだそうだ」と声を荒げる国王と有力貴族以外の国王派の面々。

翁「煩いぞ。ぴいぴい喚くな」

国王派貴族A「な…」

翁「それに会合は互いに10名までの参加と決めたが、誰が出るかまでは国王と王子以外は決まっておらん。こちらの面子に口出しする権限は貴様には無い」

国王派貴族A「なんて物言ですか！」

翁「逆に言わせて頂くと、その事すら理解できていない者がこの”大事な会合”に参加している事自体、疑問に思うが？」

そう言うと国王派の面々からの声が止んだ。

翁「未だに状況を把握出来ない者を何故呼んだのかのう」

有力貴族「…まさかそういう訳では無いでしょう。若の立場を知りたいと思っただけだと思いますよ」

有力貴族がフォローに見せかけた皮肉を言う。

その言葉に安堵の雰囲気を出す反国王派の面々。

魔王『ここまで無能が揃うと逆に驚きだな』

有力貴族「この”大事な会合”は成功させなくてははいけません。その事はここに居る誰もが理解できていると思います」

そう言って言葉を区切った有力貴族は国王派の面々を見た後に国王を見て、

有力貴族「もし会合を壊すような発言や行為を行う人物はこの場から退出していただくようにしませんか？」

国王「そうだな」

王子「こちらもそれで構いません」

有力貴族の「無能は黙っとけ」と言う発言に国王と王子が頷く。

がっちりした国王と細身の王子は余りにて居ないと思ったけど、薄く笑って頷くその姿はやはり血の繋がった兄弟と感じる。

翁の「では始めますかの」という言葉を皮切りに会合は始まった。

翁「まず降伏を受け入れると言う事で、その条件調整と言う事でよろしいですか」

その言葉に頷く国王と王子。

翁「では、まず国王については退位していただいた後に王妃と共に隠居して頂く事になります。お子が生まれても王位継承権を得ることとは無く、場合によっては里子に出される事もあります」

その言葉に国王派からざわめきがもれるが、発言するものは居なかった。

そもそも事前に話を通しているのだ。今更だろう。

国王「：わかった」

翁「では次ですが、国王軍に付いた者たちの処遇ですが――」

翁が条件を伝えようと国王軍派から「認められない!」と言う言葉が多数上がった。

国王と有力貴族は黙って聞いている。

翁「認められないと言う。ではそなた達の条件は？」

国王派貴族A「家と財産と命の保障です」

想像していた通りの答えが返ってきた。

翁「何一つ失わず、何を持ってこの度の敗戦の責を償うと？」

国王派貴族A「復興に対する支援にて」

相手も此方という事を予想して来たのだろう。
だがそれは此方も同じだ。

翁「復興の支援と言うが、それはどれくらいの期間を見ているのじゃ？まさか一回や二回で済むとは思っておらんだろうな？」

国王派貴族A「今後5年に渡り――」

翁「10年だ」

有料貴族「――支援を続けて、何ですと？」

翁「10年だ。5年は短い」

国王派貴族A「∴では10年で」

しづしづ頷く国王派貴族A達に翁は一年毎の出資額を伝える。

翁「もちろん各領主毎の金額だ。前一律、分割も認めず年度毎に一喝で払ってもらう」

その言葉に色めき立つ国王派貴族達。

その額はここに居る大貴族達でも領民に重税を課しても集まるかどうかの額であった。

翁「払えない場合は土地を国に売って払ってもらう。ちなみに新政府は各領主が領民に掛ける税の上弦を決めるでな。好き勝手に住民から徴収は出来なくなるぞ」

国王派貴族A「それでどうやって払えと言うんですか！」

翁「それは頑張つてとしか言えんな」

国王派貴族A「そんな無責任な!!」

翁「責任？何故そんな物をワシらが取らねばならん。」

そう言う翁に国王派貴族達は言葉を無くす。

翁「責任を取るのはお主らであろう。我々の条件を飲まずに復興支援で購うと言ったのはお主等だ。」

国王派貴族A「そうは言っても額が大きすぎます」

翁「必要なだから仕方あるまい」

国王派貴族A「もう少し減額を！」

翁「お主等は馬鹿か？」

国王派貴族A「何を！」

翁「ワシらはわしらの出した条件を基にした降伏しか受け付けぬと言っているのを、お主等が哀れなので条件を聞いて取り入れてやっているの過ぎん。それを、アレはいかん、コレはいかんとやる立場だと思ふのか？」

国王派貴族A「そ、それは…」

翁「これ以上の妥協は無い。我々の条件を飲むか、復興財源を払っていくか、だ」

一瞬で奪われるか、年々奪われていくか。
どう算出しても10年間、お金を出し続ける事に耐えられる貴族は無い。

翁「因みに復興支援が行えない領主は契約不履行で処刑となるがな。今すぐどちらか決めろ」

そんな大事な事を即決できないという国王派貴族達に翁が言う。

翁「だから馬鹿だと言うのだ。今まで散々伝えてきただろう。それでも考えて来なかったのはお主等が無能だったただけだ」

「そうじゃろ？有力貴族よ」という翁に「そうですね」と頷く有力貴族。

有力貴族「私はすでに国王派の言い分での全面降伏しかないと思います」

その言葉に国王派貴族達は声を荒げる。
それを見やって、

有力貴族「では降伏は無かった事にして戦い、全員で死にますか？」

国王派貴族A「それは…」

有力貴族「それに殿下も即答されたのですよ？殿下ほどの重責ある方が答えを出せる程の時間、貴方方は何をなさっていたのですか？」

翁「そうじゃの。今、答えを出せていない者は現実を理解していない愚か者だけだろう」

国王派貴族A「な、何て言い草ですか！」

翁「そうか？今のこの状況で、自分達の命も家も財産も守った上に数年、国に金を出したら丸く収まると考え、それ以外の代案を考えてこない程度の理解力なんじゃろ？」

そう言うとき国王派貴族達は黙ったが、その一人が何かを思いついたように口を開く。

国王派貴族B「では、この度の敗戦の責任として国の要職に付いていた者の首をつけましょう」

国王派貴族達はそれ程の要職に付いていなかったのだろうか？
そもそもその程度の人物が参加しているのは何故だ？

翁「…要職に就いてた者はここに来ていないのか？」

有力貴族「私以外は敗戦の責任を問われて解任されました。今ここに
いる人たちが代行してます」

翁「そうか」

そう言うとう翁は「首だけもらってものお」と呟いた。

国王派貴族 B 「ではその者の土地を一部国に返還させましょう」

翁「そうじゃのお…」

翁はここに居る国王派貴族の面々を眺めて言った。

翁「有力貴族はいいのか？おぬしの首と土地が無くなるが？」

有力貴族「…それで戦が終わるなら」

翁「そうか。では、今まで要職に付いてた者は打ち首と土地の返還」

そう言った翁に国王派貴族 B が頷く。

翁「そしてここに居る今の要職に付いている者達は一族郎党全員処刑の上で全て没収。他の国王派は領地に見合った復興支援を10年、という所で妥協しよう」

国王派貴族 B 「そんな！」

翁「おかしいか？国王派の殆どの家も財産も守られるぞ？」

国王派貴族 B 「我々の一族は皆殺しですか！！」

翁「そうじゃ？」

国王派貴族B「何故!？」

翁「我が身可愛さに他人を売るような輩はいらんからな」

ガツクリと項垂れた国王派貴族Bに翁は「では次の話は――」と進めようとした。

国王派貴族A「待ってください!」

翁「何じゃ？」

国王派貴族A「まだ話し合いは終わってないです」

翁「先程代案を出されて決まったじやろう。反論も無かったしな」

国王派貴族A「国王派貴族Bが勝手に言っただけです。我々は同意して無い!」

そもそも国王派貴族Bが言った時点で何も言わなかった事が同意になるのにそんな事を言う。

翁「ほう」

国王派貴族A「ですので話し合いは終わってない！」

翁「国王派は決まっても居ない個人的意見を勝手に述べるような輩をこの”大事な会合”に参加させているのか？」

国王派貴族A「ぐっ」

翁「とりあえず勝手な事を言って”この会合を”惑わした国王派貴族Bには退出してもらおうかの」

国王派貴族B「なっ！」

翁「勝手な発言だったんじゃない？」

翁の言葉に頷かざるを獲ない国王派貴族B。
すぐに兵が呼ばれ国王派貴族Bは退出させられた。

翁「では、勝手な物言いでは”大事な会合”を乱した者は、当初の決まり事にしたがって退出してもらった」

”大事な会合”と毎回強調する翁は人が悪い。

そして「勝手な発言」と言う言葉を取り上げて退出させる事により、これ以上の無駄な反論をする機会を国王派貴族達から奪った。

翁「では聞く『我々の条件での全面降伏』か『10年わたる復興支援』か選べ」

即答できない相手に「そうそうー」と言う

翁「もう一つ『国王派貴族Bの勝手な発言』も候補に入れるか。」

国王派貴族A「……」

翁「後日返答はありん。今決断するか、物別れに終わり戦うか、じゃ」

それでも何も言わない国王派貴族達を見やって有力貴族が手を上げた。

翁が名を呼ぶと、

有力貴族「確認なんですが、確かそちらの降伏の条件に『領民による領主の裁判が行われ、無罪となった場合は命と家の存続とある程度の土地と財産の保有を認める』とありましたが」

翁「そうじゃな。命以外の全てを没収するかは領民に決めさせる。伝えた書状に書いておったのですで見えていると思っ

てわざわざ言わなんだが？」

有力貴族「いえ、ありがとうございます」

そう言って発言を終えた有力貴族が座ると周りの国王派貴族達が色

めき立った。

魔王『馬鹿どもばかりで話がうまくまとまりそうで何よりだ』

反国王派の申し出を受ければ領民による裁判で助かるかもしれない。日頃から忠誠を誓わせている領民達である。

必ずや無罪になるだろう、という考えを持ったのだろうかという事が国王派貴族達の顔からうかがえる。

中には微妙だと思っている者も幾人かはあるが、絶望的に思っている者は居ないようだ。

国王派貴族達は小難しい顔（魔王に言わせたら『馬鹿顔』）をしながら「有力貴族殿の意見に従う」とだけ伝えた。

それを聞いた有力貴族は国王に「宜しいですか？」と伺いを立て、国王が頷くのを見て「全面的な降伏を受け入れます」と言った。

ここに半年近くに及んだ内乱は終結した。

第32話 会談（後書き）

戦争終結しました。

話の流れ上、こういう形になりました。

当初の予定ではこういう終戦は迎えない感じでしたが、この結末の方が良かったような気がします。

22話の後書きに「話が一段落したら後書きに、当初の予定とどう違うのが後書きにでもちよこつと書けたらと思ってます。」と書きました。

しかしそういう話をするのは無粋の様な気持ちになりましたので、申し訳ありませんが、書くのを控えたいと思います。

第33話 魔王は歌う

その後は細かい内容が決められ、すぐに降伏に関する調印が国王と王子によって為された。

天幕を出た国王と王子達は赤の騎士団団長が率いる兵と共に王城へ入り国王の声明で戦争終結と国王の退位、王子の時期国王就任が告げられた。

すぐに反国王軍の兵が王城へと入り国王派の領主達の身柄を保護（と言う名の捕縛）していく。

謁見の間に集められた国王派の領主達に降伏の条件を伝えると不満の声が上がった。
しかし、

国王「では選ぶがよい。降伏条件を飲むものは我に同意という意味表示で膝をつけ。今後10年に渡る復興支援がいい者はそのまま立っているがいい。王子は貴殿らの意思を尊重するそうだ」

国王の言葉に戸惑っていた国王派領主たちも有力貴族が真っ先に頭を垂れるのを見て次々と同じようにしていき、結局は全員が同じ姿勢となった。

すぐに領民による裁判について話が始まる。
裁判は出来るだけ早く行う。

だが一遍には無理な為に順次行っていくが、それまで王城に留まってもらう事になる。

裁判が行われるまでは外部との接触は禁止となるが、家族への手紙は検閲が入るが送る事は可能である。

領地に居る一族の者は新政府が責任を持って身の安全を守る。

裁判は一族と新政府の立会人の下で行われ、結果を元に対応する。

無罪の際に保障されるのは家の存続であり、どれだけの土地や財産を残すかは状況により変る。

箇条書きするとこんな感じである。

日が完全に登ってもなお戦後処理はまだまだ終わらない。

とりあえず国王派の領主の兵以外の兵士達（近衛や王都守備軍）の一部は軟禁が解除されそれぞれの警備についている。

新政府が暫定的に樹立され、その顔触れは王子と翁達が考えていた面々で埋められていたが、どうして該当する人物が居ない所は王子と翁と爺が兼任していた。

そろそろ落ち着いてきたし少し休もうかなと思っていた所で美女さんに呼ばれる。

連れて行かれたのは王子の所だ。

忙しそうに指示を出す王子を見ているとこちらに気が付いたようで

笑顔に向けてきた。

王子「ご苦労様です」

僕「いえ、王子こそ大変そうで」

王子「まあ僕はこの為に居ますからね。戦場で役に立たなかった分、これから頑張らないとだめですから」

そう笑う王子の横で「誰か国政を手伝ってくれたら、王子の負担は減るのにのう」と書類をチェックしながら翁が言う。
それに「すぐに爺が来ますよ」と笑顔で答えておく。

王子「それなんです」

僕「？」

王子「お迎え。姉姉さまに迎えに行くと約束したでしょう？」

「あっ」と言う声を上げてしまう。

「やっぱり忘れていましたね。姉姉さまが泣きますよ？」と笑う王子。
子。

王子「白の騎士団を率いてお迎えに言って下さい」

僕「し、白の騎士団！？全員ですか？」

王子「そうですね」

僕「仰々しすぎませんか？」

白の騎士団団長「王女の凱旋ですからね。王子は戦で入城したので仕方ありませんが、国民に見せる体裁として最低でもそれくらいはいるんですよ」

後から来た白の騎士団団長が言う事に頷く王子。

王子「姉姉さまは昔から国民に人気がありますからね。物凄い歓迎になると思います」

翁「すごいぞ。もし婚約を発表したら暴動が起こるかも知れん」

驚く僕に「言いすぎですよ」と王子が笑う。

冗談なんだよね？

冗談かどうかとも言わないままに話は続く。

王子「早馬は飛ばしていますので、すぐに勝利の報は届くでしょう」

僕「では早く出ないと姫が出発してしまいますね」

そういう僕に異口同音に「それはないな」と言う面々。

魔王まで『無いな』と言う。

その言葉に気おされて「何で…」と言う僕に

王子「若が迎えに行く約束したからです。姉さまは若が来るまで絶対待ってます」

僕「そ、そうですか」

王子「10日後に僕の戴冠式を行います。その前までに必ず戻ってください」

軍勢を率いて1日半程度である。

馬と馬車だと急げば半日で付くので急げば往復2日である。

何でそんなに余裕を持って言うのかな？と思っていたら、

王子「さすがに若も白の騎士団団長も騎士団の面々も戦が終わったばかりで疲れているでしょう。大砦で一日休養を取ってください」

翁「それに王都へは昼頃に入城してもらおう事になる。王都近くの領主の館に兵を送り姫を迎える準備をしておくので、入城の前日の夕方には入ってくれ」

簡単に話を纏めると

1日目（今日）僕と白の騎士団団長（以下騎士団の面々）が大砦に

向かう。

2日目 大砦で休養

3日目 大砦を出発、王都付近の領主の館へ行く

4日目昼 王都入城

6日も余裕があればそう考えるとそこまで無理は無い。

王子「王都に戻ったら式典などの準備に大忙しですよ」

僕「僕が手伝える事があるなら手伝いますが」

爺「手伝いと言うより自分の準備じゃな」

僕「はい？」

爺「この国の作法を覚えたり、式典の夜にある祝賀会のダンスを覚えなくてはいかんしな」

僕「ダンス…だと…」

王子「まあ帰ってきてから頑張りましょう。まずは姉さまのお迎えです」

―お迎え、それなら

翁「帰ってくるのを遅らせようとしても無駄じゃよ？」

僕「!」

翁「美女殿に若をちゃんと連れて帰って頂くよう伝えておるしな」

どうやら姫のお迎えに美女さんも同行するらしく、逃げる事は敵わないようだ。

すぐに準備をと思ったら既に出来ていて後は僕だけらしく、特に用意するものも無いのですぐに出発となった。

早馬を再度飛ばし全員騎乗の騎士団は早馬に負けない速度で大砦を目指して馬を飛ばした。

日が落ちる頃に大砦に入る。

門を潜り砦の広場に入ると姫と妖精少女と爺と有力領主の娘が出迎えてくれた。

手前で降りて皆の前に行く。

僕「約束通りお迎えに上がりましたよ」

そういう僕に姫が抱きついてきた。

とっさに受け止め何とかバランスを取りつつ姫に離れるように言う。

僕「姫、僕は戦が終わってすぐ来たので物凄く汚れています。せっかくの綺麗な服が汚れてしまいますよ」

そう言った僕に姫は答えずに抱きしめている腕に力を込める。

それを感じた僕は姫の背中をぽんぽんと軽く叩いた。

それを見て妖精少女が「私も！おかえり！！」と足に抱きついてきた（かわいい！）

子狼も僕達の周りを回る。

余りの可愛さに妖精少女の頭を撫でると目を細めて笑った。

その後に「美女お姉ちゃん！」と美女さんにも飛び込んでいく。

ふと目を上げると爺が笑顔でこちらを見ている横で有力貴族の娘が笑みを浮かべて静かに僕達を見ていた。

白の騎士団団長「うらやましい限りですね」

同じく馬を下りた白の騎士団団長がそう言うのと姫がぱっと僕から離れる。

爺「お疲れでしょう。騎士の皆さんの分も食事の用意が来てます」

白の騎士団団長「ありがとうございます」

そう言うと白の騎士団副団長を呼び、騎士達に食事と明日の夕方までの休養を取るように伝えた。

翁の「祝い酒も用意してます」という言葉と内容を聞き、頷いた白の騎士団団長は

白の騎士団団長「姫が戦勝祝いに一人に付きワイン一本を用意して下さった。他にも酒を用意下さっているらしい。今日だけは食べて飲んで騒ぐ事を許可する。ただし食べ物を粗末に扱う者は騎士の資格剥奪だ。それ以外はある程度なら目を瞑る、楽しめ。そして明日の夕方までゆっくり休め！以上、解散！！」

その言葉に騎士の間から歓声が上がる。

一人の騎士から「この広場で宴会してもいいでしょうか？」と言う言葉が上がる。

それを聞いた爺は「いいですなあ」と発し、白の騎士団が頷く。

すぐにその波は騎士団の間を駆け巡り賛同を得て大砦の兵と共に建物の中からテーブルと食事や飲み物が運ばれてくる。

楽しそうな雰囲気僕達も一緒に外で食事を取る事になった。

すでに日は完全に落ち月明かりが綺麗な夜だ。

準備も終わり白の騎士団総勢4000がアルコールの入った器を持って立っている。

白の騎士団団長「姫、乾杯を」

そう言うとき姫は一步前へ出た。

姫「皆さんのお陰で無事、この戦に勝利する事が出来ました。本当にありがとうございます―」

そう言うとき姫は感極まったのか声を詰まらせた。

誰一人言葉を発しない広場に火が爆ぜる音が響く。

皆が姫の次の言葉を待つ中、魔王が『いつてやれ』と言う。

僕は姫の隣に行くと言わずに姫の肩に手を置いた。

姫が必死で堪えている顔を僕に見せる。

僕が姫に声を掛けようとした瞬間に

白の騎士団団長「二人を祝して、乾杯!!」

その言葉に周りから「二人の未来に!」「勝利に!」等と各々好き好きに乾杯の言葉を言いながら杯を煽る。

―いや、確かに反国王軍内では周知の事実だけどここでそれですか!

中には「うらやましいぞ」とか「姫を泣かしたら承知しないぞ」
「でもお前じゃ勝てないだろう!!」とか爆笑なども聞こえる。

―白の騎士団、はっちゃけ過ぎ！

だが今日は誰も咎めない。

皆の乾杯を聞いて何かが途切れたのか涙を流すと「ありがとう」と
呟いて僕に杯を少し掲げた後に口をつけた。

その後はみんなが好きに飲み食いを始める。

僕も姫の横に座って食事を始める。

宴会が始まってすでに食事はあらかた終わり立食形式の飲み会と様
相は呈して目の前は阿鼻叫喚が繰り広げられている。

僕は有力貴族の娘に話しかけた。

僕「お父さんに会ったよ」

有力貴族の娘「…そうですか」

僕「有力貴族は無事だよ。王都に着いたら遭えると思う」

その言葉に少し安心したような顔を見せる。

白の騎士団団長「有力貴族の娘の相手が若だと聞いた時の有力貴族の驚き具合は、そう見れないものだったと思いますよ」

有力貴族の娘「それは：見てみたかったですね」

そう言うのと柔らかく微笑んだ。

—そんな顔も出来るんだ

そう思って見ているとこちらを見て笑みを消すと薄い笑顔を出して僕を見た。

嫌われて：は居ない様だが打ち解けては居ない、そんな感じた。

隣に座る妖精少女が話しかけると僕とは違う笑みを浮かべる。

僕とは違う、姫に向けるのと同じ笑顔だ。

ちよっと寂しいな、と思っていたら姫が話しかけてきた。

姫「どうしました？」

僕「いえ、何でもないですよ」

姫「嘘ですね。有力貴族の娘の事でしょう？」

その言葉に僕は何も言えなくなる。
考えてなかったと言えば嘘になるが、別に疚やましい事を考えていた訳ではない。

僕を見て姫は「ふふ…」と小さく笑った。

姫「有力貴族の娘と仲良くなりたいと思われたのではないですか？」

僕「…良くわかりましたね」

姫「若をいつも見てますから…」

そう言うと言顔を真っ赤にする。

僕も釣られて顔が赤くなるのを感じる。

お酒の所為として誤魔化せるだろうか？

姫「有力貴族の娘は決して若の事を嫌ってませんよ」

僕「そうだと思いたいんですが、どう考えても僕にだけ対応が違うんですよね」

姫「薄い笑顔ですか？」

僕「そうです」

姫「緊張です」

僕「え？」

姫「有力貴族の娘は緊張するとどうしていいか分からなくなり、あいう風に薄い笑顔を出すんです」

「初めて会った時は出さなかった表情でしょう？」という姫に思い出しながら頷く。

姫「初めて会った時は若は反国王派の一人でしかありませんでした。その後に若の奥さんになる事が決まった段階でもまだ『この方法しかない』という思いが強かったので、若自身をどう思う余裕は無かったのだと思います」

僕「数日たって冷静になってきた？」

姫「そうですね。その後の若の人となりを見たり、待っている間に今までの事を私や妖精少女が話しましたからね。それで色々考える事もあったのだと思います」

そう言った時に有力領主の娘がこちらを見ている事に気がついた姫が「貴方の事を話していたの」と微笑むと驚いた顔をして妖精少女と共にこちらに来了。

姫「緊張すると笑顔が固まるけど、若の事は嫌ってませんよ、ってね」

そう笑う姫に口をパクパクさせる有力貴族。
妖精少女が「私も好き」と僕に抱きついてくる。
どうやら皆が楽しそうに盛り上がっているのを見て嬉しくて仕様が
無いらしい。

有力貴族の娘「べ、べつに私はそんな事…」

姫「無いこと無いよね!」

有力貴族の娘「ひ、姫ちゃん、飲みすぎじゃ無い?」

姫「そんな事無いよ」

「ねー」と妖精少女と言い合ってる。

確かに飲みすぎかもしれない。

姫があまり杯を重ねないように注意が必要かもしれない。

有力貴族の娘「緊張なんかしてませんから」

僕「そ、そう?」

姫「嘘はだめだよ?」

有力貴族の娘「嘘なんて…」

姫「有力貴族の娘は私に嘘を言うんだ…」

有力貴族の娘「ひ、姫ちゃん！」

姫は拗ねた様にちびちびと舐めるようにお酒を飲みだした。

いつもの姫にはありえない雰囲気を出している。

これはこれ以上のみ過ぎないように注意が必要かもしれない。

―だが可愛いから止めないけどね!!

魔王の『ダメだこいつ…』と言う言葉が聞こえるがスルー余裕でした。

微笑ましく姫と有力貴族とその間でニコニコしている妖精少女を見ていると爺が近づいてきた。

爺「楽しまれていますか？」

若「ええ」

爺「よければ一杯」

そう言う爺が手にしたボトルを掲げた。

僕は杯の中のお酒を煽ると爺から手酌を受ける。

それを飲むと喉が焼けるような思いをするが、祝い酒を頑張って飲む。

―なにこれ！

魔王『中々きつそうな酒だな』

飲み干した僕は爺からボトルを受け取り返杯する。

爺は「ありがとうございます」というとそれを煽った。

すると横から白の騎士団団長が数名の騎士を連れて僕の所に来て「私のも受けてください」と言う。

お酒は―また爺が持っていたきつい奴である。

そのお酒も煽る。

すると姫が「私のも」と美女さんから手渡されたボトルの中身を空いた僕の杯に並々と注ぐ。

―爺も城の騎士団団長も半分程度でとどめておいてくれたのに！

「さすがにコレはどうなの？」と思って姫を見るとものすごく期待した目で見ている。

それを見た僕は覚悟を決めて杯を煽った。

胸が焼けるように熱く一気に来る。

と空いた杯に今度は有力領主の娘が並々と注いだ。

僕が見つめると「飲んでくださいますよね」と悪い顔で笑う。

―そんな顔もするんですね

見つめる有力領主の娘を前に進退窮まった僕は破れかぶれに煽る。
すぐに姫が注ぐ、煽る、有力貴族の娘が注ぐ、煽る、姫が――

何回続いたのだろうか？

僕はいつの間にか意識を手放していた。

――

頭が痛い。

どうやら昨日は飲みすぎたようだ。

――というよりは飲まされすぎたのか

寝返りをうち昨日の事を思い出すが、どうやって部屋まで来たのか
も思い出せなかった。

喉が渴いたなど目をあけた僕は目の前の光景に固まった。

横に寝ている有力貴族の娘とぼっちり目が合ったのだ。

有力貴族の娘「…おはよう」

僕「お、おは、…え？」

いつの間にか魔王が暗いリズムの歌を歌っていた。

有力貴族の娘「…あなたは思ったより強引なのね」

—ええええええええええええええええええええええええ

魔王の歌が二日酔いの頭に木霊する。
後々聞いたら魔族に伝わる家畜が売られていく歌らしかったが、今は全く関係ない話だった。

第33話 魔王は歌う（後書き）

中途半端ですが、今日はここまでです。

誤字修正

半国王軍 ↓ 反国王軍

保障荒れるのは 保障されるのは

試論騎士団 ↓ 白の騎士団

若自信 ↓ 若自身

第34話 家族

目を覚ますと知らない部屋で寝ており、有力貴族の娘が傍らに居た。

どこかで使った言い回しである。

魔王が未だに歌っているのがうざいが、今の僕は魔王の事より現状把握で必死だった。

僕「え…？」

有力貴族の娘「しっ—」

驚きの声を上げようとした僕に有力貴族の娘が「静かに」と挙動で示して「姫が起きてしまうわ」と言った。
そして視線を下に向けると有力貴族の娘の胸に顔を埋める様に抱きついた姫が寝ていた。

—余計に意味が分からない！

混乱で何がなんだか分からないのでとりあえず逃げよう。
そんな混乱の極みにあった僕は二人から離れようとした所を有力貴族の娘に肩を捕まれる。

有力貴族の娘「そっちも危ないわ。妖精少女を潰してしまおう」

僕が後ろを振り返ると妖精少女が丸まって寝ていた（かわいい！）

—じゃなくて！魔王！！歌ってないで説明して！

魔王『…何をだ？』

—どういう事なの？

魔王『どうも何も…見たままだが？』

—なんでこんな事に！？

魔王『お主が自分でした事だぞ？』

—そんな訳は—

魔王『無いと言い切れるのか？』

昨日の記憶が無い僕は魔王の言葉に反論できずに黙り込む。

黙った僕に何を思ったのか有力貴族の娘が小声で話しかけてきた。

有力貴族の娘「…何も無かったから安心して」

その言葉に僕は有力貴族の娘を見る。

有力貴族の娘「妖精少女もいるのに何かある訳無いでしょう」

僕「た、確かに…」

有力貴族の娘「それに私達はもう貴方のもの。何があってもおかしくは無いけど」

そう言うと昨日、僕の杯にお酒を注いだ時と同じ顔をした。

有力貴族の娘「それにしても…昨日の事覚えてないの？」

僕「え？」

有力貴族の娘「この状況には貴方がしたのよ？」

僕「ええモガ！」

余りの事に声を上げそうにあった僕の口を急いで塞ぐ有力貴族の娘。

「大きな声はダメ！」と小声で言う。

そして昨日の僕の行動を説明しだした。

姫と有力貴族のお代わりコンボはもう何杯目になるか分からない。
やっとボトルが空になって杯に次が注がれる前に姫からボトルを奪
い自分で杯に満たす。

僕「姫、返杯です。受けてください」

僕の差し出した杯を嬉しそうな恥ずかしそうな顔で受け取った姫は
有力貴族の娘が「姫ちゃん!」と止めようとする前にぐいっと煽る。
そして僕に杯を笑顔で帰すと崩れるように意識を飛ばした。

僕「姫にはちよつときつかったようですね」

有力貴族の娘「当たり前です!どうするつもりですか!!」

眠っている姫を抱きかかえなおした僕に美女さんが「寝所までお連
れしてください」と言うので歩き出す。

有力貴族の娘は「え、ちょ、まって」そう言うと言僕達を追いかける。
半分眠りかけながら椅子に座ってた妖精少女に美女さんが「寝所
に行きましょうか」と言って抱きかかえると爺に「お先に失礼します」
と言うと僕達の後に付いていった。

有力貴族の娘は何か言いたそうだったが黙って姫の寢所まで着いてきた。

そこで何か言ってやろうと口を開く前に僕が「扉を開けてください」と言言うと仕方なく扉を開ける。

僕は開いた扉を潜り寢台に姫をそつと下ろす。

有力貴族の娘「…ありがとうございます。後は私がしますので、殿方は退室してください」

そう言われても姫ががっちり僕の服を掴んでいるので動けない。無理にでも指をはがそうかと考えてやめた。

僕「姫が掴んで離れません」

有力貴族の娘「え？」

僕「仕方ないので僕もこのまま寝ましょう」

有力貴族の娘「何を言って…」

僕は姫の横に転がる。

それを見た有力貴族の娘が「ちよつと！」と近づいてきた。

僕「何ですか？」

有力貴族の娘「婚姻するとは言え、発表前にこのような事はまずいわよ！」

僕「そうですか？」

有力貴族の娘「もちろんです！」

そう言うのと僕の横に妖精少女を寝かしている美女さんに「そう思いますよね！」と言う。

美女さんは「そうですねえ…」と呟いて

美女さん「明日、起きられる頃にお食事をお持ちしましょうか？」

有力貴族の娘「明日の食事の心配じゃないの！」

美女さん「若は酔った女性に何もしませんよ。そのような度胸もありません」

僕「酷い言われようだ」

魔王『だが事実だ』

美女さんの物言いに僕は笑う。

僕「何もしませんよ。度胸も無いですからね」

有力貴族の娘「そういう問題じゃないです！」

美女さん「心配なら有力貴族の娘様も一緒にお休みになればいいじゃないですか」

その言葉を聴いた僕は「それはそうだ」と言うとは有力貴族の娘の腕を引いて寝台に誘う。

不意をつかれた有力貴族の娘は酔っていた所為もあるのかバランスを崩し寝台に倒れこむ。

姫を押しつぶすまいと必死で体をそらした結果、寝台に旨く横になる。

有力貴族の娘「一体何を――」

僕「姫も有力貴族の娘が一緒のほうがいいですよね」

そう話しかけると姫は「ふに」と目を薄く開けて「ひゃい？」と言った。

もう一度僕が言うとは横になっている有力貴族の娘を見ると「一緒にいい」と有力貴族の娘に抱きついた。

それに嬉しいような怒ったような有力貴族の娘は、しかし姫を無下に扱う事も出来ずにされるがままにしていた結果、がっかりと姫にホールドされ動けなくなった。

それを見て僕は「うんうん」と頷く。

美女さん「では明日、食事をお持ちしますね」

有力貴族の娘「ちょっと待ってください！このまま良くつもりですか？」

美女さん「はい。何か問題でも？」

有力貴族の娘「大有りです！着替えても無いのに」

俺を聞いた美女さんは「確かに寝苦しいですね」と言う。

姫も有力貴族の娘もそれ程過度の装飾のある服を着てはいないが、それでもちよつとしたドレスを着ている。

それでは確かに窮屈で眠りにくいだろう。

美女さんは「わかりました」と言うど有力貴族の娘の裏に回った。

有力貴族の娘「え、ちょ、ええ、な、何を…」

美女さん「後ろのボタンを外しました」

有力貴族の娘「そうじゃなくて、何で…！」

美女さん「このままでは苦しくて寝にくいと申されたので」

湯力貴族の娘「そうじゃなくて『着替えてもいない』と言ったの！」

美女さん「でもこの状態では着替えるのは不可能かと」

がちり抱きついた姫を見て「姫のボタンは有力貴族の娘様が外してあげてください」と言う。

美女さん「若が外しても問題ないですけど」

有力貴族の娘「問題ありません！それに殿方の前で肌を晒すなんて！！」

美女さん「殿方の前で晒すのは問題ですが、若の前でなら問題ないでしょう」

有力貴族の娘「何故！？」

美女さん「お二人とも事実上はもう若の奥様なんですよ？」

「何処に問題が？」と首を傾げる美女さんに有力貴族の娘が言葉を無くす。

美女さん「それに若はもう眠ってます」

驚いて見ると僕はもう寝ていたらしい。

それを見て気が抜けた有力貴族の娘に美女さんが

美女さん「姫様も窮屈だと思いますので、服を楽にしてあげてください」

説明してくれた有力貴族の娘を眺めていると居心地悪そうに僕を見つめ返しながら

有力貴族の娘「その所為で着替える間もなく眠らされたんですけどね」

僕「ご、ごめん」

有力貴族の娘「別に構いませんけど」

そういう有力貴族の娘の疲れた感じの雰囲気につっかかりを覚える。

僕「もしかして休めてない？」

有力貴族の娘「そ、そんなこと無いわ」

僕「姫がずっと抱きついていたので眠りにくかったのかな。ごめんね」

有力貴族の娘「それはいつものので問題無いです」

僕「そ、そうなの？じゃあ何で…」

有力貴族の娘「――で」

僕「何か言った？」

有力貴族の娘「緊張で」

僕「え？」

有力貴族の娘「殿方が一緒に寝ていると言う状況が初めてで緊張であまり寝れなかったのです！」

「悪い事をしたな」と思いつつも顔を真っ赤に言う有力貴族の娘に可愛いなと微笑んでしまう。

それを見咎めて「何ですか！」と言う有力貴族に僕は言った。

僕「思ってたんだけどさ」

有力貴族の娘「何か？」

僕「僕にそこまで改まった言葉を使う必要は無いよ」

有力貴族の娘「でも王族になられる方にぞんざいな言葉を使う事など出来ませんし、周りも許しません」

僕「そっか：対外的には無理なのか」

有力貴族の娘「当たり前です。王族なのですよ。貴方をぞんざいに扱う事は姫をぞんざいに扱う事と同意義です」

僕「なるほど：じゃあ僕達だけの時だけ、普通に話そうよ」

有力貴族の娘「何を…」

僕「僕達だけしかいなければ問題ないよ。姫も気にしないはず」

有力貴族の娘「しかし―」

僕「人が居る時と使い分け出来ないなら仕方ないけど」

有力貴族の娘「それくらい出来ますが―」

僕「ならいいじゃない」

有力貴族の娘「わかりました―わかったわ」

そう言った有力貴族の娘に僕は満足げに頷く。

それを見た有力貴族の娘も笑顔を浮かべた。

そうして二人で笑っていると後ろで「ふえっ」と声が上がった。

どうやら妖精少女が起きたらしい。

寝ぼけ眼で目を擦っていた妖精少女は僕を見ると「おにいちちゃん!」と嬉しそうに抱きついてきた。

僕は妖精少女を受け止めながら頭を撫でてあげると目を細めて笑いながら「一緒だったなんて気がつかなかった!」と言った後に「有力貴族のお姉ちゃんもおはよう!」と元気に言う。

有力貴族の娘が「おはよう」と微笑むのを見ながら「妖精少女は疲れて寝ちゃってたからね」と言う。「今日も一緒に寝ようね!」と気の早い事を言い出す。

それに「今日は無理かな」と言うと「え〜」とベッドで跳ねる。
横にいた子狼がバウンドしているが2匹は意地でも起きないつもり
なのか丸まったまま動かない。

僕「妖精少女、まだ姫が寝てるから跳ねちゃだめだよ」

そう言うのと寝ている姫に気がついて「ごめんなさい」と言う。
それに「怒っては無いよ」と言って優しく頭を撫でる。

だが時既に遅し、姫は周りの騒がしさに目を開けた。

姫「っ頭が、痛い…です」

有力貴族の娘「姫ちゃん、おはよう」

姫「おはよう」

有力貴族の娘「姫ちゃん、落ち着いて聞いてね」

姫「どうしたの？」

妖精少女「姫お姉ちゃん、おはよう！」

その言葉に振り返りながら妖精少女に挨拶をしようとして僕を認め
ると固まった。

僕「おおはよう」

姫「え、あ、おはよう、ございます?」

混乱で疑問系になった姫は僕と同じ布団で寝ている事に気がつく
と声にならない悲鳴を上げてパニックになった。

僕と有力貴族の娘で「何も無かった」「酔ってすぐ寝た」という話
をし続けて姫を何とか宥める。

そして落ち着いてから有力貴族の娘が昨日の状況を説明する。
最後まで説明を聞くと「ご迷惑をおかけしました」と姫が小声で謝
罪した。

僕「姫が誤る必要は無いよ!僕も酔っ払って寝てしまっでごめんね」

姫「いえ…」

有力貴族の娘「全くよ!まだ婚姻していない娘の寝所に一緒に寝よ
うだなんて」

僕にぽんぽんと悪態をつく有力貴族の娘を見て姫が「あれ?」と言
う。

有力貴族の娘「どうしたのですか？」

姫「ううん、有力貴族の娘が若に対して普通に話していたのでビツクリしただけ」

有力貴族の娘「ーっ！」

僕「僕がせめて僕らしかいない時位普通に話して欲しいとお願いしたんだ」

姫「そうだったんですか」

僕「うん」

姫「二人が仲良くなった感じがしてすごい嬉しい」

有力貴族の娘「姫ちゃん！」

姫「そうだ！私にも私達の場合は昔のように話して」

有力貴族の娘「それは…」

姫「だめ？」

有力貴族の娘「だめ、です」

姫「どうしても」

有力貴族の娘「どうしても、です」

姫「お願い」

有力貴族の娘「ーっ!!」

有力貴族の娘は姫のお願い攻撃にノックダウンする。

僕もあのお願い攻撃は耐え切れまい。

こくこくと頷く有力貴族に「ありがとう」と姫が微笑む。

ーダウン…ワン、ツー、スリー

魔王『何だそれは?』

ー独り言、意味は無いから気にはしないで

仲良く笑う二人に「私も」と妖精少女が突貫する。

その姿を見ていた僕はふと思って口に出す。

僕「姫も僕達だけの時は普通に話そうか」

姫「え?」

僕「ほら、僕達は普通なのに姫だけ違うっておかしいでしょ?」

姫「でも私はこの話し方が普通で」

僕「じゃあ気を抜いて話してみようか。僕たちだけ硬く話す必要は無いよ」

有力貴族の娘「そうね」

姫「でもどう話せばいいのか」

僕「有力貴族の話し方を思い出してみたら？」

姫は考え込むと「わか…たわ」と頷いた。

僕「まあ無理にいう必要は無いよ。少しずつ使えるようになればいいから」

姫「はい、ええ」

その言い方に僕と有力貴族の娘が笑い、それを見て妖精少女が笑う。姫はそれを見ていたが自分の言い方が笑われていると分かると拗ねてしまった。

姫を宥めていると美女さんが食事を持って部屋を訪れた。

美女さんが食事の用意をしている間に「後ろを向いて」と有力貴族の娘に言われ二人は服の乱れを直した。

食事を並べる美女さんを見ながらふと思う。

僕「美女さんはもう食事は取ったの？」

美女さん「まだですよ」

僕「でも4人分しかないよ？」

美女さん「私は後で頂きます」

僕「一緒に食べようよ」

姫「そうですよ」

僕「美女さんの分を持ってくるのに時間掛かる？」

美女さん「それ程時間はかかりませんが」

僕「じゃあここは僕たちがやって置くから、美女さんの分も持ってきてよ」

有力貴族の娘「そうね。皆で食べたほうがおいしいわ」

姫「それにここに居るのは若の奥さんだけですし、気にする必要は無いわ。それに――」

「家族は一緒に食事を取ると聞いたわ」と姫が嬉しそうに言う。

どうやら王族は違うらしく、家族で食卓を囲むのは夢らしい。

その一言に僕は何も言えなくなる。

それを見た美女さんは「わかりました」と微笑むと自分の分を取りに行き、すぐに戻ってくる。

そして皿を並べるとみんなで食事を取った。

第34話 家族（後書き）

誤字修正

歌ているのが ↓ 歌っているのが

竜力貴族の娘 ↓ 有力貴族の娘

子の話し方 ↓ この話し方

第35話 時代

朝食後、自室に戻り昼前まで一眠りする。
目が覚めると頭痛は軽減されていた。

部屋を出ると美女さんと妖精少女に会う。

どうやら姫と有力貴族の娘はまだ眠っているらしい。

3人で軽く食事を取る。

妖精少女「近くにね、おっきな湖があるんだって！」

僕「そうなんだ」

妖精少女「一緒に行こうよ」

その言葉に考える。

最近はずっと妖精少女の相手が出来てなかった。

もう戦争も終わり危険性は低くなっているだろう。

それに水の精霊とも意思疎通が出来る妖精少女は、やっぱりそういう場所が好きなのかも知れない。

僕「そうだね。ちょっと出かけようか」

そういう僕に妖精少女が「わーい」と喜ぶ。

そこに白の騎士団団長が「賑やかですね」と笑顔で顔を出した。

白の騎士団団長「昨日は結構な量を飲まれてましたが、もう大丈夫なんですか？」

僕「ええ、少し頭痛がしますがもう大丈夫です」

白の騎士団団長「それはお強い」

そう言うと「私はまだ少し体が重いです」と笑った。

白の騎士団団長「で、先程は何で盛り上がってたんですか？」

僕「近くの湖まで妖精少女を連れて足を伸ばしてみようかと」

白の騎士団団長「近くの湖ですか…」

そう言うと僕を見て「私も一緒にしても宜しいですか？」と聞いてきた。

「別にいいよね」と妖精少女に聞いたら「うん!」と元気に答えた。

白の騎士団団長「何人か騎士を連れて行きましょう」

僕「騎士を、ですか？」

白の騎士団団長「戦争は終わったとは言え、野盗などが居ないとも限りませんので要人の為ですよ」

そう言って笑うのを聞きながら「それもそうか」と思う。
朝食後に出かける事となった。

白の騎士団団長と共に来る騎士団のメンバーは10名。
意外と来た。

まあこれだけ居れば野盗ごときには負けないだろう。

―美女さんもいるし

魔王『野盗ごときなら美女一人で十分だな』

その通り過ぎて言葉が出ない。

妖精少女が僕の馬に乗りたがった為に一緒に乗る事になった。

2人乗りはあまりした事は無いが妖精少女は小さいので何とかかなり
そうだ。

大砦を出て一刻ほど走った場所に湖はあった。

僕「綺麗な水ですね」

白の騎士団団長「大砦で聞いた話では、湖の中に源水が幾つかある
為に綺麗らしいですよ」

僕「なるほど」

妖精少女を馬から下ろす。

すぐい湖の淵まで行くと「おゝ」と湖を覗き込んでいた。

妖精少女の下げていた小さな布袋から2匹の子狼が顔だけ出して同じく湖を覗いている姿が微笑ましい。

湖に手を入れて「つめたい」といつている妖精少女を見ながら僕は木の陰に腰を下ろす。

すぐに美女さんと城の騎士団団長が僕のそばに来る。

僕「あれ？他の騎士団の人たちは？」

白の騎士団団長「念のために周りを確認させる為に出しました」

僕「何か折角の休暇をすみません」

白の騎士団団長「構いませんよ。変わりに王都に着いたら一日休ませます」

「逆に何も無い大砦での休みより王都での一日の休みで幸運ですよ」と笑う。

妖精少女が僕を呼ぶので手を振り妖精少女のそばに行く。

湖を近くに寄ってその透明さに驚く。

結構な深さまで底が見えるのだ。

妖精少女「お兄ちゃん、あそこに家がある」

妖精少女が指差す方を見ると湖の底に建物が見えた。

僕「昔、村でもあったけど湖の底に沈んだのかな？」

妖精少女「ふしぎだね」

僕「そうだね」

妖精少女「階段があるけど、誰があそこまでいくのかな？」

魔王『ほう、これは――』

――どうしたの？

魔王『あの建物から結構な力を感じるな。これは――精霊か』

――精霊？

魔王『あの湖は力を持った精霊、それも中級クラスの精霊が居るかもしれない』

――中級

魔王『よっぽどの事が無い限り大丈夫だと思うが、精霊に敏感な妖精少女には注意しておいた方が良くかもしれない』

美女さん「妖精少女？」

美女さんの声に妖精少女を見ると、妖精少女は湖の底から伸びる階段に向かって湖を入ろうとしていた。

急いで僕は妖精少女の肩を掴んで引きとめる。

妖精少女「え？何？」

僕「どうしたの？」

妖精少女「うん。まだなんだ」

僕「妖精少女？」

魔王『これは…精霊と交信中かも知れんな』

―交信中？

魔王『そうだ。見れない人間からしたら何を会話しているかも知らんがな』

何かに向かって話をしている妖精少女を見やる。

―気が触れたりしたとか、何か良くないものに取り付かれたりした訳じゃないんだね

魔王『まあ精霊との交信に精神が耐えられなかったら気が触れるし、精霊をコントロールできずに錯乱する事に乗っ取られた、という場合もあるがな』

―今はまだ無事なんだよね？

魔王『分からん。我も精霊は見えぬからな』

―じゃあどうにか辞めさせないと！

魔王『今の段階で止めるほうが危険だ』

中途半端な状況で手出しをするのは危険であると魔王に言われ、仕方なく妖精少女を見守る。

僕は美女さんと城の騎士団団長に「精霊と交信中らしいです」とだけ伝えた。

その間にも妖精少女の会話は続く。

「そうそう」「むずかしい」「そうかな？」等など。

中に「お兄ちゃん」という単語が出たが、それは僕の事なのだろうか？

どれくらい話が続いたのだろうか。

「うん、わかった。ありがとう、またね、バイバイ」と虚空に向かって手を振る。

すると波一つ無かった水面が神殿の真上辺りから波紋が一度だけ広がった。

話が終わったのかと妖精少女に声をかけようとしたら「うん！」と一際大きく妖精少女が頷いた。

そして僕を振り返り「お兄ちゃんどうしたの？」と言った。
それを聞いて僕は安堵の息を吐く。

僕「妖精少女が急に精霊と話し出すからビックリしただけだよ。湖の中に入っていくかと思って」

妖精少女「そうだ！すごかったよ」

僕「どうしたの？」

妖精少女「大きな精霊さんが神殿から出てきて挨拶したの」

僕「へえ。大きいってどれくらい？」

それに手を一杯に広げ「これくらい」と言う（可愛い！）

僕「それでどうしたの？」

妖精少女「神殿へ遊びにおいで、って言われたので行こうと思ったら行けなくて、そしたら大きな精霊さんが水の精霊さんと仲良くなつてないのかって聞いてきたの」

魔王『契約状況のことか』

妖精少女「うんって頷いたら紹介してあげるから、来れるようになったらまたおいで、って言われた」

僕「紹介？」

妖精少女「うん。大きな妖精と仲良くなった！」

そう言って笑う妖精少女に「よかったね」と頭を撫でてあげる。
嬉しそうに目を細める妖精少女。

魔王『紹介という事は中級以上の精霊か』

―何故？

魔王『自分より下の位のランクしか紹介出来ぬだろうからな』

僕「その精霊は下級なの？」

妖精少女「下級？」

僕「えっと、いつも回りに居るような」

妖精少女「違うよ」

僕・魔王「『何？』」

妖精少女「いつも周りにいるのはこれくらい（手を水を掬う感じ）」

僕「そんなに小さいんだ」

妖精少女「そして仲良くなったのはこれくらい（両手を広げる）」

魔王『もしかして中級か？』

僕「帰って行っただのと同じくらい？」

妖精少女「うん。帰った精霊さんはもっと大きかった」

魔王『上級か』

僕「その大きな精霊が『またおいで』って言ったの？」

妖精少女「うん。精霊さんと一杯仲良くしたら水の神殿まで来れるようになるからって」

魔王『ほう。妖精少女は精霊に気に入られる才があるようだ』

―気に入られる？

魔王『言ったであろう。精霊に気に入れないと契約できないと。どうやら妖精少女は気に入られたらしい。だから「また来い」と言われたのであろう』

―なんで今すぐ契約しなかったんだろう？

魔王『契約の条件があそこの神殿にあるのだろう。だが妖精少女は水の精霊との契約を結んでおらず神殿まで行く力が無い。だからまた力がついたら来いと言ったのであろう』

―なるほど

僕は魔王の言ったことを美女さんと白の騎士団団長に伝えた。
驚く白の騎士団団長と笑顔の美女さん。

魔王『どれ程の力が使えるか聞いてみよ』

僕「妖精少女は精霊と仲良くなって何が出来るの？」

妖精少女「んゝ（何も無い空間を見つめ）水を出せる」

僕「水？」

妖精少女「うん。一杯出せる」

魔王『ほう、水を出すか。やはり中級だな』

「下級は近くに水があれば使える程度だ。水を出すととなると中級以上だろう。」

僕「すごいね。一杯出せるの？」

妖精少女「出せるみたいだけど、出すと疲れるからやめなさいって言われた」

僕「じゃあ出し過ぎないように気をつけないとね」

その言葉に「うん！」と言う。

妖精少女「後ね、小さい怪我なら治る？」

魔王『治癒系か！』

僕「すごいね！」

僕に誉められえ嬉しいのか「うんうん」と笑顔で頷く妖精少女。

僕「どんな傷でも治るの？」

妖精少女「ううん。えっとね、ん〜難しい。傷を水で覆って直す力を早めるだけらしいから、大きな怪我は無理だって」

魔王『治癒ではなく回復促進か。確かにそれだと自然治癒しないレベルの怪我は治らん』

僕「それでもすごいね」

妖精少女「これも使いすぎるとすぐ疲れるから注意してだって」

僕「そっか。気をつけないとね」

僕が頭を撫でるといつも通り目を細めて笑う。

僕「さっきの大きい精霊、上級精霊に会える様になったらまたこよ

うね」

妖精少女は「うん！」と元気に呟いた後に「でも——」と言う。

妖精少女「でも上級精霊？じゃ無いって」

僕「そうなの？」

妖精少女「うん。王だって」

僕・魔王・白の騎士団団長「「『は？』」」

妖精少女「王だって言ってるよ」

魔王『まさかの精霊王だと！？』

僕「∴妖精少女が仲良くなったのは？」

妖精少女「んゝ中級って言ってる」

魔王『そ、そうか、安心した』

——魔王が驚くってよっぽどだね

魔王『精霊王だぞ！歴史上に現れたのも数える程の存在に妖精少女が気に入られたのだ！』

しかも精霊王からの申し出である。

魔王が興奮するのも無理は無いらしい。

僕はすごい事だとは思うけどいまいち実感が無い。

魔王『お主は全く：とりあえずこの事は隠した方が良いでしょう』

―何故？

魔王『膨大な力を手に入れるかも知れない器だぞ？どこから狙われるかわからんだろう』

―そうか

魔王『まあ精霊と契約自体はそう少なくないので問題無いが、精霊王と話をした事や「来い」と言われた事は妖精少女がもう少し大きくなって判断できるまで隠した方が賢明だ』

それを聞いて僕は美女さんと白の騎士団団長に伝える。

それを聞いた白の騎士団団長は「それがいいですね」と頷いた。

妖精少女にも黙っているように言うと「姫お姉ちゃんや有力貴族お姉ちゃんにも？」と言う。

それに「二人には良いけど、それ以外の人は絶対ダメだよ。二人に話す時は僕も説明するから一緒に言おうね」と言い、妖精少女がしっかりと頷くのを確認した。

僕「あの神殿があんなにはっきり見えるなら、だれかに悪用されないかな？」

魔王『今まで話にもあがらなかったんだ。何かしらの対処方法があるのだろうか』

妖精少女「なんかね。精霊の力で見えなくするんだって」

―精霊万能説浮上。

魔王『そこまで万能ではないがな』

とりあえず大砦に戻る事を決め、騎士達が戻ると大砦に向けて帰還した。

途中、騎士の一人に「わざわざ着いて来てもらって確認までしたてらったのにトンボ帰りで申し訳ない」という事を伝えると「気にしないで下さい」と笑って答えてくれた。

大砦に戻ると姫と有力貴族の娘が立っていた。

二人は帰ってきた僕を見ると「宜しいでしょうか？」と笑顔で伝え

「お話がありますのでお部屋まで」と言った。

僕も妖精少女の件で話があったので丁度いい。

美女さんにこのまま姫の部屋に行く事を伝えると「分かりました。お茶をお持ちしますので頑張ってくださいね」と言われた。

―頑張る？妖精少女の契約の件かな？

魔王『お主は本当にめでたいな』

―何がだよ

魔王『まあすぐ分かる事だ。気にするな』

―そういう含みのある言い方って好きじゃないな

魔王『そうだな。「まずは謝れ」としか言いようが無い。例え自分が悪くなくても、だ』

全く持つて意味が分からない。

悪くないのに謝るとか、どんだけ気弱なんだよ。

―そう思っていた時代が僕にもありました。

魔王『言った通りであろう』

僕は姫と有力貴族の前に土下座をさせられていた。

第35話 時代（後書き）

誤字修正

更新中 ↓ 交信中

第36話 気持ち

―何故正座サセラレテイルノダロウ

部屋に付いて速攻正座させられた上で有力貴族に「何故妖精少女と美女さんだけで遠乗りに行ったのか」という質問をされた。

妖精少女から出かけようと言われた事や、最近妖精少女の相手をしてあげる事が出来てなかったので連れて行って上げたという趣旨を伝える。

すると姫が「有力貴族…」と名前を呼んで「仕方ないわね、立っていいわ」と有力貴族が行ってくれたので立ち上がる。

なんだか分からないけど怒りが収まったらしいと思った僕は、その後「姫が二日酔いで体調が悪そうだった」や「有力貴族の娘はまだ寝ていたようだった」と2人を氣遣った事を伝えたと何故かまた「正座!!!」と言われた。

続けるように見た姫も「正座です」と言うので正座に逆戻りとなる。

―2人の体調を氣遣ったのに何で!!!

魔王『氣遣う方向が間違っていたのであろう』

―方向って何だよ!

魔王『頑張って探れ』

その後、2人との会話の中から誘わなかった事に付いて怒っている

ことが分かり、魔王の『謝れ』という言葉で一生懸命誤り、「次からは二人も誘います」と約束させられてから開放された。その後湖であった出来事や口外しないようにという事を伝える頃には半時（約1時間）以上の時間を要していた。

夕食は姫と僕と有力貴族の娘、妖精少女、美女さん、白の騎士団団長で食卓を囲む。

今日の湖での出来事に大興奮の妖精少女は姫と有力貴族の間に座って話し続けている。

それを2人は楽しそうに聞いていた。

食事が終わる頃に王都から伝令が届く。

何かあったのかと緊張が走ったが、明日に向かう館の場所を案内する手紙だった。

それを聞いた白の騎士団団長は副団長を呼び、500名の兵を率いてすぐにその館に向かうように伝えた。

僕「なぜ今すぐ向かわせるんですか？」

白の騎士団団長「警備の為ですよ」

僕「警備？」

白の騎士団団長「姫が入られる館です。念には念を入れて置くだけですよ」

そう言うとは本当にただそれだけだと言うように食後のお茶を飲む。
出発は明日の朝、食事（8時頃）と決まった。

夜に久々に美女さんと手合わせする。

必死で美女さんの攻撃を裁いているとあっという間に時間が過ぎていく。

美女さん「強くなりましたね」

僕「はあ、はあ、そ、そうですか…」

美女さん「ええ」

笑顔でそういう美女さん。

息も殆ど切らせてない上に防戦一方だったのは明白で、本当に強くなっているのかな？と思っていたら美女さんが「なってますよ」と言った。

—こ、心が読めるのか！

魔王『顔に出すぎなだけだな』

—そ、そうなの？

美女さん「この内乱に参加する前の若はまだまだと言う感じでした」

僕「そうだよね」

美女さん「今は結構な感じです」

僕「よくわかんないよ」

美女さん「剣筋が鋭くなりました。さすがに私も動かずに対処できないようになりましたよ」

そう言えば美女さんがたまに立ち位置を変えていた気がする。前までは棒立ちで一方的にやられていたのに。

「少しづつでも強くなっている」そう思うと純粋に嬉しかった。

美女さん「でもまだ昔の力の一割程度ですけど」

僕「ええ！そんなに強かったの？」

美女さん「私が勝てないぐらいは」

—マジですか！

魔王『当たり前だ。だから美女は私の従者になったのだぞ？』

『そんな事も分からないのか？』という魔王。

まさかそこまで魔王が強かったなんて。

美女さんが「今日はここまでにしましようか」と館に戻っていくのを見送り空を仰ぐ。

―もっともって強くなって昔の魔王と同じくらいにはならないと、魔族の王位継承争いは厳しいよね？

魔王『―そうだな』

―これが終わったら戻るつもりだったけど、まだまだなんだね

魔王『―そうだな』

―ごめんね

魔王『気に病むことは無い。まだ始まったばかりだ』

―頑張るよ

魔王『当たり前だ』

その魔王の物言いに思わず笑ってしまう。

そうだ、当たり前だ。

僕は体を拭うために井戸に向かった。

大砦を出発した。

馬車に姫と有力貴族と妖精少女と美女さんが乗り込み、僕と赤の騎士団団長が馬車を挟む。

その周りを数十人の騎士が囲み前と後ろに列を成す。

そして分隊クラスの斥候が10分隊程、斥候として周りを走り回っているらしい。

やはり仰々しい。

途中、小川の近くで昼食を取りながら小休止である。

携帯食として渡されたサンドイッチとお湯を沸かした紅茶が昼食である。

妖精少女が「ピクニックみたいだね」と言っていたのが微笑ましい。子狼達はサンドイッチが入っていたバスケットを気に入ったよう为中に入って遊んでいたが、妖精少女が布を入れると丸まって眠ってしまった。

数刻してすぐに出発をし日が沈む前には問題なく目的地の館に付いた。

館には爺が居て僕達を笑顔で迎えてくれた。

すぐに館の広間に案内されると明日の凱旋パレードの説明を受ける。といっても白の騎士団全員が正装をし隊列を組んで姫の乗る馬車と共に悠然と王都を進むと言う程度である。

「へえ」と思っていると爺に「若も正装ですよ」と言われた。

僕「え？」

爺「していただきます」

僕「正装…？そんなの無いですよ？」

爺「用意しております」

僕「用意…？」

爺「ええ」

そう言うのと黒く塗られた鎧が運ばれてきた。

僕「黒は黒の騎士団と被るんじゃない？」

爺「あれは名前だけです」

僕「それでもイメージは良くない気がするなあ」

爺「しかし他の色と成りますと…」

白の騎士団団長「我々は白で赤の騎士団は赤ですしね」

姫「他の色と成ると黄色とか桃色？」

有力貴族の娘「緑とか」

妖精少女「水！」

全身黄色とか桃色とか何処の戦隊ものなんだよ！

まあ別に問題ないなら黒でも良いけど。

ただ――

僕「全身鎧は嫌だな」

爺「そうですか？」

僕「動きにくそうだしね」

美女さん「では最低限の部位だけつければいいのでは？」

爺「そうですね。服を黒くすれば変では無いですな」

僕「じゃあそれで――」

美女さん「その場合だと素顔を民衆の面前にさらす事になりますけどね」

僕「――！」

美女さん「さすが若、勇気がありますね」

爺「全くですな」

「さすが」と口々に言う姫達に今更やっぱり全身鎧がいいな、とも言えない。

白の騎士団団長「まあ遅かれ早かれ知れ渡るのですし」

僕「ええ！何で！？」

爺「若は姫と婚約されるのですぞ？」

有力貴族の娘「発表時に民衆の前に顔を出さなくてはいいけません」

爺「年に何回かは国事にも出席していただく事になりますし」

僕「それは、最初からそういうのは断ると…」

有力貴族の娘「無理よ。そんな事したら姫を笑いものにする事になりますよ？」

国事に夫婦で出席しないというのは不仲であるという事をさらけ出す事だ。

本来のどうだとかは関係なく、そう思われる。

僕「……」

有力貴族の娘「嫌なら婚約しなければよろしいかと。そうすればそういう事も必要ありませんし」

姫「若…」

姫が心配そうに見ているのを見て決心する。

僕はもう姫にこういう顔をさせたくないのに、僕の覚悟が弱いせいでいつもさせてしまう。

僕「分かりました。王都に居る間は公式の式典で本当に必要なものだけ、は出ます」

有力貴族の娘「必要じゃない公式の式典…まあ無いとは言い切れませんね」

それを聞いて「確かに」と笑う爺。

それに釣られて何人かが笑う。

一頻り笑った爺は「大切なお話を忘れてました」と笑みを消していた。

爺「一部の領主の領民裁判が行われました」

僕「もう、ですか」

爺「私が出てくるまでで5人でしたが」

僕「それで？」

爺「その中に有力貴族が含まれておりました」

その言葉に有力貴族の娘が身を強張らせ、姫がそっと手を掴む。
その姿を見た爺は優しい笑みを浮かべ「安心してください」と伝え
た。

爺「有力貴族は民衆裁判の結果、全会一致で無罪となりました」

その言葉に有力貴族の娘から一筋だけ涙が流れる。
だがそれでも気丈に振舞う有力貴族の娘に誰もが見てみぬ振りをす
る。

爺「その結果により家は続行、土地は一部国に返上、年収の10分
の1を今後5年間にわたり復興支援として収める事と決まりました」

僕「その他の責任については？」

爺「一切必要なし、です」

有力貴族の娘が静かに涙を流すのを姫がゆっくりと抱きしめる。

爺「まあ最初は確実に無罪になる者から領民裁判を行っておりますからな」

僕「というと？」

最初から死罪だの家の断絶ばかりが続くと決起する輩が出無いとも限らない。

それに有能な者は早く国政に戻って貰いたいからである。

王子の戴冠式前後までには有望なものの領民裁判は終わる見込みだ。逆に言ったら、それ程多くの人数が居ないと言う事である。

爺「王子が王位に付いた後に有罪になる者たちの裁判が行われるでしょう」

それが王子の最初の仕事となる。

爺「論功は王子の戴冠式の後に行われます。ただし与えられるのは爵位や勲章、物品などに限られ、領土などの下賜に関しては後日、別の理由をつけて行う事になるでしょう」

まだ国王派の領主から分捕っていないので渡すのは不可能だ。だからそれが終わってから渡す事になるらしい。

僕「それでみんな納得しますか？」

爺「その代わり既に接收した財産から戦の褒章として反国王派だった者達には渡されます。その上で戦功により授与されるのです」

白の騎士団団長「通常、他国への侵攻で勝利した時ぐらいしか領土は下賜されません。国内での戦ですから、十分な額が出れば不満は出ないと思います」

そういうものらしい。

爺「因みに王子の即位式の後にある官位受領式で若も姫の騎士として任命されますので」

僕「はいい!？」

爺「正式に任命しないとダメですからな」

言いたい事はわかる。

ただ身内だけで「姫の騎士ね」と言っても意味が無いのは分かる。

—だからと言って受領式とか！

と叫びたいが口には出さない。

こう言うのはどうしても避けられないものがある、という事は理解

した。

魔王『勉強したな』

ーうるさいよ！

僕は「わかり…ました」と悔しそうに言う。

その後は明日の凱旋パレードに着るドレスの話で盛り上がる女性人を眺める。

どうやら妖精少女も美女さんもドレスを着るらしい。

妖精少女は喜んでいたが美女さんが嫌がっていたのは意外だった。最終的に馬車の中でそれ程目立たないという話と戴冠式などには出席しないという話で落ち着いた。

「美女さんにも戦功があるのに」という言葉に「私は若の従者ですのでそういう場に出る資格はありません」や「私の戦功は若の戦功です」の一点張りでこれだけは譲らなかった。

資格が無いというか出たくないだけだろうと思う。

どうしても引かない美女さんに「とりあえず、その話はまた王子達と話し合いましょう」ととりあえず先送りにした。

話は大体終わり夕食までの時間、居間で各自が時間を潰している。爺と白の騎士団団長は明日の進路や安全の確認の話し合いをしている。

姫と有力貴族の娘は妖精少女に似合う色を妖精少女の髪を弄りながら話しており、妖精少女は目を細めてされるがままになっている。

そして美女さんは笑顔で皆にお茶を入れていた。

僕はその姿を眺めながらふと思う。

僕「有力貴族が無罪なら、有力貴族の娘は僕に嫁ぐ必要は無いんじゃない？」

僕の一言にみんなが止まり、そして僕のほうを一斉に見る。

それに戸惑いながら「違うかな？」と聞いたら、皆は今度は有力貴族の娘を見た。

有力貴族の娘「そうですね…もう一族を守る必要は無くなったかもしれないですね」

僕「なら有力貴族の娘も不本意な立場に居る必要はないよね？」

有力貴族の娘「そうですね。不本意な立場に居る必要はなくなりました」

姫「有力貴族の娘…」

僕「なら僕に嫁ぐ必要も無くなったと言うことだね」

その言葉に僕を見つめたままの有力貴族の娘は「必要は無いですね」と静かに答える。

―あれ？何この雰囲気

魔王『……』

有力貴族の娘「必要が無くなれば私はお払い箱でしょうか？」

僕「いやいや、お払い箱も何も、無理に嫁ぐ必要は無いんだよ」

有力貴族の娘「そうですね。無理は必要なくなります」

僕「だったら自由にしたらいいじゃない」

有力貴族の娘「自由…ですか」

その言葉に困ったような顔をする有力貴族の娘。

何でそんな顔をするのかが分からない。

姫が「若―」と言う。

そんな縫るような目で見られてもどうしていいのか分からない。

妖精少女は姫と有力貴族の娘を見ていたが、何かを感じたのか何も言わずに黙っている。

爺と白の騎士団団長がそっと部屋を出るのが視界の隅に入るが何も言えない。

黙ってしまった僕に美女さんが言う。

美女さん「若は有力貴族の娘様がお嫌いですか？」

僕「え？そんな事無いよ」

美女さん「好き？」

僕「え、まあ、どちらかと言えば好き、かな？」

美女さん「ではこのまま若に嫁ぐのはダメなのですか？」

僕「何で？だってもう必要なくなったんだよ？」

美女さん「必要無くなるという事は、若にとって不必要になったんですか？」

僕「まさか！」

美女さん「では何故？」

僕「だって無理に嫁ぐ必要ないじゃないですか」

美女さん「無理じゃなければいいのですか？」

僕「え？」

美女さん「無理に嫁ぐ必要が無いから解消と言ってるんですよ？」

僕「う、うん」

美女さん「では無理じゃなく必要なら嫁いで言いという事ですよ？」

僕「そう…だよな」

美女さんの言葉に考えるが、言われている通りだと思うので頷く。
すると美女さんは有力貴族の娘に向き直る。

美女さん「有力貴族の娘様」

有力貴族の娘「はい」

美女さん「若に嫁ぐのは無理ですか？」

有力貴族の娘「……」

美女さん「若に嫁ぐのは必要ないですか？」

有力貴族の娘「……」

何も言わない有力貴族の娘に美女さんは「わかりました」と頷く。

美女さん「若」

僕「はい」

美女さん「若は何故有力貴族の娘が嫁ぐのを拒否なさるのでしょう？」

僕「え、だからもう有力貴族が無罪になったので無理に嫁ぐ必要が

無いから…」

美女さん「では有力貴族様の無罪というのは関係ないものとして話を進めます」

僕「え？」

美女さん「有力貴族の娘様が無理に嫁ぐ必要が無いから、解約されるのですよね？」

僕「え、ええ」

美女さん「では無理にはなかった場合は？」

僕「は？」

美女さん「無理には無い場合なら続けますか？」

僕「え、まあそうなるの…かな？」

美女さん「次に必要の話ですが、確かにもう一族の為に嫁ぐ必要は無くなりました」

僕「はい」

美女さん「では他の必要性があった場合は受け入れますよね？」

僕「それはそうですね」

美女さん「全く無理ではなく、その上で嫁ぐ理由があれば受け入れ

る？」

僕「……」

美女さんの言い方に何かあるような気がして返答に戸惑っていると「どうなんですか？」とさらに聞かれて恐る恐る「そうなります」と答えた。

それを聞いた美女さんは笑顔で頷くと有力貴族の娘の方を見た。

美女さん「本来なら女性の口から言わせるのは不本意ですが、若はこういう方です」

有力貴族の娘「……」

美女さんの物言いに口を開こうとしたが魔王に『黙っておけ』と言われて黙る。

美女さん「しっかりはつきりと口に出されないと誤解を解く事は出来ません」

有力貴族の娘「……」

姫「有力貴族の娘、思った事をはっきり伝えて。そうしないと若には届かないわ」

有力貴族の娘「姫ちゃん……」

美女さんの言葉に言うか言わまいか迷っていた有力貴族の娘は姫の言葉に決意をしたらしく、頷くと僕のほうをしっかりと見て言った。

有力貴族の娘「私は、若に、嫁ぎたいと思います」

僕「はい？」

有力貴族の娘「同じ事をもう一度…！」

僕「あ、ごめん。聞こえました。驚きでつい」

有力貴族の娘の雰囲気についてそんな事を言ってしまう。

僕「でも…もう無理する必要は無いんだよ？」

僕の物言いに「それでもダメなの？」という有力貴族の娘と「頑張っ
て！」という姫。

何だ、この図？

有力貴族の娘「無理なんかしてない。私が、貴方に、嫁ぎたいの」

僕「……」

有力貴族の娘「な、何か答えてよ…」

語尾が聞き取れないくらい小さくなっていく有力貴族の娘の姿に何か言わなくてはと必死になる。

僕「え、あ、その、何で？」

有力貴族の娘「何でって…そう思ったから仕方ないじゃない！」

僕「だってまだ会って数日だよ？」

有力貴族の娘「理由は色々あるけど、正直分からないわ！！」

そういと色々と理由を挙げていく。

僕が剣術の訓練を受けていた姿だったり姫との話だったり―

有力貴族の娘「―他にも妖精少女を見ている目が優しくていいなと思ったとか一体私は何を言ってるのか良く分からなくてきたわ」

「あわあわ」としだす有力貴族の娘に「私も同じ事を思ってるわ！頑張っ！！」と姫が手を握り、妖精少女は間に挟まれながらも「私も！」と言った。

何、その応援。

そして姫が「ここも」と例をあげると「そうね。ここもいいわゆよね」と2人で話し出し、妖精少女は「うんうん」と頷く。

有力貴族の娘は本当に混乱しているようだ。

美女さん「若、解約なさるのですか？」

僕「それは…」

美女さん「若に嫁ぐのが無理していない事も、そして必要だと言う事もわかりましたよね？それでも解約なさいますか？」

僕「……」

美女さん「先程までの関係に戻るだけです。いえ—」

「—違いますね」と美女さんはいつも以上に微笑むと

美女さん「義務だとか無理だとかそう言うのは一切無くなり、互いに望んでそうなったと言う事実のみで繋がった関係となります。気に病むことは無くなるでしょう」

僕「そう、なのか？」

美女さん「若が有力貴族の娘を嫌っているなら、はっきりと断ってあげてください」

そう言うと美女さんは妖精少女に「あちらに行きましょうか」と言いながら部屋を出て行く。

―嫌ってなど無い

魔王『逆に好いておるぐらいだな』

―そう、だね

魔王『では気に病むことは無いだろう。姫も受け入れてる。この話は前もしたな』

―したね

魔王『その時に決意したのであろう?』

―その時とは違うよ

魔王『どう違うのだ?』

―それは…

魔王『美女の言うとおりであろう? 後はお主の気持ち一つだ』

―やっぱり魔王は変わったね

魔王『おぬしの悪影響だな』

苦々しそうに言う魔王に「ありがとう」とだけ伝える。
そして僕のいい所を上げあっている二人に目を向ける。

今まで恥ずかしいから出来るだけ耳に入らないようにしてたけど、聞くとやっぱり恥ずかしい。だがそれを我慢して有力貴族の娘を見る。

僕「有力貴族の娘」

僕の言葉に2人の会話が途切れる。
もう一度呼びかけるとゆっくりとこっちを向いた。

僕「有力貴族の娘」

有力貴族の娘「…はい」

僕「有力貴族の娘に伝えないといけない事があるんだ」

そうして僕は「この事は姫と美女さんしか知らない事だけど」と前置きをして話し出す。

僕「僕は実は―」

有力貴族の娘「魔族なんですよ？」

僕「―そう魔族なん、え？」

有力貴族の娘「姫から聞いたわ。魔王の意識の事も、別世界から来

た事も」

僕「え？え？」

姫「有力貴族の娘は若の奥さんになるんです。だから隠し事はしてはいけないと思って言いました」

僕「ええ？」

有力貴族の娘「全部聞いてるわ。その上で私はそんな事は気にしない」

有力貴族の娘はしっかりと僕を見つめて言う。

だが自分の服を掴む手は白くなるほど固く握り締められており、姫がその手を優しく包んでいた。

僕は有力少女を見つめ返し、しっかりと聞こえるように言う。

僕「有力貴族の娘が良ければ、今までどおりの関係が続けてもらってもいいだろうか？」

有力貴族の娘「え…」

姫「若！」

有力貴族の娘の目に涙が溜まる。

―あ、あれ？

魔王『なんだ、断るのか？』

―ち、違うよ！！

魔王『「今までの関係」と言うのは偽装だったので「友人関係のまま」と受け取られるだろうな』

それを聞いて焦って言葉を紡ぐ。

僕「あ、違う！違うんだ有力貴族の娘！！」

有力貴族の娘「……」

僕「えっと、僕の所に嫁いで着てくれると嬉しい。その、義務とかそういうのではなく」

そう言うとは有力貴族はうんうんとだけ頷き続ける。

それを聞いて姫が有力貴族を抱き寄せた。

僕「姫、今聞いて貰ったとおり、姫と婚姻をしながら有力貴族を本当に迎え入れる事になるから」

姫「はい。私は元よりそのつもりでした」

確か最初から姫はそう言ってたかもしれない。
僕は近づく二人の肩に手を置いた。

僕「二人が僕を選んでよかったと言って貰えるように力の限り頑張るよ」

僕を見上げた姫が「違いますよ」と言う言葉に有力貴族の娘が頷く。

姫「二人ではありません」

有力貴族の娘「よ、4人で、すゝグス」

僕「はい？」

姫「妖精少女と美女さんも入れて4人です」

有力貴族の娘「そう…ね」

美女さんと妖精少女に関しては突っ込みどころ満載だったけど、姫と有力貴族の娘の嬉しそうな顔を見ると何もいえなくなり、とりあえず「がんばるよ」とだけ伝えた。

第37話 二者択一、二者一択

食事の席で爺と白の騎士団団長に有力貴族の娘を正式に娶^{めと}る事を伝える。

「わざわざ言わなくても」という有力貴族の娘に「心配掛けたからね」と言う。

嬉しそうに頷く爺と「それは良かったですね」とさわやかに笑う白の騎士団団長。

姫も優しく微笑んでおり美女さんと妖精少女はいつも通りだ。穏やかな時間が流れる。

白の騎士団団長「では父君に挨拶に行かないとダメですね」

僕「挨拶!？」

白の騎士団団長の一言に僕と姫と有力貴族の娘に電流が走る。

爺「そうですね」

有力貴族の娘「別にそんなのはいいです!」

爺「いやいや、良くないでしょう」

僕「やっぱり行かないとダメだよね」

姫「私も行かないと!！」

有力貴族の娘「姬ちゃんはいいの！」

妖精少女「私も！」

姫「そうね。家族全員で行かないと」

有力貴族の娘「姬ちゃん、それ違うから」

白の騎士団団長「やっぱり定番のアレですよ。『娘はやらん！』とガッーンといくアレ」

僕「ぼこぼこですか！？」

姫「私も！？」

有力貴族の娘「姬ちゃんは私が守るから！」

僕「じゃあ僕は有力貴族を守ればいいのかな？」

姫「私も守ってください！」

僕「じゃあ陣形は僕が先頭に立って、その後ろは真ん中を姫で左右を爺と白の騎士団団長、最後尾を有力貴族の娘が固める1・3・1のインペリアルクロスで」

有力貴族の娘「陣形って何ですか！？」

有力貴族の娘のツツコミが響き渡る。

新たな立ち位置を手に入れたようだ。

魔王『求めてないだろうがな』

—そうだよね

王城の門を潜る。

先頭の騎士が門に差し掛かっただけで何かが爆発したような音がする。

何だと思ったら歓声らしい。

何千何万という人が声を上げると人の声には聞こえないようだ。

姫の馬車と共に僕も門を潜ると一際歓声が大きくなる。

馬車の通り道は赤の騎士団と翁の兵達により市民が入らないようにされているが、その外側は人で溢れ帰っている。

道はもちろん建物の各窓も全て開かれ何人もの人が乗り出している。そして巻かれる…花びら？

黄色い花びらが雨のように降り注ぐ。

—どうやら市民には受け入れられているようだね

魔王『まあ姫は人気らしいからな。この熱狂を見ると「婚姻発表をしたら暴動」というのは強ち嘘で無いかもしれない』

—怖いことを言わないでよ

魔王『腹は括ったんだろう？それぐらいで引くなよ』

—引かないよ

魔王『がんばれ』

声援と花びらの量は城に近づくにつれて益々大きくなる。

城まであと少しという所で騎士の間から抜け出し馬車に近づくものが居た。

とっさに剣の柄に手を掛けた僕に魔王が『幼子だ！』と叫ぶのが聞こえ、柄から手を離し近寄ってきた影を捕まえて馬に引き上げる。

僕が止まった事により馬車も止まり、それに釣られて全体が止まる。すぐに周りの警備兵が寄ってこようとするのを手で制し相手を見ると、妖精少女と同じくらいの歳の小さな女の子が急に馬の上に抱き上げられて目を白黒していた。

僕「急に飛び出したら危ないよ」

小さな女の子「ごめんなさい」

僕「急にどうしたの？」

小さな女の子「姫様にこれをあげたかったの」

そう言って差し出したのは数輪の黄色い花だった。

僕は「だからって飛び出したら馬に蹴られて危ないから、今度からはダメだよ」

そう言うのを馬を馬車に寄せる。

何事だろうと心配そうに見ている姫の窓の傍に拠ると「姫にプレゼントを持ってきてくれたそうだよ」と伝えた。

姫が馬車の扉を開けると周りの兵が護衛に寄ってくる。

馬車の上から小さな女の子が差し出した黄色い花を「ありがとう」と受け取った姫は大事そうに胸に抱くと「お花のお礼よ」と綺麗な黄色のハンカチを少女の手首に巻いてあげた。

姫「我が国では黄色は幸福を表すんです」

僕「今度は嘘じゃないんだね」

そう笑う僕に姫はキョトンとしたがすぐに腕の紐に思い至り「そうですね」と微笑んだ。

そうして少女の頭を撫でると「ありがとう。でも危ないから飛び出

してはダメよ」と微笑んだ。

馬車の扉が絞められ窓越しに姫が手を振っている。

その姫に手を振り返す小さな女の子を連れて脇によると母親なのか姉なのか、若い女性が駆け寄ってきた。

必死で謝る女性に「姫は全然怒ってませんよ。逆に小さな女の子の心からの贈り物に感激し、自らのハンカチを小さな女の子に送られました」と伝えると、小さな女の子が「これ！」と手に巻かれたハンカチを女性に見せた。

僕「ただし姫は小さな女の子が飛び出した事は危ないので怒ってました。でも小さな女の子がもうしないと約束したのでこれ以上の罪には問われません。安心してください」

そう言うとき小さな女の子を馬から下ろし女性に預ける。

そして「もしこの小さな女の子から姫のハンカチを奪い取るような輩が居たら城に申し出てください。犯人を見つけ出し厳罰に処しますにで」と笑いながら言う。

余りの事に恐縮しまくっている女性を笑わせようと思って言ったけど、あまり効果は無いようだった。

魔王『いや、効果的だぞ』

—そう？

魔王『あれだけ回りに聞こえるように言ったのだ。奪う輩はそう出まい』

―本当に居るんだ!!

魔王『姫の私物だぞ？好事家がどれだけの金を出すか』

―そういうものなんだ

「またね」と手を振る小さな女の子に手を振り替えしながら馬車の横に戻るとパレードの行列は再度動き出した。

姫と小さな女の子のやり取りを見ていた人達から、見ることが出来ずに何故止まっているのか分からない人に説明が波のように広がる。それを知った人は知らない人に大声で伝え、そのまま姫への歓声を上げ続けと言う事が繰り返され、あつという間に大歓声になる。誰もが姫の優しさに熱狂していた。

隊列が止まる前と後ではものすごい違いだ。

―鼓膜が破ける

魔王『こまく？』

―音を拾う膜だよ。耳の中にある

魔王『そんなのがあるのか？』

―え？知らないの？

魔王『知らん』

―そっか。こっちの世界は医療技術がそんなに進んでないんだったね

魔王『お主の国では違うのか？』

―ここよりはかなり進んでいると思うけど、僕自身にその知識は無いからね。伝える事は出来ないよ。

魔王『それは残念だ』

―全くだね

そんな話をしていると一の郭の門が見えてきた。

王都の市民は一の郭の門の前までしか居ないのであそこを潜ると凱旋パレードは概ね終わりを告げる。

無事に姫の乗る馬車は城の門を潜った。

馬車から降りた姫を王子と翁が出迎える。

王子「お帰りなさい。姉さま」

姫「…ただいま」

姫が感極まったように笑い泣きで言う。

この顔のために僕は頑張って居たと胸を張って言える。

王子「若もお疲れ様です」

僕「王子こそ、疲れているようですが？」

王子「戦後処理で色々」と

そう笑うと爺が「昼食を用意してますので」と先を促したので皆で向かう。

部屋に入ると有力貴族が居た。

部屋に入った自分の娘を無視し姫に臣下の礼をとる。

姫がその挨拶に「私は良いので湯力貴族の娘に…」と言うと「ありがとうございます」と言い「無事でよかった」「お父様こそ」とお互いに短く言った。

どうやらさすが親子というか似たもの同士らしい。

昼食が運ばれて来てみんなで食事をする。

食卓には王子、僕、姫、妖精少女、有力貴族の娘、美女さん、翁、赤の騎士団団長、白の騎士団団長、有力貴族、現領主、領主息子、翁とぐると並んでいる。

というか領主息子、久しぶり！

今度こそ穏やかな時間が流れる。

白の騎士団団長「皆さんで食卓を囲むのもこれが最後かもしれませんね」

翁「そうじゃな」

僕「そうなんですか？」

爺「王族と食卓を囲むなどと言う事は滅多にありません」

赤の騎士団団長「戦場という特殊な環境であつたからこそ行われていたに過ぎぬからな」

僕「そうなんですか」

白の騎士団団長「でも若は王族になるので王子や姫と今まで通り食事が出来ますよ」

「私は？」と聞く妖精少女に「妖精少女も若の奥さんだから大丈夫」と笑う白の騎士団団長。

いつの間にか既成事実になりそうだからその冗談を余り言わないで欲しい。

王子「そう言えば前に話をしていた城の上にある離宮ですが、とりあえずは部屋は常に手入れされていたようで今日の晩からでも入れますよ」

姫「そうですか」

王子「たださすがに婚約発表前の若が入ることは出来ないので、離宮に渡る通路にある部屋を仮住まいとしてください」

翁「初めて内部を見たが、中々すごい設備じゃったぞ。どうやってるのか水を上までくみ上げているようだし。食料を運び込めばあそこだけで籠城が出来そうじゃ」

僕「すごいですね。なら火をたけばお湯が沸かせますね」

翁「火を絶やさなければいつでも入れる風呂もあったからの」

白の騎士団団長「それはすごい。さすが後宮」

この世界はお湯を沸かして貯めて入ると言う事はあまりしない。

個人宅ではせいぜい水で体を拭くか川で水浴びをするか。

お風呂は大都市に大衆浴場がある程度である。

個人で風呂を所有しているのは王族か大貴族くらいである。

小さな領主だと蒸し風呂があればいい方である。

王子「取り合えずどの部屋もすぐに使えますので好きな部屋を選んでください。どの部屋も素晴らしい感じでしたよ」

それを聞いた姫は「楽しみです」と有力貴族と妖精少女に言う。

翁「そういえば、有力貴族の娘は若に嫁ぐのか？」

その言葉に有力貴族が止まる。

翁「もう嫁が無くても良くなったが？」

僕「それなんです、有力貴族の娘と話し合って娶る事にしました」

翁「ほう」

僕「後はお父さんである有力貴族殿に認められるかどうかです」

翁「じゃ、そうだが？お父さん」

有力貴族「私は翁のお父さんではありません。若、なぜ尋ねられるのですか？王族になれるのだ。よこせと一言いうだけで済むでしょう」

有力貴族の言葉に「それは違うと思います」と僕は言う。

僕「物じゃないんです。よこせ、で終わらしていい問題じゃない」

有力貴族「しかし王族というのは人を物扱いできる立場にあるのです」

僕「僕は王族じゃない。王族は姫です」

有力貴族「その姫と婚姻なさるのだ。そうしたら貴方は王族の一員です」

僕「だとしてもそういうやり方は好きじゃない」

有力貴族「私がダメだと言ったらどうするんですか？」

その言葉に有力貴族の娘がピクツと揺れる。

僕「認めてもらうまでお願いし続けるのみです」

有力貴族「何故そこまで娘を？」

僕「有力貴族の娘が好きだからです」

姫が「いいなあ」と呟くのが聞こえ笑いそうになる。

有力貴族「貴方は姫と結ばれる。その上で娘まで欲しいと？」

僕「姫もちろん大好きです。でもそれだけじゃダメなんです」

有力貴族「何がダメだと？」

僕「もう有力貴族の娘も僕達の家族の一員なんです。居なくなるなんて考えられない」

そういう僕に姫が「そうです」と頷く。

ぱっとこっちを見た妖精少女の頭を撫でながら「もちろん妖精少女も家族よ」と姫が言う。

有力貴族「有力貴族の娘自身はどう考えている？」

有力貴族の娘「家族になりたいです」

しっかりと目を見つめ返して言う有力貴族の娘。
その娘を見つめていたがふっと笑うと

有力貴族「元々跳ねっ返りな所があった上に、今は私が国賊のレツテルを張られてしまった所為で嫁ぎ先も困る状況でした。逆にこちらからお願いしたいくらいの好条件です」

有力貴族の娘が反論しようとするのを手で制して「娘をよろしくお願いします」と呟いた。

王子「別に国賊等と思ってませんよ」

翁「そうじゃ。有力貴族が居なければ国はもっと荒れていただろうしな」

有力貴族「そう言っていたただけるだけで身に余る光栄です」

王子「有力貴族には論功で国の安定に尽力したとして章を与えるつもりです」

有力貴族「受け取れません」

翁「受け取るしか選択肢は無い。今の状況で辞退する事が王子に与える影響を考えれば、断る事も出来無い」

通常なら「自分には身に余りすぎる」と辞退する事は悪い事ではなく、場合によっては謙虚さが賞賛に繋がる。

しかし有力貴族は国王派に付いて居たにも関わらず拒否すると言う事は王子の治世を拒否するのと同義語だ。そんな事をすれば向かう先は断頭台である。

―遠まわしの脅しかよ！

有力貴族「…分かりました」

翁「そして内務大臣もやってもらうからの」

有力貴族「それは―」

王子「今からが国の本当の大事なんです」

翁「それを見捨てるの？」

有力貴族に拒否権など最初から無い。

元々翁もお願いではなく断定で語っていたしね。

白の騎士団団長「論功として言えば前に話していた領主息子はどうしますか？」

領主息子「は？自分ですか？」

赤の騎士団団長「ああ若が姫と結ばれたのは竜主息子のお陰というやつだな。それを言うとな私の功績も大きいだろう？」

白の騎士団団長「女性の気持ちを勝手に口に出す罪は100回断頭台に登っても償いきれませんけどね」

赤と白の両騎士団団長の言葉のやり取りに戸惑いながら「えっと、私が何か？」という領主息子。

やっぱりあの件を引きずっているようで、前より大人しくなっている。

白の騎士団団長が領主息子の手柄、簡単にいうとミスのお陰で大砦に戻る事になり、そのお陰で姫の気持ちに気が付いた若が姫と婚姻する事になった、と説明を受ける。

白の騎士団団長「それに有力貴族の娘が特使として来たのに出会えたのも領主息子のおかげかもしれませんね」

王子「確かにそうですね。あそこで大砦に居なければ今の展開は無かったかもしれません」

あのまま進軍して出会っていた場合は進軍を優先して使者を放置していた可能性が高いからだ。

そうなると実力行使での王都攻略になり、もっと被害も大きくなっただけに有力貴族とこうして食卓を囲む事も無かったかもしれない。その話を聞いた領主息子は首を振り「偶然です」と自分はそんなも

のを受け取る立場ではないと言う。

王子「いえ、受け取ってもらいます」

領主息子「しかし：」

白の騎士団団長「あの時のミスですが、本来ならそこまで厳しい処罰を受ける程のものではありませんでした」

赤の騎士団団長「そうだな。せいぜい行っても戦果取り消しでも十分おつりが来る」

王子「でも連勝に緩みがちな軍を引き締める為に人身御供としてあいう処罰にしました。申し訳ありません」

領主息子「いえ、その話は爺からの手紙で伺っておいりましたので恨んでおりません」

爺「差し出がましいとは思いましたが、一つのミスで腐って欲しくありませんでしたので。翁はそう言うのは送るような奴ではありませんし、他の方は立場的に無理でしたしね」

王子「爺、ありがとう」

領主息子「功を早って同断戦功した上に大きなミスを犯したのは確かです。前に美女殿荷言われた事を全然理解していなかったとゆっくり考える事が出来ました」

翁「それが分かったただけ十分成長できたじゃろうな」

王子「ですので本当は戦果に対する論功なのです」

翁「拒否権は認めない」

翁が言い切ると領主息子は「ありがとうございます」と深々と頭を下げた。

王子「若にもありますよ」

僕「は？」

王子「ただ若は何もいらないと言い張ると思ったので、褒章は金と姫の騎士の地位だけにしました」

翁「当初の約束通りにな」

僕がほっと胸を撫で下ろすと翁は悪そうに笑って言う

翁「論功の最後に姫自信による姫の騎士の叙任式を行うつもりじゃ」

僕「は？」

翁「あの時の姫への件の誓いが素晴らしかったのな。あれを少し変えて行う予定じゃ」

そういう翁に姫が「それはいいですね」と手を叩く。

有力貴族が「私も見てみたかったんですよ」と言うのを聞きながら僕は呆然としていた。

王子「論功授与式は僕の戴冠式の後に行う為に武器の携帯は出来ません」

翁「なので若が最初に捧げていた剣をこちらで用意しておいて姫がそれを若に授けると言う形にする予定じゃ」

王子「宝物庫にある一品を若に上げますよ。」

僕「ちょっと待ってください！見世物は嫌です！！」

王子「見世物ではありません」

翁「まあ見せるんだがな。若が姫の騎士だという事を国内の全ての者にな」

僕「いやいや…」

姫「若は嫌ですか？」

僕「え、いや」

姫「嫌ですか？」

僕「そんな事はないですが…」

姫「ではやってくださいますか？」

僕「あの、その」

姫「『はい』か『うん』で答えてください」

―どっちも肯定だから！というか何処で知ったのそのネタ！！

姫の台詞に笑う面々。

魔王『どうせ拒否権は無いんだ』

―そうだったね。忘れて居たかったよ

僕はしぶしぶ「はい…」と答えた。

第37話 二者択一、二者一択（後書き）

誤字修正

守ればいいのなか ↓ 守ればいいのかな

言うようですが ↓ いるようですが

進化の礼 ↓ 臣下の礼

娘自信 ↓ 娘自身

棒是 ↓ 呆然

第38話 騎士団

―試練は続く。

パレードから3日がたった。

僕と姫が婚約するらしいという噂がすでに蔓延している。

反国王軍内では周知の事実だったようなので、予想はされていたけど。

ただ婚約に関して賛成の風潮になりつつあるのは翁による工作が見え隠れしている。

―本人は知らないと言ってたけど

魔王『それは無いな』

礼儀作法とダンスの練習は毎日行われている。

式典の礼儀作法はそれ程難しいものではない。

奇抜な内容は無いし姫の騎士を授与される手順だけを覚えれば良いようなものだ。

ただその手順と言うのが僕がこの前やった姫に剣を捧げる行為で、それを大勢の前でやるのは少し恥ずかしい。

王子「そうですか？僕はいいと思いますけど」

姫「私もかっこいいと思います」

僕「あ、ありがとうございます」

白の騎士団団長「練習を見ている限りでは素晴らしいものに思えますが」

周りには好評らしい。

―やる方は恥ずかしいんだけどね。

それでもこれはまだマシな方だった。

ダンスの練習に比べたら。

有力貴族の娘「ほら、また下を向く！足元を見てはダメよ」

ダンスの練習は有力貴族の娘がしてくれる。

最初は姫が行う予定だったらしいが、僕がダンス未経験者と分かると姫より有力貴族の方が教えるのが得意と言う事で変わったのだ。

有力貴族の娘「間違えて私の足を踏んでもいいから、しっかりと前を向いて」

中々のスパルタである。

半時（約1時間）の練習で疲労困憊である。

これなら剣を振るっていた方が楽だ。

いつもなら冷やかしかし半分に現れる両騎士団団長も顔を出さない。

魔王『逃げたな』

―やっぱり!?

ずっと僕と有力貴族練習をにこにこ見ていた姫に声を掛ける。

僕「姫はダンスの練習をしなくてもいいんですか？」

有力貴族の娘「姫は幼い頃から習っているから、今更数日練習する必要なんか無いわ」

姫「それにダンスを踊るのは王子と若だけですから」

どうやらダンスはある程度決められたパートナーで踊った後は好き好きにダンスの誘いを申し込めるらしい。

姫は王子と僕以外で踊る気も無いので、すぐに上座に上がって見ている事にするらしい。

さすがにそこまで追いかける無礼は誰もしないだろう。

僕「有力貴族の娘はどうするの？」

有力貴族の娘「私は…お父様と踊った後は適当に申し込まれたのを受ける事になるわね」

僕「そうなの？」

姫「有力貴族の娘は大貴族の娘ですからね。未婚の貴族の子弟達が沢山申し込むと思うわ」

有力貴族の娘「面倒ですけどね」

僕「僕の奥さんと言うことで断る事は出来ないの？」

姫「まだ発表していない状態では難しいですね…」

なんだか物凄く嫌なので何か出来ないかを僕は考える。

有力貴族の娘「あら、独占欲？」

「ふふ…」と笑う有力貴族の娘の言葉に僕が抱えていたもやもやが晴れる気がする。

僕「そうだ、独占欲なんだ」

有力貴族の娘「え？」

僕「何か嫌だったんだけど、独占欲と言われたらしっくり来た。他の男と踊るのを見るのが嫌なんだ」

有力貴族の娘「え、な…」

「何ではっきりとそんな事を…」と真っ赤で言う有力貴族の娘に「僕の奥さんになる人だからね！」と言うと「独り言を盗み聞きしないで！」と真っ赤になって怒られた。

「私みたいに逃げる事が出来たらいいのに」と呟く姫に「それだ！」と僕は手を叩く。

僕「上座に登って姫と一緒に居ればいいのでは？」

有力貴族の娘「少し難しいわね」

僕「何で？」

有力貴族の娘「勝手に上がっていけば不敬罪だわ」

僕「勝手じゃなければいいの？」

有力貴族の娘「そう…なるわね」

僕「姫、踊る順番はどうなってますか？」

姫「私は王子と踊った後に若と踊って上座に戻るわ」

僕「王子の順番は？」

姫「一人目が私ね。二人目以降はその場に残って適当に来る踊りの相手が続ける事になるでしょうね」

僕「王子の2人目の相手を有力貴族に出来ないかな？」

姫「それは…翁達に聞かないと分からないわ」

僕「じゃあごり押しで入れ込もう」

有力貴族の娘「どういうつもり？」

僕「有力貴族の娘は一人目を僕、二人目を王子に踊ってもらうんです」

有力貴族の娘「…それで？」

僕「僕は姫と踊ったら姫を上座へ案内するように言われています。有力貴族の娘は王子に上座に案内してもらえばいいんですよ」

「名案ですね！」と姫が声を上げる。

これで有力貴族の娘も煩わしい誘いを受ける事も無い。

有力貴族の娘「それは…ダメですよ」

有料貴族の娘が言うには未婚の王子がそのような行動を取ると王妃候補として騒がれてしまうと言うのだ。

さすがにそれはまずいのかな？と思っていたら姫が「聞くだけ聞いてみましょう」と言って部屋を出て行ってしまった。

有力貴族の娘「大変な事になったわ」

僕「そうだね」

有力貴族の娘「貴方が言い出したのでしよう！」

僕「でも有力貴族の娘が誰かと踊るのは見たくないから」

有力貴族の娘「ー！も、もし王子が無理ならどうするの？」

どうしよう？

はつきり言う王子が断るとは思わない。

なんだかんだできっとやってくれると言う確信がなぜかある。

ではもしダメだったらどうしようか。

僕「有力貴族の娘と踊り続けるしかないかな？」

その言葉に有力貴族の娘は「なにそれ」と笑う。
そんなに笑う事…だよな。

僕「それか踊った後に踊りの輪から外れるように誘うしかないかな？」

有力貴族の娘「バルコニーとかで2人きりで会話できるように？」

僕「そうだね」

有力貴族の娘「姫との婚約を発表した直後にそんな事をするとか誤解されるわよ？」

僕「誤解じゃないし、問題ないよ」

有力貴族の娘が黙り込む。

どうしたのかと思って声をかけようとした時に姫が王子と翁をつれて戻ってきた。

姫が来るまでに簡単に話をしていたらしい。

すぐに「問題ありませんよ」と王子が言ってくれた。

―話が早くていいね。別に長々会話するのが面倒な訳じゃないけど！

魔王『何に対する物言いなんだ、それは』

翁「ただし上座の立ち位置を工夫せねばならん」

そう言うとう翁は地図を取り出した。

祝賀会の行われるホールの地図らしく、色々書き込まれているところ

ろを見ると警備の場所を記した地図らしい。

工夫という程でもない。

ただ上座の数段下に椅子を用意して置くというだけだった。

どうやら元々そこには妖精少女と美女さんが待機している予定だったらしい。

妖精少女は実質何もしてないけど兵達の心の支えとして（勝手に）祭り上げられていたし、美女さんに至っては新興宗教の神になっている。

そして二人とも（僕もだけど）この国の人間ではなく、姫と王子を助ける為だけに手伝っていた客人でもあるので、このような待遇でも不満は少ないというのだ。

僕「王女だけ上では寂しくない？」

姫「確かにそうですね」

僕「一緒に座ったらダメなのかな？」

翁「そうはいかんじやろう」

僕「そうですか？」

翁「王族だぞ？」

僕「でも王位に付く王子は無理でも姫なら問題ないのでは？その王子もダンスの相手で踊りっぱなしなんでしょうし」

翁「確かにそうじゃが」

王子「問題ないと思いますよ。全員、若の家族ですし、今から周知させるのもありでしょう」

その王子の言葉に翁が「確かにそれはあるな」と頷く。

それで王女は祝賀会の最初だけ王子と共に上座に居て、踊り終わった後は妖精少女達と同じ場所に居る事となった。

僕「王子は踊りっぱなしになるそうですが、大変ですね」

爺「仕方あるまい」

首を振りながら笑う。

王子が未婚と言う事で誰もが自分の娘を送り込んでくる事が予想される。

王子「まあ王族の定めと諦めます」

僕「王子の後か…王子には好きな人は居ないんですか？」

王子「…僕は国同士の結びつきを強くする為に他国の姫を娶る事は決まっていますからね」

僕「そうなんですネ…」

王子「相手は爺達が決めてくれますよ」

爺「まあ、そうなりますな」

「王族はそういうものです」と王子が言うので、そういうものらしい。

王子も受け入れているものを僕がどうこう言えるわけも無い。

王子「だからこそ姉姉さまが本当に好きな人と婚姻する事は嬉しいんです」

その言葉に姫が「ありがとう」と微笑む。

王子が「有力貴族の娘もね」と言う。

僕「有力貴族の娘も？」

湯量貴族の娘「私も大貴族の一人娘ですから、どこかの大貴族の嫡男か王族の誰かに宛がわれていたでしょうね」

翁「王族も貴族も婚姻は家を強くする手段だからな」

「相手の顔を見るのは婚姻の席というのは良くあることだ」と言う翁の言葉に驚く。

—そうなの？

魔王『そうだな。会ってみたら物凄い幼子だったり年寄りだったり
と言う事もある』

王族も貴族も大変だ。

王子「だから幸せになってくださいね」

そう笑う王子に僕はしっかりと頷いた。

いい感じ(?)で話が纏まって、後は本番を迎えるだけ。

だと思ったら、そんなことは全然無かったぜー。

ダンスの練習は熾烈を極めた。

有力貴族の娘が嬉々として僕に叱咤しダンスが一応の形なり姫とも
練習を始める頃には前日になっていた。

本当にここ数日は大変だった。

僕の物覚えが悪い所為なのか一日の大半をダンスに費やした。
それに付き合う有力貴族のパワーは大したものだ。

そして空いた時間で寸法を何回も取られたり試着をさせられる。
どうやらパレードでの黒尽くめを姫がいたく気に入ったそうで、僕
は黒で統一しようという事に決まっただけ。

王子「姫の騎士団が設立されたら、騎士団メンバーも黒尽くめ決定
ですね」

僕「はい？ 姫の騎士団？ なにそれ？」

王子が言うには姫の騎士と言うのは僕しか居ない。
そして王子から任命されて殿騎士団にも所属せずに新たになると
言う事は、騎士団を作っても問題ないという事らしい。
冗談だと思って翁を見たら「作れるぞ」と言われた。

僕「でも作ってどうするんですか？」

翁「姫と後宮を守ればよろう」

僕「そうになると女性騎士団となりますが？」

姫「女性騎士団って素敵ですね」

王子「面白いかもしれませんね」

どうやらこの国だけではなく。何処の国にも女性騎士団は無いらしい。

そもそも兵として女性が勤務している事はあるが、騎士に任命される事はない。

女性でも頑張れば騎士になれるというのは画期的な発想らしい。

—そうか、まだこの世界では女性の地位はそんなに高くないのか

魔王『おぬしの世界は違うのか?』

政治を司ったりしている事を伝えたら魔王が驚いていた。
やっぱりこの世界はそうらしい。

僕「女性騎士団…ですか」

姫「作ってみませんか?」

僕「姫が望むなら構いませんが、雇うお金が出来るかどうか」

翁「騎士団を設立したら国から規模に規模に応じてある程度出るぞ?」

魔王『面白そうだな』

全ては出ないし大きくすればするほど出ると言うものでもないらし

いが幾らかは毎年出してくれるようで、そこが領主の私兵と騎士団の違いらしい。

そして足りない部分を実費で補えばいいらしい。

僕「では作りましょうか：って簡単に出来るかな？」

姫「そうですね…」

王子「志願を募って選考会でも開きますか」

僕「そこまでやっていいのかな？」

爺「騎士団だから。変な物が張り込んでも困るからな」

それでも何人の志願があるかも分からないらしい。

もしかしたら0の可能性もあるし、志のある女性がこの機会を逃すまいと沢山集まるかも知れない。

そればかりはやってみないとわからないらしい。

有力貴族の娘「私も志願してもいいですか？」

姫「有力貴族の娘？」

有力貴族の娘「それとも若の奥さんになる人物が騎士団入りするのはまずいでしょうか？」

王子「どうなんでしょうか？」

翁「そうじゃのう：実力以上の待遇を受ければ周りの者が納得しまいが―」

「回りも何も一人もおらんから大丈夫じゃろうよ」と翁が言う。
選考会に参加して実力でなれば良い。

僕「有力貴族の娘、本当に出るの？」

有力貴族の娘「私も剣は使えるわ。美女さんにも教わってるし」

美女さん「中々優秀な生徒です」

僕「怪我だけしないようにね」

有力貴族の娘「必ず受かるわ」

そう頷く有力貴族の娘。

僕「実力至上主義で騎士団内の立場を決めるけど、有力貴族には是非僕の補佐として頑張って欲しいからね」

有力貴族の娘「実力至上主義なら美女さんが騎士団団長じゃない」

僕「たし…かに！」

翁「いやいや」

僕が姫の騎士に任命されたから騎士団が成立されるので、若以外に団長はありえないと言うのだ。

余程の事が無い限りは一代限りの騎士団になりそうである。

まあ今はそんな将来の話をして意味が無いので、とりあえずは騎士団に人が集まるかどうか、である。

僕「まあ姫と後宮：僕達の住まいを守るための兵だから20名程度の騎士団でいいのかな？」

翁「まあ最初はそんなものだが、体裁を保つ為に1000くらいにはならんとな」

僕「そんなに!？」

どうやら住居だけでなく式典の警備などにも借り出させるので、それくらいは要るらしい。

確かにたった20名って住居だけならまだしも式典では周りしか警備できない。

僕「となるとしっかりとした形を作らないとダメですね」

王子「最初は王子が副団長を一人決めて以下騎士団という形でいいと思います」

魔王『美女を副団長にすればよいだろう』

—そうだね

僕「副団長は美女さんに頼めるかな」

美女さん「私ですか？」

僕「うん」

美女さんは少し考えて

美女さん「そうなると若が出かけるときに私が騎士団を見る為に残る事になりませんか？」

僕「そうか…うん」

王子「それはさらに下の者を育てて任せれば問題ないかと思います」

僕「それでいいの？」

爺「まあ姫のというか若の私兵のようなものじゃからな。問題あるまい」

そういう事ならと美女さんが副団長に妖精少女が「私も！私も！」と言う。

それを聞いて「妖精少女が私の騎士の一人なんて素敵」と言うので

「姫の騎士団団長補佐」という名誉職に付いてもらう事になった。

姫の騎士団として女性騎士団を発足する事は就任式の際に同時に発表する事に決まった。

そこで公募する事を伝えて後日に選考会を行うのである。

選考会の内容とかについても後日話合う事となった。

第38話 騎士団（後書き）

誤字修正

不経済 ↓ 不敬罪

なるそうだが ↓ なるそうですが

一台限りの ↓ 一代限りの

第39話 我が剣は

式典は恙つつがな無く進む。

前国王である第三王子の退位の式典に続いて王子の就任式が執り行われる。

厳かな雰囲気の中、頭に冠を載せられた王子は振り返り広間に並ぶ人達に手を上げる。
すると広間は歓声に包まれた。

歓声が止み次は論功授与式に移行する。

まず一番に翁が呼ばれ王子の前に立つ。

姫を助け周りの領主に呼びかけ、先頭に立って軍を導いた功績により幾つかの物品の授与と執政に任命される。

それを拝命した爺は王子の傍らに立ち、次々と名前を上げて聞く。

爺は姫を守り続けて来た功績とその後の戦場での働きで内務大臣に任命された。

現領主も同じく功績が称えられ、爵位が一つ上がり子爵となり国の要職に着いた。

爵位に関しては恩に報いる事が出来ない領主息子への救済策でもある。

いずれ跡を継ぐ領主息子の為といっても過言ではない。

他にも当初から参加していた領主に勲章や国の要職の地位が与えられていく。

それは王子を助けて立った者たちも同様だった。

小砦以降の者達には勲章と物品が与えられる。

赤白両騎士団団長も呼ばれる。

両騎士団は無駄な戦闘を避け、団長を救出した後は獅子奮迅の働きに対して称えられ、騎士全員に勲章が授与された。

軍務大臣は不在とし殿下の管轄の下で赤白両騎士団団長が2人で軍務の副大臣になる事が発表された。

そして有力貴族が呼ばれた。

最後まで国王派であった有力貴族が呼ばれる事に少なからず驚きの声上がる。

王子の「辛い時期にも国政に携わり国を守った」との言葉に一時は収まったものの、その後に外務大臣に任命されると一瞬ざわめきが大きくなった。

その後も元国王派の中で領民裁判で無罪になったものが呼ばれ、同じように国を守ったとして称えられ国の要職に任命される。

これだけで論考が始まって半時（約1時間）以上掛かった。

美女さんと妖精少女が呼ばれる。

2人は王子の前に立つとまたざわめきが起こる。

そして2人が姫のピンチに居合わせ助けた後に行動を共にし、妖精少女は兵達の心の支えとして、美女さんは共に剣を振るって尽力を尽くしてくれた事を称える。

王子「二人には私の客人として王宮に滞在していただく」

王子がそう宣言する。
遠まわしに「勝手に近づくなコラ！」という事らしい。

そして最後に僕が呼ばれた。

美女さんと妖精少女を従者とし（妖精少女は本当は違うけど）姫のピンチを助け翁の所まで守った。

その後に赤白両騎士団と話をつけて引き込んだり、新兵器を発明したり。

大砦で大活躍した事になってたり大砦に現れた国王軍を撃退した功労者になってたりと、若干誇張が入ってたけど物凄く持ち上げられる。

昨晚、王子に「姫の騎士の箔を付けるため為に多少の誇張はあります」とは言われていたけど、何処が多少なの！？

しかし翁にも「何があっても表情を変えず毅然としておれ」と言われているので我慢する。

たちかにこそばゆい感はある。

しかし耐えれないわけではない。

唯一つ問題があるとしたら『あの男は物凄い剥げだな』とか『あの髭は取り外し可能かもしれない』と僕を笑わせようと放し続けていることだ。

一つ一つはくだらない事でも、ピリツとした式場でひたすら言われ続けると面白くなってくるから困る。

―黙っててよ！

魔王『何だ？別によいではないか』

全然聞いてくれない。

別の意味で（笑わないように）必死で無表情を貫いていたりする。

王子の「姫の騎士として任命する」と言う言葉と共に姫が前に出てくる。

誉めは跪いた僕に微笑むと「貴方を私の騎士に任命します」といい剣を手に「この剣を騎士の証として貴方に授けます」と言った。

その剣を受け取ると僕は決められた文言を述べる。

僕「我が剣は姫の為に」

色々と長い文言を言うように言われ皆で考えたけど、式典の雰囲気にならだと言うのもなかなか感じたので最後の一文だけを口にする。

その一言に姫は大きく頷くと「期待します。私の騎士様」と言った。それを聞いて立ち上がると姫の背後に控える。

その後は恙無く式典が終了した。

姫達と控えの間に入ると僕はぐったりとする。

思った以上にキツカタ。

対照的に姫は「これで若は私の騎士様」と物凄いテンションである。

後は夜に開かれる祝賀会である。

そこで僕と姫の婚姻が正式に発表されるらしい。
本当に大丈夫なのだろうか？

翁「まあ何名かは異議を唱えるかもしれんが、大丈夫じゃ。」

「若は黙って成り行きを見てればいい。我々で異議を唱える者を叩き潰すでな」と物騒に翁が笑う。
別にいいんだけど穏便にだけはお願したい。

夜になり祝賀会が始まる。

フロアには多くの領主達とその子弟などが大勢参加し歓談している。
そこに王子改め殿下と姫の来場を継げる声が響く。

僕も姫に続いて入る。

元々殿下と姫が入る扉は他とは違い高い場所にあり上座に直接行ける様になっている。

美女さんと妖精少女も一緒に入りそのまま上座の下の席に座る。
殿下が挨拶した後に「皆様にお伝えしたい事があります」と告げた。

殿下「この旅、姫と若が婚姻する運びとなりました」

殿下の言葉に静まったフロアが騒然とする。

元々話を聞いていた反国王派に居た人々から祝福の言葉を送る。
でもその数は半分程度であり、残り半分は戸惑って要るようだ。

その中の一人が「お待ちください！」と前に進み出る。

見るとどこかの貴族の子弟なのだろうか、豪華な衣装に身を包んだ
青年の集団が前に進み出る。

その先頭に立つ若者が「その者が姫の婚約者になるのはおかしい」
と声を張り上げる。

その声に周りの者が「全くだ」などと異口同音に賛同の声を上げる。
殿下が「大貴族の子弟です」と僕に耳打ちする。

殿下「何処がおかしいですか？」

その言葉に「恐れながら言わせて頂きますと、この国の国民ですら
なく身分も低いものが姫の婚約者など持った他です」と芝居掛か
ったように言う。

それを聞いて殿下がふっと笑う。

殿下「身分ですか…因みに姫の騎士は執政と同じ地位にありますが
？」

殿下の物言いに絶句する貴族の子弟達。

何とか「だとしても行き成り姫の婚約者と言うのは無理がある」と言うのだ。

僕の事を言われているのだが殿下も爺も黙っているとされたので黙って聞いている。

「実力も伴っているか分からないような輩が騎士に任命されただけでは飽き足らず、姫の婚約者になるなど、おかしいと思いませんか？」と回りに語りかけるように言う。

さらに芝居掛かった動きに笑いそうになっていると、それを聞いてた一人の人物が笑った。

見ると白の騎士団団長である。

「何がおかしいんだですか？」と聞く貴族の子弟に

白の騎士団団長「実力をどうこう言うなら、演説ではなく決闘を申し込めば宜しいのでは？」

しかし祝賀会でそこまでするのは、と言う貴族の子弟に「ただ不満を大きな声で言うよりは潔くて素晴らしいと思いますか？」と白の騎士団団長が言う。

殿下は頷き「確かに本来は祝賀会で剣を抜くのは良くないが、今回は若の実力を証明する為のものである。許可しよう」と言い、すぐに貴族の子弟用に一本の剣が渡される。

それを迷いも無く受け取ると言う事は少しは自信があるのだろうか？仕方なく僕は階段を下りて貴族の子弟の前に立つ。

途中で妖精少女に「頑張って」と言われたので頭を軽く撫でる。

白の騎士団団長が「はじめ」と言うと言貴族の子弟が切り込んでくる。それを剣で捌きつつ相手の出方を見る僕。

がながんと打ち込んでくる貴族の子弟を裁きながら思う。

―弱い

魔王『そこそこやるが、所詮はそこそこレベルだな。身内で強いから勘違いしてたのだろう』

防戦一方の僕に「降参するなら怪我をする前がいいですよ」という貴族の子弟に本当に打ち倒していいのか分からず白の騎士団団長をチラッと見たら、苦笑をして小さく頷いてくれた。
それを見た僕は「ハッ」と短く息を吐くと貴族の子弟の剣を根元から切り落とし返す刀で喉に剣を突きつける。

魔王『中々の一品だな』

―本当にいい剣だ

動きを止めた僕に「そこまで」と白の騎士団団長の声が掛かる。
剣を収めると周りからの拍手を受けて一礼し元に戻ろうとする。
そこに貴族の子弟から「剣の力だろう」と吐き捨てる。
僕は振り返り「拳でやりあいますか？」とだけ聞く。
その言葉に貴族の子弟は何も言わずににらみ続ける。

翁「納得いったか？」

黙っていた翁が口を開く。

その言葉に何かを言おうとした貴族の子弟を睨み黙らせる。

翁「今更、若に付いてどうこう言うが、そういうお主は婚姻を辞めさせる程の者なのか？」

その言葉に自分は「どこそこの貴族の嫡男です」と胸を張って言う。それを聞いた翁は「なるほどのう」と頷いた。

その姿を自分達の事を肯定するのだと思った貴族の子弟はさらに言葉を重ねようとして翁の言葉に遮られる。

翁「父親は出兵してきてたが、お主の顔は見た記憶がないのう」

翁の見下した物言いに顔を怒気で染める貴族の子弟に

翁「戦に出ていれば若がどのような者かは知っている筈だからな。のう、白と赤の騎士団団長」

白の騎士団団長「そうですね」

そう言って笑う白の騎士団団長。

赤の騎士団団長「反国王派に居たもので今更、若の實力云々と言いつ出す事は無いだろうな」

赤の騎士団団長「剣の腕は僕達でも負ける事があるくらいですからね」

剣の腕で国内でも名が通る両騎士団団長の言葉に言葉を無くす貴族の子弟。

翁「それに戦場でどれだけの活躍をしたかは誰もが知っている。知らないのは戦場に出ずにのうのと過ごしてたものだけじゃな」

黙り込む貴族の子弟達に「この国のものではない？身分が低い？」と翁が言う。

翁「その『この国の者』で『身分の高い』者は一体どうしてんじやったかな？」

「ほれ、いうてみい」という翁に「∴領地を守っておりました」と言う。

「そなたの領地は国境にあるわけでもないのか？」と言う翁の言葉に下を向く貴族の子弟。

翁「さて、権能ではおぬしよりはるか上、戦の功績はここに居る誰

よりも高く、この度身分も執政と同等になった。他に何か問題が？」

「しかしその身分はただ任命されただけの騎士ではないですか」最後まで足掻く貴族の子弟に「ただのう…」と翁が言う。

翁「簡単に誰も成れないから執政と同等の身分なんじゃよ」

成るのに姫の指名と殿下、執政、内務と外務の大臣と軍務を代表する赤白両騎士団団長の全員の賛同が必要となり、その中の誰か一人が拒否をしたらならないのである。

翁「勘違いしているものも居るかもしれないが、今後は今までの身分だのなんだのは通らんぞ？」

その言葉に周りの反国王派に参加していなかったものから驚きの声が上がる。

翁「殆どの者は気は知っていると思うが、身分だけ高いものが国を乱したでな」

能力が無ければ身分が高くても優遇される事はない、と言うのだ。逆に言えば能力があれば身分が身分に関わらず取り立てるという事だ。

—そんな事、宣言したっけ？

魔王『して無いな』

—だよね！

反国王軍の中では確かに言ってたので、参加していた者達は知っているだろう。

だが初耳のもの達は驚きを隠せずにざわめき出す。

殿下「執政の言うとおりです。国を良くする為に、これからは身分に関わらず能力のある者は、例えばそれが市井しせいの者だとしても取り立てていく事になる」

その言葉に一際声が大きくなりそうな所に爺おやが「でもまあ能力があれば良いのですから、気にするほどの事でもでしょう」と良い翁が「その通りじゃ」と笑う。

殿下「他に婚姻に異議を唱えるものは？」

別に異議がある者は僕と決闘をする決まりがあるわけでも無いが赤白両騎士団団長の「自分達と同等の剣術」という言葉に誰も何も言わない。

―実力行使過ぎない!?

魔王『まあ仕方あるまい』

殿下「貴族の子弟はどうですか？」

殿下の言葉に「…ございません」と言うと殿下に一礼して周りの面々を引き連れて人垣の奥へ消えた。

殿下「では婚姻の発表はここまで、後は祝賀会を皆、楽しんでください」

そう言うのと殿下は姫の手を取り階段を下りる。

殿下の「若もどなたかと踊ればいい」と言う言葉に周りを見る。先程のやり取りの所為か周りにいる女性達が見る目が少し怖い。

魔王『今なら入れ食いだな』

―なにそれ

魔王『好きな娘をモノに出来るだろう、と言う事だ』

―なんでまた？

魔王『さあな。王族になるのが魅力なのか、剣の腕が魅力なのか』

—さっさと選ぼう

まあ選ぶと言っても相手は決まっている。

何処にいるのか探して見つけると「一曲お願いできますか」と声を掛ける。

有力貴族の娘は微笑んで「お受けいたします」と僕の手を取ると周りにから黄色い声上がる。

手を引くと王子と姫の横あたりで踊りだす。

すると有力貴族の娘が耳元でささやいた。

有力貴族の娘「さっきはなかなか格好よかったわよ」

僕「中々なんだ。でもありがとう。有力貴族も余りにも綺麗で一瞬分からなかったよ」

有力貴族の娘「いつもは綺麗じゃないみたいじゃない」

僕「いつも綺麗だけど、今は綺麗の種類が違うんだよ」

魔王『20点だな（「厳しいよ！」）』

若干しどろもどろに成りつついう僕に有力貴族の娘は「そういう事にしておくわ」と笑った所で曲が終わる。

有力貴族の娘と一礼をして離れると姫の前で「お願いします」と言い踊り始めた。

見ると王子も有力貴族の娘と踊っている。

姫「先程は有力貴族の娘と何を話していたんですか？」

僕「先程の件に付いてですよ」

それを聞いて「格好よかったです」と姫も言ってくれた。

姫の綺麗さも称えると魔王が『30点』と言った。

100点は一体どうしたら取れるのだろうか。

当初の予定通りに曲が終わると僕は姫の手を取って、王子は有力貴族の手を取って階段を上がる。

上座に上がっていく王子を見て女性達から残念な声上がるが、有力貴族を美女さんと妖精少女の所に送るとそのまま階段を織り出した王子を見て今度は黄色い歓声が上がった。

僕がそのまま姫の横に控えると少なからず残念そうな声上がる。

姫「若が降らない事に残念がつている娘も居るようですよ？」

僕「まさか」

姫「ほら、こちらを残念そうに見ているでしょう」

そう言われてみると居るような居ないような。

「面倒なのでいいですよ」と言うとな僕は姫のとなりに腰をおろした。本来はダメなんだろうけど婚約者であり祝賀会でもあるので許される行為だ。

美女さん、妖精少女、姫、僕、有力貴族と扇状に並ぶ。

両手に花と言うレベルではない。

下で行われるダンスを見ながら軽食を食べつつ飲み物を飲む。

王子や白の騎士団団長はもちろん赤の騎士団団長まで女性が周りを囲んでいる。

有力少女が「お二人とも、一応未婚ですからね」と有力貴族の娘が教えてくれた。

というか白の騎士団団長も結婚してないのか。

と思ったけど、どうやら内縁の妻らしき人物は居るらしい事は周知の事実らしい。

ただ身分が低い為に婚姻できていないようだ。

僕の件もあるし今後は正式に婚姻できるかも知れないと聞いて少し嬉しくなる。

踊りを眺めていたら殿下がこちらを向く。

殿下「若！」

なんだろうと思うと僕に向かって笑顔で「来い」と言うように手を振る。

姫が「行ってらっしゃい」と笑顔で答える。

―行きたくないんだけど

有力貴族の娘「行くべきよ」

僕「何で？」

有力貴族の娘「ここで色んな娘と仲良くして味方を作っておくの」

僕「味方？」

有力貴族の娘「女は政治に介入する力はないけど社交界では強力なパイプを持つわ」

だから少しでも仲良くしとけば、それだけ多くの味方が集まり、姫も有力貴族の娘の立場も良くなるらしい。

そう言われると行かざるを獲ず立ち上がった所に「でも本気にしたらだめよ」と有力貴族の娘が鋭く言った。

その言葉に僕は笑顔で「わかってる」と言うと言階段を下りていった。

殿下「若、皆さんが若と踊りたいと言っていたので呼びました」

見ると数名の若い娘がこちらを見ていた。

僕は「僕でよろしければ」とその中の一人の手を取り踊りだす。

踊りの途中に色々話しかけられるが、殆どが挨拶と「別の日にでも

戦のお話を聞きたいです」とお誘いが殆どだった。
それに「機会がありましたら」とだけ答えておく。

魔王『もったいない』

ーソウデスネー

僕もそう思うよ！
でも仕方ないじゃない。

数名の娘と踊ってお終いかと思ったら後から後から交代の娘が来る。
結局、祝賀会が終わるまで踊り続ける羽目になった。

祝賀会から2日程立った。
僕は婚約発表の後に住まいを後宮に移した。

この後宮は「いつまで後宮と言えればいいんだ？」と思っていたら何代か前の王が「空の館」と言っていたらしく「その名前もどうなの？」という気もするが後宮よりはマシなのでそう呼ぶようになった。

―取り合えず姫と有力貴族とはまだ何にも無いからね！―

魔王『誰に言ってるのだ？』

姫とは正式に結婚するまではそういう関係にならないという暗黙の了解が成り立っている。

魔王『お主がそう思っているだけでは？』

―成り立っている！

そして姫とそういう関係が無い限り、有力貴族の娘ともそういう関係にはならない。

魔王『何時までそんな事を言っておるのか：根性無しが』

―けじめだよ！

取り合えずそういう事である。

夜に美女さんが僕の部屋を訪ねてくる。

美女さん「行き成りですが、若は姫様と有力貴族の娘様はお嫌いですか？」

僕「そんなこと無いけど？」

美女さん「では何故お抱きにならなのですか？」

美女さんのストレートな物言いに僕は声が出ない。

美女さんが言うのは2人は僕が何もしない事にやきもきしながら、でも女性から求めるのははしたないと思って何も言えずに居るらしい。

有力貴族が何も言わないのも姫をおもんみ惟て何も言わないだけらしい。

『ほれ見たことか』魔王の言葉を聴きながら僕は「決して二人の事を嫌っているわけではない」という事を伝え、姫と正式に結婚するまでははじめとして抑えて居るだけだと熱弁した。

—というか何この状況？

意味が分からない。

ただその言葉を聴いた美女さんは「では明日、挙式をするよう国王殿下に進言いたしましたしう」と言うので部屋を出て行こうとした。それを取り合えず止めて話し合う。

半時（約1時間）程して美女さんに言い負かされてしまう。

魔王『弱いな』

ーソウダネ

晩御飯の席で姫に「食事の後に2人でお茶でも如何ですか？」と誘う。

姫は驚いたようだが「はい」とだけ頷く。

妖精少女が「私も！」と言うが美女さんが「妖精少女は私と有力貴族の娘とバルコニーで夜景を見ながらお茶にしましょうか」と話を逸らしてくれた。

部屋が静かにノックされる。

返事をするに姫が真っ赤な顔で入ってきた。

僕はテーブルの席を勧めると美女さんが用意してくれていたお茶を入れる。

変わった匂いだが「人の気持ちを高ぶらす効用があります」と美女さんが笑顔で言っていたのを思いだす。

会話はたまにでは途切れて、たまにするの繰り返しである。

因みに魔王は居間は居ない。

居ないと言うのも変だが「魔王は、その、やっぱりずっと見てるの？」とき言いたら『他人の情事に興味は無い。消えておいてやるから安心しろ』と言ってから消えたように気配が無くなった。

どうやら僕の意識の中のどこかに魔王の個室があるイメージらしく、そこに籠ったみたいだ。

だからたまに静かだったらしい。

—なんて都合のいい設定！

あまりの緊張に良く分からない事まで考えてしまう。

僕「姫」

姫「ひゃい！」

驚きに噛んで顔を真っ赤にした姫を見て「本当に可愛らしいな」と心の底から姫を愛おしいと思いい口に出口を出していた。

それが姫の笑顔を誘い自然と会話が繋がる。

二人をととても優しい雰囲気包んでいた。

第39話 我が剣は（後書き）

誤字修正

無駄な先頭 ↓ 無駄な戦闘

「ただののう…」と王が言う ↓ 「ただののう…」と翁が言う

そんなんこと ↓ そんなこと

名にこの状況 ↓ 何この状況

第41話 キス

殿下が戦後すぐに送っていた妖精少女への国の使者が戻ってきた。

魔王『おい』

それだけではなく使者は――

魔王『おい！』

妖精少女の故郷から何名かのお客さんを伴って――

魔王『無視をするな！』

――なんだよ、魔王

魔王『おかしいだろう？』

――何が？

魔王『その後をちゃんと説明しないとダメだろう』

――その後…？

魔王『ああ、面倒くさい。祝賀会から2日後の夜だ!』

―…人の情事には興味が無かったんじゃないの?

魔王『無い!しかし突っ込まねばいかん気がするのだ』

―なんだよそれ

取り合えず、姫と有力貴族の娘は僕の正式な奥さんとなった。

魔王『抱いたという事だな』

―わざとぼやかして話しているのに!

魔王『だが事実は変わるまい』

確かにそうだけど。

魔王『よかったな』

―?…うん。

まあ、そういう事である。

話を元に戻す。

妖精少女の故郷に出ていた使者がお客さんを数名連れて戻ってきた。

殿下との挨拶をしている所に入出した妖精少女はお客さんの集団を見ると「お姉ちゃん！」と走り出してしまった。

お客さんの集団はその声に振り返り走り寄って来る妖精少女を見止めると一人の女性が立ち上がった。

その女性に「お姉ちゃん!!」と飛ぶように抱きつく妖精少女と、その妖精少女を受け止めて抱きしめる。

―お姉ちゃん？

魔王『よくまあ、これだけの数の妖精族が出てきたものだ』

妖精族は集落付近の森の外に出るものは本当に珍しい。

それが男女合わせて5名も出てきているのである。

4名の男性と1名の女性の計5名の妖精族の男女は一頻り^{ひとしき}妖精少女との再会を喜んだ後に、一人の若者がはっと気がついたように殿下に「申し訳ありません」と頭を下げた。

どうやら自分達の世界から出ない種族ではあるが人族の身分制度などの理解はあるようで、今の行動は一国の王の前で行うべき態度ではないという判断はできるようだ。

魔王『別に特別人嫌いという種族わけでもないからな』

—そうなんだ

魔王『ただ人間が妖精族をさらったりする事があるので避けているだけだ』

謝罪する妖精族の若者に殿下は「構いません。久々に会うことが出来たんですから」と笑顔で頷いた。

そして「良ければ部屋を用意しますのでそちらでゆっくりとお話ください」といい「若、案内をよろしくお願いします」と言われた。取り合えず頷いて「こちらへ」と5名の妖精族の若者と妖精少女を謁見の間から出るように促したが、ここで困った。

—案内するのはいいけど、何処にするか知らないよ！

すぐに美女さんが「こちらです」と先導してくれるのでついて行く。そして談話室の一室に案内をする。

美女さん「お泊りになるお部屋は後ほど案内致します。とりあえずは夕食まではこちらでおくつろぎください」

そう案内して美女さんが出て行こうとしたので僕も付いて出て行くこ

うとする所を「お姉ちゃん」と呼ばれていた妖精族の女性の膝に座る妖精少女が呼び止める。

妖精少女「お兄ちゃんも一緒にいようよ」

その言葉に僕が振り返ると妖精族の若者全員が僕を見ていた。

―何と言うプレッシャー

魔王『警戒心しかないのに中々の圧迫感だな』

妖精少女が「お兄ちゃん」となついている僕は一体何者だろうか、と皆が思っているであろう中に「お兄ちゃんは私を変な人から助けてくれて首輪も外してくれたんだよ!」という妖精少女の声が響く。

「どういう事なんでしょう?」と言う妖精族の若者の言葉に掻い摘んで説明する。

僕と美女さんが旅をしている時に野党に襲われた商隊に出くわし、野盗を倒した。

だが生き残ったのは妖精少女のみで、妖精少女の風貌から奴隷商人の商隊だった事が分かった。

「家に帰りたい」という妖精少女を帰してあげる為に妖精少女の故郷に向かっていて間にこの国の内乱に巻きこまれてしまった。そしてやっと内乱が終わり殿下の好意で皆さんに連絡が取れた。

首輪と言うのは奴隷商人のつけた魔法の首輪で、無理い外すと危ないので魔力で内部を破壊して壊した。

それを聞いた妖精族の若者達は口々に「ありがとう」と僕に礼を言う。

しかし本当はすぐにでも送らないといけないのに危険に巻き込んでしまったのである。

その事を謝罪すると「貴方がいなければ妖精少女はどうなっていたか分からない」と言った上で「精霊の導きです」と言った。

妖精少女が「かわいいでしょう」というと2匹の子狼を取り出すと、妖精族の若者から「狼の子だ」と声が上がった。

僕は何故2匹の子狼が妖精少女になつているのかを説明する。

すると「そういう事でしたら仕方ありません」と頷いた。

そうやら狼は妖精族の中では守り神のような存在らしい。

いろんな考え方があるもんだ。

そうして美女さんが飲み物を持てくると美女さんにも全員が感謝の言葉を続けた。

美女さんは「気にしないで下さい」と言うと「姫様と有力貴族の娘様もご挨拶したいと申しておりますが宜しいでしょうか？」と尋ねた。

僕はすかさず「姫と有力貴族の娘は妖精少女と仲良くしてくれて、僕達が戦で不在の時には傍にずっといてくれたんです」と言うと妖精少女が「家族なの!」と言った。

家族の意味に首をかしげながら「妖精少女がお世話になった人なら」と喜んで二人を招き入れた。

入出した姫と有力貴族の娘が挨拶をする。
それに答えて妖精族の若者達が挨拶する。

妖精少女を膝に乗せている女性美女さんと同じぐらいの歳で「妖精姉」と言うらしい。

というより来ている全員が結構若いようだ。

妖精姉「妖精少女を良くして頂いて、感謝の言葉もありません」

姫「私達が妖精少女が好きで行っただけです。気にしないで下さい」

妖精少女「そうだよ！家族になったから」

妖精姉「家族？」

―あ、何か嫌な流れになってきた気がする

妖精少女「うん！全員お兄ちゃんのお嫁さんなんだ！！」

魔王『予想が当たって良かったな』

妖精族の若者達が妖精少女の言葉に固まりゆっくりとこちらを見る。

―何か目にも見たな、この風景

僕は冷静に「違いますからね」と言った。

姫と有力貴族が僕の奥さんであることは間違いないが、妖精少女と美女さんは冗談で言っているだけだ。

確かに僕達は家族として暮らしてはいるが、決して妖精少女に何かしていると言うわけではない。

姫と有力貴族、美女さんが笑いながら肯定してくれたので、誤解を解くのは簡単ではあった。

―疲れる事には変わりないけどね。

魔王がこの状況を楽しんでいる感じなのがむかつく。

妖精姉達はやはり妖精少女を迎えに来たらしい。

小声で妖精少女に何かを語りかけ、妖精少女も嬉しそうに頷いていた。

しかし妖精姉が何かをささやいた時に妖精少女は「お兄ちゃん達もだよね？」と唐突に言ったが妖精姉が首を振ると「や！」と大声を出した。

どうしたのか聞いたら妖精姉が「妖精少女に妖精の里に戻りましょう」と伝えたのだと言う。

宥めて梳かしても妖精少女は首を縦に振らない。

どれだけ言われても妖精少女はイヤイヤと首を振り続けている。

余りの嫌がりようにそろそろ止めようかと思った時に魔王が叫ぶ

魔王『感情が高ぶりすぎている。危険だ！』

—え？

2匹の子狼が跳ね起きるように部屋の奥に走っていく。
と「やー！ー！！」と叫んだ瞬間に何かが妖精少女から迸った。

とっさに姫と有力貴族を前から抱きかかえると力任せに座ってた椅子を乗り越える。

そこで美女さんが駆け寄ってきたので二人を渡すと美女さんは驚きで声も出ない二人を担いだまま壁際まで交代した。

振り帰ると妖精少女から迸る力を5人の妖精族の若者がシールドを張って抑えているようだ。

優勢姉が良く分からない呪文のような悲痛の叫びが聞こえる。

魔王『聞こえていないな』

—どうすれば

魔王『妖精少女の力は強い。このままではシールドが破れるだろう』

—そうするとどうなる

魔王『この部屋が吹っ飛んで、妖精少女が力尽きるまで暴走するの
だろう』

—どうすれば止めれるんだ！？

魔王『妖精少女の気持ちを落ち着かせる事だろう』

見て人間に妖精族の5人は押されるように妖精少女から離されていく。

―僕はもうどうしたらいい

魔王『呼びかけろ』

僕「妖精少女!」

僕は何度も呼びかけるが声にならない叫びを上げ続ける妖精少女には届かない。

魔王『直接言葉をぶつけるしかない!』

―直接ってどうするのさ!?

魔王『妖精少女を捕まえて直接言霊を吹き込むんだ』

―捕まえるって、あの中に入れと??

妖精少女を囲むシールドの中に渦巻く何かを見る。
入ったらずたらずたになるのでは無いだろうか。

魔王『今なら妖精少女までの距離は1歩くらいだ。時間が経てば距離は開くぞ!』

確かにじりじりとシールドが押されている。

魔王『今の内に妖精少女を捕まえるんだ!』

—どうすれば捕まえられる?

魔王『全身に魔力の膜を作って飛び込め。それで少しは耐えてるはずだ』

—わかった

魔王『足りないとズタズタになり、多すぎると自滅するから注意しろ!』

—分かったけど、今言われたく無かったよ!

魔王『妖精少女を捕まえたらすぐに言葉だを吹き込め』

—どうやって?

魔王『口から直接吹き込む』

—それって、もしかして—

魔王『接吻だ』

―！？

魔王『驚く時間はない。やれ！』

―どう吹き込むのさ！？

魔王『意識を込めた接吻で言霊を相手に送り込め』

―それで旨くいくのだろうか？

魔王『いかない場合は吹っ飛ぶだけだ』

それを聞いて決心する。

僕は魔力で全身を包む事を意識する。

魔王『それではまだまだ弱い！』

―っ！？

さらに魔力を込める。

魔王『それで足りるか分からんが、魔力を途切らすなよ！』

僕は心の中で頷くと魔力を途切らせないように歩き出す。

妖精姉「何をしているの！？危ないから離れー」

その声に反応せず歩いていくとシールドに手を伸ばす。

本来なら触れると大怪我をするだろうシールドに触れた手は、すり抜けるように中に入る。

と荒れ狂う奔流に手の皮膚が裂ける。

魔王『もっと魔力を込めろ！』

僕は無言で魔力を込めるとそのままシールドを越えて中に入る。

それを周りの妖精族の若者達が驚きと共に見つめる。

余りの驚きに気が逸れたのだろう。

シールドの範囲が急に広がり、僕の上半身が急にシールドの中まで入り衝撃をモロニ浴びる。

僕「っ！！」

余りの衝撃に声が漏れる。

すぐにシールドの広がり止まる。

僕はそのまま止まらずに中へと進んでいくと妖精少女の方に触れようとした。

魔王『余り外側に魔力を放出すると妖精少女を傷つける事になるからな!』

妖精少女が傷つくぐらいなら魔力を切ってやる!

その僕の思いが伝わったのか、魔王が笑う。

妖精少女の肩を身長に掴んだ頃には僕の全身はシールド内に入っていた。

上を向いて叫び続ける妖精少女の両肩を掴む。

その間も刻々と魔力の消費は消費されていく。

妖精少女の首輪を壊した時とは比にならない程の消耗だ。

掴んだ肩に力を込めると妖精少女を抱き寄せる。

それでも変わらず声にならない悲鳴を上げ続ける妖精少女に意識を込めたキスをする。

この後どうしたらいいのか分からない僕は妖精少女を抱きしめたままキスを続けた。

妖精少女の全身から力が抜けるのを確認してキスをやめる。

いつの間にか周りを取り巻いていた本流が止んでいる。

腕の中の妖精少女が少し身じろぎする。

僕「妖精少女…大丈夫?」

妖精少女「おに…いちゃ…ん」

僕「無事でよかった」

妖精少女「おにいちゃん…」

僕「何？」

妖精少女「ごめん…ね」

僕「ん？」

妖精少女「怪我…」

そう言うのと泣き出してしまふ。

その妖精少女の頭をなでると「全然痛くないよ」と笑う。

僕「妖精少女が無事ならこんなの全然平気だよ」

魔王『うそつけ』

―黙ってて！

妖精少女「でも…でも…」

それでも自分を責めようとする妖精少女に「家族を守るのは当たり前だよ」と頭を撫でた。

妖精少女は何も言わずに泣き続ける。

それを優しく撫でながら周りを見ると、皆が僕達を放心したように見ていた。

やはり大事にならずにすんでみんな安心したんだろう。

姫「…キスした」

僕「は？」

妖精姉「キスした」

美女さん「しましたね」

僕「え？え？」

有力貴族の娘「舌を入れた」

僕「そこまでしてないよ！」

あれ？何この空気。

無事に収まってよかったって思うところじゃないの？？

妖精姉「何もして無いと言っていたのにためらう事も無くしましたね」

姫「本当は私達の知らないところでキスをしたのかも」

美女さん「あらあら」

有力貴族の娘「妖精少女はあんなに可愛いのだから、仕方ないと言

えば仕方ないけど…」

僕「いやいやいやいや」

その反応おかしくない!?

僕「ああするしか無かったんだよ!？」

有力貴族の娘「本当かしら？」

妖精姉「妖精少女に近づけるならキスでなくてもいけた筈です」

―あれしかなかったんだよね魔王!?

魔王『我は「驚く時間はない、やれ」とは言ったがな』

―魔王ううう!!

妖精姉「別にあそこまで魔力を扱えるなら、妖精少女に魔力を送ってどうにかする事も出来たはずです」

魔王『それはさすがに危険を伴うがな』

僕「それは危険も伴うからあの場合には使えないよ! だから言霊を吹き込んだんだよ!？」

有力貴族の娘「言霊？」

僕「そう！」

妖精姉 「言霊を…キスで？」

—なんて説明したらいいんだろう、魔王お願い！

魔王『ああ言霊は嘘だ』

僕「言霊はうー」

—ええええええ!!!!

魔王『ただ接吻で妖精少女の意識を呼び寄せただけに過ぎん』

—だって言霊がどうこうって

魔王「だから嘘だ！」

魔王の言葉に呆然とする。

姫・有力貴族の娘・妖精姉 「「う？」」

僕「うーうまく…送る為にあの場は仕方なかったんだ！」

魔王「仕方なかった」言い訳の常套句だな」

—魔王の所為じゃないか!!!

魔王『でもそのお陰で妖精少女は落ち着いただろう』

確かにそうだけど納得いかない。

言い出したのは魔王で騙された僕も悪いけど、魔王の事を妖精族の若者の前で言うわけにはいかない。

どう言えばいいんだろう、と悩んでいると姫と有力貴族の娘が噴出した。

有力貴族の娘「あの状態でそこまで考える余裕が無いのは分かっているわ」

姫「そうですね。結果的にちゃんと収まりましたし」

「傷の手当てを…」という姫と有力貴族の娘の顔が笑っている所を見ると、魔王の差し金と言うのは分かかって面白半分に僕をからかったらしい。

―勘弁してください。

妖精少女を助ける為にシールド内に突入するより、みんなから妖精少女へのキスを責められるほうが精神的に何倍もキツかった。

第42話 方針

僕の腕で泣いていた妖精少女が静かになっていた。

疲れて眠ったのかな？　と思ったら顔を上げて「えへへ」と笑った。

そして僕の全身にある切り傷を見て「痛い？」と聞いたので「それ程じゃないよ」と答えた。

実際の所は良く分からない。

ひりひりしている気もするが、全身満遍なく擦り傷があるので全体的に熱を持って熱いような気もする。

妖精少女「治すね！」

そう言うのと妖精少女は掌を僕に翳すと目を閉じた。

傷口に水の膜が張り擦り傷が消えていく。

それを見た妖精族の若者が何か驚いた声を出した。

そんなに珍しい術なのだろうかと思って聞いてみた。

妖精姉「回復の精霊魔法は中級以上の精霊にしか使えません」

妖精少女が精霊と契約している事すら驚いたのに、中級と契約を結んでいた事にさらに驚愕したと言うのだ。

僕「確かに出会った時の妖精少女は精霊と意思疎通は出来たようだが契約して無かったのですしね」

妖精姉「それだけでもすごいんですけどね」

どうやら精霊族の全てが妖精少女のように精霊と意思疎通が図れるわけではないらしい。

しかも妖精少女の歳で精霊と契約を結ぶ事もそうそうある訳でもなく、しかも中級精霊との契約である。

精霊族の皆が驚くのも無理は無い。

僕「そうか、みんな妖精少女見たいに精霊と話せるわけじゃないんだ。すごいね」

僕を治療している妖精少女は誉められた事に嬉しそうに笑う。

僕「だから妖精王から話しかけられるのか」

妖精姉「は？」

驚く妖精族の若者達。

妖精姉「ナニニ、ナンデスツテ？」

僕「妖精王だったんだよね？」

妖精少女「うん」

妖精姉「話し…かけてきた？」

妖精少女「またおいでって言われたよ！」

さらに衝撃を受ける妖精族の若者達に僕は当時の状況を伝える。
それを黙って聞いていた妖精族の若者達は話が終わっても動かなかった。

妖精族の若者達が息を吹き返したように動きだしたのは、僕の治療をしていた妖精少女が急に倒れこんで眠ってしまった後だった。

僕「よ、妖精少女!？」

魔王『力の使いすぎだ。心配は無い』

すぐに駆け寄ってきた美女さんが妖精少女の様子を見て「力の使いすぎで気を失っただけのようです」と言った。

それに一同が安心してると「部屋で寝かせてきます」と美女さんが妖精少女を抱きかかえて部屋を出て行く。

姫と有力貴族の娘と妖精姉が付いていく。

残った妖精族の若者に妖精王に話しかけられる事がどれ程の事なの

かを教わる。

どうやら妖精族の集落は各地に散らばってあるようだが一つの集落に上級精霊と契約を結んでいる者が一人居るかどうかであり、妖精族全体でも妖精王となると過去を振り返ってもそれ程多くない。

現在の妖精族の女王が精霊王と言葉を交わして力を借りれるそうだが、契約までには至ってないらしい。

力を借りるのと、契約を結ぶ事の違いは使える力の量かなり違うらしい。

力を借りる場合は、精霊がその場の状況で使える力の中から気が向いただけ使う。

例えば水の精霊王の力が100%だとしてその場の水の力が50%しか使えない場所では、使える最大は50%である。

その50から精霊王の気持ち一つで1〜50の力を使うのである。

契約を結ぶと50%の場でも契約者が残り50%の力をたしてあげれば100%の力が出せる。

しかも契約しているので術者の希望通りに妖精王は力を貸してくれる。

ただあくまでも術者の力次第な面もあるので、50%の場で30%しか足せないなら80%の力しか出せない。

しかも単純に30%の力を足すだけで80%の力が使えるわけではなく、ちゃんと80%の力が必要なのである。

だから100%の力が出せる場でも術者に80%分の力しかなければ、80%しか出せないと言う音になる。

100%の場で80%しか出せなくても100%使えるのでは？と思ったが、力を借りる場合と契約の場合で精霊がこの世に影響を及

ばす方法が違うので仕方ないらしい。

ここら辺は良く分からないがそういう事だと思っておく。

未契約で力を貸してもらえる状況なら1ヶ場の力の最大まで、術者の力は必要なく力を貸してもらえるが、契約すると術者の力次第となるのである。

しかも妖精女王も精霊王との会話には自ら赴いて後に会話できるようになったのであって、妖精王から語りかけてくる事は物凄い事なのだそうだ。

「妖精少女も妖精王の居た湖まで出向いた事になるんだけど？」と言うと首を振り「出向いただけで出てくるのがすごいのです」と言う。

妖精女王の出向いたというのは、精霊王の居る場所まで出向いた上で儀式を行い精霊王を召還して協力を得たらしいのだ。

それから見るとどれだけ妖精少女の状況が特殊なのかがわかる。

だからこそ一度妖精族の里に戻らなくてはいけない、と言うのだ。

僕は何か言う前に妖精姉と美女さんが戻ってきた。

姉と有力貴族の娘は妖精少女の傍に付いているらしい。

妖精姉も傍に居ようと思ったが、こちらで妖精少女の話をしっかり行わないといけないと思い戻ってきたそうだ。

当初は妖精少女を保護しなくては、と妖精族の里に連れ帰ろうとしていたが、妖精少女が精霊と契約をしている事で状況は変わった。妖精族は精霊と契約を結べたら未成年でも一人前と扱われる。

だから妖精少女も一人前として扱われる為に、本人が帰りたくないといえは無理に帰す事は出来ない。

妖精姉「でも一度、妖精の里に連れ帰りたいと考えております」

僕「何故？」

妖精姉「妖精少女はまだ幼い。あれ程の力を手に入れてしまったのに、それを制御できてないんです」

妖精の里に戻って力の制御ができるように練習しないとだめだと言うのだ。

僕「訓練はここではできない？」

妖精姉「出来ない事も無いでしょうが、できる人物が居ません」

妖精族の里に戻れば知識も経験も豊富な先達^{せんだつ}が居る。
だから妖精の里に戻る方が良い。

僕「でも、妖精少女が嫌がってますからね」

妖精姉「しかしあのような暴走が起こればどれ程の被害を周りに与えるか…」

魔王『だがその原因は妖精族の若者達なんだがな』

—だよね

どうにか妖精少女に里に戻ってもらいたいが、嫌がる妖精少女をどう説得すればいいのか分からないのだ。

妖精姉「若からず妖精少女を説得していただけないでしょうか？」

魔王『それこそまた妖精少女が爆発しかねないな』

僕「…妖精少女が嫌がる事を説得できません」

妖精姉「でも妖精族に戻るのには必要な事なんです」

それは分かる。分かるけど妖精少女を納得させる事は出きると思わない。

—ああそうか、僕自身が妖精少女が帰って離れ離れになってしまう事を納得して無いんだ

元々送り届けるつもりだったにも関わらず、である。
納得していないのに説得なんかできない。

僕「僕には…無理そうです」

妖精姉「そんな事無いと思うんですが」

僕「僕には無理です」

妖精姉「妖精少女が帰りたがらなかったのは、貴方と離れたくないからだと思ったんですが」

僕「僕だけじゃなく、美女さんにも姫にも有力貴族の娘にもですよ」

それを聞いて何かを考え込む妖精姉。

他の精霊族の若者達が小声で何か話し合っているが、多分どうにか連れ帰す事が出来ないかという事だろう。

しかしコレという解決策は出てこないようだ。

妖精姉「若、一緒に妖精の里まで来ていただけないでしょうか？」

急な申し出に驚いて聞く。

僕「別種族が入っても大丈夫なんですか？」

妖精姉「本来はありませんが、絶対ダメと言うわけではありません」

僕「そうなんですか…」

別に言ってもいいかなと思っていると美女さんが口を開いた。

美女さん「今すぐ返答は致しかねます」

妖精姉「何故ですか？」

美女さん「若が王族の一員だからです」

妖精姉「え!？」

美女さん「若が先程、姫様を奥さんとお伝えしたと思いますが」

その言葉に妖精続の若者達は先程の僕の言葉を思い出したのだろうか、一様に無言になる。

―王族だとまずい？

魔王『まあ、王族が他国に無断で侵入したら国際問題だろうな』

―じゃあ僕はもう旅に出れないの!？

魔王『身分を隠して行けばよからう。この場は「兵を率いて」と言う意味だ』

―兵なんか率いなきやいいのでは？

魔王『本来、王族が出かけるのなら護衛が付くのは当然であろう』

—そうか

ただ、今回の妖精族の集落は国境付近にあるらしい。
だから身分を隠して同行するのは問題ないのではないだろうか？

魔王『確かに。だが美女がここで王族という立場を出したのは別の意味があるだろうな』

—別の意味？

魔王『王族であるお主が「保護している」妖精少女を無理やり連れ去る事はできんだろう』

—それは妖精族の若者達が無理やり拉致する可能性があるって事？

魔王『どうしても連れ帰らないといけないといっている。だが妖精少女は嫌がっているのなら、無いことでは無いだろう』

—なるほど

美女さん「ですので、若が付いていくというお話に付いては今すぐの返答は致しかねます」

妖精姉「しかし…」

それでも食い下がろうとする妖精姉に美女さんは「貴方はわが国と隣国間で争いを起こさせたいのですか？」と一刀両断した。

それにしても美女さんはなぜこんなに攻撃的なんだろう？
いつも通りの笑顔なんだけど有無を言わせぬ雰囲気物が凄く怖い。

「妖精少女はこのままでは危険だ」と言い張る妖精族の若者の一人に「妖精族の事も考えて申しているのですが？」と美女さんが答える。

だがどういう事が相手はわからないようである。

美女さん「王族である若を招きいれるという事は、わが国との関係を強くしようという事に繋がりますが」

「それとコレとは…」と反論しようとするのを制して「我々がどういうつもりか、では無く他の国がどう感じるか、です」と美女さんが制する。

美女さん「妖精族の全体的な方針としては中立を貫いていたと思いますが」

それが一国との関係を強くしようとしてると取られてもいいのか？
と言うのだ。

それを聞いてさすがに理解できたのか「それは…」と言葉が続かない。

僕「どうですか？一度、妖精族の集落に連絡を取って方針を仰ぐと
いうのは？」

妖精姉「そう：ですね」

僕「その間に僕達の方でもどうするか話し合いますよ」

妖精姉「話し合いとは？」

僕「妖精少女にどうしたいかを聞いて、それに付いて検討します」

妖精姉「とりあえず妖精少女に集落に連れて行けば：」

僕「それが出来そうに無いから困ってるのでは？」

そう言うとき妖精姉は黙り込んでしまった。

しっかりしてそうに見えるのに意外と抜けてる人なのか？

美女さん「そろそろお食事の時間となります。お話はその後にしませんか？」

そう美女さんが言った時に扉がノックがノックをされ「お食事の用意が出来ました」と侍女が言った。

食事は殿下と翁も居た。

妖精族の面々はその事に恐縮しているようだ。

僕は今でこそ一緒にとる事も減ったが、戦時中は王子だった国王とよく食べていたので何とも思わなくなったが、コレが普通の反応かも知れない。

魔王『お主も王族なんだがな』

妖精少女も起きたようで姫と有力貴族の娘の間で食事…というよりご飯を食べている。

魔王『何が違うんだ？』

―食事よりご飯を食べる、の方が何かしっくりするんだ

ただの気分の問題である。

妖精少女は食事前に妖精族の若者達と出会った時に、妖精姉が何か言う前に姫の後ろに隠れて「や！」とだけ言った。

それを見て妖精姉が仕方ないと言った感じでため息をついた。
今ここで強く言っても意味が無いと思ったんだろう。

食事の後に妖精族の若者達を部屋に案内する。

妖精少女の近くがいいと言う妖精族の若者達に美女さんが「妖精姉様なら構いませんが、その他の方は無理です」と言う。

妖精姉「何故ですか？」

美女さん「男子禁制だからです」

妖精姉「男子禁制？」

美女さん「姫様の寝所がある場所だからです」

妖精姉「なるほど：私はいいでしょいか？」

美女さん「部屋は余ってますので問題ありませんが：よろしいでしょうか、若」

僕「そうだね。いいんじゃない？」

妖精姉「何故若にお尋ねに？」

美女さん「ああ、若も住んでるからです」

妖精姉「え？男子禁制じゃ？？」

美女さん「そうです。若以外は入れません」

妖精姉「それはどういう…」

美女さんが説明をする。

それを聞いた妖精姉は「妖精少女もそこに…」と僕を見る。
慌てて姫と有力貴族の娘に懐いているので一緒に住んでいるので、

家族のようなものであってやましい事は何一つ無いと力説する。

―なんで毎回毎回、いいわけじみた事を言わなきゃダメなんだ

魔王『身から出た錆だろう?』

妖精姉は空の館の一室、他の妖精族の若者は少しはなれた部屋を宛がわれた。

その後に空の館の入り口付近の応接間に再度集まる。

妖精姉「一度、集落に戻って方針を仰ぐ事になりました」

僕「そうですか」

妖精姉「それです…私だけ残ろうと思うんですが…」

僕「じゃあその間は今の部屋を使ってください」

妖精姉「…いいのですか?」

僕「構いませんけど」

何か問題があるのだろうか?

妖精族の若者は明日の朝に集落へ戻る為に出るらしいが、どれくらいで結論が出て戻ってくるか分からないと言う。

僕「そうなんですか。まあ別に部屋は余っているのです、いつまでも居ていただいていいですよ」

僕をじっと見ていた妖精姉は「…ありがとうございます」と一言だけ呟いた。

翌日、妖精族の若者は何かを小声で妖精姉に言うと、護衛の兵士達と共に馬を走らせた。

第42話 方針（後書き）

誤字修正

償還して ↓ 召還して

無いことで花だろう ↓ 無いことでは無いだろう

その他の片 ↓ その他の方

第43話 第二次選考会・午前

さらに数日が立った。

姫の騎士団の応募数は78名居たらしい。

思ったより多い。

第一次審査は書類審査になった。

僕「アイドルの選考会か！」

つい突っ込んだ僕に翁が「あいどる？」と聞き返す。

それでアイドルと言うのを簡単に説明をすると翁は「確かに似ておるの」と笑った。

翁「だがこの審査は応募した全員の素行調査も含まれております」

翁が言うのは兵士なら勤務期間や勤務態度、周りの評価を確認するだけで済むが、それ以外の応募は結構時間が掛かるらしい。

市井のものなら本人は愚か、親兄弟、本人の交友関係まで調べる。

冒険者の場合は冒険者組合に問い合わせを行い、冒険者としての経歴や本人の交友関係、噂まで調べるそうだ。

大げさな、と思ったけど「姫のお傍に仕える者だから、大げさに過ぎて足りないぐらいですな」と言われて納得。

ただ翁が僕に警護を使うのが何とも慣れないのでその事を言うところまではもう王族ですからな」と言われた。

そこを何とか説き伏せて公式の場以外では今まで通りで行くようお願いをする。

翁は「その方が楽でいいがな」と言う。

選考会に関して「よろしくお願いします」と言う。「まかせておけ」と豪快に笑っていた。

そして書類選考が終わって78名が73名になった。

―殆ど通過かよ！

魔王『落ちた5名の素性が気になるな』

翁に聞いたら「幼子が1名、男が1名、素行が良くないものが2名、姫が1名」と言った。

―姫を守るための騎士ですから！

魔王『男だと？』

―まあ性同一性障害の人かも知れないしね

魔王『なんだそれは』

性同一性障害というものに関して僕が知っている事を伝える。

―まあ僕のいた世界では少しづつだけど、そういう人もいると受け入れられてきてはいたよ

魔王『なるほどな』

―ただ応募した男の人がそうなのは分からないけどね

とりあえずは117名をどうするかだ。

美女さん「本来なら対戦試合を行ったりして決めますね」

僕「仲間を決める選考会で、行き成りそれで振るいにかけるのはどうなんでしょうか？」

翁「だが実力の無いものは採用できないと思うが？」

僕「そうでしょうか？」

僕の考えを二人に告げる。

本来の騎士なら剣の腕前も必要だろう。

でも姫の騎士団は姫を守る為だけの騎士で、他の騎士とは少し違う。だから剣の腕以外でも能力のある人間は取り入れたい。

翁「他の能力とは？」

僕「そこまで深く考えてませんが剣一辺倒の騎士団にはしたくないですね」

翁「ふむ…」

そう言うのと「なら面談しかあるまいて」と迫うが呟いた。

面接を73名行うのか、結構ハードだな。

そんな事を思っていたら「ではこうしましょう」と美女さんが手を叩いた。

美女さん「全員と手合わせしましょう」

僕・爺「手合わせ？」

美女さん「はい。勝ち負け関係なく手合わせをすれば、相手の剣の腕以外も見れますね」

翁「なるほどの…」

僕「まって！…誰がするの？」

念の為に聞いてみたら2人が僕を見るし、魔王まで『決まっておるだろう』と言う。

—やっぱり僕がするんですね

美女さん「私も副団長として手伝いますよ」

—さすが美女さん!!

そう思って物凄い期待して美女さんを見たら「ちゃんと立ち会います」と言う。

僕「立ち会う？」

美女さん「ええ、実際に剣を振るうのは若のお仕事です」

僕「一人で!？」

美女さん「若なら一人でも十分いけます」

魔王『いつも通りお主に拒否権は無い』

美女さんの太鼓判と魔王の冷たい一言で僕が全員と直接剣を交える事となった。

さらに数日後、姫の騎士団の二次選考前日の夜。
姫、有力貴族の娘、妖精少女、美女さんと、ここ数日で（僕以外と）
すっかり打ち解けた妖精姉とで食卓を囲んでいた。

姫「明日、姫の騎士団の二次選考なんですネ」

僕「ええ」

姫「手合わせと聞いてますが…」

すでに候補者に向けて、二次選考は僕との手合わせと告知している。
単純な勝ち負けではないという事は伝えられているが、内容は手合
わせ以外は当日となっている。

僕「姫、申し訳ありませんが有力貴族の娘も候補者の一人である限り、
ここで内容は言えませんが」

姫「そんな…」

有力貴族の娘「私も他の候補者と同じ立場で挑みたいので構いません」

毅然と言う有力貴族の娘に妖精姉は首を傾げる。

妖精姉「有力貴族の娘は若の奥さんなんでしょう？なら選考無しで合格なのでは？」

僕「それはありません」

妖精姉「何故？」

僕「僕の奥さんという立場と姫の騎士団の一員と言うのは別だからですよ」

妖精姉「身内でも最賈しない？」

僕「ここで僕が有力貴族の娘を特別扱いで合格させると、今後、コネで入ろうとする者を拒否できなくなります」

そうになると姫の騎士団は貴族や豪商のような力ある娘に箔を付けるだけの騎士団に成り下がってしまうだろう。
それでは姫の騎士団を作る意味は無いのだ。

妖精姉「しかし若の奥さんである限りは実力で入ったとしても、やっぱりコネとして見られるのでは？」

僕「その可能性は否定できません。しかし騎士団の選考をしっかりと行えば問題はありません」

選考内容に有力貴族の娘を優遇するような不正を行わず他の候補者達と同じ立場で試験を受けて合格すれば、騎士団の中から有力貴族の娘に不満を持つ者は出ないだろう。

それでも不満に思うような器の小さい人は騎士団に必要な無い。

騎士団の仲間がちゃんと理解してくれているなら、例え騎士団以外の誰かが有力貴族の娘の事を悪く言ってもみんなで守れるのだ。

妖精姉「それでも力のある者はコネだと信じて娘を入れようとするのでは？」

僕「その為にしっかりと選考会を行うんですよ」

選考会をしっかりと行っておけば、後々にコネで娘を入団させようとしても選考会と同じテストを受けさせればよい。

僕「テストは生半可な気持ちで受かるようなモノは行いません。コネで来るような娘は到底無理ですよ」

美女さんも笑顔で頷いている。

因みに明日の二次審査は決まっているが三次以降はまだ決まってい。

ただ単に自分の首を絞めたかな？とも思わないでもないが、姫の騎士団について妥協したくないのは確かである。

姫「私も見学に行っても宜しいでしょうか？」

僕「かまいませんが…」

美女さん「さすがに直接は危険ですので、選考会の広場を見渡せる3階のバルコニーに席を用意させます」

姫「近くで見るのはだめですか？」

美女さん「素行調査は行っておりますし赤白両騎士団の騎士も手伝いに来てくださいますが、それでもどの様な者がいるかまだ分かりませんので」

それを聞いて姫が「そうですか…」と残念そうにする。

姫「せめて2Fで…」

美女さん「2Fですと投擲用の武器があれば十分姫に危害を加えることが出来ますし、協力者がいれば飛び移る事も可能です」

美女さん「私ならナイフで確実に仕留められますね」

魔王『3Fでも出来そうだ』

魔王の呟きが聞こえたかのように「3Fでも10回に9回は出来ると思います」と笑顔で呟いた。
それを聞いて姫が「分かりました」と頷く。

妖精少女「私も姫お姉ちゃんと一緒に見る！」

美女さん「わかりました。妖精姉様のも合わせて3席用意致します」

妖精姉は「私は別に…」と言っていたが妖精少女の「楽しみだね」という言葉に「え、ええ…」と何となく頷いていた。

二次選考当日。

姫の騎士団の候補者73名は城にある兵の訓練場広場に集められた。

その中には有力貴族の娘もいるが選考会が始まってしまえば一人の候補者として扱う。

美女さん「では姫の騎士団の2次選考会を始めます」

美女さんはそう宣言すると今回の選考会の趣旨を説明する。

全員にくじを引いてもらい一班9～10名に班分けをし紅白に分かれて模擬戦を行う。

各班、一人の大将を選び、対象は鉢巻を巻くしておく。

模擬戦毎に大将を変えるのは構わないが、戦闘中の交代は認めない。攻撃は木剣のみで飛び道具や魔法、精霊魔法等の類は使用不可である。

勝敗は相手大将を打ち取るか、一定時間後に決着が付かない場合は生き残りの多い方が勝ちである。

大将の交代は認められていないために、鉢巻が外れた場合も負けとなる。

戦死判定は一人につき一人の判定者が付き行い、旗が揚がった方の色の候補者は戦死となる。

2人の判定者（自分と相手）の戦死判定が合わない場合は両方相打ちで戦死となる。

A（赤）とB（白）が戦った場合の両判定者の判定。

両方、赤を上げたら赤の戦死。

両方、白を上げたら白の戦死。

赤と白で分かれたら両方の戦死。

旗が揚がらない限り戦闘続行。

判定員の判断は絶対であり異論は認めない。

判定員は赤白両騎士団の連隊長と大隊長達が行い、毎回ランダムで決める。

模擬戦の立会い人は赤白両騎士団副団長2名が行う。

美女さん「赤白両騎士団の全面協力の下で行います」

美女さんがそういうと白の騎士団団長が「どうも」と挨拶をし、赤の騎士団団長は目礼だけした。

まさに赤白両騎士団の全面協力である。

しかもこれだけではなく、両騎士団から各数十人の騎士団員が手伝いに来ているのである。

白の騎士団団長曰く「騎士団員の勉強になると思ってます」

赤の騎士団団長も同じ考えらしく、互いの騎士団から次代を担うだろう数十人を厳選して連れて来たらしい。

美女さん「では、午前中ですは私と若のペアと総当りで対戦してもらいます」

その言葉に候補者から動揺が伺える。

一部は「2人で？」という反国王軍に関わっていない市井しせいの者や冒険者。

残りの大半が僕と美女さんがある程度知っている反国王軍の兵士だ

ったもの達である。

美女さん「私達の大將は若が行います。判定員は赤白両騎士団団長
にお願いします」

「お二人なら皆さんも判断に納得なさるでしょう」と美女さんが微笑む。

赤白両騎士団団長が頷くのを確認して「ではクジを引いてください」と言った。

全員がくじを引き番号順に並ぶ。

1～8が横に並びその後ろに9～16が横に並ぶ。

全員並んだ縦の列が班になり、そうして8つの班が出来上がる。

美女さん「模擬戦の順番は一番先頭の人の数字の若い班から対戦となります。一通り終わればまた1から。それを午前中は繰り返しします。戦闘の勝敗は関係ありません」

勝敗ではなく模擬戦を通して協調性ややる気などを見るのだ。

美女さん「各模擬戦を時間一杯に行えば3周くらいですが、何戦出来るか楽しみです」

魔王『ほう』

—美女さん？

魔王『美女は「どれくらい耐えられるのか？」と挑発したのだ』

—だよねえ！

なんて事言うの！？って思ったが、それを聞いた候補者達がやる気を出してくれたようなので、まあいいかと思う。

美女さんは「1刻、作戦会議に時間を取ります」と言うとい時解散を告げた。

白の騎士団副団長の「始め！」言葉で模擬戦が開始される。

僕達は赤で美女さんを前衛、僕が後衛に立つ。

白側の1班のメンバーは7人が前衛、3人が後衛で大将を2人で守るつものようだ。

7人の内3名が美女さんに張り付き4名が僕の方に突っ込んでくる。

と美女さんに張り付いた3名が崩れ落ちる。

すぐに白の旗が3本揚がる。

僕に向かおうとしていた4名が驚きで足が止まった瞬間に僕は自ら突っ込んで2名を倒す。

慌てて僕に向かおうとする残りの二人を倒した時には、美女さんは走り抜けて後衛に肉薄すると大将を含む3人を打ち倒していた。一斉に白い旗が揚がり「そこまで」という声が掛かる。

すぐに周りにいた赤白両騎士団の騎士達が1班のメンバーに駆け寄り怪我の具合などを確認しながら模擬戦エリアから連れ出す。

開始1分未満で終了である。

他の候補者からざわめきが上がった。

模擬戦前の作戦会議中に美女さんから「候補者は人数差から気を抜いていると思うので気を引き締めましょう」と言われた。

第一班は見せしめとして一瞬で叩き伏せられたのである。

もちろん、全員次の模擬戦に影響を及ぼさないように打ち身程度に抑えている。

「次、第2班！」という掛け声の下で2班がフィールドに入る。

「はじめ！」の合図で9名の内、8名が美女さんに殺到する。

美女さんは8名を裁きながら次々と倒していく。

それを横目に僕は飛び出すと相手の大将に迫る。

予想はしていたようで剣を構えたが僕は剣を叩き落すと喉元に剣を突きつけた。

すぐに「そこまで！」という掛け声が掛かる。

やはり開始1分未満である。

次の班は剣を握った事の無い市井出身の娘が大将を勤めていた。というよりは剣が使えないので大将に追いやられたのだろう。

全員が大将を守り打って出てこない。

僕と美女さんは回り込んで左右から挟撃するとあつという間に防御は崩れた。

唯一驚いたのは剣を初めて握るような市井の娘が独りになっても降伏せずに僕に向かって来た事である。

もちろん素人の剣など問題になるわけも無く難なく剣を叩き落したが、向かってくる勇氣は中々だと思う。

その後も各班は他の班の戦いを見ながら戦術を考えて立ち向かってきた。

2週目は相手の出方を伺いながら対応したので1週目よりは対戦時間がかる。

それでも数分といった所だったが：

全班各2回づつ対戦を終わった時点で始まって半刻（約1時間）と言った所だ。

美女さん「2回ずつ終了しました」

美女さんはそう言うとき若干息の上がつている候補者達を見て「どこか打開策を見出した班はありますか？」と聞いた。

しかしどこの班も思いつかないようで声を上げない。

美女さん「わかりました。では1と2、3と4、5と6、7と8のそれぞれ2つの班を統合して引き続き行います」

一つの班18〜19名になる。

1刻の作戦会議の後に若い番号順から模擬戦を行う。

1つ目の班は開始直後に大将を除く18名全員が向かってきた。

「いさぎが良いですね」という美女さんはいつもの笑顔で集団に飛び込むと触れるを幸いに片っ端から打ち倒していく。

次々と揚がる白い旗。

このまま美女さんが倒してくれたら楽だなと思ったら三分の一ほど倒した後に僕と目を合わせた美女さんが引いた。
そして候補者を引き連れたまま僕の方に向かってきた。

魔王『楽はさせてくれないようだ』

—そのようだね

美女さんは僕の横を通る時に「サボったらダメですよ」と僕にだけ聞こえるように言うときさらに下がっていった。

美女さんと共に向かってきた候補者達は大将である僕を見逃す訳も無く僕をそのまま取り囲もうとする。

僕は前面の的に突っ込むと3人の候補者を打ち倒し囲みを抜ける。
すぐに振り返り向かってくる9名を近い順に対処する為に剣を構えた。

昼間近になり休憩となる。

息も絶え絶えに地べたに崩れ落ちる候補者達の前に立ち「では昼食と休憩をはさみます」と美女さんが言う。

最初から最後まで笑顔の美女さんに候補者達は恐怖を覚えるかもしれない。

―僕は怖いよ

魔王『我也怖い』

さすがに僕も肩で息をしながら汗を拭う。

―立ってるのが辛いなあ

だが候補生の前だから見栄を張ってなんでもない風を装う。

魔王『息も絶え絶えで装えてないがな』

―それくらいは許してよ

美女さん「もし姫の騎士団を辞退したいと考える場合は、昼の選考会が始まるまでに申し出てください」

美女さんが「以上です」と言う回りの騎士達が「昼食の用意はあちらです」と候補者達を案内していた。

僕と美女さんも赤白両騎士団団長と副団長達と共に食事を取る為に移動した。

第43話 第二次選考会・午前（後書き）

誤字修正

考ええお ↓ 考えを

生残り ↓ 生き残り

私達の対象 ↓ 私達の大將

3週くらい ↓ 3周くらい

数分といた ↓ も数分といった

第44話 第2次選考会・午後

白の騎士団団長「中々激しい選考会ですね」

赤の騎士団団長「ウチの入団テストよりハードだな」

白の騎士団団長「そうですね。よければ食後の運動がてら、うちの騎士団とやりませんか？」

赤の騎士団団長「我が騎士団もやってみたいな」

そういう二人に「選考会もあるのに無理ですよ」と僕が言うと美女さんが「昼以降は若は模擬戦を行わないのでいいのでは？」と言う。

「美女さん、何を言うの!？」

確かに午後からは候補者同士の模擬戦を行う予定だけど！

白の騎士団団長が「おお、じゃあ赤白両騎士団から選抜で班を作りましょうか」と赤の騎士団団長や副団長達と話を始める。

僕「…美女さんがそういうならいいですが、赤白両騎士団団長は無しで、班の人数は6人ですよ」

赤の騎士団団長「なんだと!？」

僕「当たり前じゃないですか。赤白両騎士団副団長も無しにしたいくらいです」

白の騎士団団長「そんな…」

どうしてもやりたいという赤白両騎士団団長に美女さんが「じゃあ、私達と組んで4人でやりますか」と笑顔で告げる。

4人vs赤白両騎士団選抜でやろうというのだ。

「面白そうだ」と両騎士団団長がノリノリで今度は対戦する赤白両騎士団選抜の人数を何人にするか、という話で盛り上がる。

「一人10人で40人」「さすがに多くないですか?」「じゃあ8人で32人」「ギリ良く30というところですか」という事で30名になった。

朝の模擬戦から姫騎士候補生の実力に話が飛び、連れてきている騎士達なら何人で対応できるかの話になる。

赤の騎士団団長「9人の班なら3人だな」

白の騎士団団長「でも何戦もする事を考えると5人は要りますね」

僕「もし今の状態の疲労困憊の候補生なら?」

白の騎士団団長「9人の班なら4名で8班対応できないと困りますね」

僕「18人なら?」

赤の騎士団団長「そうだな。6名：7名だな」

僕「じゃあ7名の班を2つほど、午後から入れましょうか」

赤の騎士団団長「何？」

僕「男性騎士団の実力を肌で感じるのはいいい刺激になると思うんですよね」

赤の騎士団団長「なるほどな」

僕「もちろん、疲れている候補生との差を無くす為に模擬戦を2回ほどやってもらいますけど」

そういうと赤白両騎士団団長は二つ返事で頷く。

僕「ただし参加するのは赤白両騎士団選抜の中から平騎士団員のみにしてもらいますけどね」

僕の言葉に赤の騎士団団長が「なっ！」と声を発する。

白の騎士団団長は「他の騎士候補生の選抜試験に出る騎士団団長が何処にいるんですか」と苦笑いを浮かべる。

全くその通りである。

午後になった。

候補生から5名の脱落者が出た。

3名が貴族の娘で2名が市井の娘である。

これで貴族出身者は有力貴族の娘のみとなった。

残った候補者の一人に市井の娘がいた事に驚いた。

集まった候補生68名に午後の内容を伝える。

人数が減ったので再度17人一組で班分けを行う。

まずは僕と美女さんに赤白両騎士団団長の班と赤白両騎士団団選抜の班による模擬戦を見もらう。

4対30の模擬戦。

騎士が30名隊列を組んでいるのは中々壮観である。

開始ししてすぐに突っこんでは来ず、2鉄横隊を維持したまま前進する。

前衛3人の美女さん、赤白両騎士団団長の前まで来ると1列目がそれぞれに当たっていく。

そして2列目が脇をすり抜け僕に向かってきた。

魔王『守る気ナシだな』

僕は向かってくる騎士達10名を迎え撃つ。

隙無く向かってくる騎士達にどう対処しようかと思ったら、向かってくる騎士達の肩越しに美女さんがこちらを見ていた。

5人相手にしながらである。

―美女さんがこちらを見ている：

魔王『「情けない姿を見せたらどうなるか分かるか？」という所か』

―ひいひい

向かってくる騎士達に対して手加減無しで向かう。

一番近い騎士に接近し打ち倒す。

そして足が止まった騎士達から距離を取るように離れる。

僕を囲もうとする騎士たちの一番端に立っている騎士を打ち倒し囲われる前に脱出する。

出来る限り全員の姿が視界に入るように後ろに下がりながら、一人突出している者を見つけたら倒す、という戦法を取り続けて半分の5人になった。

人数も減ったので5人の輪に飛び込む。

今まで囲まれるのを避けながら戦っていた僕が突っこんできた事に戸惑っている間に5人全員を打ち倒した。

それを待っていたかのように（待って居たんだろうけど）直後に美女さんが対象を討ち取って模擬戦が終了する。

白の騎士団団長が「今の模擬戦を見て何かを感じてもらえれば」と候補者達に言い纏めているが、後ろで赤の騎士団団長が「お前ら：

もう少し頑張らんか！」と言っているので色々台無しである。

明日からの訓練を厳しくすると言う赤の騎士団団長の言葉に白の騎士団団長も「ウチも精進が足りませんね」と同意する。

がんばれ赤白両騎士団団員達。

くじ引きで再度班分けを行う。

午後は7名一班の騎士選抜と模擬戦を行う。

騎士選抜は2班あり、一定数模擬戦をこなしたら入れ替わる。

それ以外は朝のルールと同じである。

模擬戦が始まった。

当初こそ騎士団選抜が大将を打ち倒して勝利を収めていたが、すぐに時間制限一杯まで掛かる試合が出てきます。

各班5戦ずつ行ったあたりで選考会は終了する。

美女さん「お疲れ様でした。これにて2次選考会を終了します」

美女さんの言葉に息も絶え絶えの候補者達から「お疲れ様です」と挨拶がちらほら聞こえてくる。

美女さん「今残っている候補者の皆さんは2次試験合格者となります」

その言葉に顔を上げる候補者達。

美女さん「2次は技術などではなくやる気を見させて頂きました」

だから最後まで残った全員合格なのだ。

美女さんは候補者達を見渡すと「二次合格おめでとうございます」と言った。

それを聞いて安堵なのか脱力する候補者達を美女さんの言葉が襲う。

美女さん「ではこれから第3次試験を行います」

候補者達に戦慄が走る。

魔王『候補者達には美女は悪魔か何かに見えているだろうな』

―まあ午後に僕と美女さんが決めたんだけどね

美女さん「今から4日間に渡る合宿を行います」

これから野営用の荷物を担いで行軍し、野営を行う。

明日からは今日よりハードな選考会を行う事を伝える。

美女さん「もちろん、もう1時（約2時間）程で日が沈みだしますのでそれ程遠い場所ではありません」

そう言う手を持った地図を広げて目的地を指す。

「どう考えても1時でいける距離ではありません、ありがとうございます。」

美女さん「一刻後に野営の装備が支給され行動開始となります」

美女さんの言葉に誰も一言も発しない。

美女さん「途中でリタイヤされても困ります。もし辞退したい者がいたら今すぐ申し出てください」

呆然としているのか誰一人反応しなかったが、その中の一人が「辞退します」と手を上げると連鎖的に手が上がっていた。

美女さんは「そうですか。残念です。では辞退者はあちらへ。体の不調を感じる方はあちらへ」と辞退者一人一人に「お疲れ様でした」と微笑む。

半数以上が辞退を申し出て居なくなり、残りは29名になった。

残留者に有力貴族の娘も居る。

美女さんが3次試験を受ける候補者に立つように促す。

全員、疲労困憊という感じで立ち上がるが、何人かは立っているの

もやっとのようだ。

「では3次試験を行いますのでこちらへ」と美女さんが29名を促して歩き出す。

城の中の一室へ案内する。

すでに赤白両騎士団団員により椅子が用意されており候補者達を座らせる。

美女さん「ではこれから3次試験を行います。これより辞退出来なくなります。宜しいですか？」

そういう美女さんに皆頷く。

美女さん「ではまず皆さんに自己紹介をしてもらいましょう。名前と志望動機で構いません」

「志望動機が選考基準になりませんので、どんな内容でもかまいませんよ」と言う。

何故自己紹介？と首を傾げる面々に「これから4日間一緒に生活する仲間ですからね」と美女さんは言う。と端に座っている候補生を指名した。

一人一人自己紹介をしていく。

志望動機は様々だ。

「姫様のお役に立ちたいとずっと思っていた」という兵士。

女性が認められる数少ない場だと感じて応募した者。

いつまで冒険家業が続けられるか分からないので定職に付こうと思
った者。

純粹に騎士に憧れていたという者。

驚いたのが市井しせいの娘が残っており「私でも頑張れば何か出来るかと思
って」と言っていた。

有力貴族の娘は「姫様を守りたい」と言っていた。

中には「美女さんに憧れて」と言っていた者もいた。

全員の名前と志望動機を来た美女さんは「ありがとうございます」
と言うと「若」と僕を呼んだ。

僕はみんなの前に立つと「3次試験合格おめでとうございます」と
言った。

何を言われているか分からないという顔の面々に「3次試験の合宿
は嘘です」と伝える。

僕「3次試験はどんな環境でも騎士として命令に従う気概があるか。
絶望的な状況でも諦めずに居る事が出来るか、等を見させて頂きま
した」

僕の言葉が少しずつ理解できてきたのだろうか。

候補者達がざわめきだす。

美女さんがすかさず「静かに、話は途中です」と言いざわめきを止
める。

僕「まあそれは建前で根性をみさせていただきました」

僕は全員を一通り見渡すと「合格です。姫の騎士団として一緒に頑張りました」と言った。

静まり返る部屋に美女さんの「おめでとうございます。これからよろしく願います」という言葉が響く。

それを聞いてやっと実感が沸いたのか、喜びで横の候補者達と抱き合うものや泣き出すもの表現は様々だ。

喜びを表現する候補者達が落ち着くのを待って美女さんが口を開く。

美女さん「今日は城に部屋と食事を用意しております」

5人部屋となるがゆっくり休むように言う。

「明日、朝食後にまたここに集まってください」と言う解散を伝えた。

夕食の席に有力貴族の娘は居ない。

なぜなら姫の騎士団の候補者として他の候補者達と用意された部屋で休む事になっている。

妖精少女「有力貴族のお姉ちゃんが居ないと寂しいね」

姫「そうね。でもすぐに戻ってくるわ」

僕「すぐは無理ですよ」

姫「そうなんですか？」

姫にこれから数日の訓練などを経てやっと姫の騎士団見習いとして姫と面会を果たす。

だから少なくともそれまでは有力貴族の娘は戻ってこれないし、戻ってきてても勤務中は一騎士団員に過ぎないので特別視は出来ないと言ふ事を説明する。

姫はそれを聞いて「そう：なんですか」と寂しそうに言った。

同じく寂しそうにしている妖精少女の頭を妖精姉が慰めるように撫でていた。

翌日、29名の姫の騎士団候補者達は昨日の部屋に集まった。

美女さん「今から貴方達は姫の騎士団見習いとなります。まずは姫の騎士団という立場を理解してもらおう為に説明を行います」

美女さんはそう言うのと姫の騎士団の説明を行う。

あくまでも僕が姫の騎士という立場に任命された副産物として出来た騎士団である為に、僕が引退したりした場合は解散する事になる一代限りの騎士団である。

僕は執政と同じ立場に序されている為に姫の騎士団に命令できる立場にある者は国王殿下と姫様と執政だけである。

もし不当な命令などを受けた場合は団長である僕か副団長の美女さんに申し出る事。

ただしあくまでも姫の騎士団として守られているだけで、決して騎士団員に権力がある訳ではない。

美女さん「分かっているかとは思いますが勘違いしてしまうような事があり、姫の騎士団員として相応しくないと判断された場合は、騎士団として処罰いたしますので注意してください」

美女さんの言葉に皆が頷く。

それを見届けると続きを話し出す。

姫の騎士団は姫と僕に忠誠を誓う集団である。

姫の騎士団の見習いとなった全員、今までの身分は関係なく横並び

になる。

元の身分が貴族だろうが平民だろうが関係なく、今度の頑張りを見て立場を決めていくというのだ。

まあ貴族は有力貴族の娘だけだが。

美女さん「他は赤白両騎士団と同じような規則となります」

姫の騎士団の宿舎で寝泊りをし、一日の大半を訓練や警備に費やす。休みの日も基本は宿舎で準待機状態でしかなく、外出などにも許可が必要となる。

美女さん「ここまで聞いて辞退したい人は居ますか？これが最終となります。今後は姫の騎士団団員として、除隊も自由に出来なくなります」

見渡すが誰も何も言わないのを見て美女さんは頷く。

美女さん「では訓練は昼から始めます。午前中は姫の騎士団の制服を作る為にみなさんの寸法を測らせて頂きます」

そう言うのと扉が開いて針子が数十人入ってきた。

僕は寸法測りが始まる前に部屋を後にした。

姫の騎士団選考会から数日。騎士団員達の訓練も進み、ある程度形になった。

騎士団は7、8名一班とし4つの隊に分け各隊で実力から隊長を決め、有力貴族の娘もその一つの隊長になった。

そして姫との顔見せを行った。

やはりというか何というか、姫の騎士の制服は黒づくめである。

夏は暑いだろうなと思ったが、それまでには涼しい服が用意されるのだろう。

姫が「折角の女性騎士団なので、華やかなのがいいです」といい制服はドレスがいいと言っていたが、僕と美女さんで「それでは勤務に差支えがある」という話をして納得してもらった。

そして服のデザインは色々上がったが「僕がズボンとスカートを足せば良いのでは？」と適当に言ったのが採用され、ヒラヒラの多い制服となった。

さすがというか何というか美女さん含めて30名の女性が黒尽くめとは言え、ヒラヒラした服を着ているのは華やかではある。

一応、剣を抜いたり動き回るのには邪魔にならないように出来ているが、僕も着ろといわれたら騎士団解散を宣言しなくてはいいけないだろう。

一時的に姫の騎士団の詰め所は空の館の中になった。
空の館が元々後宮だった為に、後宮で働く侍女たちの部屋が沢山ある。

その中から入り口に一番近い部屋から数部屋を騎士団の部屋とした。
後宮に勤める侍女も身分は高いものだったようで、部屋は2人部屋だが結構な広さを確保したので、そこに寝具を入れて4人部屋にした。

有力貴族の娘が僕の奥さんである事はすでに団員に伝えている。

今までの訓練でも特別扱いは行っていない上に、隊長にも実力であった為に今の所は特に問題は無いようだ。

空の館に移っても騎士団員として行動し、休みの日に姫や僕たちと食事をする程度である。

昼食時、有力貴族の娘の話をした時に団員から「姫の騎士団団員は団長の奥さんになるんですか？」と言われた。

さすがにそれは無いと言うと「残念ですね」とある騎士団団員が冗談を言い、回りの団員もそれを笑った。

休憩中に冗談が言い合えるぐらいは騎士団団員と良好な関係が築けていると言えるのだろう。

—言えるよね？

魔王『いきなり29人増えるのか…大変だな』

—いやいや、増えないから！

姫の騎士団の勤務は隊単位で行動となる。

1日目と2日目が訓練、3日目の朝から4日目の朝まで24時間警備。

警備明けの4日目が休みとなる。

このサイクルを4つの隊が日をずらして行っている。

少しずつ騎士団の様相を呈してきた。

第44話 第2次選考会・午後（後書き）

誤字修正

簿義戦 ↓ 模擬戦

訓練が厳しくすると ↓ 訓練を厳しくすると

高所派の皆さん ↓ 候補者の皆さん

第45話 そんな一日

朝は早い。

日が昇る前に起きる。

起きるとまずは寝室に隣接したバルコニーで軽く運動をする。

内乱時に他の者達：若や赤白両騎士団団長と一緒に行っていた時のからの日課で、これをしないと一日しっくり来ない。

剣を手に取り型の練習をする。

元々それほど弱くは無かったが強くも無かった自分が、若と一緒に練習する事により戦場で足を引つ張らな程度に剣を振るえるようになった事は純粹に嬉しかった。

国王となりもう剣を振るう事も余り無いだろうが、それでも剣の練習をするのは楽しい。

僕「今度、若に手合わせでも願おうかな…」

自分の義兄となる人を思い出しそつと笑う。

自分にとって義兄に当たるにも関わらず、その事を鼻にかけないどころか地位の大きさを理解していない節がある。

王族、それも国王の義兄ともなれば国政に干渉する立場についてもおかしくない。

若には是非国政を手伝って欲しいのだが「政は僕には向きませんよ」と笑って断られる。

―向かない事なんて無いのに。

若ほど広い視野で物事を見ている人は居ないと思うので、是非国政に携わって欲しいのに…

本人はその気がまったく無いのである。

―若が国王になって、僕が補佐の方がいいけど

そうになったら僕は全力で若を支えるつもりだ。

僕は若をそれほど買っている。

買っているという言葉は妥当ではない。

心酔していると言ってもいいかもしれない。

初対面で姉姉さまを孤立無援な状態にも関わらず守っていた姿を見た時点で好感は持っていた。

その後、若が「姫の笑顔を守りたいだけ」という事を言った時の真摯さを目のあたりにした時初めて、姉姉さまと共に国を引っ張っていった欲しい人だと感じた。

その後もその気持ちは変わらず今も思っている。

若が国王で姉姉さまが王妃、そして僕が執政として脇に控える姿を想像してため息を付く。

何故なら若が全力で拒否をするからだ。

その事を強引に進めたら出奔する勢いかもしれない。

僕は溜息を付くと剣を鞘に収めてベッドの脇に立てかける。

扉がノックされ侍女たちが桶にお湯を張って持ってきたのでそれで体を清めた後に服を着替える。

朝食は基本的に翁と爺と取る。

それを聞いた若が「それは寂しいですね」と言い、4日に一度若と姉姉さま達と一緒にする事になった。

どうやら姫の騎士になった有力貴族の娘と一緒に食事を取れるのが4日に一度だかららしい。

同じく夜も4日に一度、若たちと一緒に食事をする。

僕はこの日を楽しみにしている。

朝食の場に行ったら既に若達は来ていた。

姉姉さまと有力貴族の娘、妖精姉が「おはようございます」と言い、若が「おはよう」と言うのに挨拶を返す。

若も「おはようございます」と言っていたのだが僕が「義兄になるのですから、挨拶くらいは普通に」と言って、最近やっと「おはよう」になった。

妖精少女はいつも元気に「おはよー!」と挨拶をしてくれる。

それを妖精姉が「おはようございますでしょ」と窘めているのを「構いませんよ」と笑顔で返す。

翁と爺達との食事嫌いではないが、若たちとの食事は賑やかでやはり楽しい。

食事が終わると執務室で書類との格闘が始まる。

主に行っているのは復興に関する事と国王派貴族の領民裁判、治水

や治安、国防に関することである。

領民裁判に関しては半分ぐらいが終了している。

有罪になり接収した土地は一旦国の直轄にしているが、そろそろ誰に任せるかを決めなくては行けない。

今までの治水というのは災害が起こった後や良く起こる場所だけで行っていたが、国庫が今までに無いくらい潤っているのでこれに気がしつかりと行うことにした。

治安に関しては元国王軍派領主の下で働いていた兵士達を召し上げて軍を編成し当たらせている。

2000もの数になった軍は領主息子と騎士隊長の指揮の下に国を巡回させ魔物や盗賊などを討伐して回らせた。

まだ出て数日だが野盗の集団を1つ、魔獣を1体倒したらしく成果は上々だ。

このまま続ければ領主息子にも褒章を与えるいい口実になるので一石二鳥である。

昼食は姉姉さまと妖精少女と妖精姉と取り、有力貴族の娘が休みの日は有力貴族の娘もその中に入る。

若と美女さんは「食事は仲間の結束を固めるいい機会」らしく姫の騎士団団員と取る。

確かに姫の騎士団は他の騎士団に比べ、有力貴族の娘の話聞く限りでは仲が格段に良い。

女性騎士団だったり少数だと言うのも差し引いても、やはり若の人徳なんだと思う。

しかも勤務中は美女さんが適度に引き締めるようで、そのメリハリもいい感じのようだ。

昼食は毎食、姫姉さまや妖精少女、妖精姉が居るので華やかで楽しい。

僕の大切な時間となっている。

ただ妖精姉は僕に対しては笑顔が硬い気がする。

もう少し楽にしてくれたら良いのにといい若に相談したら「国王だから最初は仕方ないのでは？」と言われた。

その後に「若も妖精少女にキスした所為（理由は既に聞いている）で、違う意味で警戒されてますよね」と美女さんに言われ「ですよねー」と言っていたのが面白かった。

昼からは半時（約1時間）程、他国の大使との面会や領主達の陳情を受ける。

そういった用件の無い日は赤白両騎士団や城の各部署を訪問する。

赤白両騎士団以外は僕が行くと畏まってしまって仕事にならないそうなので、余り行かないけど…

その後に1時（約2時間程）の休みを取る。

基本的には若の所に遊びに行く。

何故ならあそこは男子禁制で若以外は国王である僕しか入れないからだ。

彼らも仕事とは言え四六時中付き纏われるとさすがに肩がこる。

基本的には若達の訓練風景を眺めたり姫姉さまや妖精少女や妖精姉とお茶を飲んだり、妖精少女と子狼の戯れを見て過ごす。

ここは癒しの空間だと思う。

その後は夕食まで翁と爺と有力貴族とその補佐官達との会議である。今まではここに貴族が出張って自分達の権益の為に色々口出しをして来た様だが、僕の代からは出席させていない。

施策の報告や新たな問題の提起と解決策、他国の情勢に対するわが国の対応を話し合う。

たまに若も参加するが黙って聞いているだけで意見を求められた時にだけ答えている。

大抵が「僕にはわかりませんが、それでいいのでは」で終わるけど。

どうしても良い解決方法が思いつかない場合に意見を求めると、誰にも思いつかない方向からの解決策を提示される事があり毎回驚かされる。

翁なんかは若を何とか国政に引っ張り込めないと頭を悩ませており、若が居ない時に会議の議題として上がる事もしばしばある。

あくまでも会議での息抜き目的の議題での事で、ここに出席している面々は誰も実現出来るとは思っていない。

熱望はしてるけど。

夕食は朝食と同じく有力貴族の娘が休みの日はみんなで食べる。

若には「それ以外の日でも空の館に食べに来たらいいのに」といわれるが、家族の団欒に毎日邪魔するのは気が引ける。

というよりも有力貴族の娘を差し置いてそんな事するのは怖：気が引ける。

別に有力貴族の娘が酷い事をするわけでは無い。

確かに子供の頃の有力貴族の娘はかなりのお転婆で一緒に居た僕は色々な目あった。

どれもこれも楽しい思い出として僕の記憶に生々しい傷跡を残してくれている。

歳を重ね僕は女の子と遊ばなくなっていたので大昔で出会ったのは数年ぶりだったけど、まるで深層の令嬢のような立ち振る舞いに驚いた。

だが挨拶を終えてた時に驚いている僕にまるで悪戯が成功したような目を一瞬だけ見たのを見て「変わってないな」と思った。

その後は色々あって若の奥さんになった有力貴族の娘は本当に優しく笑うようになったと思う。

いや幼い頃から優しかったが今はその比じゃないくらい優しく綺麗で幸せそうなので、相手が若で本当に良かったと思う。

話が逸れてしまった。

もし有力貴族の娘を仲間はずれにしようものならどの様な目にあうか分からないのである。

食事の後は一時程雑務を行い、明日の予定を確認して一日の勤務が終わる。

その後は入浴をして寝るだけだ。

ある日、休憩時間の日課に空の館に顔を出した時の事。

姉姉さまは有力貴族と妖精少女を連れて町へ出かけていて居なかった。

若と美女さんも警備以外の当直の姫の騎士団を引き連れて護衛に行ってしまった。

そういえば前日の昼にそのような事を姉姉さまが言って居た様な時がある。

居ないならしょうがないと戻ろうとした所で声を掛けられる。

妖精姉「殿下？」

声をした方を見ると妖精姉がバルコニーにある椅子に腰掛けていた。すぐに立ち上がろうとするのを制して話しかける。

僕「今日は昼前から出かけると言われていたのを忘れて来てしまいました」

妖精姉「なるほど」

僕「妖精姉は一緒に行かなかったんですか？」

そう言う「町は：怖いので」と静かに言った。
どうやら人族の町に出たのは今回が初めてらしく、やはり人族の町は未だに何があるか想像できなくて怖いらしい。
「なるほど」と僕が頷いて居ると妖精姉は思い出したかのように僕に席を勧めてきた。

妖精姉「殿下を立たせたまままで申し訳ありません」

僕「気にしないで下さい」

妖精姉「しかし…」

そういう妖精姉に「妖精少女のお姉さんなら若の家族も同然。なら僕とも家族ですよ」と笑いかける。

僕がテーブルに着いた事で気を利かせた侍女が飲み物を用意してくれた為に、なし崩し的に2人でお茶を飲む事になった。

僕「少しはここに慣れましたか？」

妖精姉「はい、皆さん良くしてくれます」

妖精姉の言葉を聴いて僕は小さくため息をついた。
それを感じた妖精姉が「何か？」と言って来た。

僕「いえ、やはり気を使われているなと感じまして」

妖精少女「そんな事は」

僕「姉姉さまにも言われませんでした?」

何か思い当たる節でもあるのだろうか。

黙り込んだ妖精姉に僕は笑いながら言う。

僕「先程も言ったとおり家族のようなものです。公式の場でない所では氣を使わないで下さい」

妖精姉「しかし一国の王に対してそんな事は…」

僕「妖精姉は国王はどの様なものだと聞いてきました?」

妖精姉は僕の台詞に言いにくそうにしていたが「国王は絶対の権力者であり、その国に居る者は絶対服従が義務付けられていると聞いてます」と言った。

それを聞いて僕はさらに笑う。

僕「確かにそのように振舞う国王も居るでしょうね」

妖精姉「…殿下は違うと?」

僕「違いますよ」

妖精姉「どう…違うのですか？」

僕「僕は国王じゃ無いんです」

妖精姉「は？」

「何を言ってるの？」というキョトンとした顔の妖精姉を見て僕はさらに笑ってしまった。

僕「僕は国王じゃないんですよ」

妖精姉「それはどういう意味でしょう」

僕「まあ実際に戴冠式も済ませて国王という立場に居ますが、本当はもっと相応しい人が居るんです」

僕がそう言っていると僕が何をいつているのだろうという感じに探るように妖精姉は黙ってしまった。

僕「ただその人がやりたくないというので、僕は仕方なしに国王代理をしています」

妖精姉「代理…？」

僕「だから、僕に対して公式の場以外はかしこまらなくても良いですよ」

僕の突飛な理論に妖精姉は溜まらず噴出した。
一頻り笑いが収まると妖精姉は「わかりました」と頷いた。

僕「良かった。で、この国には慣れました？」

妖精姉「慣れた…とは言えないですね」

さすがに人族の町では気が休む暇は無い。
ただこの空の館は若以外の男性は僕しか来ない上に寝起きしている
人数も少なく、大抵は妖精少女や姫と一緒に居るのでまだマシだ
というのだ。

妖精姉「本当にこの人たちには妖精少女共々良くしてもらって
て感謝をしています」

僕「そう言ってもらえると良かった」

そう言うとお茶に口をつける。

僕「若も優しい人でしょう？」

妖精姉「そう…ですね」

僕「あれ、そうでもないですか？」

妖精姉「決してそんな事は」

僕「何かありました？」

妖精姉「あったという程の事では――」

僕「妖精少女にキスした件で怒ってます？」

妖精姉「そんな事は無いです」

そう首を振ると妖精姉は話し出した。

確かに若は人あたりも良く優しい人だと思う。

それは妖精少女の懐き様や姫の話などから伝わってくる。

ただ説明は難しいのだが、何か感じる時がある。

決して実は悪人だと思っている訳では無いが、違和感を覚える時があるらしい。

それは若の魔族の部分を感じているのだろうか？

――妖精族って魔族と仲が悪かったわけ？

僕「悪い人ではないんですけどね」

妖精姉「そうですね」

僕「まあ一緒に生活してれば時期に違和感も無くなるでしょう」

妖精姉「そうですね…」

僕「もし負担があるなら別に部屋を用意させましょうか？」

妖精姉「いえ！そこまでしてもらう必要は無いというか、この方が人が少なくて落ち着くというか、一人は寂しいというか…」

そう言う妖精姉に僕はやっぱり笑ってしまふ。

僕「そういえば妖精族の里とはどのような場所なんですか？」

僕の言葉に妖精姉に緊張が走る。

「何だろう？」と思って首をかしげて意味に気が付き「ああ」と声を上げてしまふ。

僕「別に妖精族の里の実情を探ろうとか、何かしようという訳じゃなくて、ただ単純な興味なんです」

妖精姉「……」

僕「何か警戒させてしまってますみません。噂でとても綺麗な所だと聞いた事があって興味があつたんです。国王の僕は一生訪れる機会が取れないだろうから…」

そう言う妖精姉は方を力を抜き「大した事はお伝え出来ませんよ」

と言った上で教えてくれた。

妖精族の里は森の深くにあり夜になると月明かりのみで静かである事。

里には精霊が沢山居て幼子の時から精霊と遊ぶ事。

人族の国とは全然違う話に時間もあつという間に過ぎて言った。

姫の騎士団の騎士が「国王陛下。執政の使いの者が来ております」という言葉で、時間を大幅に過ぎている事に気がついた。

僕「しまった。もう戻らなくては。楽しい時間でした。ありがとう」

そういう僕に「こちらこそ」と妖精姉が微笑む。

今日だけで妖精姉と仲良く出来たようで嬉しい。

僕「また機会があればお話を聞かせてください」

妖精姉「あんな話でよければいつでも」

戻ると仕掛けた所を振り返り「よければ暇なときにも執務室にでも遊びに来てください」と言う。

妖精姉「仕事中に伺うのは…」

僕「構いませんよ。翁には『たまには息抜きしてくださいさらないと、ワシが休めません!』って言われてますから」

翁の口真似をしながら言うと妖精姉は笑ってくれた。

僕「ここから執務室までは殆ど人が居ませんから」

だから人に怯える必要ありませんよ、と言葉外に言うと言妖精姉は「そこまで怯えてません！」と頬を膨らませる。そんな子どもっぽいしぐさに笑いを堪える。

僕「ではまた」

僕は会釈をしながらそう言うと言と空の館を後にした。

執務室まではすぐ着く。

扉を開けて入り「遅れてすみません」と言いながら席に着く。すでに他の面々は集まっており何かの議題で話し合っていたようだ。

翁「構いませんよ」

僕「何を話し合っていたのでしょうか？」

翁「若をどうしたら国政に引っ張り込めるか、です」

それを聞いて噴出してしまう。

爺「殿下、何か良い事がありましたか？」

僕「うん？なんで？」

爺「なにやら楽しそうでしたので」

爺の言葉に「確かに」と翁が頷く。

―確かに妖精姉と仲良くなれた事はよい事だと言えるな

僕「大した事ではないですが、ありましたよ」

爺「それは良かった」

そう言う内容まで突っ込んで聞かずに嬉しそうに頷く爺。

翁が「では殿下も来たし今日の議題に取り掛かるか」と言うとき会議が始まった。

第45話 そんな一日（後書き）

誤字修正

若い害は ↓ 若以外

国王派どの様なもの ↓ 国王はどの様なもの
獲れないだろう ↓ 取れないだろう

第46話 事実

妖精族の里に帰った妖精族の若者達から手紙が届いたと言う事で殿下に呼ばれた。

僕と姫と美女さんと妖精姉と妖精少女が殿下の執務室に向かう。有力貴族の娘は本日は勤務中である。

執務室に入ると殿下が妖精姉に一枚の手紙を渡した。

どうやら手紙は2通あり、一通は国王宛でもう一通は妖精姉宛のようだ。

殿下と妖精姉は手紙を開封すると中身を確認した。

殿下「手紙には妖精少女の処遇について妖精族間で会議を開く為に時間が掛かりそうだと書かれておりますね」

読んでいた手紙を翁に渡しながら言う。

妖精姉「こちらにも似たような事が書かれておりました。会議は妖精女王の名の下に行われるそうです」

殿下の「宜しければ見せていただいても良いですか？」と言う言葉に妖精姉は頷いて『読めないかも知れませんが』と手紙を渡す。

妖精姉の言うには手紙には、妖精女王の名の下に妖精族の会議が招集された事の他には里の近況と妖精姉と妖精少女の体調を気遣う内

容が書かれているらしい。

僕も見せてもらったが読める訳が無いと思ったが、魔王が『妖精姉の言うとおりでな』と言ったので間違いないだろう。

—というか妖精語読めるの!?

魔王『読めるぞ。話す事は殆どでみんなが聞き取りなら出来るしな』

—聞き取り? 言語も違うの?

魔王『当たり前であろう。種族によって独自の言語を持つのは当然だ』

ただ魔族や人族が多いのでその言葉が共通語のように扱われているだけの事らしい。

魔族と人族が同じ事に驚いたけど、元々同じ種族だったのでおかしくないようだ。

それもあくまで「魔族や人族の中で長年力を持った国々が使っていた言語」という話であり、地方や特殊な地域には共通語とは若干趣の違う独自の言語が使われているらしい。

そしてあくまでも共通語となっではいるが、全ての者が話したり読み書き出来るわけじゃないそうだ。

今まではたまたまそういう者に会わなかったただけなのだろう。

—じゃあ妖精少女がああ歳で共通語が話せるのはすごいんだね

魔王『すごいと言えばすごいが、本当にすごいのは耳だろうな』

―耳？

魔王『妖精少女は元々そんなに共通語が話せるわけじゃないのだから』

―でも普通に話してない？

魔王『普通ではないな』

魔王が言うのは僕達の会話を聞いて覚えているようだ。
だから最初は余り話さなかったし、話しても片言になるらしい。
てつきり幼いからそういう話方なのだと思ってた！

だからたまに周りの話を黙って聞きながらニコニコしている時は、
良く分からない単語が出てきて分からないけど周りの皆が笑顔なの
で一緒に笑っているのだろう。

魔王『出会ってそれほど立っていないのに、日常会話を聞く事が出来るのは耳と頭が良い証拠だな』

―確かにすごいね

魔王『それを言うなら妖精姉も中々だな』

―なんで？

一緒に来ていた妖精族の若者達が余り話さなかったのは共通語をそ

れ程理解してなかったからだろう。

妖精姉だけ残ったのも共通語への理解が一番出来ているからと思う。それは少しの時間では理解できるものでもないし、妖精姉の理解力を見る限りではある程度の勉強をしたと予想されるそうだ。

僕は手紙を妖精姉に渡しながら「妖精姉の言っている事は本当のようです」と伝えた。

すると妖精姉が「読めるのですか!？」と驚いた表情をし、他の面々（美女さん以外）も一様に驚いていた。

僕「え、ええ…文字の読み書きと聞く事だけで話すのは難しいですが…」

僕がそう言うのと妖精姉が歌うように何かの言葉を紡いだ。

魔王『「貴方はどこで妖精語を？」と聞いている。知り合いに妖精族の出身者がいたと言ってよいぞ』

どうやらあのメロディが妖精語の言語らしい。

歌うように響く言葉は綺麗だと思う。

姫も同じように感じたのか目を閉じて聞いている。

僕「昔の知り合いに妖精族の出身者が居たのです」

するとさらに妖精姉は歌う。

以降は同時通訳が面ど：分かりにくいので会話出来ているように簡潔に。

妖精姉「その者の名前と出身がわかりますか？」

僕は名前と出身を伝え、その人は昔に病気で無くなったと伝えた。

妖精姉「―――（魔王にも読解不能）なのですか？」

僕「ごめん。その言葉の意味は分からない」

僕の言葉に何かを探る言うな感じだったが、別の言葉を紡いだ。

妖精姉「貴方に出身を伝えた者との関係は？」

魔王が『愛人だ』と言うのに「いえるか！」と突っ込むと「冗談だ」と笑えないことを言い出した。

もし僕がそのまま冗談を口にしたら、冗談ではすまない惨劇が待ち受けていたかもしれない。

僕「昔住んでた付近の森で怪我をして居たのを助けました。魔獣に襲われたそうです」

妖精姉「…試すような事をして済みません」

僕「構いませんよ」

そう言って会話が終わると妖精少女が僕に飛びついてきた。

妖精少女「お兄ちゃん、話せるの？」

僕「聞くだけなら出来るよ」

妖精少女「すごいね！これで沢山お話できるね！」

そう言うのと妖精少女が物凄い勢いで話し出した。

「本当はもっと皆と話したかった」という事、「中々言葉を覚えられなくて旨く話せずもどかしい」事、「ちゃんと覚えたいから共通語を教えて欲しい」と言う事。

沢山話す妖精少女は本当に楽しそうで、歌う声は共通語より軽やかで綺麗だ。

妖精少女に「じゃあ毎日少しずつ覚えようか」と心の中で魔王に「頼むよ」と言いながら言うのと、頷く妖精少女と共に姫も「私も妖精語を覚えたいです！」と言って来た。

「一緒に頑張りましょうね」という姫と妖精少女。

これ以降、毎晩一時（約2時間）程、妖精語と共通語の勉強会が開かれる事となる。

それは何故か姫の騎士団も参加となったが、それは有力貴族の娘を

仲間外れにしない為の力技であった。

しかし姫の騎士団でも妖精少女は人気の様で「妖精少女と話せるなら！」と殆どの者が乗り気だった。

勉強会により僕自身や姫の騎士団の面々も妖精語をある程度理解し、姫に至っては日常会話でも妖精少女と妖精語で会話をしたりした結果、精霊語が話せるようにまでなるのはまだ先の話である。

殿下「妖精族の会議はどれくらい掛かると思いますか？」

妖精姉「手紙が書かれた時点で召集という段階ですので、まだ始まっても無いと思います。決まるのはどれくらいになるか…」

殿下「そうですか」

そう言うと考え込むように黙っていた殿下が顔を上げた。

殿下「妖精姉にお願いがあるのですか」

妖精姉「なんでしょうか？」

殿下「妖精女王宛に親書を認^{したた}めていただけませんか？」

妖精姉「私が…ですか？」

殿下「はい」

妖精姉「殿下が直接共通語で書かれても解読できますか？」

殿下「そうなのですが、妖精姉に妖精語で掻いて頂くのに意味があるんです」

妖精姉「意味…？」

殿下「まあ深く考えずに、一緒に貴方や妖精少女の近況なども書いて貰って構いませんから」

妖精姉「妖精女王にそんな事は書けません」

殿下「それはそうですね…」

そう言うのと殿下は笑った。

殿下「妖精姉は妖精女王にお会いした事がありますか？」

妖精姉「…あります」

殿下「では、どのような判断を下すと思われますか？」

その言葉に妖精姉は思案したが「特殊な状況過ぎてわかりません」と答えた。

殿下「どんな人ですか？」

妖精姉「優しく美しい方です」

誇らしげに妖精姉が言う。

それを聞いた殿下は「そうですか」と言うと笑顔で頷いた。

そして「親書の件はお願いできませんか？」と聞く。

妖精姉「内容によりますが、問題ないようなら」

そう答える妖精姉に「たいした内容ではありませんよ」とだけ答えた。

親書の内容は以下の通りである。

- ・妖精族と事を起こすつもりはないと言うより、出来れば仲良くしたい
- ・妖精少女は若達と本当に家族のように仲が良いので無理やり引き離すような事はしないで欲しい
- ・妖精族に迷惑が掛からないようなら若が妖精族を訪問する意思はある（僕も了承済み）
- ・出来れば随時、親書のやり取りで近況報告を行いたい

概ねこんな感じだ。

僕の訪問に関しては殿下に「と言う事を織り込んでもいいですか？」と聞かれたので二つ返事で答えた。

姫も「私も！」とすごい食いついていたが、取り合えず今は妖精少女が「一緒じゃなきゃ嫌だ」と言った僕だけ伝えてるだけだ、と言

う事で納得してもらった。

殿下「この内容さへ書いていただければ、後は妖精姉が他に何を書いていただいてもいいですよ」

そう言うのと「すぐに印璽（いんじ・蠟で封筒を止めて印を押して封印する事）を押すので、こちらで書いていただいてもいいですか」と少し離れたテーブルの椅子を薦め数枚の紙とペンと封筒を渡した。妖精姉は黙ってそれを受け取ると紙に羽ペンを走らせる。

数刻して2枚の手紙を書き終わると、インクが乾くのを待って手紙を僕に差し出した。

僕「？」

妖精姉「内容を確認しないのですか？」

僕「何で？」

妖精姉「何でって：読めるのは若だけなのですから」

僕「いや、何で内容を確認するの？」

妖精姉「は？」

僕「殿下、必要あります？」

殿下「無いですけど？」

僕「ですよね」

そう言うとは僕は手紙を受け取り、内容を確認する事無く折りたたむと「2枚とも同じ封筒に入れていいですか？」と聞いて封筒に入れ殿下に手渡す。

殿下はそれに手早く印璽いんじを押す。

殿下「家族宛などの手紙も一緒に送りましょうか」

そう言うのとさらに数枚の紙を妖精姉に渡す。

そして妖精少女に「文字は掛けますか？」と聞いて「少し」と答える妖精少女にも紙とペンを渡した。

姫が「私も妖精少女の家族に手紙を書きたいのですが、共通語でもいいでしょうか？」と妖精姉に確認していた。

妖精姉が「大丈夫です」と言うとは姫は綺麗な共通語で手紙3枚に渡る長文を書いていた。

内容は今までの妖精少女の元気な様子を書いてたら止まらなくなつて、無理やり途中で止めたそうだ。

—というかそれでもびっしり3枚か

魔王『すごいな』

妖精少女も妖精姉に聞きながら両親に手紙を書き終わったらしい。

姫が「私のも一緒に入れていい？」と妖精少女に聞いたら「うん！」と元気に返事をしていた。

妖精姉の物と妖精少女と姫の物にも殿下が印璽を押す。

「印璽ってそんなに無駄使いしていいものなのだろうか？」と思っただけど「大事な手紙には違いないので構いません」と殿下が笑った。妖精少女の手紙は妖精少女が「押してみたい！」と言ったので押させてあげた。

「熱いから火傷しないようにね」と横で殿下と姫が見ている中で一生懸命押した印璽は歪んでいたが「できた！」と喜ぶ妖精少女が可愛いので問題なしだろう。

魔王『国王の印璽を国王以外の者が押すとは…妖精少女はやはり大物だな』

—すごい事なの？

魔王『通常は処刑物だな』

—まじですか！

魔王『それ程、国王の印璽は大切に重要なものだ』

それをさらっと「押したい」と言って押す妖精少女は本当にすごいと思う。

すぐに兵士が呼ばれて「親書を届けるように」と言うところ通の手紙を渡す。

敬礼をし受け取った兵士はすぐに部屋を出て行った。

あの手紙はあつという間に控えている伝令に渡されると、十数騎の護衛の騎兵を伴って物凄いスピードで国境まで届けられるのだろう。そこで国境付近にいる妖精族の者に渡されて数日で親書が届く筈である。

姫「そういえば妖精少女のお母さんってどんな人？」

妖精少女「おかーさん？ん」

そう言うと考え込んだ。

共通語が難しいのか、言葉に言い表すのが難しい母親なのだろうか？出来れば前者であって欲しい。

901

妖精姉「妖精女王です」

姫・殿下・翁・爺・有力貴族「」「」「は？」「」「」

皆が呼吸を合わせて言う中で、僕は言葉も出ないほど驚いていた。妖精姉の言っている意味がわかんない。

妖精姉「妖精少女の母は妖精女王です」

固まる僕達に妖精姉は再度言葉を紡いだ。

第46話 事実（後書き）

誤字修正

妖精姉の言うには手紙には殿下の手紙には ↓ 「殿下の手紙には」
部分不要の為削除

要請女王の ↓ 妖精王女の

人族がおいので ↓ 人族が多いので

掻いていただいても ↓ 書いていただいても

第47話 娘

妖精姉「妖精少女の母は妖精女王です」

姫「え…え？」

それ以上の詳しい説明方法は無いとも言うように妖精姉は黙る。
いや、確かに無いけど！

殿下「…何故、今、それを言ったのですか？」

妖精姉「今までの皆さんの妖精少女に対する対応を見て、言っても
良いかと思いました。」

そうやら妖精族が妖精少女をどうしても連れ帰えろうとした要因の
一つにそういう事が関係していたようだ。

そして妖精少女が妖精族の女王の娘と知られると利用されるのは間
違いないと思い、妖精少女にも口止めをし黙っている予定だったよ
うだ。

—というか後者（言葉に表しにくい方）だった！

魔王『我は知っていたがな』

—なんだって！

魔王『妖精族の若者達の会話や、先程の妖精姉の妖精語での質問で聞かれたりしたからな』

—なんで黙っていたの!?

魔王『知っている必要があるか? 関係あるまい』

—それも…そうだね

魔王『まあ、知った時の驚きを見てみたかったただけだな』

—魔王!?

魔王『冗談だ。妖精族の若者の会話がしっかり聞こえたわけではないのだ』

「妖精少女」「妖精女王」という単語しか聞こえず、娘だとまでは思っていなかったらしい。

妖精姉の質問で「妖精少女が妖精女王の娘と言う事もご存知なのですか?」と聞かれて初めて理解したらしい。

ただあの場は知らない振りをしたほうが言いと判断し、解読できないと嘘を尽いた様だ。

—言ってくれたら良かったのに

魔王『言ったら少なからず驚きの反応をするであろう。それでは意味が無い』

―確かに：

殿下「何故そう思われたのですか？」

そう言うのと妖精姉は説明をした。

本当に妖精少女が大事にされているし、姫と有力貴族の娘を見る限り絶対に妖精少女に対して酷い事は行われまいだろう事。

殿下と話してみても国王も同じようにそんな事をしない人だと判断できた。

そして何より僕が妖精少女が妖精女王の娘だと知っていながら誰にもその事を話すつもりがない様子だった事等が、ここに居る人たちを信用出来ると判断したようだ。

妖精姉「先程の手紙にも妖精少女を妖精女王の娘と伝えた旨を記載しました」

殿下「：勝手な判断をして大丈夫ですか？」

妖精姉「勝手な判断ではありません」

妖精姉が言うのは先程届いた手紙に妖精女王の言葉も記されており「妖精姉が信頼に値すると判断するようなら真実を明かしてよい」とあったそうだ。

ただ何故そのような判断を妖精女王がしたのかまでは分からないそうだ。

—そうなの？

魔王『あったな』

—なんで言わないの？

魔王『真実が何か分からなかったからだ』

—でも妖精姉は嘘は言って無いって

魔王『「嘘」は言っておらん。ただ全てを申してなかったただけだ』

—ああ言えばこう言う…

妖精姉の言葉に翁が「妖精姉の申すとおりですか？」と言う翁の言葉に頷く。

翁「何故その事を仰らなかったのですか？」

—そう言われても黙っていたのは魔王だから！

と言える訳も無く、仕方なく魔王が言ったとおり「真実が何か判断しかねた」と伝えた。

しかし翁が「貴方は妖精族の若者達の言葉で女王の娘である事を知っていたはずなのに？」

―さすが翁！するどい。

しかし僕は開き直って白を切りとおす事にした。

僕「それが真実と結びつきませんでした」

翁「何と？」

僕「僕にとって妖精女王の娘と言うのは左程重要な事では無かった
ので」

翁「重要な事では無いと？」

僕「はい」

翁「何故そう判断した？」

僕「妖精少女は妖精少女でしかありませんから」

それを聞いて翁が「他国の姫君を…」と言う。

僕「例えそうでも妖精少女は僕達の家族に違いはありません。今
まで通り家族として守るだけです」

そう言うのと姫も「そうですね」と頷いた。

「それに…」と僕は妖精姉の目を見て「妖精姉も言わないようでしたので、黙っている事が最善だと判断しました」と伝える。それでも何か言おうとした翁を殿下が制する。

殿下「別に知ったとしても若の言うとおりで何も変わりませんよ。それとも利用するつもりでしたか？」

殿下の言葉に翁は「ありません」とはっきりと言った上で

翁「ワシが言いたいのには王族の姫君としての扱いをしなくて良いのか、という事です」

僕「ああ、なるほど…妖精少女」

妖精少女「何？」

僕「姫様になりたい？」

僕の言葉に「ん〜」と考える妖精少女に「今まで通り僕や姫や有力貴族の娘と一緒にいることが出来なくなるけど」と伝えると「今のままが良い！」と元気に答えた。

僕「妖精姉はどうですか？妖精少女に対して王族の姫君として熱かったほうが良いですか？」

妖精姉「いいえ。妖精少女が望むままにしてあげて欲しいです」

僕「なら問題ないですね」

翁が頷く。

今まで通りで行く事に決まったが、もしその事を知った誰かが良からぬ事を仕出かす恐れもあるので、妖精女王の娘という事は口外しない事に決まった。

空の館は城の最深部に位置し、男子禁制で姫の騎士団も居るので僕の後宮（じゃないよ！住まいだよ！！）という事を差し引いても、この国で1・2を争う安全な場所だと言えるだろう。

僕「そういえば妖精姉もやっぱり姫になるんだよね？」

妖精姉「なりませんよ」

僕「そうなの？」

妖精族の子育ては人族と違いまとめて行われる。

そして小さな子どもの面倒を見るのが、一人前になる前の妖精族の若者達なのだそうだ。

妖精姉は妖精少女の年代を見ていた一人だから姉となるらしい。

妖精女王の娘もそれ以外の子どもも一纏めに面倒を見るというのは驚きである。

妖精姉「そもそも妖精女王の地位は妖精族は血縁による世襲ではありませんか」

妖精族は女王制だそうだ。

これは女性の方が争い事を起こさないだろうという事から始まったと予測されるが、遥か昔から女王制なので詳しいことは良く分かって無いらしい。

だが妖精族の歴史では女王制で問題がこる事は殆ど無く反対意見も出る事が無かったので今までずっと続いてきたらしい。

女王が絶対君主ではなく各集落が集まった際の議長のような立場であるのも要因の一つと言えるらしい。

そして女王は各集落から推薦された娘が代表となって、一人に決まるまで話し合いを続けるらしい。

例えば途中で女王が不在になってもその事は変わらないと言う。

気の長い種族だ。

妖精姉「だからこそ議会がどれくらいで意見が纏まるか分からないんです」

殿下「なるほど」

殿下は妖精姉をみて頷くと「しかし―」と思案するように言った。

殿下「そうなる妖精少女が若の奥さんというのは問題あるのかな？」

僕「は？」

殿下「いえ、だって世襲制ではないとは言え妖精女王の娘で姫には変わりありませんし」

翁「そうなると外交の問題となってくるな」

―そこまでの話になるの！？

魔王『なるであろうな』

―いや、違うから！

僕「そもそもが妖精少女が僕の奥さんというのが間違いだからね！？」

姫「そんな事ありません。妖精少女も家族です」

僕「いや家族だけど奥さんじゃないよね？」

妖精少女「奥さんになるー」

姫「妖精少女もこう申しておりますし」

僕「意味分かってないだけだと思うよ！」

姫「そんな事ないですよね」

妖精少女「うん！お兄ちゃん達とずっと一緒に居る事！！」

妖精少女の言う事に「その通りですよ」と姫が頷く。
間違っていないだろうけど若干違うから!!

妖精姉「その事に付いては先程、妖精女王宛の手紙に記載させて頂きました」

僕「何て事を仕出かしてくれたんだ!!」

妖精姉「え、いや、さすがに本当にそうだとは書いてませんので問題は無いですよ」

その言葉にほっと胸を撫で下ろす。

妖精姉「ただ妖精少女の気持ちは固く、いずれそうなるだろうと」

「問題大有りだ!」と叫ぼうとしたが「手紙を確認するか伺ったのに確認なさいませんでした」と妖精姉に言われる。

ぐうの音も出ない僕が何とか言おうとする前に姫が「あっ!!」と声を上げた。

姫「妖精少女が妖精女王の娘という事は、妖精少女のご両親宛の手紙は妖精女王に届くという事ですよね!？」

妖精姉「そうですね」

姫「大変だわ…」

姫が呟く。

「これ以上何が大変なのですか？」と恐る恐る聞いてみると、姫は先程^{したた}認めた手紙の内容を話した。

どうやら姫が妖精少女と出会ってからの妖精少女の事を書き綴ったらしい。

その中でどれだけ妖精少女が可愛く愛おしいかも書いたそうだ。

―何が問題なのだろう？

そして僕の事も妖精少女を最初に助けた人物である事や姫や有力貴族の娘を妻としている事を書いた後に、妖精少女も家族の一員として一緒に暮らしてる事を書いたらしい。

妖精姉「その何処が問題なのですか？」

姫「いずれは妖精少女がもう少し大人になったら若の正式な奥さんとして迎えて本当の家族になりたいと書きました」

―なんてことするだー！

姫「そしていつか直接お会いしてお話しをし、若や私達を知っても

らえたらと思ってます、と書いてしまったわ」

一国の姫君が他国の女王に、しかも国交がまだ正式に結べているわけが無い状況で姫君がいうべき内容ではない。

その事に思い当たって姫は「やってしまった」と言っているのだ。一同が「それはまずいかもしれない」と思い翁が急いで手紙を差し押さえる為に早馬を飛ばそうとしたの妖精姉の言葉が止める。

妖精姉「それなら同封した妖精少女の手紙に『姫は妖精女王が母君と知らずに妖精少女の母君宛に手紙を書かれました』と添えてあるので大丈夫かと」

例えその一文があってもそれは「同封された別の手紙」に書かれた内容であり、無視したらなかった事にされる程度のものである。本当に大丈夫か？という表情の面々に「妖精女王はそこまで器量の狭い方ではありませんので、ご安心ください」と妖精姉が言う。

妖精姉「逆に妖精少女が大事にされていると分かり喜ばれるでしょう」

それを聞いて姫がほっと息をつく。

妖精姉「まあ若の奥さんになると言う件についてはどう思われるかわかりませんが」

僕「あ、う、あ…」

妖精姉が悪戯っぽく言うが僕は言葉にならない。

翁の行動を思い出し手紙を差し押さえる為に伝令を！と叫ぶも翁に「伝令は最速のものを選んだ、間に合わんよ」と言う。

―自分も早馬を飛ばそうとしたくせに！

魔王『間に合わなくても、事が国同士の問題なら飛ばす他あるまい』

―じゃあ飛ばしてよ！

魔王『お主の事程度なら飛ばす必要も無いという判断だろう』

―皆酷いや

どんよりとしている僕に妖精少女が「元気を出して」と頭を撫で、
姫も「大丈夫ですか？」と心配そうに覗き込んできた。

2人の優しさが染み渡る。

―やっぱり僕には家族しか居ないんだ！

僕は姫と妖精少女と今はここに居ない有力貴族の娘の4人で田舎で
ひっそりと優しく暖かい家庭を築いていくんだ！と心の中で叫ぶ。

魔王『いや、だからその妖精少女を妻にするという事が問題となっているのだろうか？』

―そうだった：

魔王『しかもその火種に薪をくべたのは姫だな』

―確かに！！

現実逃避したくて適当なことを想像していた僕に魔王が容赦なく突っ込む。

一人反省会をしている僕を尻目に殿下が「取り合えずは妖精女王からの返答を待つしかないですね」と言い話は終わった。

空の館に戻ると僕と姫と妖精少女と妖精姉は応接室に集まった。

美女さんは姫の騎士団の訓練に戻って今は居ない。

椅子に腰を下ろすと僕は深いため息を付いた。

姫「お疲れですか？」

僕「まあ色々ありましたからね」

妖精姉「妻にするという事を妖精女王に伝えた事ですか？」

僕「それが一番の悩みの種ですね」

僕はそう言っていると頭をかいた。

別に妖精少女が嫌いなわけでも無いが、奥さんとして迎えたいかと言えはそうではなく、妹のような存在だ。

娘を持った事が無いのでさすがに娘とは言えない。

僕「そもそも妖精姉は僕が妖精少女を奥さんとして迎える事に賛成なのですか？」

妖精姉「賛成も反対もありません」

僕「どちらでも無いと？」

妖精姉「決めるのは妖精女王です」

僕「妖精族の婚姻は親が決めるんですか？それとも妖精女王？」

僕の言葉に「どちらでもありませんよ」と首を振る妖精姉。

妖精族同士なら特に問題なく当人達の問題でしかないが、僕が人族（実は魔族だけど）である事が問題らしい。

他種族との婚姻に加えて妖精少女が精霊王から言葉を掛けられる程の使い手という事が問題をややこしくしているらしい。

妖精女王の娘というのはそれに比べると些細な問題なのと言う。

妖精姉「そもそも他種族との婚姻は無い事ではありません」

僕「そうなの？」

妖精姉「はい。何かの偶然で妖精族の里に紛れ込んだり、または外に出た妖精族が別種族と家庭を持つ事はごく稀にあります」

僕「そうなんだ」

妖精姉「まあ他種族といっても人族か魔族が殆どで、それ以外の種族とは無いといっても過言ではありませんが」

僕「魔族でもいいんだ」

「人族も魔族も私達からしたら違いは左程ありません」と言う。

姫「でも他種族とのロマンスなんて素敵ですね」

妖精姉「実際はそうでも無いようですが」

姫「どうしてですか？」

妖精族「妖精族と人族、魔族は時間の流れが違います」

人族は100年も満たない時間しか生きられない。

妖精族は百数十年〜二百数十年。魔族は長いもので数百年生きる。その時間の流れが圧倒的な絶望感となることが多い。

その事を聞いて姫が息を呑む。

姫のそして妖精少女や有力貴族の娘と僕の関係に置き換えて、何れ残されていく僕に何かを思っただろうか。

姫「でも、二人の愛の結晶が生まれれば！」

妖精姉「人族と魔族の間では元々同じ種族だった為に子が成せ易いですが、妖精族との間には殆ど成す事が出来ません」

—そうなの？

魔王『まあ全くと言うわけでは無いが、少ない事は確かだろうな』

妖精姉「まあゼロではありませんけどね」

姫の気持ちを慮おもんばってか妖精姉が付け加える。

それを聞いても姫は何も言わなかったが。

妖精姉「何にせよ、妖精少女がその気である限りは、後は妖精女王の判断次第です」

—うん。まず妖精少女に考え直すように説得しようよ。

姫が「やはり手紙の返答を待つしか無いんですね」と妖精少女の頭を撫でる。

―妖精少女は僕達の家族なんだ。どうにか守らなければ

魔王『そうだな』

嬉しそうに目を細める妖精少女を見やり、妻に迎えるとかではなく何かしら現実的な方法で妖精少女を守れないかを考えていた。

第47話 娘（後書き）

誤字修正

妖精女王だと知っていたいながら ↓ 妖精女王の娘だと知っていたいながら
松しかない ↓ 待つしかない

第48話 独占欲

僕と姫の式の準備が始まった。

式は次の新芽が芽吹く頃なので季節を2つもまたぐのにも関わらずだ。

殿下が「国を挙げての挙式になりますので、これでも準備期間が短すぎるくらいです」と言っていた。

翁の「若が逃げる前にしなくては」と言う言葉に「逃げませんよ!」と反論しながらも、国を挙げての挙式と言われると逃げ出したくて仕方ないのも事実である。

各国には既に挙式の招待状が送られている。

城下では既にお祭り騒ぎで、これが挙式の日から数日後まで続くそう。

祝福されているのは嬉しいが、そんなに騒いで大丈夫なのだろうか？

挙式に関する色々は翁と有力貴族が全力で取り掛かってくれているそう。

警備はもちろん、列席する予定の各国の要人の席順はとても重要で、それ専用の組織を臨時で立ち上げたくらいだ。

各部署から優秀な人材を20名ほど集めて、今から席順などを決めていくらしい。

「何もそこまで」と思ったが、国の大小で席順を決めるわけには行かず、わが国の友好国や歴史の長い国の他に国同士の友好関係や宗教観など、色々考慮しなければならぬらしい。

僕「でも殿下の結婚式ならいざ知らず、僕と姫の結婚式でそこまで人が集まりますか？」

翁「殆どの国が来ると思われるぞ」

翁が言うのはこの国は位置的に中々重要なのだそうだ。

国自体は特にめばしい鉱山がある訳でもなく産業も農業も特筆すべきものは無い。

ただ大陸を横断する険しい山脈に国の3方向が囲まれている。

山脈を抜ける大きな街道はわが国に面しており、物流の拠点として成り立っているのである。

山脈を迂回する事も出来るが、その場合はわが国を抜ける3倍以上の時間が掛かる上に幾つもの国境を越えねばならない為にお金も時間も掛かってしまうらしい。

だからどの国もある程度の人物が来ると予想されるのだ。

こういう各国の要人が集まる場は他国との情報交換を行える得がたい場でもある為に、数日前から国を挙げての盛大な宴が催されるのが通例らしい。

僕「その全ての宴に顔出ししないとダメとか？」

翁「国が主催する大きな宴は全てですな」

絶句する僕に「私もなので一緒に頑張らしましょう」と殿下が言ってくれる。

いや、何の慰みにもなってないから！

姫と有力貴族の娘と美女さんが式で着るドレスについてあれこれ話し合っている。

妖精少女は妖精姉と一緒に殿下の所にお茶を飲みに行っている。

この世界はスカートの広がったドレスが一般のようで、結婚式のドレスも同じように広がったものの上に物凄く色々とデコレーションされているようだった。

それを見て僕が「うわ、良くこんなを着れるね」と声を出してしまう。

どうやってスカートは広がっているのかと思ったら金属製のコルセットで広がった型を作っており、それを装着しているそうだ。

聞いたら騎士の鎧の上半分くらいの重さが金属の型だけであるそうで、そんなのを着て笑顔で踊っているのかと思うと、女性ってすごいと感心してしまう。

姫「こんなのと申されましたも…どこにどの様なものがあるんですか？」

僕「あゝ僕の居た世界ではこのような広がったドレスは使用されていないもので…」

有力貴族の娘「ではどの様なドレスなのですか？」

僕は紙とペンを取ると適当な絵を描く。

と言っても絵心もデザインのセンスもある訳ではないので、人っぽ

い曲線に何とかウエディングドレスに見えなくも無いような絵を描く。

—なんとか、出来たかな

魔王『何だこれは、魔獣か？』

—ドレスを着た人だよ！！

姫「これは…」

有力貴族の娘「私達の知るドレスとは全然違いますね…」

僕「そうだね。でも姫の騎士の制服をズボンから膨らんでいないスカートにした感じ、と言うのが一番近いかもね」

有力貴族の娘「姫の騎士団の制服を…」

姫「それは…以外と…」

姫と有力貴族の娘が「あーでもない、こうでもない」と言うのを美女さんが紙に絵で書いていく。中々の腕前だ。

僕が書いたものとは全然違う、ちゃんとしたドレスのように見える。姫と有力貴族の娘が「中々言い感じ」と盛り上がるのを身ながら「今までに無い形のドレスで大丈夫なんですか？」と聞く。

各国の要人が来るような席で大丈夫なのか？

美女さん「肌の露出的が多いわけでもなく、ただスカート周りの形が違う程度ですから問題は無いと思いますが――」

「一応、国王殿下や翁様に確認をしましょう」と言うと言った絵を持って部屋を出て行った。

姫と有力貴族の娘は何色にするかで盛り上がっている。

姫「やはりここは黒でしょうか？」

有力貴族の娘「しかし姫は華やかな色が」

そこに美女さんが妖精少女と妖精姉を連れて戻ってきた。

美女さん「問題ないそうです」

それを聞いて喜ぶ姫と有力貴族の娘。

妖精姉は美女さんが置いたデザイン画を見て「このような形の服もあるんですね」と感心していた。

僕「妖精族は結婚式でどのような服を着るの？」

妖精姉「妖精族に結婚式という概念はありません」

姫「そうなんですか？」

「ええ」と頷くと「しいて言えば、精霊への誓いの儀式がそれに近いかもしれません」と言った。

妖精族は一緒になる時に精霊に誓いを立てるらしい。

その時に着るのはドレスなどではなく、白い布を体に巻く程度なのだと言う。

姫が「妖精に誓いを立てるなんて素敵ですね」と妖精姉の言葉に言う。

有力貴族の娘「白も中々いいですね」

妖精姉「何がですか？」

有力貴族の娘「姫の着るドレスの色です」

妖精姉「なるほど」

そう言うとは色が良い、とまた話し出す。

それをニコニコ聞いてた妖精少女が「桃色！」と声を上げた。

妖精姉「姫お姉ちゃんは桃色が良い！」

有力貴族の娘「…確かに」

姫「そうね、桃色が良いわね」

妖精少女「でねでね、有力貴族のお姉ちゃんは一紫！」

有力貴族の娘「え？私？私は良いわよ」

そういう有力貴族の娘に「なんで？」と妖精少女が聞く。

妖精少女「お兄ちゃんとの結婚式でしょ？」

結婚というのは奥さんとするもので、有力少女のおねえちゃんも奥さんだからするんだよね？という。

何と説明したものと困った顔の有力貴族の娘に姫が「そうね」と手を叩く。

有力貴族の娘「姫ちゃん！？」

姫「妖精少女の言う通りね。一緒にしましょう」

有力貴族の娘が「姫ちゃんの一生に一度の大事な日に何故私まで一緒に！」と反論するのを「私達は家族なもの」と姫が笑顔で答える。

—うん。有力貴族の娘を見る限り、やはり姫がおかしいんだな

魔王『お主は反論せんで良いのか？』

―僕が何を言っても姫の意思は変わらないからね。なるようになるよ

悟りの境地で答えたら魔王がおかしそうに笑った。

有力貴族の娘「若はいいんですか!？」

僕「当日の主役は姫ですよ。主役がそういうなら僕は何も言えませんが。ただ―」

「殿下と翁が許可するかまでは分かりませんが」と言うのと「早速聞いて来ましょう」と姫が部屋をでていつてしまった。

美女さんと有力貴族の娘が急いで後に続いて出て行くのを見る。

妖精姉「なんというか…姫はすごい人ですね」

僕「そうだね」

感心したような呆れているような、そんな半々ま感じでいう妖精姉に少し吹いてしまう。

何となく和やかな空気が充満した部屋に爆弾が投下された。

妖精少女「わたしも一緒に結婚式する!」

僕・妖精姉「!?!」

「わたしも奥さんだから！」と笑う妖精少女に僕は驚きで何もいない。

妖精姉が何とか妖精少女は出来ないという事を必死で伝えているが「わたしも！」と聞かない。
魔王の面白がる笑いが伝わってくる。

―魔王、何か打開策を!!

魔王『あげればよいでは無いか』

―いやいやいやいや、妖精族とどうなるかも分からないのに勝手に
拳式とか、戦争する気なの!?

魔王『確かにな』

『仕方ない』と言うと自分の言うように言えという。

僕（魔王）「『妖精少女はまた今度ね』」
だ

妖精少女「何で？」

僕（魔王）「『妖精少女がまだ（幼い）小さいからだよ』」

妖精少女「もう大人だよ？」

僕（魔王）「『（毛も生えて―「いえるか!」）式はドレスを着て長時間立って居ない（いかん）ダメなんだよ。この前の賀会の時より長い時間を』」

その言葉に「ううう…」と言う妖精少女。

妖精族はスカートの膨らんだ人族のドレスを来た事が無かった様で祝賀会の時のドレスの重さと窮屈さを思い出してうめいた。
あの時もすぐに耐え切れなくなって会場をすぐに出たのだ。

―魔王ありがとう。とりあえずやばくなったらまたお願い

妖精少女「我慢…できるもん」

僕「本当に?」

妖精少女「するもん」

僕「嘘はダメだよ?」

そう言う僕は妖精少女の頭を撫でて「無理に式を上げてもいい思い出にならないよ」と言う。

どういう事かと僕を見上げる妖精少女に「ドレスが辛くて我慢して、妖精少女は楽しいかい?」と聞くと首を横に振り「たのしくない」と言った。

僕「だから妖精少女が大人になって式を楽しく迎えられるまで少しだけまとう」

妖精少女「でも…」

僕「大丈夫。式を挙げて無くても妖精少女は僕の大切な家族に代わりは無いよ」

「だから今回は姫と有力貴族の娘をお祝いしてくれるかな？」と言うとと妖精少女は目を細めて「うん！」と笑った。
妖精姉が後ろでホッとしている。

何とか妖精少女を丸め込む（と言うと言い方が悪いが）事が出来たようだ。

殿下の所に向かった姫達が戻ってこない。

さすがに殿下や翁に止められて姫が諦めきれずに長引いているのか
と思ったところに有力貴族の娘が戻ってきた。

僕「ど、どうしたの？」

肩を落とす有力貴族の娘に声を掛けると何かを小声で呟いた。

「え？」と近づいて聞こうとした所、姫が美女さんを伴って入ってきた。

有力貴族の娘が「そんな…」と小さく呟き、姫は満面の笑みである。

僕「え？もしかして…」

美女さん「認められました」

僕「え？」

美女さん「姫様のご要望は認められました」

僕「それって」

姫「有力貴族の娘も一緒にいいそうよ」

そう言うとき姫は小躍りしかねないぐらい舞い上がっていた。

—まさか通るとは！

魔王『驚きだな』

姫は喜びで妖精少女と手を取り合って喜んでいるし（妖精少女は半分もわかって居ないだろうけど）有力貴族の娘は脱力状態である。美女さんに「どういう事なの？」と聞くと説明してくれた。

当初はもちろん殿下も翁も爺も有力貴族さへも「ありえない」と否定したそうだ。

それはそうあろう。

一国の姫君の挙式に妾（他国からはそう判断されるのは当然である）が一緒に式を挙げるなど聞いた事も無い。

だが姫は「聴いたこと無いからといって、ダメなわけではない！」と反論する。

それは反論ちゃう。

意見は平行線を辿り、後は姫が折れるのを待つだけと言う所で裏切りが生じた。

何と爺が「姫が言うとおりにするのが良いかも知れません」と言い出したのだ。

爺の援軍を受けた姫は息を吹き返し「何事にも新しきはあります！」と言った。

何か憑き物に憑かれたような姫に「落ち着いてくだされ」と爺はたしなめる。

翁「どういう事じゃな？」

爺「式には各国から要人が来ます」

翁「当たり前じゃな」

爺「各国は他国との情報交換の他に殿下の後の座を手に入れようとしてくるでしょう」

翁「それが悩みの種ではなるな」

何処の国も殿下の後の座を得るためにそれなりの娘が選ばれて同行してくるだろう。

殿下はそれを相手にしながら不快に思わせないようにあしらわなくてはならない。

翁「それまでに后を決めるか…来る者たちの中から誰かを選ぶのか…頭が痛い問題じゃ」

爺「そうですね。だがそれは殿下だけじゃありません」

殿下程では無いにしても後二人、各国から狙われる相手がいる。その一人が領主息子だ。

ただ領主息子は対外的には内乱時の判断ミスにより戦果を剥奪され、現在に至るまで要職に就く事は無く国中を走らされている。

多くの者達は例え執政の孫だろうが政への影響力は少ないと思うだろう。

だからこそ領主息子に近づく国は危険だとも言える。

翁「あやつには婚約者がいる。さっさと夫婦にさせれば問題あるまい」

そう言って領主息子の婚姻はさっさと決まってしまったそうだ。

—というか婚約者がいたのか。

魔王『貴族の嫡男だ。生まれた時から居てもおかしくあるまい』

そういうものらしい。

そしてもう一人と言うのが有力貴族の娘である。

元々国王派とは言え現在は内務大臣である有料貴族の一人娘であり、結婚をすれば有力貴族の跡取りとなるのだ。

男にとってこれほど魅力的な結婚相手は居ない。

殿下と同じく各国の独身男性が放って置くわけが無いどころか、来る独身男性全員から確実にアプローチがあるだろう。

翁「だからさっさと若の奥さんである事を公表してしまおうと言うのだな」

爺「まさか他国の王族の妾をよこせと言う者は、そうそうおりますまい」

自国の者がいえば不敬罪、他国の者がいえば宣戦布告と言えるだろう。

どうせ僕の奥さんというのが事実として既にあるなら、一々誰から会ってどう断るか等と考えるより「僕の奥さんだから」と会うこと自体拒否してしまった方が楽というものだ、と爺は言う。

翁「確かにな」

有力貴族「そうしてもらえると私も娘も気は楽ですが…」

有力貴族の娘へ縁談を持って来ると言う事は、有力貴族も相手をし

なくてはいけない。

それが一気に無くなれば物凄く楽である。

しかし、それと式を挙げるのは別問題ではないだろうか？

姫「でもちゃんと式を挙げないと相手は納得しないかもしれません」

翁「そうじゃな。縁談を断る口実だと思いごり押ししてくるやも知れん」

先程も言ったとおり一国の王族の妾を「よこせ」というのは宣戦布告と同じだ。

だがまだ妾として囲われても居ない状態なら小国などは無理でも大国なら「私にもチャンスを」と言うのは社交辞令として押し通す事も可能である。

社交辞令とは言えそれなりの身分の者に言われた事を此方から「社交辞令で無いと思ってました」とは言えないのである。

―面倒くさい！色々面倒くさすぎる！！

魔王『どこもこんなものだ』

―魔族も？

魔王『まあな。ただ魔族は人族よりすぐに力に頼るものが多いというだけだ』

―それもどうなの？

これで大勢は決したと言えるだろう。

すでに翁と殿下は「姫と並んで誓う訳にはいかんが、姫の後ろに控えてなら…」とどの様に式を挙げるかの話まで始めている。

姫は「じゃあ決定で良いですね!」と畳み掛けると殿下が「まだどのような形になるか分かりませんが、そのようにします」と頷いたのだ。

美女「―という事で、有力貴族の娘も一緒に式を上げる事に決まりました」

僕「あれ? そういえば説明時に有力貴族の娘は何も言わなかったようだけど?」

美女さん「それは―」

姫が乗り込んだ場は殿下の執務室である。

その場には殿下の他に執政である翁や内務と外務の大臣である爺と有力貴族が居て、国の方針（と言っても結婚式の話だけど）を話し合っているのである。

いくらそれが自分の事であれ、意見を求められても居ないのに不用意に発言などは出来ない。

僕「え? 出来ないの?」

有力貴族の娘「…出来ないわ」

有力貴族の娘は小さな頃から政について父親である有力貴族に躰けられていた。

将来、有力貴族の娘が地位のある者に嫁いだとしてもその権力は夫や家に付属するものであり、有力貴族の娘自身にあるわけではない。だから権力を使って好き勝手に良いわけでもなく政に口を出す権利も無い、夫となったものを支えるよう心がけなさい、と。

有力貴族は代々続く名門貴族の嫡男として色々と見てきたのだろう。だからこそ有力貴族の娘には小さな頃からそういう事にならないように良い含めてきたのだ。

そしてその結果、何も言えないままに一緒に式を上げる事に決まったというのだ。

僕は項垂れる有力貴族の娘の頭を撫でて上げる。

有力貴族の娘「…何よ？」

僕「世の中にはね、本人の意思では避けられない事が山ほどあるんだよ」

優しい笑顔でそう言う「若が言うとなんとも言えなくなるわー」と有力貴族の娘が呟いた。

有力貴族の娘「―切実過ぎて」

笑顔の裏で僕は少し泣いた。

姫と妖精少女が美女さんにドレスの絵を見ながら「ここに羽をつけよう！」と言ってるのが聞こえてくる。

僕「：せめてドレスくらいは意見を伝えないと、どんなものになるかわかんないよ？」

有力貴族の娘「そうね、行って来る」

力なく歩いていく有力貴族の娘を見送る。

魔王『お主は驚きはしたが否定はしないんだな』

―有力貴族の娘の一緒って事に？

魔王『そうだ』

―実を言うと姫の意見に賛成なんだ

魔王『ほう』

先程の美女さんの話にあったように例え全て断るとは言え、他の男が有力貴族の娘に近づくのは我慢がならない。

魔王『意外と独占欲が強いのだな』

―自分でも驚いているよ

自分で納得して決めた事とは言え「自分の妻だ」と言張る事なんて出来るとも思わなかったけど、今は言う事に躊躇いは無い。

その上、この独占欲だ。

やはり魔王の影響は大きいと思っていたら『我の所為にするな』と怒られた。

第48話 独占欲（後書き）

誤字修正

以外 ↓ 意外

「たのしくな」 ↓ 「たのしくない」

要職に尽く ↓ 要職に就く

第49話 内政

殿下「何かお疲れのようですね」

いきなり執務室に押しかけてため息を付いた僕に殿下が声を掛ける。僕は殿下に「執務中に申し訳ないです」と言いながらも出て行こうとはしない。

殿下もそんな僕に出て行けとは言わずに黙々と資料に目を通しサインをしている。

翁と有力貴族は会議などの時意外は自分の執務室におり、殿下の執務室は基本的には殿下と翁のみである。

殿下「毎日、式の準備で追い回されて大変そうですね」

僕「まだ先の話なのに、何であんなに話す事があるんですかね」

本当に細かい事を一々確認される。

有力貴族の娘が非番の日などは2倍ではなく2乗である。

この前などドレスのデザインが変わったので見て欲しいと言われた。デザイン画を手渡されて見たが、この前見たのと同じが分からない。

「なんなの？脳トレなの？？」

魔王『ん？スカートの段が一段増えてないか？』

――：ホントだ

ただ単にスカートのフリルが一段増えただけだった。

正直どうでも良い気がするが、それを言うとは大変な目にあうのでそれは言えず「フリルが一段増えてさらに華やかになったね」とだけ伝えた。

余り増やしすぎると重くなって大変じゃないかと聞いたら、軽い生地を使うのでそれほど重くなく、コルセットをつけることを考えると全然平気らしい。
女性はやはりすごい。

最近の悩みは姫の騎士団の団員も巻き込まれて……と言うより取り込んでいることだ。

もちろん勤務中の団員は勤務をしているが、非番の団員の一緒に衣装の原画を見ているのだ。

姫が「姫の騎士団も式用に新しい衣装を作りましょう！」と言ったのが始まりだ。

さすがにそれは無駄使いじゃないかと思っていたが翁が「構わんよ」とまさかの許可を出した。

どうやら赤白両騎士団も勤務用で平時用（戦時は上から鎧を着用するだけ）、公式の式典用、そして婚礼などの礼服用で3種類はあるそうだ。

だから姫の騎士団としても礼服用を作るのは問題ないらしい。

ただそれだけならここまで大事にならなかったのに姫が「どうせなら実際に着る騎士団の皆に意見を聞きましょう」と言ったから大変

である。

騎士とは言えやはり女性なので大半の騎士団員が姫の意見に賛同して、非番の日に姫達とわいわい話し合っているのである。

大抵の騎士団員、それから外れたのはたった3名。

一人は美女さんだが、元々手伝っているが非番の日にわいわい言う感じではないだけだ。

残り2名も別に嫌だとか反対と言うわけではなくその反対で「自分にはセンスが無いので、意見など言えません」というスタンスで、新しい礼服には期待をしているようだ。

というか結局は全員が楽しみらしい。

―それに巻き込まれる僕はきついけどね

殿下と翁が仕事をしている場にただ何となく居るだけと言うのが居た堪れなくなって殿下に話しかける。

僕「この前、この国が流通の拠点だって言っていましたよね」

殿下「ええ」

僕「この城の場所は丁度真ん中くらい？」

殿下「そうですね。国を横断する中間地点のような場所にあります」

王都を中心に十字に大きな街道が通っている、

そして十字の道のそれぞれの点（国境に当たる部分）を戦で結ぶようにも街道が走っているようだ。

僕「もしかして小砦や大砦はその街道に立てられてる？」

殿下「そうですね、やはり他国の侵攻は街道を通り真っ直ぐ王都を目指す事が多いですからね」

僕「なるほど」

そう言って言葉を止めた僕に追うがどうかしたのか？」と聞く。

僕は「いえ、ちょっと不思議だったんですが、他国の侵攻を気にして街道を整備してないのかと納得しただけです」

翁「街道の整備じゃと？」

僕「あれ？違うんですか？」

翁「街道は人や馬車が良く通るで、特に整備せんでも道は無くなるまい。何かで街道が崩れたりした時は補強するがな」

僕「あゝその程度なんですね……」

道を整備するという感覚が無いために何処の国でも行われていないのか。

どう言ったものかと考えていると魔王が『どうした？』と聞いている。

―街道を整備する事を薦めるべきか考えてる

魔王『整備とは？』

―道を平らにし城下の道のように石を敷き詰める

魔王『ふむ』

―そうするだけで馬車などは速度を増すし、道の凹凸による痛みも減る

魔王『しかし、街道全部となると時間も金も掛かるぞ。石畳は特に』

―だよねえ。だから困ってる。アスファルトがあればなあ

魔王『あすふあると？』

僕はアスファルトの話をする。

と言っても僕もアスファルトの原料など知らないので大雑把になるが。

そもそもあれって石油で出来てるんだっけ？その程度の知識である。この世界では石油があるのだろうか？

魔王『あすふあると、なるモノは無いな』

「だから困ってるんだ

黙り込んだ僕に殿下が「どうしました？」と聞く。

「うゝん」とうなっていた僕は頭をかきながら

僕「本当なら街道の整備をしたほうが良いと言っただけど、時間もお金も莫大に掛かりそうなので困ってる」

翁「街道の整備だど？」

僕は魔王に伝えたように街道を整備するメリットを伝える。

それを聞いた殿下と翁は「なるほど…」と言うと爺は鈴を鳴らし部下を呼ぶ。

そして「内務大臣達をを呼ぶように」と伝えた。

すぐに爺が「どうしましたかな」と他の内務官と共に姿を現す。

翁は街道の話をするとう爺も「なるほど」と腕を組んだ。

僕「いや来て貰って申し訳ないけど、石畳だと時間もお金も掛かりすぎるので現実的じゃないんですよ」

爺「確かに時間は掛かりますが一考の余地はありますな」

翁「確かに街道を整える事は国を豊かにする一歩かも知れん」

僕「因みに王都から国境までの道一本に掛かる時間と費用はどれく

「らいか算出できますか？」

すぐに内務官たちが地図を見比べながら話し合います。

それを見ながら翁に「他にも何か思いついた事はないですか？」と言ってくる。

取り合えず「実現可能かどうかは分かりませんが」と思いついた事を言う。

僕「街道にもう少し兵士の駐在所を作っても良いのでは？」

街道を旅する場合に野営をする場所は、大抵決まってくる。

そこに塀の駐在所を作るのだ。

一つの国境から王都までの距離と、人と馬車の一日の走行距離を簡単にし出し、適当に丸をつける。

そこに簡単な小屋を建てて駐在させるのだ。

小屋の兵士は王都側と国境側からそれぞれ5名ずつ、一日置きに一箇所移動していく。

一日目を移動なら二日目は小屋で待機をし、周りを巡回するのである。毎日5名ずつ送り出す事により、各小屋には王都と国境から来た10名の待機者と、その日新しく着た10名で、夜には20名になる。

そして翌日には前日待機していた10名がそれぞれ5名ずつ隣の小屋に移動する。

そして新たにきた10名でまだ20名になる、という考えだ。

これにより街道を今より安全に通過できる上に、兵がいるなら野営も安心だろうと思ったのだ。

翁「一つの街道に兵が500程か…」

僕「まあ全部は規模が大きすぎるので国境と王都の間だけでも出来たらいいのでは？」

翁「4本の街道で約2000…出来ない事も無いな」

翁は現在国中を回っている領主息子の率いる兵の数がそれくらいだと言う。

ある程度の目処が付いたら、その者達の再就職先として良いかもしれないというのだ。

小屋は簡易の小屋で良いと思うと告げる。

さすがに屋根だけとかだと兵士に気の毒なので最低限休める家であって欲しいが、街道の整備をするなら移動距離も変わるだろうし、何かあった場合に取り壊せるような建物が良いという話をする。

他にも教育の話をした。

これは市井の者などは生まれた時点で将来が決まっている事が多い。教育を受ける事が出来て職業を選択できるのはある程度裕福な層だけだ。

市井の者達にも簡単な教育として義務教育を受けさせる。

それは識字率を上げる為でもあるが、簡単な教育の中からさらに勉強を望む者はさらに高度な教育を受けさせることも出来る。

そして勉強する意思や能力があっても家の事情で教育を受ける事が出来ないような者に対しては国が援助する。
そうすれば人材も育ち優秀な文官を育てる事により国も良くなるだろう。

殿下「しかし国の援助を学問に使わない者も出てくるのでは？」

僕「現金で渡さなければ良いんですよ」

全寮制の学校を作り、能力があり勉強したい者はそこに通わせる。
進級をと卒業を實力制にすれば援助に値するか判断できる。

厳しいようだが能力の無い者は残念ながら進級も出来ないし援助も切られる。

卒業後は必ず城で文官として働いて貰う事が援助の条件である。

「折角育てたのに他の国とかに行かれても困りますからね」と言う
と翁は「確かに」と笑った。

僕「問題は派閥を作られたりエリート思考ですが、それも幼い頃からの教育で何とかなるでしょう」

翁「はばっ？ えりーとしこう？」

僕「派閥は何ていうか簡単に言うと、最初に自分の仲間を作ります。
自分が卒業した後も残った仲間が新たな仲間を作ると言うのを繰り返し、仕事に付いた後も仲間達で結託して物事を動かそうとする集団ですよ」

翁「ああ、昔の貴族が我が物顔でいた次代の王宮がそうじゃったな」

エリート思考に付いても説明する。

これこそ貴族の思考なので説明は簡単で、それを優秀な成績で卒業した者達である自分はすごい、という事に置き換えたら終わりだ。

翁「しかし義務教育と言うのは実行するのは難しくないか？」

僕「そうですね。まずは王都で子どもを対象に行ってはどうかでしょうか？」

殿下「子どもですか？」

僕「1年程で構わないと思います。文字の読み書きと簡単な計算を教えるのです」

殿下「王都だけでも何千人という子どもが居ますが？」

僕「成人前から数えて8つくらいの子どもの何人くらいでしょう？」

翁「さあもう。2、3000は居るのではないか？」

僕「全員は無理ですか？」

翁「教える者の数が圧倒的に足りん」

確かに子どもの数が多すぎる。

僕「では最初は公募しましょう」

王都に「希望する対象の年齢の子どもは無料で読み書きや計算を教える」と触れを出す。

志願者の数次第だが、多ければ裕福な家庭など自分達で学費を出せるような所は対象外にする。

その中からやる気がある者は学校に入れる。

学校の授業の一環として下の者に勉強を教えるようにする。

そうすれば義務教育も行える上に、教える側の人間性も見れる。

僕「ちよつと強引過ぎる論法ですかね？」

翁「まあ人間性云々は別として、勉強を学生が教えるのはアリかも知れんな」

殿下「そうですね。勉強を教える教師の数も確保できますし」

翁「それに金もかかりませんしな」

そう言うとう翁が笑う。

学校の卒業生は王城へ上がる。

途中で学校をやめる者も能力によっては教師として子ども達に勉強を教える。

もしくは他の町に派遣したり出来るかもしれない。

そして他の村でも勉強を教えてやる気と能力のある者だけ王都に呼

んで学校に入れば良い。

翁「良い事づくめのような気がするな」

僕「まあ毎年莫大なお金が掛かりますから、そうとも言えませんが」

翁「確かにの…」

僕「将来的に何かしらの技術も教えることが出来れば工業や商業なども発展するかもしれませんね」

翁「ほう」

僕「色々な所から職人を引き抜き教える。育った者達が次代を育てたり国のどこかで腕を振るう。そうすれば国は発展しますよ」

爺「それはすごい」

僕「それには街道整備より物凄い時間が掛かりますけどね。ただ将来的には色々な技術を学べる学校が国の最大の産業になり、国を守る事に繋がりますよ」

殿下「学校がですか？」

僕「どこよりも高い技術や教育を受ける事が出来る用になれば他国からも入学希望者が出てくるでしょう。」

「そうなるにはどれだけの月日が掛かるか分かりませんが」と言う。

翁「しかし無料なら人が着ても金が掛かるだけだろう」

僕「学費をとれば良いじゃないですか」

王子「学費を取るのですか？」

僕「国の援助を受ける権利はこの国の国民で、卒業後に国で働く人だけです。他国に戻る人は対象外で良いでしょう」

殿下「なるほど」

翁「して、国を守るとは？」

僕「各国からの入学希望者は毎年学費を取ります。と言う事はそれなりの裕福な家庭か、身分のある家の子弟でしょう」

その子ども達が人質となり容易に手が出せないと言うのだ。

翁「それは…面白いのう」

僕「何度も言いますが、そうなるまでかなりの時間が掛かります」

殿下「しかし一考の余地はありますね」

そう言うと一人の文官を見る。

文官は僕のいう事を必死で文字に起こしていたのだ。
先程の街道の警備に付いても別の文官が同じように書き起こしていた。

実際にやるかどうか分からないのに、本当にご苦労様です。

翁「まだあるか？」

僕が期待して言う。

そんなに思いつかないよ、と思いながら思い出した事があって「孤^{みな}児^{しじ}…」と言う。

爺「孤児？」

僕「王都の裏路地に行くと多いと聞きます」

殿下「残念ながら数は減りません」

僕「孤児というかスラムに住む人を国が保護しましょう」

翁「何と？」

孤児が生きる為に犯罪を犯し、それがさらに孤児の迫害へとつながり犯罪を犯すという悪循環に繋がる。
だから国で全員保護するのだ。

翁「全員とな！？それこそ読み書きを教える子どもの比では無いぞ？」

僕「ただ保護するだけではありません」

保護した子供達に居食住を保障する代わりに労働をしてもらう。

もちろん年齢にあった労働をしてもらい、一部を積み立て一部を渡す。

農作業を手伝わせたり、王城の下働きをさせたり。

そして教育も受けさせる。

兵士になりたい者は兵士の訓練を受けさせても良い。

もしかしたら騎士になるくらいの腕の者も居るかも知れない。

ある程度の年齢に達したら就職先を探す。

今まで通り働いたりするかもしれないが、一定年齢を超えると自立してもらう。

自立の資金は今まで働いて積み立てたお金を渡し、それで住む家を探す。

僕「そうすれば…まあ孤児も犯罪も減るし、労働力も増える…かな？」

翁「なるほどのう」

僕「何度も言うけど、どれもお金が掛かりますからね」

殿下「それでもどれも行いたいですね」

爺「貴族から接收したので結構な資金があるとは言え…」

さすがに全部を行うのは無理である。

殿下「優先順位をつけるとしたら若ならどうします？」

僕「そうですね…孤児、街道警備、街道整備、学校？ いや、孤児、学校、街道警備、街道整備？」

爺「何にせよ孤児が一番最初なのですか？」

孤児を含むスラムに住む者たちを保護する事で大人は街道整備などの仕事が出る。

他の女性や子どもは王都の外で農業を行わせれば、食料事情もよくなるだろう。

勉強を教える事で子どもに勉強を教える人材を育てる事が出来る。

僕「だからスラム街を何とかするのが最優先ですね」

翁「ふむ」

僕「一遍には無理なので、順を追ってやっていけば、まあ無理は無いかと」

翁「順…」

まずスラムの人たちに説明をちゃんとして保護する。

もちろん、会いたいときにはすぐ逢えるようにする事で安心感を与える。

同時に病人や妊婦や老人も保護する。

そして残った大人達に話をし、職を斡旋する。

そして住民が全員納得した地域からスラムの家を取り壊して集合住宅を立てる。

そしてそこに元々住んでいたスラムの人たちが住めるように手配する。

密集したスラム街をなくし道の広い区画を作り、何箇所か兵の詰め所を作る。

僕「何区画か整備をし綺麗な家にそのまま住んでもらえる事が分ければ、どこも自分達も同じようにして欲しいと思うでしょう」

爺「しかしそれこそ莫大な金がかかるな」

僕「まあそこは家賃でどうにかできるようにすればいいと思いますよ」

殿下「家賃を取るのですか？」

僕「国営の集合住宅ですし、仕事も斡旋してますしね。それに国が住む所と仕事を斡旋してくれると噂が広まれば、色んな所から人が集まると思いますよ」

翁「それは…怖いな」

僕「まあ人材も集まると考えるしかないですね。街道の整理や開墾などやれる事は色々ありますしね」

翁「開墾はどこを行うのだ？」

僕「王都の隣にも沢山平原はあるじゃないですか」

さすがに全ては無理でも開墾できる場所が残っている。

人が増える事を見越して農作物を育てて置く事は間違いいではないだろう。

余れば輸出すればいい。

働いてお金が溜まれば良い所に住む為に引っ越す者が出てくるだろう。

開いた所に新しい人を住まわせれば良い。

考え込んだ殿下たちに街道整備の時間や予算を計算していた文官たちが「試算できました」と言った。

4本の街道は長さがまちまちであるが、一番長い街道で試算した。王都側と国境側両方から工事を行うとして、各200名程度が作業の効率的に限界と予想。

両方から工事をして早くて2月といった所だと言う。

僕「作業工程を3工程に分ければもう少し早くなりますよ」

街道を掘り砂利を敷き詰め平らにしてレンガを敷き詰める。それと一緒に行おうとするから時間が掛かるのである。

街道を掘る物、砂利を強い詰めて平坦にする者、レンガを敷き詰めていく者、に分ければ問題ない。
しかもそれを道の片側だけ行っていく。

翁「片側？」

僕「一遍に全部すると馬車が通った際に作業が止まる。片方だけなら開いてるほうを通ればよいのだ」

そして片方がある程度進んだらもう半分も作業を始める。
そうしたら少しは早くなるだろう。

「それなら2ヶ月掛からないかも知れません」と文官たちが言う。

僕「ただレンガが足りるかどうか」

翁「国中の釜を使えば何とかなるだろう」

殿下「やりますか？」

翁「やりたいが、本当に実現可能かまずは検証が必要ですま」

爺「早速、本格的に検討させます。何から始めますか？」

殿下「若の言うとおり、スラム街と街道整備ですね」

翁「街道警備に関してはすぐにも行えるだろう」

「明日の会議までにはある程度結果を持ってきます」と爺は言う
と文官たちを引き連れて自分達の執務室へ帰っていった。

僕も「さすがにもう思いつきませんよ」と翁が何か言う前に言う。

「これ以上言われても一遍には出来んよ」と笑うと「お金も時間も
掛からないことなら歓迎じゃがな」と言う。

僕は肩をすくめ「もう少しここに避難させてくださいね」と言う
と「お好きなだけいいですよ」と殿下が笑った。

第49話 内政（後書き）

誤字修正

仲間達 ↓ 仲間達

街道を掘る物 ↓ 街道を掘る者

避難させてうださいね ↓ 避難させてくださいね

第50話 負傷

久々に王都を出る。

別に式の準備に辟易してでは無い。

―ではない！

魔王『何を言っている』

そんな事実が無い！

あくまでも今回は姫の騎士団の実戦演習だ。

演習と言っても国境線付近に住み着いている魔物の討伐任務である。国中を回っている領主息子に手ごろな相手を発見し次第、連絡をくれるようにお願いしていたのだ。

姫と妖精少女は近衛騎士団に任せて全員での出陣となる。

僕「で、何で白の騎士団団長と団員まで一緒に来るのですか？」

横を10名ほどの騎士を連れて走る白の騎士団団長に言う。

白の騎士団団長「初の実戦ですから、補佐として付いてきました」

「よっぽどの事が無い限り手は出しませんよ」と笑う。
白の騎士団団が居ると緊張感が無いんだけど……まあいいか。

2日程走り国境付近の村に着く。

駐屯していた領主息子に簡単な挨拶をした後に話を聞く。

魔物は最近になって現れたらしい。

山に入った者たち5人の内4人と同行していた犬が殺され、残りの一人も逃げ帰ってきたが傷が元で亡くなったそうだ。

その帰還した者がゴブリンの群れに襲われたと言っていたようだ。
10匹以上居たと言っていたが錯乱状態であった為に正確な数は分からないが、逃げ帰る事が出来たという事からもそれ程多くは無かった可能性が高い。

領主息子「現場に向かってみたところ遺体が無造作に打ち捨てられている状態で身包みは剥がされていてませんでした。が犬の死体はありませんでした」

身包みを剥いでいないので野党の可能性は低く、人肉には見向きもせず、犬の死骸だけ持って帰ったという事はゴブリンあたりでほぼ間違いないだろう。

姫の騎士団を集める情報を伝えて方針を話す。

僕「この中にゴブリンとの戦闘経験のある者は？」

騎士団の過半数が手を上げる。

僕「ボブは？」

各隊で数名と所だ。

僕「それ以外のゴブは？」

誰も手を上げない。

まあホブゴブリンと戦闘経験がある者が隊に居れば、それ以外のゴブリンはシャーマンかロードだと分かるだろう。

ゴブリンロードは一回りくらい大きさ違うし。

僕「では第一く第三は美女さんの指揮の下で付近の索敵。第四は僕といつでも援護しにいけるように後方待機」

注意事項を伝える。

ゴブリンを見かけても安易に戦闘を行わない。

相手が自分達と同数が多い場合は戦闘を避ける。

少ない場合は気が付かれないように後をつけて行動を監視、出来れば巢の場所を特定する。

伝令を出す場合は2人以上で出し、決して一人で行動しない。

敵に気付かれた時は慌てずに対応し他の敵に知らせないようにする。数が多い場合や巢へ仲間を呼びに行って危険と判断した場合は笛を吹いて他の隊に知らせる。

巢を見つけても単独で攻撃は仕掛けない。

搜索時間は半時（訳1時間）で、何も無くてもその時間には必ず戻る。

全員が頷くのを確認し出発する。

白の騎士団団長は付いてこようとしたが、それでは姫の騎士団団員のために為らないと丁重にお断りした。

実際には「殿下や翁から僕を守れと言われているのは理解しますが、こうも監視される様なら考えがありますよ?」と伝えたら「分かりました。無茶だけしないで下さい」と苦笑した。

どうせ付いて来るんだろうけど。

搜索が始まって数刻。

未だに遭遇などの報告は来ない。

森の外れとは言え警戒を怠るわけには行かず、第四班の隊員からは緊張感がありありと感じられる。

―どうにかこの緊張を解^{ほぐ}せないかな

少し考えて世間話を装って、その中で落ち着いている第四隊隊長に話しかける。

僕「第四隊隊長はゴブリン討伐はいつ行ったの？」

第四隊隊長「兵士になったばかりの時に巡回中に出会いました」

僕「それは…運が無かったね」

第四隊隊長「ゴブリンが4匹だけしかおらず、私達は10名程居たのであつという間に勝負は付きました。でも私は怖くて剣を構えて震えてるだけでした」

そう言うと第四隊隊長は苦笑した。

第四隊隊長「その後、巢は別の者達が討伐をしたために結局私は何もせずに終わりましたけどね」

僕「でも今は違うでしょ？」

第4隊隊長は僕の言葉に「そうですね」とだけいった後に、僕の目を見て意図を悟ったのか「隊長と副隊長に鍛えられましたので、ゴブリンロードでも負ける気はしません」と笑う。

―さすが隊長、わかってくれたか

それを聞いた他の隊員たちが頷いた。

第四隊隊長の言葉に他の団員も緊張が少し解けたようだ。

―まあ今までの訓練を見る限り、余程の事が無い限りは大丈夫だろうけど

そう思った時に笛の音が森に響く。

その後に長い音が2回鳴らされる。

2回は第二隊が敵と遭遇中だ。

―有力貴族の娘の隊か！

僕は「いくぞ！遅れるな！！」と言うと笛の音のした方へと走り出す。

森の中を走り抜けて少し行くと争う音が聞こえてきた。

「まずは状況の確認、そして味方の安全の確保！1人で突っ込まず2，3人で一匹を狙え！」と言うと森が開けて戦いの場に出る。

開けた視界に目に飛び込んできた惨状に舌打ちをする。

美女さんと第一隊、第三隊は現場に既に到着し戦闘を繰り広げている。

しかしそれは戦闘と言える様なものではなかった。

美女さんが最前線でホブゴブリンに囲まれている。

そこから離れた位置、美女さんの後方にいる騎士団達もゴブリンと戦っているが、その数は第一、第三の半数にも満たない。

半数上がゴブリンに押されて戦闘不能になっている。

一部のメンバーでゴブリンを押さえている間に倒れている団員を負傷している団員が後方へ移送している。

そこへ側面から僕が率いる第四隊が到着したのだ。

―数が多いとは言え、ゴブリンごときに何故こんなに：

魔王『ゴブリンシャーマンが二匹居る！』

見るとゴブリンシャーマンが放った魔法を美女さんが叩き落している。

しかしすべてを防ぎきることは出来ず、魔法やその爆風で隊員はやられたようだ。

僕は助太刀しようとしていた美女さんの方ではなくゴブリンシャー

マンに向かって走る。

後ろで白の騎士団団長が「援護しろ！」と叫んでいるのが聞こえた。「やはり来ていた」と思うことはなく、ただ単純に「これで数でも負けないだろう」とだけ思った。

道を塞いで立ちふさがるゴブリンを切り裂きシャーマンの魔法を剣に魔力を込めて弾く。

そして逃げようとしたシャーマンの首を跳ね飛ばした。

すぐにもう一匹のシャーマンを目指して走る。

此方に気が付いたシャーマンが魔法を連発してきたが止まらない僕に恐れをなしたのか、背を向けて逃げようとするシャーマンにナイフを投げて足止めをする。

そして追いつがるスピードのまま振り返ろうとしたシャーマンの肩から袈裟切りに切り落とす。

これで魔法は無くなった。

後はゴブリンロード2体とホブゴブリンが5体、ゴブリンが7体だ。ゴブリンは騎士達に向かっていったが第四隊と白の騎士団団長達の援軍で撃退できそうだ。

ゴブリンロードとホブゴブリンを一人で相手にしていた美女さんも魔法の攻撃がなくなった事により見る見る間に数を減らしていく。

僕はゴブリンロードの一匹の後ろから近づく。

ホブゴブリンの声で僕に気が付いたのか、振り返ろうとしたゴブリンロードの腕を美女さんが切り落とす。

痛みに怒り美女さんの方を向こうとした所を魔力を込めた剣で胴を真っ二つにする。

僕と美女さんvsゴブリンロードとホブゴブリン2匹。

勝敗は一瞬で決した。

戦闘が終わった後に第四隊隊長に負傷者の状態を確認するように指示を出す。

白の騎士団団長は部下の騎士団員に領主息子に伝令を送る指示をするとすぐに4名の騎士が走り去っていく。

そして自分は周囲の警戒をする為に騎士達と共に行ってしまった。すぐに4名の騎士が走り去っていく。

それを横目に僕と美女さんはゴブリンの巢に入る。

何かの巢を彫り広げたような巢は以外と広い。

だが巢に居たゴ布林は全て出ていたようで新たに出くわす事はなかった。

一つの広い空間でゴ布林の子どもを6匹見つけるが、僕は何も言わずに6匹を始末した。

奥に貴金属などがあったが今はそんなの相手にしてられないので放置する。

巢の搜索にはそう時間が掛からなかった。

巢を出て状況確認する。

今回の戦闘による被害は、重症は19名、内危険な状態の者が1名。

僕「どういう状態だ!？」

駆けつけながら聞くと「シャーマンの魔法の直撃を受け、全員に火傷を負ってます」と第四隊隊長が言う。

美女さんが「名は?」と聞く前に「第二隊隊長です」と答えた。

僕は「そうか」とだけ言うのと地面に寝かされている有力貴族の娘の

横に跪く。

有力貴族の娘は息も絶えだえという状態で倒れていた。

近くに居た第二隊隊員の一人に「状況を」と言うと、声を詰まらせながら説明した。

巢を発見した第二隊は巢を発見の伝令2名を出した後に草陰から状況を確認していた。

その時はまだ巢の中の状況は良く分からず、巢の前にゴブリンが3匹居ただけだったようだ。

すぐにホブゴブリンとゴブリン4匹が戻ってきた。

そしてホブゴブリンが手に持っていたものを地面に投げ捨てると、それをゴブリンたちが寄ってたかって蹴りだしたのだ。

それが幼い人間の子どもだという事が分かった瞬間に誰かが小さく息を呑んだ。

それは本当に小さかったのも関わらずゴブリンには届いてしまったようで、ホブゴブリンと2匹のゴブリンが近づいてきた。

有力貴族の娘は小声で「3匹を撃退後に子どもを保護して逃げる。笛は巢の中にいるゴブリンに気付かれるのでギリギリまで吹かないように」と指示を出し、第二隊隊員4名も頷いた。

そしてホブゴブリン達が近づいた所を5人は飛び出しホブゴブリンとゴブリンを仕留める。

そしてぐったりしている子どもの周りのゴブリンに切りかかる。

一人の隊員（今話している隊員）が子どもを抱きかかえ「息はあります」と言うと子どもを抱えて駆け出した。

周りにいたゴブリンも打ち倒して逃げようとした所で、巢の入り口から魔法が飛んでき。

子どもを抱えて森の中へと入ろうとしている騎士団員はそれに気が付いておらず、背後から魔法の直撃を受けそうになった所を有力貴族の娘が体を張って止めたそうだ。

倒れこむ有力貴族の娘を守るために他の3名はその場に残り、巢から出てくるゴブリンと対峙しながら笛を吹いたようだ。

その後、すぐに美女さんと第三隊が駆けつけた。

「魔法攻撃です！」と言うと状況を確認した美女さん負傷者を後方へ連れて引くように指示すると、ゴブリンを出来るだけひきつける為に真っ只中に飛び込んでいった。

第一隊が駆けつけるまでに数名の騎士団員が魔法の爆風などで負傷していた。

そして迫り来るゴブリンを押しと留めながら負傷者を後方へ移送している所に僕と第四隊が到着したのだ。

僕「その子どもは？」

美女さん「全身の打撲と骨折。意識を失っていますが、命に別状は無いようです」

僕はそれを聞いて頷くと有力貴族の娘に向き直る。

全身の火傷はすぐに治療しないと命に関わる。

しかしこの世界には火傷に対する医療技術など確立していない。

神聖魔法に火傷の治療があるが使えるのは神官だけでここには居ない。

魔王『つまり有力貴族の娘は助からない』

―っ！

有力貴族の娘が薄く目を開け何か呟く。

耳を近づけると「こ…ども…は？」と聞いた。

僕は有力貴族の娘を見ると「命に別状は無い」と言った。

有力貴族の娘が僕を見つめる。

それを見つめ返し「よくやった」と言うと言目がかすかに微笑んでそのまま閉じた。

僕はそれを無表情に見やる。

そして横に居た第四隊隊長に「他の者の容態は？」と聞いた。

それを聞いて何かを言おうとした第四隊隊長は僕の目を見ると静かに「命に別状はありません」と言った。

有力貴族の娘の意識が無くなり呼吸が弱くなってくる。

誰も何も言わずにそれを見つめる。

僕も有力貴族の娘の手に手を重ねながら見つめる。

魔王『この火傷では夜中まで持つまい』

―自分がもっと用心をして少数行動をさせなければ有力貴族の娘はこんな目にあわなかったかもしれない。

そう思うと目の前が真っ暗になる思いがした。

第51話 美女

魔王『――！――か！聞こえているのか！』

――え…？

魔王『時間が無い、小娘を助けたくば我の言うとおりにしろ！』

―何を…

魔王『早く！』

そう言うとき美女を呼べと叫んだ。

同時通訳で言葉を選ぶほど頭が回っていない僕は魔王の言葉をそのまま言う。

僕（魔王）「『美女、封じられし力を我の名において時はなつ』」

美女さんは頷くと僕に膝き腕を組んで目を閉じる。

魔王が呪文を唱えるのを同時通訳で唱えると魔王の言われるままに美女さんに口付けをした。

麻痺している僕の思考は有力貴族の娘を助けたい、ただその気持ちだけで魔王の言葉にしたがっている僕は何をしているのか理解していない。

呆然とその光景を見詰めていた騎士団の面々の前で美女さんが僕の口付けを受け入れる。

何が起こったという訳でもない。

ただそれだけだ。

美女さんは目を開け立ち上がると有力貴族の横に両膝を尽いて腕を組む。

そして何かを呟きだした。

火傷により風前の灯の有力貴族の娘の横で美女さんが一心不乱に祈りを捧げる。

笑顔以外の表情を見るのは初めてかもしない。

あまりの事に現実逃避している僕はそんな事を考えていた。

有力貴族の娘が淡く光る。

それを見た一人が「神聖：魔法？」と呟いた。

美女さんの祈りは続き有力貴族の娘の顔の火傷が少しずつ小さくなっていく。

魔王『：何とかなるかもしれない』

魔王の言葉が良く分からない。

ただ美女さんの祈りが有力貴族の娘を救うようだ。

美女さんは祈り続け、有力貴族の娘は光の膜に覆われていく。

僕は美女さんの背後からそれを見下ろしながら目を閉じ心の中で有力貴族の娘が助かるように一心に念じた。

どれくらい続いたのだろうか。

美女さんが祈りをやめると両手を地面に尽き荒い息を吐く。

僕は二人に駆け寄ると美女さんが「なん…と…か…なりま…した」とダルそうに呟いた。

有力貴族の娘を見ると全身にあった火傷が消えている。苦しそうだだった呼吸も今は落ち着いている。

魔王『火傷は治療ができ助かったようだが体力が戻るわけではない。当面は意識を取り戻すまい』

僕はそれを聞いて顔を手で覆った。

嬉しさで泣き叫びたい所だが他の団員の手前、ぐっと堪える。する遠くから「若!」と叫ぶ白の騎士団団長と領主息子の声が聞こえてきた。

その瞬間に僕はハツとする。

有力貴族の娘は全身を火傷しており、全裸に近いというより服が無い。つまり全裸だ。

などと良く分からない説明をするくらい混乱した。

有力貴族の娘の裸体を他の男に見せるわけには行かない。

僕はすぐに羽織っていた姫の騎士団団長の証のマントを外すと有力貴族の娘をそれで包んだ。

駆けつけた領主息子は有力貴族の娘が無事だと聞いて胸を撫で下ろす。

伝令から大火傷と聞いて急いできたらしい。

もしもの時にとまって白の騎士団団長が呼び寄せていた法術師も一緒に連れてきていた。

今は他の姫に騎士団団員に治療法術を唱えている。

美女さんのモノとは違い効力は小さいようだ。
だが血が止まり傷口がふさがってるのを見ると、それだけでもありがたかった。

馬車も共に来ていたので、有力貴族の娘を馬車に横たえる。
そして疲労で立てない美女さんを抱えるて馬車に運ぶ。

美女さんの状態を見て驚きを隠せない白の騎士団団長と領主息子に
「一応確認しましたが、後をお願いします」と言うと言領主息子は部下に付近と巣の搜索を命ずる。

「巣は既に搜索済み」と説明するのも面倒なくらいに精神的に疲れていた。

美女さんは運ぶ途中に僕の腕の中で少し身じろぎをすると「恥ずかしいですね」と弱々しく微笑んだ。

僕は美女さんを有力貴族の娘の横に座らせる。

魔王が伝えろというので小声で「魔王が容態が落ち着いたら話があると云ってます」と言うと言美女さんは「分かりました」と頷いて目を閉じた。

他の馬車に重症の騎士団団員を運ぶのを手伝う。

相手が女性とは言え、人一人を抱きかかえるのは女性同士では難しいこともある。

しかも兵士達は女性にどう触れて良いのか分からない、という感じで惑っている。

白の騎士団団長なら気にせず手伝ってくれるだろうが領主息子と騎士隊長と共にゴブリンたちの死体を検分している。

だから僕が自分で歩けない者を全員運んだ。

騎士に叙任した時に覚悟していたつもりだったが、いざ女性の体に跡が残る可能性の高い傷があるのを見ると息をのんでしまう。

そんな僕に騎士団員達は「気にしないで下さい」「有力貴族の娘が

助かってよかった」と異口同音に言葉を掛けてくれる。

中には「傷が残ったら貰ってくださいね」と笑う騎士団団員もいたが、色々と一杯で頷く事しか出来なかった。

怪我人を馬車に乗せ、馬に乗れる者は騎乗し出発する。

白の騎士団団長と騎士団員が護衛に付いて近くの村を目指す。

領主息子と騎士隊長はもう少し付近の搜索と巢の破壊を行ってから戻る予定のようだ。

村に戻る頃には日が落ちかけていた。

村の村長の家を借り受けて有力貴族の娘と美女さんを休ませ、すぐに姫の騎士団員28名を居間に呼ぶ。

全員の顔を見ながら「有力貴族の娘の怪我と美女さんの力に付いては部外秘で」と通達した。

有力貴族の娘は大火傷も負わなかった。

だから美女さんも治療なんか行わなかった。

「話せる時が来たら、ここに居る皆には必ず話す」と言うとき姫の騎士団団員全員が頷いた。

助けた子どもは近くの村に住む子どもで、他の子ども達と森に遊びに入りゴブリンに捕まったようだ。

腕の骨折は直せないようだったが神官が治療を行い裂傷は治療をした。

意識を取り戻した時には錯乱状態だったが、姫の騎士団の一人が抱きしめて「大丈夫」と言い続けたら落ち着いて寝てしまった。

そして家族が心配しているだろうと言う事で白の騎士団員が責任を

持って子どもの村まで送り届ける事になった。

そして姫の騎士団達に「今日は見張りは白の騎士団員が行ってくれるので、当直は無し。全員休んでくれ」と言って解散した。

怪我が酷い者はベッドで、それ以外の者は村長の家の周りに張られた天幕で休んだ。

翌日、美女さんは一日ベッドの上で過ごした。

夕方には体を起こす事は出来たがベッドを離れるまでには回復しなかった。

有力貴族の娘は眠り続けている。

美女さんが「消耗した体力を回復している状態ですから、明日の意識を取り戻しますよ」と言ってくれたので一安心である。

有力貴族の娘が目覚めておらず美女さんもベッドを出れない上に殆どの姫の騎士団団員がどこかしら負傷をしているのもう一日休んでいく事になった。

昼過ぎ、白の騎士団団長が領主息子と騎士隊長を連れて僕を訪ねた。ゴブリンの検分結果を伝えにきたらしい。

美女さんはまだベッドから離れられないので第一、第三、第四隊の隊長を呼び、一緒に話を聞かせる。

ゴブリンの数はゴブリンロード2匹、ゴブリンシャーマン2匹、ホブゴブリン17匹、ゴブリン31匹いたそうだ。

赤の騎士団団長が「我々の出動する規模のゴブリン族です」と言った。

本来ならゴ布林ロード1匹でも一般兵には荷が重い。
それでも僕たちが到着するまでにホブゴ布林とゴ布林を半数近く倒していた計算になる。

ゴ布林たちが住み着いてそれ程の時は立っていなかった様だが、近隣の村には数日前から小さな被害は出て居たようだ。

ただこの規模のゴ布林族が何故住処を移動してきたのかは分からない。

国境にそびえる山脈は険しく人が入る事が少ない。

その為、魔獣や魔物が多く生息している土地ではあり、たまに山を降りた魔獣や魔物による被害はあったが、ここまで大規模の住処の移動は聞いた事が無いそうだ。

すぐに国王には状況を説明し、討伐済みだが山脈付近の監視の強化と調査が必要だと言う旨の伝令は走らせているらしい。

白の騎士団団長は有力貴族の娘が大火傷を負っていたのを見ていたとは思わない。

それならあの場で何かしらの行動を起こしていたはずだ。
だが部下の騎士が目撃していて後で伝えた可能性はある。

しかし傷が無いが眠り続ける有力貴族の娘や疲弊した美女さんの話を聞いて何かを察したのか何も言わないので黙ってくれているらしい。

夜に美女さんの部屋に行く。

美女さんは僕が来る事を見越していたのだろう。
ベッドの上で身を起こして待っていた。

僕「体の調子はどうですか？」

美女さん「ほぼ大丈夫です。大事をとって寝ているだけで、普通に歩いたりも可能ですよ」

僕は美女さんのベッドの脇の椅子に腰掛けると美女さんに向かって頭を下げた。

僕「有力貴族の娘を助けてくれてありがとうございます」

僕が頭を下げ続け「ありがとうございます」と再度言う少し間をあけて「頭を上げてください」と美女さんが言う。

僕はその言葉に下げていた頭を元に戻すと美女さんはいつもの笑顔ではない真剣な顔で「話は聞きましたか？」と聞いてきた。

多分、魔王の事を指しているのだろうが特に何も聞いていないので「いいえ」と言う。

美女さんは「そうですか…」と言うと魔王と話をさせて欲しいと言

った。

同時通訳で話してくれと言うのだ。
いちいち丁寧な口調に戻さずにそのまま話して欲しいらしい。

美女さん「魔王」

僕（魔王）「『なんだ』」

美女さん「お久しぶりですね」

僕（魔王）「『我はずっと見てたがな』」

魔王の言葉を代弁すると「そうですね」と美女さんは笑った。

美女さん「何故、事情を説明しないのですか？」

僕（魔王）「『面倒でな』」

美女さん「貴方らしいと言えば貴方らしいですが、卑怯ですよ」

「説明を私に全部させようなんて」と言う美女さんに魔王が笑う。

―何だろうか？美女さんの雰囲気は魔王の従者のそれではない気がする

僕（魔王）「『当たり前であろう。美女は我が無理やり従者にした

（のだ）うええええええええええ！？』」

美女さん「そうですね。無理やり従者にされました」

僕「何で美女さん程の人が何故魔王なんかに…」

美女さん「魔王に敗れたからです」

美女さんと魔王は敵同士だったそうだ。

そして戦いの最中で美女さんと魔王は相打ちとなった。
だが最後の最後で魔王の自力が上まわり美女さんは倒れ、魔王が立っていた。

意識が飛びそうになっている美女さんに魔王は服従の魔法を掛ける。
それは心臓に楔を打つ魔法で、魔王の意に沿わない行動を取ろうとすると心臓に負担をかけ死に至らせる恐ろしい魔法だ。

しかし魔法が完成した直後に魔王も意識を失い、次に目覚めた時には僕が中に入り込んでいて体の自由が利かなかったそうだ。

美女さんと魔王の過去と、美女さんに対して魔王の余りの仕打ちに僕は言葉も無い。

美女さん「私を縛るつもりだったのか、それとも…いえ、多分気まぐれで行ったのでしょぅ」

僕（魔王）「『縛るなら無抵抗な女より、抵抗するような粹の良いほうが好みだな。まあ美女を気に入ったのは確かだが、ただの気まぐれだ』」

思考停止中の僕は魔王の言葉が無意識に口からぼそぼそ述べていた。

美女さん「でしょうね」

僕（魔王）「『面白いと思ったのは確かだ』」

それを聞くと美女さんは静かに笑った。

美女さんが「若」と何回も呼びかける言葉に意識を取り戻す。

美女さん「若にも関係する事です。しっかりしてください」

僕「え、あ、はい」

僕（魔王）「『全くだ』うるさいよ!」

傍から見たら僕は一人芝居をしている変な奴である。

美女さんは「落ち着いて」と言うと言明を始めた。

美女さん「あの時、呪文を唱えて私に口付けしましたね」

それを聞いて僕は今更ながらに大それた事に取り乱す。

それを「そういう態度を取られると説明しにくいので落ち着いてください」と言い

美女さん「アレは服従の契約を解除する呪文と儀式だったのです」

僕「なるほど。ではあの力は？」

美女さん「あの力は服従の契約時に封印されていた力です」

僕（魔王）「『あの力は神聖魔法の上位魔法だな。世界でも2人しか使えない貴重な魔法だ』」

神法と神聖魔法は違うらしい。

神法は法力を元に神の力を借りる魔法で、神聖魔法は信仰により神の奇跡を起こすらしい。

その神聖魔法の中でも上位に当たる治癒の奇跡を美女さんは使ったらしい。

僕「2人だけ…美女さんってすごいんですね」

僕（魔王）「『そうだな。世界で神に愛された二人、聖神国の皇女と勇者のみだからな』へえ、聖神国の皇女と勇者…者？」

聖神国の皇女と勇者のみしか使えない上位神聖魔法。

そして魔王は僕が入り込む前に大怪我を負っており、その戦っていた相手は勇者…

第52話 勇者

僕「何で…黙ってたの？」

美女さん・魔王「『面白そうだったので』」

―この2人は似た者同士だ！！

絶句する僕に「魔王もそう答えましたか？」と美女さんが笑うのでコクコクと切れた糸人形のように頷く。

「私は冗談ですよ」と笑うと「貴方を見極めておりました」と言っ
た。

美女さん「初めて若とお会いした時…と言うのも変ですが、別人格
の中には魔王が居ると言ったときは、魔王が私を誑たぶらかすために付い
ている嘘だと思いました」

僕「ですよね…」

だが貴方は剣も扱えない。

あれ程の力を持った魔法も使えない状態でいる僕を見て本当に別人
格だと理解したようだ。

「まあ元の魔王とは似ても似つかない性格だったので、本当はもっ
と早く確信してましたが」と笑う美女さんに「『余計青世話だ』」
と僕が代弁する。

美女さん「本当に力を使えない貴方を見て、最低限の力の使い方を教える事にしました」

僕（魔王）「『何故あの時殺さなかった？』は？殺す？」

魔王が言うには服従の魔法は術者が死んだら解ける。

そして術者に服従させる魔法であるが、それは術者が力を込めたら心臓に負担を与えるという物であって、心の動きに反応して勝手に負担を与える者ではない。

僕の行動から明らかに使い方を理解していないのを知り、美女さん程の使い手なら神聖魔法を封じられていても一瞬で僕の首を落とせただろう。

それなのに何故、今まで何もしなかったのか？

僕は魔王の言葉を代弁しながら血の気が引く思いがする。

剣術の練習の中で美女さんに剣を突きつけられた事は数知れない。その一回でも一歩踏み込んでいたら僕はここに居ない。

美女さん「若の人格がどうなるか、というのが躊躇った一つの要因です」

—美女さんありがとう！

美女さん「ただ魔王の命と天秤に掛けた時に、多少の犠牲は…とも思いましたが」

—ちよ！！！

「冗談です」と美女さんが笑う。

服従の魔法が解けてからお茶目にも程がある！！

美女さん「元々こんな性格でしたよ？」

僕（魔王）「心が読めるの！？『おぬしが分かり易すぎなだけだ』悪かったね！」

そういえばたまにお茶目な事を言っていたかもしれない。
恐ろしさが選考してお茶目に受け取れなかっただけだ。

美女さん「若と旅をして妖精少女を助けたり、ゴブリン退治、姫との出会いなどを共に行動して、若なら無理に倒す必要はないと思いました」

僕（魔王）「『お前も丸くなったな』」

美女さん「私は前から変わってません」

僕（魔王）「『そうだな…甘いところは変わってないな。で、だ』」

美女さん「はい？」

僕（魔王）「『封印もある程度解けて神聖魔法も体の負担を無視すれば使えるようになった』全部解けてないの？」

美女さん「はい。やはり解除の魔法が不十分だった様です」

僕（魔王）「『今なら無理やり解除できるのではないのか？』」

美女さん「できますね」

僕（魔王）「『しないのか？』」

美女さん「まだ本調子では無いですからね」

僕（魔王）「『……』何か言ってよ！無言を代弁ってどうなの！？『だまれ』！！」

美女さん「貴方こそ、今の内に私に止めを刺すなり、再度服従の魔法を掛けるなりしないのですか？」

僕（魔王）「『こやつが許すま（い）』当たり前だよ！『と言う事だ』」

美女さんは「そうですか…」と言うと黙り込んだ。

そんな美女さんに「ちゃんと解けるなら解いた方がいいのでは？」と伝える。

美女さん「え？」

僕「不十分だったのならちゃんと解いたほうが良くない？」

美女さん「それは私を抱きたいと言う事ですか？」

コノヒトハナニヲイツテルノ？

美女さん「口付けによる魔力の注入ではうまく行きませんでした。それならそれ以上の接触が必要になります。」

僕「それが…？」

美女さん「そういう事になりますね」

あんぐりとしている僕に美女さんが笑い出し「冗談です」と笑う。

美女さん「そんな事、あるわけ無いじゃないですか」

くすくすと笑う美女さんに魔王の笑いも頭の中で重なる。

僕「分かってて2人とも黙っていたな!？」

美女さん・魔王「『おもしろそうだったので』」

僕「やっぱり2人は似た者同士だよ」

ガツクリする僕に「また同じ事を言いましたか」と美女さんが笑う。

美女さん「まあ魔王とは敵味方とはいえ、付き合いが長いですから」

僕（魔王）「そうなの？『まあな』」

美女さん「私は勇者として前魔王とも戦ってましたからね。小さな頃の魔王にも何度も会ってますし、話した事もあります」

僕（魔王）「『ま、まあ昔の話は良いではないか、今は今後の話』
どんな感じたんですか？」

美女さん「小さいのに剣を構えて『倒してやる！』と可愛かったですよ」

僕「『（だまれ、言うな！聞くな！！）』よく殺されなかったな…
魔王」

美女さん「私は小さな子どもを殺すほど歪んでは居ませんので」

小さな魔王をあしらったりしながらたまに会話をしていたらしい。

美女さん「あの頃の魔王は可愛かったですよ」

僕（魔王）「『（○\$×△#□φβ！）』へえ…って！美女さん
幾つなの？」

そう言う「女性に年齢を聞いてはいけませんよ」と言った。

僕（魔王）「『美女はハーフエルフだ。年齢も80年くらいだったかな?』はーふえるふ!？」

美女さん「まだ70年ちょっとです!ハーフエルフなので耳は普通のと同じで見分けは付かないんですよ」

お父さんがエルフでお母さんが人族の娘だったようだ。
両親はすでに亡くなっているそうだ。

自分の身を守る為に色々な事を学んで居る時に神の声を聞いて神聖魔法を使うようになり、色々あって勇者になったそうだ。

—小さな頃に会ってるって、魔王は今はいくつなの

魔王『我か?50年ちよつとだ』

—50年!!

驚きの新事実!!

僕（魔王）「そうだったんですか『で、今後はどうする?..』」

美女さん「そうですね…」

そう言うところちょっと考えた美女さんは「正式に若の奥さんになります
しょうか」と言った。

僕「は？」

美女さん「もう一度言います？」

僕「イイエケツコウデス」

美女さん「では帰ったら姫様と有力貴族の娘様に言いましょうか」

僕「いやいやいやいや」

僕は手を横に振って美女さんを制する。

僕「何？どういう事？何でそうなるの？『毎回煩いな。勇者の嫁な
どそうもらえんぞ』」

美女さん「魔王の割には言い事をいいますね！」

僕「だから待って！」

美女さん「何なんですか？若」

僕「おかしくない？ねえ、おかしいよね。この流れ」

美女さん「そうですか？」

僕「いきなりそんなおかしいよ!？」

美女さん「いきなりではありませんけど？」

そう言うのと「詳しい話は姫様と有力貴族の娘様の時に話しますが…」
と言います

美女さん「私の初めてを奪っておきながら、奥さんに迎えるのを嫌だというのですか？」

僕（魔王）「は?『酷い奴だ』もう通訳しないから!！」

美女さん「本当に酷い…」

そう言うのと美女さんは泣き真似をする。
それを見て脱力しながら

僕「美女さん、キャラ変わりすぎ…」

美女さん「今までは従者でしたので。これからは奥さんとして頑張ります」

僕「いや、だから…」

美女さん「初めてだったのに……」

僕「!だから何なの?」

そう言うとき美女さんは恥ずかしそうに「口付けです」と言った。

今まで笑顔しか見たことが無かった美女さんの恥じらいを見て可愛

いときめき――

僕「70歳いいいいいいいいいいいい」

危ない危ない。
騙される所だった。

美女さん「年齢は言わないで下さい。それに人族に置き換えたらまだ15歳程度です」

僕「年下になるんだ」

美女さん「私もお兄ちゃんと呼びますか？」

僕「ごめんなさい。調子が狂うので前と同じ感じでお願いします」

美女さん 「それは良かった。あの感じのノリは疲れるので」

僕「じゃあしなきゃいいじゃん!!」

どうしよう。

僕の中での美女さん株が大暴落中だ。

美女さん「まあ若の奥さんになる事は置いておいて」

僕「いや、置かずに『ならない』という結論を出そうよ!」

美女さん「そこまで嫌がられると本気で傷つきますよ?」

美女さんがいつもの雰囲気で良く分からない事を言う。

どうにか「しない」方向に持っていかなくては

僕「そもそも神聖魔法って穢れたらダメなのでは?」

美女さん「ああ、それなら大丈夫です」

僕（魔王）「『確かに処女のほうが神の声を聞きやすいと言うが、それは幼い女兒の法が穢れが少ないから、と言うだけだな。子を為した女でも神の声を聞く事はある。』そうなんだ」

美女さんは頷くと「本気で愛し合い子を為すための行為は穢れてません。だから大丈夫」という。

美女さん「神の声を聞いた後は、変わらぬ信仰心さえ持ち続ければ

問題ありません」

僕「そんな簡単なものなの？」

美女さん「穢れ無き信仰を持ち続けると言うのは難しい事です。狂信ではいけませんからね」

信仰心にも色々あるらしい。

美女さん「私にかかっている服従の魔法のことですが」

僕「美女さんを抱くと解除されるってのは嘘なんでしょう？」

美女さん「強^{あなが}ち嘘では無いんですけどね」

服従の魔法は術者が死ぬ以外でも術者とかけられた者の心の結びつきが強くなった時に解かれると言われているらしい。

僕（魔王）「らしい？『服従の魔法を掛けられてまで服従させられて、心の結びつきもあるまい』なるほど」

美女さん「そうですね。ただ、そう言われ伝えられているのは確かです」

僕（魔王）「『そうだな』」

美女さん「ですので、実際にそうか確かめるいい機会でもあります」

僕「それとこれとは！」

美女さん「まあ王都に戻ってちゃんと話し合いましょう」

魔王『王都に戻ったら負けだな』

―だよね！

ここは強く出て話を終わらせて置かないと大変な事になる。

そう思い言おうと口を開いたところで美女さんが「申し訳ありません」とベッドに横になった。

美女さん「やはり本調子じゃないので横にならせていただきますね」

僕「ああ、ごめんね。気が付かなくて」

美女さん「お気になさらずに。少し楽しくてはしゃいでしまいました」

―美女さんとはしゃぐという言葉が似合わないと思っていた時が僕にもありました

「何か？」そう言う少しダルそうに「何か言われようとしてませんでしたか？」と美女さんが言う。

僕は「また今度でいいです。無理をしないでゆっくり休んでください

い」と言う。「ありがとうございます」と美女さんが微笑んだ。
美女さんに「また明日」と言う。と部屋を出る。

魔王『はぐらかされたな』

魔王の言葉に振り返る。

美女さんの部屋からかすかな笑い声が聞こえたので扉を開けようと
ノブに手を掛けて思いとどまる。

最後に横になった時の美女さんは本当に辛そうだった。

もし演技だとしても本調子でないのは本当だろう。

そう思い扉から離れる。

きつと美女さん程の達人なら、僕の扉の前の葛藤くらい気配で見
通しなのだろう。

僕は廊下を少し歩いて一つの扉の前に立つと小さくノックする。

中から「どうぞ」と聞こえたので開けて部屋に入る。

僕が「どうかな？」と聞くと有力貴族の娘のベッドの脇に腰掛けた
姫の騎士団員の一人が「眠っているだけで問題は無いそうです」と
言った。

姫の騎士団員達が二人交代で有力貴族の娘の看病を続けてくれている。
る。

美女さんの見立てでは有力貴族の娘は疲労から眠り続けているだけ
で明日の昼前には目覚めるらしい。

ただ当面は激しい運動は出来ないそうだ。

だから本当は看病など必要ないのだが「目覚めた時に一人なのは心
細いですよ」とみんなが言い交代で付いてくれているのだ。

僕は騎士団員に礼を言う。と部屋を後にした。

第53話 帰還

王都を目指して帰路につく。

有力貴族の娘と美女さんは馬車に乗っての帰還だ。

有力貴族の娘は昼前に一度目を覚ました。

「あの子はどうなったのか」「あの後どうなったのか」を聞くとまた眠りに付いてしまった。

美女さん曰く「疲労困憊なので仕方ないでしょう」との事だ。

その美女さんは歩けるくらいには回復したが、大事を取って有力貴族の娘と共に馬車に乗ってもらったのだ。

王都に着いた。

出る前とは違い騎士団はボロボロだ。

出て行くときは華やかだった姫の騎士団の異様な姿に王都へ続く道の脇に居る人たちは声を上げない。

その中を僕達は背筋を伸ばし精一杯の虚勢を張る。

王城を抜けた。

馬を下りる僕に声が掛かる。

「酷い有様ですな」見ると祝賀会の時に文句を言っていた貴族の子弟達だった。

彼らは満身創痍の姫の騎士団員たちを見て「やはり急造の、しかも女騎士には魔物退治は荷が重すぎたようですな」と笑う。

僕は「その通りですね」と言うで一礼をして傍から離れる。

背後から「女に守られて自分は無傷か」と嘲りの声が聞こえた。

王都に帰還して1時（約2時間）程して謁見の間に呼ばれる。
姫の騎士団員で歩けるものは全員、僕と共に謁見の間に入る。
正面に殿下と翁、周りには僕たちをみる貴族や文官、武官達が並ぶ。
姫は居ない。有力貴族の娘に付いているのだ。
僕達は左右に人が並ぶ間を進み、殿下の前で跪く。

僕「姫の騎士団、ただいま戻りました」

僕の言葉に「お帰りなさい」と殿下が言う。
一部の貴族から「あんななりでよく戻れたものだ」と言う小声が聞こえてくる。

チラリと視線を向けると、なるほど左右に立つ人達は綺麗に二つに分かれている。

右が貴族達、左が反国王軍に居た領主や文官、武官達。

あからさま過ぎて笑いそうになる。

嘲りの声も右からのみ聞こえてくる。

殿下「よく無事に戻られました」

僕「ありがとうございます」

殿下が頷くと翁が前に進み出て宣言する。

翁「今回のゴブリン討伐の功により姫の騎士団団長に黄翼勲章を、副団長に白翼勲章、団員には黒翼勲章を授ける」

翁の言葉に右側からざわめきが起こる。

勲章は上から紫青赤黄白黒の6種類がある。

翼の文字が入っているのは国旗に翼が掛かっているからだろう。

勲章の授与の目安などは明確に無い。

しかし僕が黒と白を飛ばして黄色を貰うという事や、団員一人一人にまで渡すと言う事に右側から「どういうことだ?」「女なのにか?」「そもそもゴブリン程度に苦戦した奴らだろう」という声が聞こえてくる。

左側からは一切何の反応も無いという事は、状況を知っているのだろう。

女性で勲章を授与されるのは今回が初めてのようだ。

翁が「白の騎士団団長、報告を」と言うと、白の騎士団団長が「はっ!」と言うと用紙を広げ内容を読み上げる。

白の騎士団団長「姫の騎士団団長以下30名、国境の森にてゴブリンと遭遇。これを撃破し捕まっていた子どもを救出、巢の壊滅を行いました」

その後にゴブリンの数が告げられる。

白の騎士団団長「ゴブリンロード2、ゴブリンシャーマン2、ホブゴブリン17、ゴブリン31匹、巢に居た子ども12匹、全て死亡確認。巢を破壊しました」

ゴブリンロードとゴブリンシャーマンが2匹ずつと聞いてざわめいてた声が消える。

それだけの規模のゴブリンに魔法を使うシャーマンが2匹も居るのだ。

領主軍程度ではそうそう手出しの出来る規模ではない。

そして放置をしていれば数を増やして更なる脅威になっていたに違わない。

それを31名で立ち向かい、死者0で壊滅させたのだ。

とてもじゃないが満身創痍を笑える状況ではない。

とはいえ、美女さんが居なければ今頃全滅に近い状態だったのは間違いない。

翁がざわめきが消えた事に満足そうに頷くと「姫の騎士団団長、前へ」と言うのを聞いて僕は立ち上がり前出る。

殿下の前に着くと再度膝を折った。

殿下「姫の騎士団の働きに黄翼勲章を授ける」

そう言うのと立ち上がった僕に黄翼勲章をつける。

この場では僕だけが騎士団員全員に後で送られる。

勲章と言うのは名誉でもあるが、将来の保障にもなるのだ。

勲章があれば退役後の年金も増えるのだ。

僕だけなら断っていたが団員にも出るなら喜んで受け取る。

離れる間際に殿下が「本当にご無事でよかった」と心から言ってくれた事の方が勲章より嬉しかった。

殿下「何か望みはあるか？」

殿下の言葉に「ありません」と短く伝えた。
それで謁見は終了である。

姫の騎士団の活躍と勲章授与はすぐに国中に知れ渡った。
満身創痍ながらも気丈に馬を進めていた姿と知らされた功績、勲章
授与に姫の騎士団の名声は上がったようだ。
だが少なからず妬みも買った様だ。
注意をするべきかもしれない。

王都帰還から3日、ようやく有力貴族の娘も歩けるくらいにはな
った。

しかし大事を取って姫の騎士団への減退復帰はもう数日後となる。
そして美女さんの素性を姫と有力貴族の娘に明かすこととなった。
とは言え、どこまで話すかは美女さんに任せる予定だけど。
妖精少女には話しても構わないだろうが妖精姉には今は黙っておく
べきだと言う判断をし、2人には席を外してもらっている。

美女さん「私は勇者なんです」

―ぶっちゃけた！

魔王『全部言ったな』

姫が「ゆうしゃ？」と首を傾げる。

有力貴族の娘は余りの事に言葉が出なかったらしい。

有力貴族の娘「勇者と言われると…どこなのでしょう？」

―どこの？

魔王『勇者と呼ばれるのは何人が居るのだ。そして勇者にも格がある』

勇者というのはどこぞの権力者が認定して初めてなる。

その認定した者の力や数により勇者としての格付けがあるのだ。

逆に言う影響力も何も無い小国の王が認めても、他からは相手にもされない事もあるのだ。

美女さん「恐れ多くて余り好きな呼び名ではありませんが、『神の御遣い』と呼ばれてました」

有力貴族の娘「か…」

魔王『因みに「神の御遣い」は最高クラスだな』

—まじですか！

有力貴族の娘「『神の御遣い』は力ある魔王と戦って相打ちになったと発表された記憶してますが」

美女さん「そうですね。因みに若の中に居るのはその魔王です」

姫・有力貴族の娘「「え…」」

2人が驚きの顔で僕を見る。

魔王は『ふん』と得意げだが僕はどのようにして良いか分からずに頭をかく。

2人とも僕が魔族である事は知っているし、魔王であることも伝えていた。

しかし今の僕からは「魔王だった」と言う事までは現実味が無かったのだろう。

『神の御使い』と対立していた噂の魔王というのも想像だにできなかったのだろう。

僕ですら魔王がそんなに凄かったというのが想像出来ない。

姫「『神の御使い』が何故、戦った魔王の従者をしているのですか？」

美女さん「その呼び名は好きでは無いですし、今は若の従者でしか

ありませんので今まで通り呼んでください」

姫「え、あ、はい。では…美女さんは何故？」

美女さん「まあ服従の魔法を掛けられていたというのがありますが、権力争いの道具にされるのが嫌になったのもありますね」

美女さんはそう言うと「しがらみが増えると大変です」と笑った。

有力貴族の娘「では私を治療したのは神聖魔法の…」

美女さん「はい」

有力貴族の娘が「ありがとうございました」と詰まりながら言った。
あの時の自分は決して助からないと解っていたらしい。

美女さんは「封印を解いてくれた若のお陰です」と美女さん言う
が、そんな事は無い。

僕「美女さんのお陰ですよ。本当にありがとうございました」

姫も「ありがとうございました」と続く。

姫「有力貴族の治療の件があるとは言え今、私達に勇者である事を
伝えるのは何故でしょう？」

美女さん「一つは神聖魔法を使った事によりいずれは知られるだろう事」

それを聞いた有力貴族の娘が自分のドレスを固く握り締めるが「気にしないで下さい」と美女さんが微笑みかける。

美女さん「そしてもう一つが服従の魔法の効果が弱まった事ですね」

神聖魔法を使う為に僕が封印の一部を解除した事を説明する。
封印解除の方法は言わないで置こう。

美女さん「だから今後の身の振りように付いてお話するべきかと」

姫「今後…」

美女さん「はい」

有力貴族の娘「美女さんは…どうなさるおつもりですか？」

美女さん「私はこのまま若の従者で居たいと思います」

美女さんの言葉に僕は驚く。

まさか今のままで居たいと言うとは思わなかった。

姫「なら特に問題ないのではないでしょうか？」

有力貴族の娘「いえ、勇者が魔王の従者をしていると知られると大問題ですよ」

魔王『裏切り者のレッテルを貼られかねんな』

その言葉に美女さんは「それはたいした問題ではありません」と笑う。

自分の神聖魔法が使える限りは信仰を疑われる事も無いというのだ。それよりも問題は美女さんの生存が知れ渡った際の各国の動きだ。

美女さん「間違いなく私の身柄の引渡しを要求するでしょうね」

有料貴族の娘「引渡し…犯罪者ではないのですから」

美女さん「引渡しが悪くなら保護と言いましょか。少なくともこの国の保護下に居る事を認め無い国は幾つも出てくるでしょうね」

魔王『勇者を抱えると言うのは一種のステータスだからな。格の高い勇者をそうそう他国に手放す国など居ない』

—どうやってどの国の庇護下にあるかを決めるのさ

魔王『一番最初に認定した国が基本的にはそうなるが、そこが小国の場合は大国が奪うこともある。美女ほどのクラスになれば数カ国

で共同だろうな』

美女さんの価値は各国にとってそれだけ高いのだ。
そこらの王族よりVIPである。

美女さん「他国に知られた際にここに居られるだけの理由が必要になるのです」

姫「居たいと言うだけじゃダメなのですか？」

美女さん「残念ながら」

それで済むなら迷わないだろう。

美女さんは「とりあえずは国王殿下にもお話ししないといけません」と言う。

美女さん「国王殿下達が私の保護を断ったらそれで話はおしまいな
んですけどね」

僕「そうになったら仕方ありません。国を出ましょう」

姫・有力貴族の娘「「え」」

2人に僕は「もちろん2人も一緒に」と伝えと姫はすぐに、有力
貴族の娘は姫が頷いたのを確認して頷いた。

確かに殿下が無理だと言えばそこで話が終わる。
まずは殿下にも話すべきだと言う事となり、すぐに殿下の下へと向かった。

部屋に入ると殿下と翁、爺、有力貴族が数名の文官と話し合っていた。

僕は「少しお話宜しいですか？」と殿下に言う。

殿下「丁度休憩する所なので大丈夫ですよ」

そういう殿下に僕は「大事なお話です」と言うと、何かを察した翁が文官たちに「呼ぶまで待機」と伝え部屋から追い出した。
全員が退出するのを確認すると美女さんの正体を明かした。
4人とも驚きで言葉も出ない。

僕「出来れば美女さんがこの国に居る事を認めて欲しいのですが」

翁「…もし無理だと言ったらどうするのじゃ？」

僕「美女さんと共に姫と有力貴族の娘を連れて国を出ます」

翁「姫もじゃと!？」

僕「2人は僕の妻ですからね」

僕の言葉に姫が嬉しそうな顔をする。

喜んでくれるのはありがたいけど今はそういう状況じゃないからね。

翁「姫を…」

殿下「翁、ちょっとまって」

そう言うのと「無理だと言った場合の話だから」と殿下が翁を止める。

殿下「僕は美女さんを受け入れないとは言っていない」

翁「しかし、現実問題…」

爺「それをわかった上で、どうすれば美女殿がわが国に居るだけの理由を作れるかの段階はないですか」

殿下「その通りです」

そう言うのと4人とも考え込んでしまった。

有力貴族「王妃になってもらいますか？」

翁「確かにそうすればわが国に居るだけの十分な理由になるが…」

殿下「僕には無理です」

殿下が笑顔で「美女さんは僕にはもったいない」と言う。

翁は「身分的に釣り合わないとは言いませんが」と

翁「美女殿本人がその気で無い場合は無理でしょう」

「折角殿下の後問題も一挙解決できそうな妙案なのだが」と残念そうに言った。

その言葉に「申し訳ありません」と美女さんが頭を下げる。

爺「他に何かありますか？」

翁「他国を黙らす方法…やはり婚姻が一番なのじゃがな」

殿下「さすがに美女さんが納得してない婚姻は出来ませんよ」

そう殿下が言うと「納得ですか…」と美女さんが言った。

美女「若の奥さんの一人になりますか」

その言葉に僕の「いやいや!」と言う僕と姫の「名案です!」という姫の声が被る。

姫「元々、美女さんと妖精少女も若の奥さんでしたし」

僕「違うよね。ただ行ってただけだよね??」

有力貴族の娘「予定通りですね」

今まで黙って成り行きを見守っていた有力貴族の娘も「家族の会話」になったとたんに姫の援護をしだす。

というか、有力貴族の娘はそれで良いのかを聞いたら「美女さんを尊敬してますから」と言った。意味がわからない。

有力貴族の娘「美女さんと家族になれるのは嬉しいです」

美女さん「ありがとう」

美女さんは有力貴族の娘に微笑みかける。

姫が「本当の家族になるのだから私の事も様を付けずに呼んでください」という言葉に首を振ると

美女さん「あくまでもこの国に居る為の方便としての妻です」

姫「そうなんですか…」

美女さん「それでもダメですか？若」

美女さんの言葉に詰まる。

確かにこれしか方法が無いし、名目で良いなら良いと思う。

僕「それで他国を黙らせる事が出来ますか？」

翁「まあ少し弱い気もしますが、継承権第二位の姫婿の妻なら言い様はありますな」

僕「名目上なんですよね」

美女さん「事実上でも構いませんよ？」

僕「いやいやいや」

美女さん「冗談です」

「若には好意を抱いておりますが、さすがに妻になると…」と美女さんが言う。

何だろう。

物凄く安心したのにちょっと納得できない感じ。

ああアレだ。

好きでもないのに勝手に好きだと回りに決められて、それが本人の

耳に入った上で「良い人だてゃ思うけどごめんなさい」と言われた時のような気分だ。

魔王『微妙な例えだな』

――まあ有力貴族の娘の時のようになし崩し的にならなくて良かったよ

殿下「では美女さんは若の奥さんと言う事で発表しましょうか」

僕「もうするの!？」

翁「後で美女殿の正体がばれた時に言うより、今から言っていたほうが後々有利じゃ」

美女さんの「それで構いません」と言う言葉で即発表と決まった。世間では僕は好色扱いされるのだろう。

魔王『世間などどうでもよいでは無いか』

――まあそうだけどね。

「美女さんの信者に殺されるかもしれない」と言う僕に「私が望んだ事にしてもらって結構ですよ」と美女さんがそう言ってくれたので、それをお願いした。

この件に関しては魔王の『へたれ』と言う言葉を甘んじて受ける。美女さん信者はそれだけ脅威なのだ。

第54話 第2回選考会

美女さんが僕に嫁ぐ（偽装）事はすぐにでも発表する事となった。よくよく考えたら姫との発表と同時に有力貴族の娘が嫁ぐ事も発表され、それから間もなく美女さんを娶るのだ。どれだけ女好きなんだという話である。

魔王『よくよく考えなくても女好きだな』

―仕方無しだよ！これで打ち止めだから！！

魔王が『そうだと良いな』と言うのが怖い。本当に次が出そうだからやめて！

取り合えず美女さんを娶る（偽装）話はすぐに発表する。

魔王『（偽装）とは何だ』

―付けておかないといつの間にかその通りになっていそうでコワイから

『くだらん』と一笑された。うううう：

美女さんを娶る事を発表する。

では美女さんの正体をいつ流すか、という問題が残る。

姫の騎士団員にはあの場で見た事を口外しないように伝えて居る。

だが何処からどのように漏れ出るかはわからない。

殿下「今すぐはダメですか？」

爺「ダメでしょう。まだ他国の介入に対する備えが出来ていませんしな」

翁「若と美女殿の発表からある程度開けた方が良いだろうな」

「夫婦めおととしての関係が無視できなくなる程度にはな」と翁は言った。そうになるとどれ位の帰還が必要なのだろうか？爺が「長ければ長いほど良いでしょうなと言う。」

姫「いつそ知られるまで黙っておきますか？」

美女「そうも行かないと思います」

「姫との結婚式に他国から沢山の人が来るでしょうから」と言うのだ。

各国のお偉いさんの中には美女さんと直接面識がある者も居るようだ。

そうになると「の新芽が芽吹く頃」がタイムリミットと見ても良いだろう。

美女さん「その時期は私は隠れてましようか？」

姫「ダメですよ。一緒に式を挙げるのですから」

―はい？

僕が「偽装だとわかってますか？」と聞くと「わかってます」と姫ははっきり答えた。
しかし私と有力貴族の娘が挙げるのに美女さんだけ挙げないのはおかしいと言うのだ。

翁「確かにのう」

僕「翁！？」

翁「よく考えなされ。姫の言うとおりだ」

有力貴族の娘と美女さんの発表は殆ど時期が同じである。

それなのに片方は挙げて片方は挙げないとなると、色々と勘ぐる者は出てくるだろう。

だから美女さんも挙げるべきなのだと言う。

それでも何か言おうとする僕に姫が「美女さんが居なくなっても良いんですか？」という言葉にぐうの音も出ない。

魔王『毎回毎回似た事でうじうじ言って、似た様な事で言い負かされよって』

—くっ

魔王『そろそろ損得で物事を判断できるようになれ』

—でも！

魔王『そういう立場なのだ』

魔王はそう言うところ以上の事は言わせないという感じに黙り込んだ。

魔王とそういう話をしている間に美女さんも一緒に式を上げるという方向で纏まりつつあった。

美女さんが僕に「よろしいのですか？」と聞いてきたので、少しして頷いた。

姫の騎士団の問題がいろいろと浮き彫りになった。

もちろん僕的能力不足もそうだが、やはり人数が少ない。

姫の騎士団員の増強をする事としたので第二次公募を行う。

勲章の授与などで姫の騎士団への応募数が跳ね上がり400名近い数が集まったらしい。

特に姫の騎士団に市井の者が居て同じく勲章を得たのが大きいようだ。

その市井の者である商人娘がそれを聞いて「恥ずかしいです」と言っていた。

400名近い応募の第一次審査はやはり書類審査だ。

翁が「早く若も公いう事をやる部下を持ってくだされ」と言われたので「今回で最後にします」と言ったら笑われた。

早くそれなりの地位に付いてくれと言われたのだ。

勘弁してください。

人数が増える。

どれくらいかわからないが増える事は間違いない。

だから姫の騎士団員が駐在する館をもらえないかと殿下に言ったらすぐに用意してくれた。

一の郭と二の郭に5箇所。

僕「多すぎですよ」

殿下「好きな所を選んでください」

僕「いえ、姫の騎士団宿舎なのでそんな豪勢な建物は必要在りません」

何だこの「お風呂が大きい」とか「ガーデニングが綺麗」とかは。

姫の騎士団団員が訓練できる庭などがあるような建物が良い。そう言うとう翁が「これはどうじゃ？」と一つの建物を出した。

古い。

一の郭の一番奥になる建物だが何せ古い。

かなり昔に人はすまなくなっではいるが国が管理していたので住むのは問題はない。

この建物を建てたのは昔の国の軍人貴族で「もし王都が攻められた時に籠城できないと困る！」と自分の館を要塞化したそうだ。

何せ館の周りに2重の堀を掘って水を張って跳ね橋にしている上に、高い塀で囲っているとという懲りようだ。

籠城を考えて水も引いているらしい。

本当は王都でクーデターを起こすつもりだったのではないだろうか？

城の裏門が館の中にあるというのは、よほどこの館を作った軍人貴族は信頼されていたのだろうか？

勝手に壁に穴を開けて作った訳ではないだろう。

因みに城壁に引っ付いているのはこの建物だけである。

殿下「数代前の王の後宮だったという噂もありますよ」

—また後宮か！

だから城から直でいける様になっているのか。

何にせよ姫の騎士団の宿舎としては申し分ないと思う。

一つには一番奥である事。

少々訓練で騒いでも文句は言われないだろう。

二つに直で城に上がれる事。
三つに堀と高い塀で囲われている事。

3つ目はどうなのだろうかと思うが、少なからず快く思っていないものが居る。

何かをすぐにされるとは言わないが用心するに越した事は無い。

騎士とは言え女性のみである事には違いない。

特に姫の騎士は執政と同じ地位にある事から、姫の騎士団に頭ごなしに命令は出来ない。

だがどこにも頭の悪い者は居る。

女性によからぬ事をしようとする者も居るかもしれないのだ。

姫の騎士の権力で頭の悪い権力者を、そして塀と堀で無頼漢をそれぞれ防げるだろう。

姫の騎士団の館は決まった。

殿下のお墨付きで中に入れる者は姫の騎士団員と執政並みの地位があるもの。

それ以外は殿下、もしくは僕の許可が居ると言う事にした。

それ以外で不当に侵入を試みた者は侵入者とみなして切ってもよいと言うのだ。

さすがにやりすぎ感はあるが、館の裏に王城への入り口があるのである。

これを盾に正当性を無理やり付けた。

今後は姫の騎士はここで寝起きをし、姫の護衛の任の者だけが空の館に登る事となる。

すぐに姫の騎士団のメンバーと翁が用意した侍女を連れて美女さんが準備の為に下りて言った。

姫の騎士団寄宿舍に僕が入ったのは3日後、王城側から入ったがその異様に驚いた。

王城側の入り口が3階の高さにあったのだ。

城と宿舍の3階から橋が伸びて繋がっているのだ。

そして寄宿舍側の橋の一部、城壁のところが跳ね橋になっている。

— どれだけ凝ってるんだ

魔王『物凄い用心だな』

ただ王城へ上がるのに寄宿舍の中を通らないといけないのは中々良いかもしれない。

ただその先の通路に部屋に通じている寝室に通じた扉が一つあると言うのは、やはり後宮だったからなのだろうか。

— まあここを姫の騎士団の会議室にすれば良いか。

姫の騎士団寄宿舍は下記のような間取りになっている。

1Fは姫の騎士団団員の宿泊と食堂、厨房などの生活エリア、幾つかの会議室。

2Fは指揮官クラスの宿泊と予備室。

3Fは会議室と資料室と予備室。

3Fの予備室は何かで僕が泊り込むことがある際の寝室となる予定

だ。

姫の騎士団の第一次選考会通過者は384名。

一回目の5枚以上の数である。

商人娘が居るからか多種多様な人材の応募があった。

市井の者も多いが中には娼婦の出などもある。

さすがに翁が「弾くか？」と聞いてきた。

余程の理由が無い限りは弾く前に確認して欲しいと伝えていたのだ。それに僕は「徹底的に調べて白なら通してください」とだけ伝えた。通ったという事は白なのだろう。

貴族の娘の応募も増えた。

これには翁が「若に近づくには姫の騎士になるのが早いと感じたのだろう」と言う。

馬鹿らしいと笑おうとしたが『3人の妻のうち2人が姫の騎士団員だな』という魔王の言葉で辞めた。

そう取られても仕方ないらしい。遺憾である。

まあ思惑はどうであれ、それくらいでは弾かれずに一次審査を通っている。

そういう者は二次以降で脱落すると思っているのだろう。

候補者384名を寄宿舍の広場に集める。

現在ここにいるのは僕と美女さんと姫の騎士団員と候補者のみだ。姫の護衛は近衛兵に任せている。

候補者にこれからの予定を伝える。

一月間、ここで寝起きをしながら姫の騎士団員と同じ生活をしてもらう。

ただし警備の任に付いてもらうわけにはいかないのでそれは免除だ。384名を4つの隊に分け、一つの隊が96名とし、各隊に分けられる。

3日間訓練で1日が半分休暇だ。

とは言え休暇は外出は出来ず、食事の用意や館の掃除と座学、寄宿舍の警備などを行うのだ。

この事を聞いた候補者の一部からざわめきが起ったので見ると貴族の娘達だった。

騎士団の候補になった時点で今までの身分は関係なく「一候補」となる。

自分の事は自分で行い、騎士団内の上下関係は階級性のみである。

それは他の騎士団でも同じであり、それが受け入れられない場合は今すぐ候補を取り下げるべきである。

美女さん「姫の騎士団内の階級に従えない場合は、騎士団団長の名の下に罰する権利があります」

それが軍隊と言う者である。

「騎士団団長が死ねと言えは死ぬ覚悟がない者は向いておりません」と美女さんが言う。

誰一人何も発しないのを確認した美女さんは「次に負傷を追った場合の保証はありません」と言う。

美女さんが一人の騎士団員を見るとその団員は頷いて小手を取り外し腕をまくって傷を見せた。

この前のゴ布林退治で負った傷だ。

美女さん「このように傷が残る事もありますが、保障はありません」

「傷は名誉です」と美女さんが言った。

本当はそこまで厳しくない。

傷が絶えないのは確かだ。訓練でも負傷をする事はある。

ただ傷を負った者たちには僕が個人的に保障をしている。

だが覚悟を無い者を振るいに掛ける為に脅しているのだ。

「次に」と美女さんが言う。

騎士団のルールの厳しさに付いてだ。

まず休暇の日は基本的に寄宿舎で待機をし、必要がある場合は外出申請が必要である。

出せば毎回通るわけでもなく、親兄弟の呼び出しであろうが認可が降りない事もある。

次に恋愛に関する事だ。

姫の傍で警護するという立場上、自由に交友関係を作る事は許されない。

特定の誰かと会う場合や婚姻も許可を必要とする。

厳しいようだがそれだけの立場になるのだ。

その他にも厳しい騎士団のルールが上げられる。

「これを聞いて無理だと思ったものは申し出てください」と言った
が立つ者は居なかった。

それを見た美女さんが隊を分けるために全員の名前を呼んでいく。
出来るだけ知り合いと違う隊に入れるためだ。

各隊96名をさらに6つに分けて16名の分隊にする。

寄宿舎は今回は1Fに候補者、2Fを姫の騎士団員を寝起きさせて
候補者へは2Fへ上がる事を禁止した。

そして4名一部屋で部屋割りを決めて行った。

その後、再度全員が広場に集まる。

これからが1ヶ月に渡る第二次試験の始まりである。

美女さんが第一隊が半休暇と伝えた。

見張りは寄宿舎の入り口を6つにわけた分隊で丸一日警備するのだ。
一つの分隊2時(約4時間)程なので対した事は無いのだが、その
間は無言で立って居ないといけない為に素人には結構大変である。
翌日以降は第二、第三と順番に行く。

美女さん「4日に一度各隊の姫の騎士団隊長を集めて会議を行い勤
務態度や適性を確認し、姫の騎士として適さない場合は落選する事

もあります」

「だから皆さん頑張ってください」と締めた。

すぐに姫の騎士団団員が揃って敬礼をする。

そして第一隊長の号令の下、それぞれの分隊が割り振られた箇所へ姫の騎士団員と共に向かっていく。

座学は隊長が初日は敬礼などを教える事になっている。

そして残った第二、四隊は訓練である。

しかし最初の4日間、各隊で3日ずつは基礎訓練と簡単な素振りのみである。

もちろん姫の騎士団員も行いながら候補生の監督に努める。

未経験のものには辛いだろうが、今まで姫の騎士として短い期間なりに訓練を受けてきた団員にはこなせるだろう。

昼を挟んでもさらに訓練を行う。

夕方に「今日はここまで」と言うのと候補者達はその場に座り込んだ。騎士団員が「まだ終わってない!」と候補者達に告げる。

何とか立ち上がった候補者を確認し姫の騎士団団員が「敬礼」とい

い全員が行う。
僕と美女さんが館に戻ると「今日はこれまで」という声と各隊隊長の声が飛び交うのが聞こえた。

夕食の後は各隊は交代で風呂に入る。

最初の数日は慣れるまで夜は休むという事を通達している。

逆に言うと数日後には夜にも何かしら行うのだが、さすがに初日と

言う事で殆どの候補者が今すぐ寝たいと言う感じである。

因みに僕は空の館で寝泊りする。

さすがに正式団員でもない候補者である若い娘が沢山いる所に男が寝泊りするのはまずいだろうという配慮の元だ。

これ以上、なし崩し的に奥さんが増えても困るのである。

こうして姫の騎士団の選考会は始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8400w/>

（仮）

2011年12月17日03時01分発行